

Print edition : ISSN 2189-0056

Online edition : ISSN 2189-0064

福岡大学 理学部・理学研究科年報



2015(平成 27)年度

1. はじめに

理学部長 山 口 敏 男

理学研究科長 西 田 昭 彦

理学部・理学研究科では、本学部・研究科の教育・研究活動を総括するとともに学内外の人々にお知らせするために、2012 年度から「理学部・理学研究科年報」を発行しています。本年報には 2015 年度の理学部・理学研究科の活動年譜、教員組織、学部・研究科の教育・研究活動、入学志願者の状況や就職状況、社会貢献、国際交流、各学科の研究室毎の活動状況等がまとめてあります。

理学部は 1970（昭和 45）年 4 月に応用数学科・応用物理学科・化学科の 3 学科で創設しました。1976 年 4 月に理学研究科応用物理学専攻および化学専攻の各博士課程を、1990 年 4 月に理学研究科応用数学専攻博士課程を設置しました。その後、1998 年 4 月に地球圏科学科を、翌年 4 月に理学研究科地球圏科学専攻博士課程（修士課程は 1997 年 4 月）を増設しました。理学部は、「数学を含む自然科学領域の探究を通して社会の発展と福祉に貢献する」という教育理念を基に、「基礎学力を十分に修得し、自然現象を幅広い視野から理解し、自ら問題を提起し、知識の活用ができる豊かな人間性をも兼ね備えた人材を育成する」ことに努めてきました。また、国際化・情報化、グローバル化の 21 世紀社会に対応し、既存の学問分野を融合した思考・発想ができる人材を育成するために、2008 年 4 月に文理融合型の人材の育成を目指す「社会数理・情報インスティテュート」と「物理」と「化学」を柱とした「ナノサイエンス・インスティテュート」を設置し、さらに同年 4 月には応用物理学科を物理科学科に改称する改革に努めてきました。

2015 年度は理学部創立 45 周年、かつ理学部同窓会設立 20 周年の年であり、さまざまな教育改善活動を行いました。11 月には、理学部創立 45 周年記念事業として、天神の電気ビル（みらいホール）で市民講演会「地球と宇宙」を開催し、理学部から固武 慶准教授（物理科学科）「壮絶なる星の最期、超新星爆発」と奥野 充教授（地球圏科学科）「噴火史から考える桜島火山と始良カルデラの現在と未来」、外部から宇宙飛行士・日本科学未来館館長の毛利 衛氏「宇宙からの贈りもの」の講演していただき、300 人を超える方が拝聴されました。また、その後、ホテルニューオータニ博多に移り、学長や他学部長、有信会理事長・理事を来賓に迎えて記念祝賀会（同窓会）を開催しました。「教育推進経費」採択事業のほか、リメディアル教育や学修支援活動、国際教育研究交流活動、文章表現力教育等にも取り組み、大きな成果を挙げることができました。

ハード面では、9 号館本館は耐震工事が完了し、外壁も塗り替えられて美しい建物に変わ

りました。また、9号館別館のリフトがエレベーターに整備されて、9号館本館へは3階の渡り廊下を通り移動できるので、障がいをもつ学生にも優しい環境になりました。

研究活動においては、国内外との共同研究や著名な外国人研究者の招聘など国際的なレベルで研究を進めています。また、「国際火山噴火史情報研究所」と「福岡から診る大気環境研究所」は、他大学や他研究機関と産官学連携事業を活発に行っています。科学研究費をはじめ外部資金の獲得も積極的に行っています。

本学部・研究科の社会貢献活動としては、スーパーサイエンスハイスクール、福岡大学市民カレッジ、地域の教育支援活動、地域との交流活動を推進しました。詳細は本年報をご参照願います。

2016年3月末に陶山芳彦教授（応用数学科）、渡辺正文教授（応用数学科）、寺田成之教授（化学科）、竹迫一雄助教（物理科学科）、安東勢津子氏（教育嘱託、化学科）と村田義夫氏（教育嘱託、化学科）が退職しました。川久保 哲助教（応用数学科）は兵庫県立大学の教授、また、濱田龍義助教（応用数学科）は日本大学の准教授として転出しました。陶山教授、渡辺教授、寺田教授には2016年4月14日に福岡大学名誉教授の称号が授与されました。これらの先生方は長年にわたり理学部の教育・研究活動に携わってこられました。ここに改めて感謝をささげたいと思います。2016年4月には2名の教授（応用数学科）、3名の助教（物理科学科、化学科2名）、1名の教育嘱託（応用数学科）が着任します。

国際交流事業では、2015年度には応用数学科に Wei Guoxin 教授（華南師範大学）と Klaus-Robert Mueller 教授（ベルリン工科大学）、物理科学科に Hannu Eskola 教授（タンペレ工科大学）、化学科に Ingmar Persson 教授（スウェーデン農業科学大学）をそれぞれ招聘して大学院生の指導や教員との共同研究を遂行しました。また、国際交流事業として、ナノサイエンス・スインスティテュートコース3年次生9名を上海交通大学に派遣しました。また、蔚山大学校自然科学大学化学科（大学院生と学部4年次生及び3年次生37名）が本学を訪問し、化学科4年次生23名と化学専攻院生20名と研究発表や文化交流を行いました。また、グローバル・アクティブ・プログラム(GAP)により、学部生1名が釜慶大学校(韓国)で、2名がオックスフォード大学(イギリス)で、2名がオークランド大学(ニュージーランド)で、3名がハワイ大学マノア校(アメリカ)で、それぞれ海外英語研修に参加しました。

2018年度から18歳人口の減少が予想されています。理学部・理学研究科は将来の動向を見据えて改革し更なる発展を目指して努力していきます。皆様のご支援とご協力をお願いいたします。

2. 学部および研究科の三つのポリシー

理学部

■アドミッションポリシー（入学者受入れの方針）

理学部は人材養成の目的を達成するために、

1. 高等学校段階で習得しておくべき基礎学力を身につけている人
2. 数理や自然現象に興味・関心を持っている人
3. 幅広い教養、国際性、および専門分野についての高い能力を身につける意欲を持つ人の入学を求めています。

■カリキュラムポリシー（教育課程編成・実施の方針）

人材養成の目的を達成するために、理学部では次のカリキュラムを編成しています。

1. 1、2年次には、リメディアル授業、少人数クラスの講義、実習や演習およびゼミナール等によって、自然科学全般にわたる基礎学力と思考力を養い、また共通教育によって、幅広い教養、国際性および社会性を身につけることができるカリキュラム
2. 3、4年次には、この基礎学力に加えて、多様な専門分野から学生自ら選択した分野について学び、自然現象等を幅広い視野から理解し、未知の現象を解明する力を習得できるカリキュラム

■ディプロマポリシー（学位授与の方針）

理学部の教育課程においては、厳格な成績評価を行い、所定の単位を修め、次の能力を備えた学生に卒業を認定し、学位を授与します。

1. 自然現象の理解とその応用に必要な論理力・分析力・創造力
2. 豊かな人間性、社会性および国際性

理学研究科

■アドミッションポリシー（入学者受入れの方針）

理学研究科では、自然科学・数理科学に関する深い学識を持ち、自立して研究活動を行い得る能力を持つ人材、及びその学術的素養を活かして社会で活躍できる専門的職業人を育成することを目的としている。

博士課程前期では、一定水準以上の学力があって、かつ自然や数理の諸現象に興味があり、問題解決に向けて積極的に取り組む人材を受け入れる。特に成績優秀な学部学生には、3年次で飛び級制度、4年次では推薦入学制度を設けている。自然科学全般に関する広い見識の重要性から、他大学・他学部の学生や社会人・外国人留学生も積極的に受け入れる。

博士課程後期では、修士論文の内容の精査と面接審査等によって、探求心と目標とする研究を遂行するための能力の有無を見極め、かつ、問題解決に向けて意欲的に取り組む姿勢を評価する。また自然現象や数理の解明に興味を持ち、新しい考え方で研究を遂行する意欲のある社会人・外国人留学生も受け入れる。

■カリキュラムポリシー（教育課程編成・実施の方針）

博士課程前期では、「講究」・「実験」等の授業科目を通じて専門分野に関する知識や自然科学研究の実験手法を修得して、研究能力や自己表現力を涵養するようにカリキュラムを構成している。

さらに専攻ごとに配置した多くの選択科目は、専攻内の他専修だけでなく他専攻からも受講できるようになっており、専門にこだわらない多面的かつ先端的な知識を修得できるようにしている。

博士課程後期では、前期課程の教育・研究をさらに深化・発展させ、自立して研究活動を遂行し得る高度な能力を備えた人材の育成を図る。このため、学生の学位取得に向けた自主的な研究推進と指導教員のもとでのゼミナールを重視し、加えて自然科学・数理科学に関する深い学識を身につけることができるよう、専門的な特修科目を設置している。

■ディプロマポリシー（学位授与の方針）

博士課程前期では、修了に必要な授業科目の単位の取得に加えて、修士論文を提出させる。修士論文の審査にあたって、広い視野に立って深い学識を修め、専門分野についての研究能力又は専門分野にかかわる職業に従事するに必要な能力を有するか否かを判断する。

博士課程後期では、博士（理学）の学位授与には査読付き学術誌に一定基準数以上の論文が掲載されていることを基本要件としている。博士論文の審査にあたって、研究成果が新たな知見を含み、研究者として自立して研究活動を行い得る能力又は自然科学・数理科学にかかわる専門的な職業に従事するに必要な高度な能力を有するか否かを判断する。

3. 2015年度 理学部・理学研究科の活動年譜

4月	1日	入学式
		【学部】新入生・保護者懇談会
		【研究科】新入生ガイダンス、研究科ガイダンス
	3日	【学部】新入生学部指導懇談会
	8日	前期授業開始
5月～6月		【応用数学科】教育実習参観
5月	16日	【応用数学科】修学指導
		【物理科学科】修学指導
		【化学科】修学指導
		【地球圏科学科】修学指導
	23日	【応用数学科】修学指導
		【物理科学科】修学指導
		【化学科】修学指導
		【地球圏科学科】修学指導
	27日	【応用数学科】「基礎数学研究」説明会、その後2週間で希望調査、配属決定（3年次）
6月～7月		父母懇談会（本学・各地）
6月	13日	【化学科】FD講演会
7月	4日	【研究科】推薦入学試験
	6・13日	【化学科】第12回チュートリアル研究発表会
	11日	【物理科学科】物理科学研究Ⅰ・Ⅱ 研究室配属説明会（3年次）
	23日	前期授業終了
	24日	【学部】前期定期試験開始
8月	2日	【学部】前期定期試験終了
	4日	夏季休業開始
	8日	オープンキャンパス
	18～21日	【化学科】日韓交流プログラム（第11回）
	18～22日	【物理科学科・化学科】日中交流プログラム
9月	4日	【研究科】秋季入学試験
	11日	【研究科】研究室配属ラボツアー（3年次生）
	13日	夏季休業終了

	14日	後期授業開始
	26日	(前期卒業式) 学位記授与式(修士)
	29日	秋季学位記授与式(博士)
10月	17日	【化学科】就職懇談会(ステップアッププログラム「先輩と語る―大学と社会―」)
11月～3月		【地球圏科学科】2年次生向け分野選択希望調査
11月	7日	【地球圏科学科・地球圏科学専攻】ステップアッププログラム「先輩と語る―大学と社会―」 【地球圏科学科】「地球圏科学科研究成果交流会」
	20日～	【応用数学科】3年次生に対する進路面接
	20日	【物理科学科】就職・進路説明会(3年次) 【物理科学科】ステップアッププログラム「先輩と語る―大学と社会―」 【応用物理学専攻】就職・進路説明会
	21日	理学部創立45周年記念事業(市民講演会「テーマ:地球と宇宙」を開催)
	26日	【応用数学専攻】理学研究科説明会、院生中間発表会
12月	5日	【応用数学科】ステップアッププログラム「先輩と語る―大学と社会―」
	12日	【化学科】FD講演会
	18日	【化学科】系分け説明会(2年次)
	21日	【応用数学科】就職活動報告会
	27日	冬季休業開始
2016年 1月	4日	冬季休業終了
	15日	【化学科】系分けラボツアー(2年次)
	18日	後期授業終了
	19日	【学部】後期定期試験開始
	28日	【学部】後期定期試験終了
	29日	【応用数学専攻】修士論文発表会
2月	1日	【化学専攻】修士論文発表会(第39回) 【地球圏科学科】修士論文発表会
	2日～	【学部】(2016年度)入学試験
	9日～10日	【地球圏科学科】卒業論文発表会
	9日	【応用物理学専攻】修士論文発表会
	15日	【物理科学科】卒業論文発表会
	15・16日	【化学科】卒業論文発表会(第43回)

- 16日 【応用数学科(応用数学コース、数理・情報インスティテュートコース)】卒業研究発表会
- 22日 【研究科】春季入学試験
- 3月 10日 【物理科学科】FD講演会
- 18日 【地球圏科学科】履修ガイダンス（新2年次）
 【化学科】履修ガイダンス（新2、3年次）
- 19日 卒業式、学位記授与式（修士）
- 24日 春季学位記授与式（博士）
- 26日 【化学科】キャリア教育調整講座
- 3月中 【応用数学科】留年した学生に対する学科独自の修学指導

)

|

10. 研究活動概要

(1) 学科別学術論文数および著書数 [2015 年 4 月～2016 年 3 月 (アクセプト済みも含む)]

	応用数学科	物理科学科	化学科	地球圏科学科
学術論文数	30	38	39	50
著書数	2	3	3	7

(2) 学科別国際会議等学術集会での発表回数 () 内は学生の発表内数

	応用数学科	物理科学科	化学科	地球圏科学科
国際会議等学術集会での発表回数	47 (0)	13 (4)	28 (16)	39 (0)

(3) 2015 年度 学科別科学研究費補助金採択件数 (件数は新規と継続の合計数)

	研究種目	応用数学科	物理科学科	化 学 科	地球圏科学科	計
補助金分	新 学 術 領 域 研究		1		1	2
	基盤研究(B)				1	1
	研究活動スタート支援			1		1
一部基金分	基盤研究(B)	1		1	2	4
	若手研究(A)		1			1
基金分	基盤研究(C)	7	1	6	4	18
	挑戦的萌芽研究	1		1	3	5
	若手研究(B)	1	3		1	5
	国際共同研究 加速基金		1			1
計		10	7	9	12	38

学科別科学研究費補助金採択件数推移 (件数は新規と継続の合計数)

	2015 年度	2014 年度	2013 年度	2012 年度	2011 年度
応用数学科	10	9	11	10	7
物理科学科	7	6	4	3	1
化学科	9	12	11	13	12
地球圏科学科	12	11	12	9	9
計	38	38	38	35	29

(4) 学科別外部資金導入件数(科研費以外の公的資金および民間企業財団からの補助金獲得状況)

2015 年度

	科学技術振興機構	その他公的機関	計
応用数学科	0	1	1
物理科学科	0	0	0
化学科	1	2	3
地球圏科学科	0	1	1
計	1	4	5

(5) 学科別学内資金導入件数

①研究推進部所管

総合科学研究部研究チームⅢ

2015 年度採択〔研究期間 2 年間：2015 年 4 月 1 日～2017 年 3 月 31 日〕

研究代表者	研 究 課 題 名
藍 浩之	RFID と高解像度ビデオ記録を用いたミツバチ行動自動追跡システムの開発

総合科学研究部研究チームⅣ

2015 年度採択〔研究期間 2 年間：2015 年 4 月 1 日～2017 年 3 月 31 日〕

研究代表者	研 究 課 題 名
固武 慶	新天文学で迫る超新星の爆発メカニズム
福田 将虎	小分子化合物による生体内 RNA 編集の制御とその機能解明

領域別研究部研究チーム(理工学研究部)

2015 年度選定〔研究期間 3 年間：2015 年 4 月 1 日～2018 年 3 月 31 日〕

研究代表者	研 究 チ ー ム 名
香月 美穂	細胞骨格動態の生物物理学
佐藤 拓	代数学とトポロジー
山口 武夫	細胞のストレス応答
山口 敏男	ナノ空間の化学

推奨研究プロジェクト研究チーム

(一般)

2015 年度採択〔研究期間 3 年間：2015 年 4 月 1 日～2018 年 3 月 31 日〕

研究代表者	研 究 課 題 名
上野 勝美	造山体における表層および深部地質過程の統合研究

②2015 年度大学院高度化推進事業

■研究科特別経費(研究科分)

小田 信行：代数とホモトピーによる多様体の研究とその周辺分野への応用

山本 大輔：高速原子間力顕微鏡による膜タンパク質群の構造解析

山口 武夫：赤血球の膜安定性におけるバンド 3 の役割

中川 裕之：微小管重合 in vitro 再構成系を用いた微小管の重合メカニズムの解析

研究科特別経費（学生分）

岩崎 春香（指導教員：松原公紀）：メソイオン性カルベンを用いた新規鉄触媒の開発とその触媒反応への応用

■外国人研究員等特別招へい経費（短期）

成瀬 慶明：Wei Guoxin（華南師範大学教授、中国）

寺田 貢：Hannu Eskola（タンペレ工科大学教授、フィンランド）

藤木 淳：Klaus-Robert Mueller（ベルリン工科大学教授、ドイツ）

山口 敏男：Nils Börje INGMAR PERSSON（スウェーデン農業科学大学教授、スウェーデン）

③「教育推進経費」採択事業

『理工系学生の基礎力パワーアッププログラム』

『科学的国際交流による表現力の継続的実践教育』

(6) 特許等出願登録実績（2015 年度）

○特許登録

代表発明者	発 明 の 名 称
香野 淳	直列接続型ソーラーセル及びソーラーセルシステム
林 政彦	粒子測定装置
塩路 幸生	ホスフィン化合物、その製造方法およびそれを用いた過酸化補捉剤

○意匠登録

代表発明者	発 明 の 名 称
小隈 龍一郎	万華鏡

5. 学部・研究科の担当者(2015年度)

2015年11月30日まで

【学部】

	学 部	応用数学科	物理科学科	化学科	地球圏科学科
学科主任	山口 敏男 (学部長)	小田 信行	平松 信康	松原 公紀	中川 裕之
学科副主任		白石 修二	寺田 貢	安藤 功	奥野 充
インスティテュート担当	—	杉万 郁夫	眞砂 卓史	塩路 幸生	—
大学協議員	横張 文男	—	—	—	—
教務連絡員会	川田 知 (教務委員)	田中 尚人	御園 雅俊	※山口 武夫	※伊東 綱男
				勝本 之昌	高島 久洋
				林田 修	奥野 充
学生部委員	林 政彦 (学生部委員)	—	—	—	—
FD推進委員会	川田 知	杉万 郁夫	眞砂 卓史	安藤 功	高島 久洋
経理委員会	山口 敏男 西田 昭彦	杉万 郁夫	眞砂 卓史	寺田 成之	西 憲敬
		成瀬 慶明			
図書連絡員会	武末 尚久 (図書委員)	成瀬 慶明	香野 淳	祢宜田啓史	杵山 哲男
研究推進連絡員会	松原 公紀 (研究推進部委員)	桑江 一洋	山本 大輔	松原 公紀	高島 久洋
キャリア教育調整員会	山田 直記 (就職・進路支援 センター委員)	秋山 獻之	西田 昭彦 田崎 繁	栗崎 敏	※横張文男
					奥野 充
					西 憲敬
理学部将来構想検討委員会	山口 敏男 西田 昭彦	田中 勝	平松 信康	松原 公紀	林 政彦
		石黒 賢士	武末 尚久	寺田 成之	上野 勝美
高大接続委員会	大熊健太郎	藤木 淳	固武 慶	勝本 之昌	景浦 宏
		杉万 郁夫		弟子丸 正伸	
教育開発支援機構委員	寺田 貢	—	—	—	—
共通教育センター委員	香野 淳	—	—	—	—
言語教育研究センター委員	小田 信行	—	—	—	—
教職課程教育センター委員	杉万 郁夫	—	—	—	—
国際センター委員	石黒 賢士	—	—	—	—
エクステンションセンター委員	田口 幸洋	—	—	—	—
アニマルセンター委員	伊東 綱男	—	—	—	—
RIセンター委員	川田 知 弟子丸正伸	—	—	—	—
広報委員会	山口 敏男 大熊健太郎	藤木 淳	香野 淳	弟子丸正伸	奥野 充
HP委員会	弟子丸正伸	濱田 龍義	香野 淳	山田 勇治	石原 与四郎
総合情報処理センター連絡員会	田中 勝 (総合情報処理 センター委員)	田中 勝	眞砂 卓史	仁部 芳則	西 憲敬
X線管理小委員会	山口 敏男		武末 尚久	山口 敏男	奥野 充
環境保全委員会	林田 修 (環境保全 センター委員)	川久保 哲	平松 信康	林田 修	原 圭一郎

遺伝子組換え実験安全委員会委員	弟子丸正伸	—	—	—	—
動物実験委員会委員	伊東 綱男	—	—	—	—
各クラス担任	1 年次	小田 信行 藤木 淳 【社情】白石修二	香野 淳	仁部 芳則 塩路 幸生 【ナ】栗崎 敏	中川 裕之 高島 久洋
	2 年次	山田 直記 田中 尚人 【社情】田中勝	平松 信康	弟子丸 正伸 塩路 幸生 【ナ】栗崎敏	奥野 充 西 憲敬
	3 年次	成瀬 慶明 福嶋 幸生 【社情】杉万郁夫	赤星 信	大熊 健太郎 川田 知 【ナ】松原公紀	上野 勝美 伊東 綱男
	4 年次	秋山 獻之 石黒 賢士 【社情】杉万郁夫	山本 大輔	山口 武夫 川田 知 【ナ】塩路幸生	景浦 宏 玉木 克美
理学部懇親会幹事	田口 幸洋 椿原 晋介	—	—	—	—

注：※印は代表者

【研究科】

	研究科	応用数学専攻	応用物理学 専攻	化学専攻	地球圏科学 専攻
大学院専攻主任	西田 昭彦 (研究科長)	石黒 賢士	眞砂 卓史	安藤 功	上野 勝美
大学院専攻副主任		山田 直記	田崎 茂	松原 公紀	横張 文男
大学院委員	杵山 哲男	—	—	—	—
大学院学務委員	中川 裕之	—	—	—	—

2015 年 12 月 1 日以降

【学部】

	学 部	応用数学科	物理科学科	化学科	地球圏科学科
学科主任	山口 敏男 (学部長)	小田 信行	平松 信康	安藤 功	中川 裕之
学科副主任		白石 修二	寺田 貢	大熊 健太郎	奥野 充
インスティテュート担当	—	杉万 郁夫	眞砂 卓史	松原 公紀	
大学協議員	田崎 茂	—	—	—	—
教務連絡員会	田中 勝 (教務委員)	田中 尚人	御園 雅俊	※勝本 之晶	※伊東 綱男
				栗崎 敏	高島 久洋
				山口 武夫	奥野 充
学生部委員	林 政彦 (学生部委員)	—	—	—	—
FD 推進委員会	田中 勝	杉万 郁夫	眞砂 卓史	仁部 芳則	高島 久洋
経理委員会	山口 敏男 西田 昭彦	杉万 郁夫	眞砂 卓史	松原 公紀	西 憲敬
		成瀬 慶明			
図書連絡員会	武末 尚久 (図書委員)	成瀬 慶明	香野 淳	祢宜田啓史	杵山 哲男
研究推進連絡員会	川田 知 (研究推進部委員)	桑江 一洋	山本 大輔	川田 知	高島 久洋
キャリア教育調整員会	安藤 功 (就職・進路支援 センター委員)	秋山 獻之	西田 昭彦 田崎 茂	川田 知	※横張 文男
					奥野 充
					西 憲敬
理学部将来構想検討委員会	山口 敏男 西田 昭彦	石黒 賢士	平松 信康	安藤 功	林 政彦
		田中 勝	武末 尚久	松原 公紀	上野 勝美
高大接続委員会	大熊健太郎	藤木 淳	固武 慶	※弟子丸正伸	景浦 宏
		杉万 郁夫		松原 公紀	
教育開発支援機構委員	寺田 貢	—	—	—	—
共通教育センター委員	香野 淳	—	—	—	—
言語教育研究センター委員	奥野 充	—	—	—	—
教職課程教育センター委員	杉万 郁夫	—	—	—	—
国際センター委員	中川 裕之	—	—	—	—
エクステンションセンター委員	塩路 幸生	—	—	—	—
アニマルセンター委員	伊東 綱男	—	—	—	—
RIセンター委員	川田 知 弟子丸正伸	—	—	—	—
広報委員会	山口 敏男 大熊健太郎	藤木 淳	香野 淳	弟子丸正伸	奥野 充
HP委員会	弟子丸正伸	濱田 龍義	香野 淳	山田 勇治	石原 与四郎
総合情報処理センター連絡員会	白石 修二 (総合情報処理 センター委員)	田中 勝	眞砂 卓史	仁部 芳則	西 憲敬
X 線管理小委員会	山口 敏男		武末 尚久	山口 敏男	奥野 充
環境保全委員会	栗崎 敏 (環境保全 センター委員)	川久保 哲	平松 信康	栗崎 敏	原 圭一郎
遺伝子組換え実験安全委員会委員	弟子丸正伸	—	—	—	—
動物実験委員会委員	伊東 綱男	—	—	—	—

各クラス担任	1 年次	小田 信行 藤木 淳 【社情】白石修二	香野 淳	村田 義夫 勝本 之昌 【ナ】塩路幸生	中川 裕之 高島 久洋
	2 年次	山田 直記 田中 尚人 【社情】田中勝	平松 信康	仁部 芳則 塩路 幸生 【ナ】栗崎敏	奥野 充 西 憲敬
	3 年次	成瀬 慶明 福嶋 幸生 【社情】杉万郁夫	赤星 信	弟子丸正伸 栗崎 敏 【ナ】大熊健太郎	上野 勝美 伊東 綱男
	4 年次	秋山 獻之 石黒 賢士 【社情】杉万郁夫	山本 大輔	大熊健太郎 川田 知 【ナ】松葉 公紀	景浦 宏 玉木 克美
理学部懇親会幹事	田口 幸洋 椿原 晋介	—	—	—	—

注：※印は代表者

【研究科】

	研究科	応用数学専攻	応用物理学 専攻	化学専攻	地球圏科学 専攻
大学院専攻主任	西田 昭彦 (研究科長)	石黒 賢士	眞砂 卓史	大熊健太郎	上野 勝美
大学院専攻副主任		山田 直記	田崎 茂	安藤 功	横張 文男
大学院委員	杵山 哲男	—	—	—	—
大学院学務委員	松原 公紀	—	—	—	—

6. 学部学生数・卒業生数等

(1) 入学試験形態別志願者数 (2015 年度入学志願者数)

	一般入学試験				センター プラス型 入 試	センター 試験利用 入 試	推薦 入試	総 数
	系統別	前期	後期	計				
応用数学科	87	450	25	562	144	117	20	843
社会数理・情報インスティテュート	39	116	8	163	46	32	6	247
物理科学科	72	279	7	358	94	72	7	531
ナノサイエンス・インスティテュート(物理科)	25	45	4	74	17	9	1	101
化学科	96	490	18	604	154	170	14	942
ナノサイエンス・インスティテュート(化)	44	62	4	110	20	34	1	165
地球圏科学科	100	380	11	491	101	123	18	733
計	465	1,882	77	2,362	576	557	67	3,562

入学試験総志願者数推移

	2015 年度	2014 年度	2013 年度	2012 年度	2011 年度
応用数学科	843	917	888	662	617
社会数理・情報インスティテュート	247	261	279	202	188
物理科学科	531	539	581	447	393
ナノサイエンス・インスティテュート(物理科)	101	80	93	63	68
化学科	942	1,065	976	894	864
ナノサイエンス・インスティテュート(化)	165	191	237	122	164
地球圏科学科	733	839	719	593	621
計	3,562	3,892	3,773	2,983	2,915

(2) 学生数 (2015 年 5 月 1 日現在)

	1 年	2 年	3 年	4 年	2011 年度 以前入学者	計
応用数学科	66	63	58	71	19	277
物理科学科	64	62	62	58	14	260
化学科	62	63	65	66	5	261
地球圏科学科	63	63	61	62	16	265
計	255	251	246	257	54	1,063

(3) 卒業生数 (2016 年 3 月 31 日現在)

	2015 年 9 月 26 日付	2016 年 3 月 19 日付	計
応用数学科	0	65	65
物理科学科	1	51	52
化学科	0	66	66
地球圏科学科	1	60	61
計	2	242	244

7. 研究科大学院生数・修了生数等

(1) 入学試験形態別志願者数 (2015 年度入学志願者数)

	博士課程前期						博士課程後期	総数
	推薦	一般 (秋期)	一般 (春期)	飛び級	留学生	小計		
応用数学専攻	0	2	1	4	0	7	1	8
応用物理学専攻	2	2	2	1	0	7	0	7
化学専攻	12	10	2	4	0	28	1	29
地球圏科学専攻	3	2	2	2	0	9	0	9
計	17	16	7	11	0	51	2	53

入学試験総志願者数推移

	2015 年度	2014 年度	2013 年度	2012 年度	2011 年度
応用数学専攻	8	6	6	6	5
応用物理学専攻	7	16	7	8	17
化学専攻	29	29	22	19	27
地球圏科学専攻	9	6	5	4	9
計	53	57	40	37	58

(2) 大学院生数 (2015 年 5 月 1 日現在)

	博士課程前期				博士課程後期					合計
	1 年	2 年	2013 年 度以前 入学者	小計	1 年	2 年	3 年	2012 年 度以前 入学者	小計	
応用数学専攻	1	5	0	6	1	0	0	0	1	7
応用物理学専攻	5	10	0	15	0	0	0	0	0	15
化学専攻	25	22	1	48	1	1	1	0	3	51
地球圏科学専攻	6	6	0	12	0	0	0	0	0	12
計	37	43	1	81	2	1	1	0	4	85

(3) 修了生数 (2016 年 3 月 31 日現在)

	博士課程前期	博士課程後期	
		修了者(学位取得者)	満期退学者
応用数学専攻	5	0	0
応用物理学専攻	10	0	0
化学専攻	20	0	1
地球圏科学専攻	6	0	0
計	41	0	1

(4) 満期退学後の学位(課程博士)取得者

0

8. 学部教育活動状況

福岡大学では2005年度から教育改善に関する取り組みを進め、PDCAサイクルによって教育改善を図る「教育マネジメントサイクル活動」を行っている。理学部でも毎年学科別に「教育マネジメントサイクル」を策定し、組織的かつ継続的に教育効果を高める取り組みを行っている。ここでは理学部各学科が2015年度に実行した教育改善行動プログラムの内容と、その活動評価結果について報告する。

【応用数学科】

(1) 早期合格者を対象とした入学前の課題指導

応用数学コース11名、社会数理・情報インスティテュートコース3名の推薦入試合格者に対し、2016年1月上旬と下旬、2月中旬と下旬の計4回にわたり、数学に関する課題を与えて提出を求め、その添削指導を実施した。新課程の内容に応じた課題に対して、解答の記述方法について、数学的根拠を押さえた説明の進め方、大学教育への導入まで、答案内容に応じた指導を行った。

また、応用数学コースでは、より数学に親しめるように数学に関する読み物を読み、その概略と感想を提出させた。社会数理・情報インスティテュートコースでは、実社会の問題に対する関心をもってもらうために、新聞を読み関心をもった記事についての概要のまとめと意見や感想を提出させた。

(2) 数学におけるリメディアル教育の構築と実践

理学部応用数学科と工学部の新入生を対象とし、演習を主体とした数学リメディアル教育を、前期・後期各12回とそれぞれの期末試験を実施した。講義内容は、応用数学科については線形代数、工学部については微分積分を中心とし、大学初年次に学ぶ正規科目を補完し、大学で学ぶ数学へのスムーズな移行をサポートした。

(3) 少人数クラスによる初年次チュートリアル教育

1年次前期科目「数学総合Ⅰ」において、少人数クラスを設置した。新入生を少人数のグループに分け、各グループに担当教員がつき、大学で学ぶ数学への導入教育を実施した。大学数学の基礎教育と環境の変化に起因する学生の悩みにきめ細かく対処する有効な手段として成果を挙げたと考えられる。「社会数理のための数学実習Ⅰ・Ⅱ」では新入生に学修の動機づけを与え専門教育への導入となるよう工夫した。

(4) 福大生ステップアッププログラム「先輩と語る－大学と社会－」の開催

2015年12月5日に、福大生ステップアッププログラムとして、各分野で活躍している本学科卒業生3名を招き、就職活動の体験談や現在の職場での業務について講演をいただき、質疑応答の後、学生や教員を交えた懇談会を開催した。就職活動前の学生にとって有意義なものとなった。

(5) 卒業研究発表会の開催

2016年2月16日に応用数学コースと社会数理・情報インスティテュートコースの卒

業研究発表会を開催した。応用数学コースでは、12 ゼミが延べ 14 のテーマで発表し、社会数理・情報インスティテュートコースでは、各人が 1 つのテーマについて発表した。いずれのコースにおいても、それぞれの教育の個性が発表の内容や形態にも見られ充実したものになった。

【物理科学科】

(1) カリキュラム検討委員会（随時）

（活動概要）

物理科学コースとナノサイエンス・インスティテュートコースの設置に伴う新カリキュラムへの移行後、旧カリキュラムからの改善点が有効に機能し、学生の能力に適合して実効性のある教育になっているかどうかについて、引き続き検討を行い、運営会議の際などに随時議論を行ってきた。

これまでに、平成 25 年度適用の新しいカリキュラムでは、特に選択科目の履修において、学習分野や将来の進路とのつながりが分かりやすくなるように配慮した。また、将来にわたる学修計画を立てやすくなるように、カリキュラムマップを作成して学生の履修指導にあたった。平成 26 年度には、学士課程教育の充実のため、年間の登録単位数の上限を 48 単位とし、それに伴うカリキュラムの改訂を行い、平成 27 年度入学者から適用されている。

カリキュラム改正の効果、カリキュラムマップに基づく履修指導の効果等を検証するため、今後も引き続き、履修動向等を見守って検討を重ねていく。この中で、本年度は、来年度もしくは再来年度のカリキュラム改正への検討を進め、大幅な科目構成の見直しによって、さらに系統的な学びとカリキュラムのスリム化に関する検討を行い、新カリキュラムの素案を作成した。

（評価）

これまでのカリキュラム改正とカリキュラムマップの作製により、学生にとっては年次進捗とともに履修すべき科目の見通しが良くなったと思われる。次のカリキュラム改正に向けて、今後、学生の履修登録状況の推移、特に専門教育科目の履修登録状況を見守りつつ、カリキュラム改正の効果を確かめていくとともに、次のカリキュラム改正の準備を進める。

(2) 「物理学基礎ゼミナール」に関する会議の開催

（概要）

物理学への導入科目として、本科目を物理科学科(SP)の物理科学コースの履修登録者に対して 15 班体制で実施した（化学科のナノサイエンス・インスティテュートコース「ナノサイエンス基礎演習」2 班との合併）。また、SP のナノサイエンス・インスティテュートコースの 10 名に対しては、課外授業の形で 3 名の教員が指導に当たった。

昨年度同様、授業期間の前半と後半で班編制を変えたが、前半の班割方法を変えた。すなわち、授業初回に一斉授業の形で電卓の使い方を学習させ、授業 2 回目に前半の最後に行う試験と同レベルの「予備試験」を行って、その結果で前半の班割を行った（昨年度は新入生ガイダンス時の学力調査の結果を用いた）。その後の授業日程は昨年度とほぼ同じである。後

半の総合試験の再試験（授業期間内に実施）を受けた学生もいたが、長期欠席の2名を除く全員が合格した。

（評価）

昨年度中の基礎ゼミ委員会で、班割方法と授業内容や日程について検討し、前後半それぞれに学力別の班割をすることも、前後半の授業日程の配分もほぼ適正として、今年度も昨年度の実施要領を原則踏襲した。ただし、前半の班割方法を前項で述べたように変更し、また、後半の授業内容（発展編）を、6テーマ中の4テーマを選択するシステムから、再編4テーマのみに変更し、後半の日程配分を縮小した。昨年度と比較して、前後半いずれの試験の得点率も、平均値は少し上昇し標準偏差は少し縮小したが、この結果が、新入生の学力上昇によるものかどうかなど、評価の詳細は不明である。

（3）教育活動の評価（随時）

（活動概要）

物理科学科の提供する教育活動の適正さを確認することが目標である。

基礎教育においては、3月7日に工学部と理学部の懇談会を行い、教務連絡員、工学部の科目を担当する先生方が集まり、工学部の基礎教育について、議論を行う予定である。

物理科学科の演習科目については、それぞれの担当者が試験や演習の問題の難易度と配点の適切さを点検・評価を行い、特に問題点は生じた報告はなかったため、検討会は開催していない。

（成果）

毎年工学部の授業担当者と工学部との基礎教育に関する議論を行うことにより、学生の到達度の変化や授業状況の把握ができる。このため、問題点が明らかになれば、次年度の教育に生かすことが出来ている。

（4）FD講演会の開催

（活動概要）

次のようなFD講演会を計画した。

実施日：2016年3月9日（木） 15:00～17:00

実施場所：9号館1階 理学部会議室

プログラム

15:00-15:30 FD関連行事出張報告

福岡大学理学部 寺田 貢、香野 淳、平松 信康

15:30-16:30「アクティブラーニング」が科学教育にどのような影響を与えるか（仮題）

NPO法人ガリレオ工房 東海大学 滝川 洋二

16:30-17:00 質疑と討論

17:00 閉会

概要：科学教育とアクティブラーニングについてや、教職免許の課程再認定についてお話を伺った。また、講演後には質疑、意見交換を行った。

(5) F D研修会への参加

(参加の講演会)

- ・ 創価大学教育フォーラム（第 13 回 FD フォーラム）「未来に生きる子どもたちのために～教育改革の現状と課題～」2015 年 7 月 11 日（寺田貢）
- ・ 東北大学高度教養教育・学生支援機構セミナー「質の高い学生の学びを実現する大学教授法」 2015 年 7 月 11 日（寺田貢）
- ・ 東京理科大学教育支援機構理数教育研究センター研究会「飛びたて！新しい高校理科教育へ」2015 年 12 月 13 日（日）（香野淳）
- ・ 「アクティブラーニングの先に何があるのか？」2016 年 1 月 10 日（日）～2016 年 1 月 11 日（月）（平松信康）

(6) 卒業論文発表会の開催

(計画)

物理科学科では、4 年間の学士課程の集大成として、中間報告会や口頭試問など、研究室独自にきめ細かな指導を行ってきた。平成 24 年度より、このような研究室単位での取り組みに加え、学科全体での卒業論文発表会を開催している。平成 27 年度も学科全体での卒業論文発表会を行う。なお、必要経費は学科の予算で充当する。

(進捗)

4 年間の学士課程の集大成として、中間報告会や口頭試問など、研究室独自にきめ細かな指導を行ってきた。平成 24 年度より、このような研究室単位での取り組みに加え、学科全体での卒業論文発表会を開催している。平成 27 年度は 2 月 15 日に学科全体での卒業論文発表会を行った。48 名の学生が研究発表をおこなって自らの研究成果について述べるとともに、発表内容に関する質疑応答を行ってさらに理解を深めた。

(評価)

物理科学科では、平成 28 年 2 月 15 日に行われた卒業研究発表会において、48 名の卒業生が研究発表を行った。発表者は、自らの研究成果について聴衆に説明し、発表内容に関する質疑応答を行ってさらに理解を深めることができた。また、発表会当日のみならず、この発表会に向け、4 年間の学士課程の集大成として、中間報告会や口頭試問など、研究室独自にきめ細かな指導を行ってきたことが実を結んだといえる。

この発表会に向けて各研究室では発表内容の吟味・推敲を行い、同時に発表の技法などについての指導を行った。発表は各自 Power Point を用いて行い、質疑応答においては教員のみならず学生からの質問も多数行われ、充実した発表会となった。

(7) 物理科学科「先輩と語る― 大学と社会 ―」の開催

(計画)

物理科学科では、就職支援および職業意識の啓発を目的として、ステップアッププログラム「先輩と語る― 大学と社会 ―」を開催する予定である。講演会と懇談会を通して、学生が各界で活躍する先輩から直接話を聞き、キャリア設計、人生についてアドバイスやヒントが得られる機会とする。

(進捗)

物理科学科では、就職支援および職業意識の啓発を主な目的として、福大生ステップアッププログラム「先輩と語る―大学と社会―」を開催する予定である。講演会と懇談会を通して、学生が各界で活躍する先輩から直接情報を得て、キャリア設計、人生についてアドバイスやヒントが得られるようにしたい。

(結果と評価)

就職支援および職業意識の啓発を主な目的として、福大生ステップアッププログラム「先輩と語る―大学と社会―」を平成 27 年 11 月 20 日(金)に開催した。物理科学科を卒業後、民間企業に就職したり、大学院に行ったり、教員になったりしている卒業生に、講演と懇談を依頼した。

学部 3 年生を中心として、多くの学生がこの催しに参加し、講演会と懇談会を通して、学生が各界で活躍する先輩から直接情報を得ることができ、在学中に学ぶべきこと、キャリア設計、さらには人生についてアドバイスやヒントを得ることができた。

【化学科】

(1) 推薦入学者に対する入学前教育

化学コースとナノサイエンス・インスティテュートコースの推薦入試合格者に対して、**2015** 年 12 月から **2016** 年 3 月までの間に、計 3 回の化学と英語等に関する課題を課し、添削指導を行った。

(2) 学力到達度チェック

例年どおり、新入生に対して学力到達度チェックテストを実施した。その結果は過去 5 年間に入学した学生と大きな相違はなかった。

(3) 初年次リメディアル教育

新入生に対して、学習効率を高めるために、リメディアル教育として「基礎化学演習」(「ナノサイエンス基礎演習」)を前期に実施した。化学、物理、数学の基本的な事項について、助教が中心となり個人指導を行った。

(4) 少人数での初年次チュートリアル教育

充実した学生生活を送るための助けとして 1 年次前期に正課外教育としてチュートリアル教育を実施した。また、この教育の一環として、第 12 回チュートリアル研究発表会を 7 月 6 日と 13 日の両日、5 時限目に開催した。講演要旨集を作成し、Power Point を用いた発表を行った。自らテーマを設定し、調査検討した結果を最新の方法で発表することは積極性、協調性、データ解析力やまとめる能力を養うのに大いに役立っている。

(5) 国際交流事業の実施

○日韓交流プログラム: 第 11 回日韓交流セミナーを 8 月 18 日(火)～21 日(金)の 3 泊 4 日で開催した。本年度は蔚山大学から教員 3 名が、大学院生 14 名、学部 4 年次生 11 名、3 年生 14 名を引率して福岡大学を訪問し、研究発表と相互交流を行った。初日は夕方からミキサーを行い、2 日目は終日、口頭・ポスター発表を英語で行った。福岡大学からも 4 年生 17 名と大学院生 25 名が参加し、発表を行った。発表要

旨およびポスターを英語で作成し、発表および討論を英語で行うことで、国際交流と研究における英語の重要性を学生に再認識させることができた。3 日目はアサヒビール工場の見学、太宰府観光と九州国立博物館を訪れ日本の文化に触れるとともに蔚山大學の学生と交友関係を築いた。この交流セミナーは、国際社会における英語によるコミュニケーション能力の向上や国際感覚の涵養に役立っている。なお、このセミナーに関する記事が本学ホームページのニュース欄に掲載された。

○日中交流プログラム：8月18日(火)～8月22日(土)まで、ナノサイエンス・インスティテュートの選択必修科目である『材料科学国際演習』を上海交通大学において実施した。物理科学科・化学科の教員4名の引率・指導のもと、3年次生15名が上海交通大学金属基複合材料国家重点実験室に赴き、上海交通大学の先生方による英語での講義を受講した。出国前には英語能力を高めるため、各自 e-learning の利用や専門的な内容についての英文を読んで読解するなどの時間を設け、後者については教員による添削・指導を行った。上海では、2日目、3日目に上海交通大学の教員により、福岡大学学生のみを対象とする英語による講義が行われた。授業の最後に、学生全員が自己紹介および授業内容に関する質問を一人ずつ英語で発表し、教員との議論を行う時間をとった。さらに、研究室見学等を実施した。4日目には、上海博物館等の見学を行った。帰国後は上海交通大学の講師に自らが学んだことについて御礼状を作成し送付している。学生は科学的な英語能力の向上意識を持つことができ、同時にナノスケールの材料およびその特性についての知識と興味をもつことができている。

(6) 就職懇談会

化学科では、福大生ステップアッププログラム「先輩と語る-大学と社会-」として、10月17日(土)に卒業生25人を招き2号館221教室で就職懇談会を開催した。就職活動について化学科の卒業生津田知司氏(シャボン玉石けん(株))と園田晋也氏((株)同仁化学研究所)に講演いただき、引き続き、講演者と今年度内定をもらっている4年次生と大学院生を囲んでのパネルディスカッションを行った。その後、化学工業、食品、IT 関連、環境インフラ系、製薬、化粧品、公務員関連、教育職関連希望などにグループ分けを行い、卒業生との進路別懇談会を行った。大学院生を含む在学生73名(修士1年次生21名、3年次生52名)が参加して活発な質問がなされた。

さらに、サテライト講演会の一環として1年次生および2年次生を対象としたキャリア教育調整講座を3月26日(土)に開催した。藤井和彦氏((株)麻生情報システム)を講師として招き、キャリアデザインについて講演を行った。また、化学科キャリア教育調整委員が化学科学生および大学院生の進路等について紹介した。

(7) F D講演会の開催

恒例のF D講演会として第30回、第31回の「談話会」を6月13日(土)と12月12日(土)に開催した。講演者とタイトルは次のとおりである。講演内容は理学集報に投稿・掲載されている。

勝本 之晶 准教授 「分子性溶液と分子構造論」

長洞 記嘉 助教 「高周期元素を含む芳香族化合物」

川田 知 教授 「金属錯体集積体における化学刺激応答性と物性発現」

石川 立太 助教 「分子レベルでスピンを操る」

濱口 智彦 助教 「USD での在外研修を終えて」

(8) 卒業研究発表会の開催

物理科学科のナノサイエンス・インスティテュートコースの学生も含めて、第 43 回化学科卒業論文発表会を 2016 年 2 月 15 日と 16 日の 2 日間にわたって開催した。学生は 1 年間の研究成果を Power Point を使い 7 分で口頭発表を行い、その後 2 分間の質疑応答を行った。学生一人ひとりに卒業論文の研究テーマが与えられており、その結果をまとめて発表した。発表後は内容を冊子にまとめて提出した。

【地球圏科学科】

(1) 地球圏科学科研究成果交流会

地球圏科学科では、学科を構成する 3 分野での研究トピックについて 3 名が講演を行った。講演内容は、分野外の教員や学生にも分かる平易なものであった。2 年次、3 年次生の参加もあり、3 年次の分野選択や卒論研究の参考になったものと思われる。

(2) カリキュラムの検証

地球圏科学科では、各科目に十分な学習時間を確保するために、平成 27 年度入学生から卒業要件に係わる科目の年間履修登録制限の上限を 49 単位とした。その結果、化学の科目を 6 科目から 4 科目に削減し、数学は入学時の習熟度の差に考慮した授業内容にすると共に標準的レベルの 3 科目を 2 年次に配置し、1 年次の図形情報 I および図形情報 II と 2 年次の数理統計および数理情報の開講年次を入れ替えた。この新しいカリキュラムの完成年度に向けて、継続的に履修状況や教育効果を調査・検証している。

(3) 就職懇談会

福大生ステップアッププログラムの一環でもある「先輩と語る－大学と社会－」を実施した。第 1 部では、就職・進路支援センター(以下センターと略記)において学生の進路決定や就職活動の支援をされている本多由希子氏に、「最近の採用活動の傾向と 2016 年度の就活への対応」と「センター活用術」についてスライドを用いて 30 分ほど講演していただいた。この講演では、地球圏科学科学生の就職などの進路などの決定率の最近の年次変化や就職先企業などが紹介され、センターを利用した就職のための活動についてのアドバイスがあった。第 2 部では、3 年生以下の学生が卒業生および就職が内定している現役学生と懇談・相談し、いろいろな情報を取得した。

(4) 卒業論文発表会

地球圏科学科では、4 年次生が、1 年間卒業論文で学んだ成果を、教育職員、学部生、及び大学院生の前で Power Point 等を用いて口頭発表する。4 年間の学士課程教育の集大成と位置づけられるこの行事は、学科創立以来欠かさず、3 分野合同で行われてきた。2015 年度は、61 名の 4 年次生が発表を行った。発表会後の学科会議において、今年度の卒論発表会の反省と改善点について議論し、また、卒論指導上の問題点と改善点について議論した。

(5) 初年度教育の充実

地球圏科学科では、「福岡大学 魅力ある学士課程教育支援」のプログラムとして実施してきた「理系こそ作文力」を、1 年次前期の演習科目として正規のカリキュラムに組み込んでから、2015 年度で 2 年目となる。この授業を通じて、研究・教育活動に必須の日本語、特に作文力を向上させる取り組みが続いている。

(6) 指定校推薦入試合格者に対する入学前教育

指定校推薦入試合格者に対し、地球圏科学科での学修に必要な数学の課題を 4 回課し、課題ごとに添削指導を行った。

(7) 分野選択希望調査

11 月から 3 月にかけて、2 年次生に対する 3 年次進級の際の分野選択希望調査を 3 回実施し、分野選択の調整を行った。

(8) 履修登録説明会

年度末の 3 月に、新 2 年次生に対し、モデル時間割配布および履修登録説明会を実施し、履修登録の手助けを行った。

9. 研究科教育活動状況

博士課程後期はこれまで単位制を採っていなかったが、大学院教育の実質化を図り博士課程後期の履修成果を明確にするため、研究指導科目を単位化、新たに設置した特修科目の履修も修了の要件に加える改正を行った（2013年度入学生から適用）。また、これに伴って博士課程前期の履修方法を変更する改正を行った。

特別講義と特別講義講師による講演会の実施

応用物理学専攻：外部講師を招聘して、本専攻の専任教員だけではカバーできないより広い先端的研究内容について特別講義を実施した。本年度は「物性物理学特別講義」（九州大学：篠崎文重教授）として、低温における量子効果について、「物理情報計測特別講義」（慶應義塾大学：相吉英太郎教授）として、力学と情報処理の融合領域の方法論について講義が行われた。これらの特別講義により、大学院生の学習意欲、研究意欲を高め、視野を広げることに寄与した。

化学専攻：化学専攻では4つの専修部門でそれぞれ特別講義を実施した。さらに、4名の特別講義講師による講演会も開催した。

○自己集合性ポルフィリンナノ空間を利用したフラレーレンの配列制御と光・電子機能の発現

九州大学 谷 文都 准教授

（8月7日（金）16時20分～17時30分, 921 教室）

○定量プロテオミクスによる生命システム研究

九州大学 松本 雅記 准教授

（8月27日（木）16時30分～17時30分, 1825 教室）

○DNA モデル塩基対の励起状態二重プロトン移動の協奏的機構と段階的機構の長い論争の始まりから終わりまで

九州大学 関谷 博 教授

（9月7日（月）16時～17時 922 教室）

○細孔とスピンとゲスト分子

九州大学 大場 正昭 教授

（9月30日（水）16時30分～18時 921教室）

これらの特別講義ならびに特別講義講師による講演会は、大学院生に馴染みの薄い分野についても学習意欲や研究意欲を促進し、幅広い視野を併せ持つ人材の育成に寄与した。

研究の中間発表会の実施

応用数学専攻：2015年11月26日に、応用数学科の教職員と学部学生を対象として、大学院生による中間研究発表会により、大学院生はこれまでの研究内容をま

とめる良い機会が与えられた。同時に、様々な分野の先生から研究についてのアドバイスをもらうことが可能となった。さらに、学部学生に対しても、大学院での勉強や研究の内容に触れさせる機会を持つことになり大学院志願者数の増加に繋がったようだ。

化学専攻：2015年6月～10月に各専修部門において中間発表会を開催した。発表者は各専修部門に所属する前期、後期大学院生と学部学生で、一人あたり20分程度の発表を行った。この中間発表会により、研究の問題点や進捗状況が把握できた。

地球圏科学専攻：中間発表会は専修部門ごとに教員・院生が参加して、適時行われている。また本専攻では主指導教員が、副指導教員と共に指導する体制が採られている。これによって教員・院生ともに複数教員による指導を意識することになり、研究活動や修士論文の作成においても、その水準と評価の客観性が担保されていると考えられる。

修士論文発表会の実施

応用数学専攻：2016年1月29日に最終試験として実施された。教員と大学院生・学部生の参加を得て活発な討議が行われ、研究内容の理解を深めるとともに、発表能力を向上させ今後の研究課題を考えるために非常に役立っている。各発表者は30分の時間内で発表を行い、すべての発表は十分に準備されたものであった。発表者は質問にも適切に答え、修士の学位を与えるに十分なものと判定された。例年通り有意義な修士論文発表会であった。

応用物理学専攻：2016年2月4日に開催した。今年度の発表者は10名で、一人あたり20分(発表15分、質疑応答4分)の発表を行った。大学院生たちは2年間の研究成果を応用物理学専攻の全教員および大学院在生学生の前で発表し、質疑にも適切に答えた。また、各院生の提出した論文が修士の学位を与えるに十分なものであることを確認した。

化学専攻：恒例の修士論文発表会を2016年2月1日に開催した。発表者は20名で、一人あたり25分(発表15分、質疑応答9分、交代1分)の発表を行った。大学院生たちは2年間の研究成果を化学科の全教員および大学院生・学部学生の前で発表した。全員が国内外での学会発表を経験しており、すべての発表において内容が非常に充実したものであった。今年度は質疑応答の時間を変更したが、教員の質問に対して適切に答え、十分な質疑応答がなされた。成果内容を適切にまとめる力や発表能力を向上させる上で非常に役立っていること、公開発表により修士学位の適切性を示す観点からも大変有意義な修士論文発表会であった。

地球圏科学専攻：2016年1月28日に開催した。博士課程前期教育プログラムの集大成である修士論文の研究内容を衆目の前で口頭発表し、大学院担当の教員全員による評価が行われた。当日は教員だけでなく、大学院生、学部学生の聴講

も得て活発な発表、質疑応答が行われた。大学院生は発表会を意識して研究活動に励み、発表内容の要旨（各自 A4 用紙 2 頁）を準備し、口頭発表によってプレゼンテーション技術の向上が図られた。一部だが学部学生も参加し、彼らの勉学および研究意欲への刺激となった。さらに、これらが公開で行われたことにより、修士の学位の適格性が担保された。

化学専攻・化学科「談話会」

理学研究科化学専攻と理学部化学科は、恒例の FD 講演会である第 30 回、第 31 回の「談話会」を 6 月と 12 月に開催している。講演者とタイトルは次のとおりである。

勝本 之晶 准教授 「分子性溶液と分子構造論」
長洞 記嘉 助教 「高周期元素を含む芳香族化合物」
川田 知 教授 「金属錯体集積体における化学刺激応答性と物性発現」
石川 立太 助教 「分子レベルでスピンを操る」
濱口 智彦 助教 「USD での在外研修を終えて」

地球圏科学専攻・地球圏科学科「研究成果交流会」

地球圏科学専攻と地球圏科学科では、学科を構成する 3 分野の教員の最新の研究成果等を学生および教員に紹介し、学科の特徴の理解と交流を深めるために、恒例の「地球と生物について語ろう」を 2015 年 11 月 7 日に開催した。

気象衛星観測を用いた雲の研究 地球物理学分野 西 憲敬
パレオテチス海山型石灰岩とタイ王国の地質学的発達史 地球科学分野 上野 勝美
昆虫は相対湿度を感知する 生物科学分野 横張 文男

参加者は、教員（含ポスドク）が 16 名、卒業生が 8 名、学部学生が 11 名、大学院生が 7 名だった。講演後のディスカッション時間には、地球圏科学科の特徴である多様な見地からの活発な討論があった。また、講演会後に懇談会を実施した。そこでは、講演会についての議論や、大学院生の研究活動などについての話が活発に行われた。

外国人招聘研究者による指導

応用数学専攻：大学院生の研究能力及び英語によるコミュニケーションの能力を高めるために、2015 年 7 月 11 日から 1 か月間、華南師範大学の魏 国新教授を招聘し、共同研究を行い、大学院生と研究交流及び研究指導を実施した。(2)2015 年 10 月に、ベルリン工科大学のミューラー教授を招聘し、大学院生と研究交流及び研究指導を実施した。

化学専攻：大学院生の研究能力および科学英語の能力を伸ばすため、2016 年 3 月 2 日から 1 ヶ月間、スウェーデン農業科学大学の Ingmar Persson 教授を招聘し、大学院生と研究交流及び修士論文の研究指導を実施し、講演会を開催した。これらの事業を通して、大学院生の国際的な感

覚を養い、さら に化学科教員の研究活動の活性化に役立った。

国際交流事業の実施

応用数学専攻：教員の国際研究集会への参加および発表とともに外国人研究者の招聘と国際研究集会を開催することにより、国際交流事業と国際共同研究を推進した。(1)2015 年 7 月 1 1 日から 1 か月間、華南師範大学の魏 国新教授を招聘し、共同研究を行い、大学院生と研究交流及び研究指導を実施した。(2)2015 年 9 月下旬から 10 月下旬にかけて、オハイオ州立大学のマルカム教授を招聘し、研究交流を行った。(3)2015 年 10 月に、ベルリン工科大学のミューラー教授を招聘し、研究交流を行った。

化学専攻：韓国蔚山大學校化学科・化学工学科との合同セミナー開催

蔚山大學校から教員 3 名が、学生 39 名（3 年生 14 名、4 年生 11 名、大学院生 14 名）を引率し福岡大学を訪問し、第 11 回日韓交流セミナーを 8 月 18 日（火）～21 日（金）の日程で開催した。本学化学科からは化学科教員と学生 42 名（学部生 17 名、大学院生 25 名）が参加した。初日にミキサーを行い、2 日目は終日、口頭・ポスター発表を行った。発表要旨およびポスターを事前に作成し、発表および討論はすべて英語で行うことにより、国際交流と研究における英語の重要性を学生に再認識させることができた。3 日目はアサヒビール工場の見学、太府観光と九州国立博物館を訪れ日本の文化に触れるとともに、互いの交友関係を築いた。この交流セミナーは、研究内容を英語によって発表し専門的な内容を議論するだけでなく、同年代の学生同士の英語によるコミュニケーションを行うことによって、学生の国際感覚の涵養に役立っている。

志願者および入学者の確保

■大学院の広報の実施

応用数学専攻：学部学生に対し大学院での勉強や研究の様子を知ってもらうために、2015 年 4 月の新入生ガイダンスにおいて大学院進学の意味や受験資格・手続き等も含めて説明を行った。さらに、2015 年 11 月に 3 年次生と 4 年次生を対象とした大学院生による大学院の紹介を兼ねた中間発表会を行い、大学院進学の意味や受験資格・手続きなどを説明した。

■大学院受験者の減少についての調査・検討

応用物理学専攻：平成 23 年度から大学院の入試受験者、入学者数が減少してきた。応用物理学専攻では、昨年度に続き、その原因および減少に歯止めをかける方策を検討し、学部学生向けの広報活動を行うこととした。まずは、学部卒業後の進路として大学院進学の道があることを、大学入学後の早い時期に学生に知らせておくことが重要であると考え、大学入学後

の懇談会において大学院進学状況等の説明を行った。また、学部3年次生に対し11月に就職・進路説明会およびステップアッププログラムとして「先輩と語る」をあわせて開催した。説明会では大学院進学の紹介を行い、「先輩と語る」では、企業で活躍している先輩に加え、大学院に進学して活躍している先輩にも話をしていただき、大学院で学ぶ意義や自らが学んだこと等を先輩から在学生に伝えてもらう取り組みを行った。さらに、12月には卒研配属説明会と合わせて新たに大学院進学説明会を行い、大学院進学の意義、大学院の入試制度、受験資格、学費、奨学金制度、大学院修了後の就職状況、TA等に関する説明を行った。

地球圏科学専攻：地球圏科学科在学生（2・3年生）に対して、大学院進学に関するアンケート調査を行った。

対象者：地球圏科学科2年生63名，3年生62名

2年生では、進学を考えている学生は7名（14%）、考えていない学生は21名（44%）、未定の学生が20名（42%）であった。大学院進学を考えていないと回答した者の多くは卒業後すぐに就職希望の学生であるが、6名は経済的な理由を進学しない理由に挙げている。また、大学院進学について未定としている学生のなかにも、学費などの経済的な理由を挙げているものが9名いる（うち、問題が解決されれば進学したい学生が4名）。2年生の段階では未だ進学について未定の学生が多いことから、3年生の実験・演習や、4年生の卒論において、大学院進学のモチベーションを高めることを意識した教育、研究指導が効果的と考えられる。3年生の回答にも同様な傾向があったことから、研究へのモチベーションを高める指導が効果的と考えられる。

10. 研究活動概要

(1) 学科別学術論文数および著書数 [2015 年 4 月～2016 年 3 月 (アクセプト済みも含む)]

	応用数学科	物理科学科	化学科	地球圏科学科
学術論文数	30	38	39	50
著書数	2	3	3	7

(2) 学科別国際会議等学術集会での発表回数 () 内は学生の発表内数

	応用数学科	物理科学科	化学科	地球圏科学科
国際会議等学術集会での発表回数	47 (0)	13 (4)	28 (16)	39 (0)

(3) 2015 年度 学科別科学研究費補助金採択件数 (件数は新規と継続の合計数)

	研究種目	応用数学科	物理科学科	化 学 科	地球圏科学科	計
補助金分	新 学 術 領 域 研究		1		1	2
	基盤研究(B)				1	1
	研究活動スタート支援			1		1
一部基金分	基盤研究(B)	1		1	2	4
	若手研究(A)		1			1
基金分	基盤研究(C)	7	1	6	4	18
	挑戦的萌芽研究	1		1	3	5
	若手研究(B)	1	3		1	5
	国際共同研究 加速基金		1			1
計		10	7	9	12	38

学科別科学研究費補助金採択件数推移 (件数は新規と継続の合計数)

	2015 年度	2014 年度	2013 年度	2012 年度	2011 年度
応用数学科	10	9	11	10	7
物理科学科	7	6	4	3	1
化学科	9	12	11	13	12
地球圏科学科	12	11	12	9	9
計	38	38	38	35	29

(4) 学科別外部資金導入件数(科研費以外の公的資金および民間企業財団からの補助金獲得状況)

2015 年度

	科学技術振興機構	その他公的機関	計
応用数学科	0	1	1
物理科学科	0	0	0
化学科	1	2	3
地球圏科学科	0	1	1
計	1	4	5

(5) 学科別学内資金導入件数

①研究推進部所管

総合科学研究部研究チームⅢ

2015 年度採択〔研究期間 2 年間：2015 年 4 月 1 日～2017 年 3 月 31 日〕

研究代表者	研 究 課 題 名
藍 浩之	RFID と高解像度ビデオ記録を用いたミツバチ行動自動追跡システムの開発

総合科学研究部研究チームⅣ

2015 年度採択〔研究期間 2 年間：2015 年 4 月 1 日～2017 年 3 月 31 日〕

研究代表者	研 究 課 題 名
固武 慶	新天文学で迫る超新星の爆発メカニズム
福田 将虎	小分子化合物による生体内 RNA 編集の制御とその機能解明

領域別研究部研究チーム(理工学研究部)

2015 年度選定〔研究期間 3 年間：2015 年 4 月 1 日～2018 年 3 月 31 日〕

研究代表者	研 究 チ ー ム 名
香月 美穂	細胞骨格動態の生物物理学
佐藤 拓	代数学とトポロジー
山口 武夫	細胞のストレス応答
山口 敏男	ナノ空間の化学

推奨研究プロジェクト研究チーム

(一般)

2015 年度採択〔研究期間 3 年間：2015 年 4 月 1 日～2018 年 3 月 31 日〕

研究代表者	研 究 課 題 名
上野 勝美	造山体における表層および深部地質過程の統合研究

②2015 年度大学院高度化推進事業

■研究科特別経費(研究科分)

小田 信行：代数とホモトピーによる多様体の研究とその周辺分野への応用

山本 大輔：高速原子間力顕微鏡による膜タンパク質群の構造解析

山口 武夫：赤血球の膜安定性におけるバンド 3 の役割

中川 裕之：微小管重合 in vitro 再構成系を用いた微小管の重合メカニズムの解析

研究科特別経費（学生分）

岩崎 春香（指導教員：松原公紀）：メソイオン性カルベンを用いた新規鉄触媒の開発とその触媒反応への応用

■外国人研究員等特別招へい経費（短期）

成瀬 慶明：Wei Guoxin（華南師範大学教授、中国）

寺田 貢：Hannu Eskola（タンペレ工科大学教授、フィンランド）

藤木 淳：Klaus-Robert Mueller（ベルリン工科大学教授、ドイツ）

山口 敏男：Nils Börje INGMAR PERSSON（スウェーデン農業科学大学教授、スウェーデン）

③「教育推進経費」採択事業

『理工系学生の基礎力パワーアッププログラム』

『科学的国際交流による表現力の継続的実践教育』

(6) 特許等出願登録実績（2015 年度）

○特許登録

代表発明者	発 明 の 名 称
香野 淳	直列接続型ソーラーセル及びソーラーセルシステム
林 政彦	粒子測定装置
塩路 幸生	ホスフィン化合物、その製造方法およびそれを用いた過酸化物補捉剤

○意匠登録

代表発明者	発 明 の 名 称
小隈 龍一郎	万華鏡

11. 社会（貢献）活動状況

(1) 一般（非研究者）向けの論文数および著書数、行政報告書数 等

応用数学科	物理科学科	化学科	地球圏科学科	計
0	0	1	4	5

(2) 一般（非研究者）対象の集会での発表回数

応用数学科	物理科学科	化学科	地球圏科学科	計
0	3	0	1	4

(3) 学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など

○福岡大学理学部創立 45 周年記念事業 市民講演会「地球と宇宙」 電気ビル4階「みらいホール」 2015 年 11 月 21 日(土)14 時～17 時 30 分 参加者:323 人

講演1.「壮絶なる星の最期、超新星爆発」 福岡大学理学部准教授 固武 慶

講演2.「噴火史から考える桜島火山と始良カルデラの現在と未来」

福岡大学理学部教授 奥野 充

講演 3.「宇宙からの贈りもの」

宇宙飛行士・日本未来館館長 毛利 衛

(福岡大学理学部創立 45 周年記念事業実行委員会)

○応用物理学会「リフレッシュ理科教室（九州支部福岡会場、飯塚会場）」企画運営の実行委員

物理科学科 香野 淳 教授、寺田 貢 教授、永田 潔文 教授、西田 昭彦 教授、平松 信康 教授、眞砂 卓史 教授、赤星 信 准教授、固武 慶 准教授、笠原 健司 助教、匠 正治 助教、田尻 恭之 助教、中村 忠嗣 助教

○福岡市教育委員会、福岡市立片江小学校サポーター会議構成員

物理科学科 永田 潔文 教授

○福岡市こども未来局、背振少年自然の家「チャレンジクラブ」講師

物理科学科 永田 潔文 教授

○「こどもまつり」出展講師、福岡市少年科学文化会館

物理科学科 永田 潔文 教授、平松 信康 教授、赤星 信准教授、匠 正治 助教、中村 忠嗣 助教、化学科 山口 武夫 教授

○ 「ありがとう 44 年さよなら少年科学文化会館」での出展講師、福岡市少年科学文

化会館 物理科学科 永田 潔文 教授、西田 昭彦 教授、香野 淳 教授、平松 信康 教授、赤星 信 准教授、匠 正治 助教、田尻 恭之 助教、中村 忠嗣 助教

- 第58回福岡県児童生徒発明くふう展 作品審査および表彰における審査委員長
物理科学科 平松 信康 教授

- 「中学生のためのキャリアデザイン啓発事業」の講師、福岡市市民局
講演「研究者としてのロールモデル」担当者：物理科学科 大槻かおり 助教

- 「世界一行きたい科学広場 in 宗像」大会運営委員、物理科学科 平松 信康 教授 宗像ユリックス

- 「第30回福岡県高等学校総合文化祭自然科学部門 福岡県大会(第16回福岡県高等学校生徒物理・地学研究発表大会)」において審査および講評 物理科学科 平松 信康 教授

- 「世界一行きたい科学広場 in 宗像」の講師、宗像ユリックス
実験展示「化学と表面張力のふしぎを楽しむ」
担当者：化学科 福田 将虎 助教、山田 勇治 助教

(4) 高校生に向けた模擬講義(2015年度：訪問・来学を含む)

応用数学科	山田 直記 教授	1回	化学科	大熊 健太郎 教授	4回
物理科学科	宮川 賢治 教授	1回	化学科	勝本 之昌 准教授	3回
物理科学科	固武 慶 准教授	2回	応用数学科	杉万 郁夫 准教授	1回
物理科学科	寺田 貢 教授	2回	地球圏科学科	杵山 哲男 教授	1回
応用数学科	藤木 淳 准教授	1回	地球圏科学科	中川 裕之 教授	1回
化学科	塩路 幸生 准教授	2回	応用数学科	田中 勝 教授	1回
物理科学科	眞砂 卓史 教授	1回			

(5) エクステンションセンター公開講座(福岡大学市民カレッジ)

■スマートフォンプログラミング講座 Swift プログラミング入門 (iPhone)

④Swift プログラミング入門⑤ Swift によるアプリ入門

講師：応用数学科 白石 修二 教授

■Android プログラミング講座 初級・中級

講師：応用数学科 白石 修二 教授

■体験！化学の不思議ー化学への招待ー

講師：化学科 塩路 幸生 准教授、田中 英彦 併任講師

安東勢津子 教育嘱託 石川 立太 助教 古賀 裕二 助教

長洞 記嘉 助教、福田 将虎 助教、吉田 亨次 助教

■キッズ・エコクラブ-環境問題を体験しながら学ぼう！

親子で学ぶ スマート省エネ発想術

監修：物理科学科 寺田 貢 教授

■「福岡大学を知る」シリーズ

噴火史研究にもとづく桜島火山の噴火予測

噴火規模と年代でつくる階段図は何を語るか？

講師：地球圏科学科 奥野 充 教授

(6) 地域ネット推進センター所管「地域の教育支援活動」

○物理コンテスト『物理チャレンジ2015』（平成27年7月12日）

- ・中学生、高校生を対象に、物理の面白さや楽しさを体験してもらうことを目的とし、国際物理オリンピック日本代表選考も兼ねる全国規模のコンテストが開催された。福岡大学は、その第1チャレンジ理論問題コンテストの会場となった。
- ・会場：福岡大学 文系センター棟 15階 第5会議室
- ・企画：平松信康理学部教授
- ・対象者：40名（福岡県内の中学生、高校生）

○親子科学教室『万華鏡を作ろう』『極低温の世界』（平成27年7月25、26日）

- ・科学的思考や知識を学び、科学への探求心を深める機会として、理科工作の体験学習を実施した。
- ・会場：片江公民館、別府公民館
- ・企画：永田潔文理学部教授
- ・対象者：80名（片江、別府校区の小学生、保護者）

○リフレッシュ理科教室 in 対馬 2015（平成27年9月7、8日）

- ・科学館などの施設利用が難しい地域の子どもたちに科学技術の面白さ、不思議さを直接体験してもらうために出張科学啓発活動を実施し、地域に根ざした理科教育の支援を行った。
- ・会場：対馬市立仁田小学校、対馬市立佐須奈小学校
- ・企画：香野淳理学部教授、永田潔文理学部教授、平松信康理学部教授、眞砂卓史理学部教授、匠正治理学部助教、中村忠嗣理学部助教
- ・対象者：50名（両校の小学生、教諭）

○親子天体観測教室『秋の星座をみてみよう』（平成27年9月19日）

- ・星や宇宙に関心を持つ機会として、天体望遠鏡を使って天体観測の体験学習を実施した。
- ・会場：福岡市立片江小学校
- ・企画：永田潔文理学部教授
- ・対象者：70名（片江校区の小学生、保護者）

○サイエンスモール in 飯塚 2015（平成27年9月19日）

- ・理科に興味を持ち、科学リテラシーを持った子どもたちを育成すると同時に、一般市民にも科学を身近に感じてもらうために、大学、高校、企業などが出展ブースを構え、様々な企画やイベントを通して理解、協力を求めた。
- ・会場：イイヅカコミュニティセンター
- ・企画：平松信康理学部教授
- ・対象者：3,500名（子どもを含めた一般市民）

○小学生のためのわくわく理科教室（平成28年2月23日）

- ・最先端の科学や専門技術を小学生向けに分かりやすく紹介することで、子どもたちが科学的思考を習得し、科学の楽しさを知る機会となった。
- ・会場：福岡市立那珂小学校
- ・企画：（理学部）香野淳教授、永田潔文教授、西田昭彦教授、平松信康教授、赤星信准教授、（福岡大学病院）志村英生教授
- ・対象者：174名（5年生児童 5クラス）

【地域との交流活動】

○夜間防犯パトロール（1、7月を除く月1回）

- ・大学周辺校区の安全・安心なまちづくりの推進および地域住民との交流を深めることを目的に実施した。
- ・場 所：七隈校区、片江校区の各町内
- ・企 画：七隈校区自治協議会、片江校区自治協議会
- ・対象者：七隈祭実行委員会、硬式・準硬式野球部、アメリカンフットボール部、男子・女子ソフトボール部、女子バスケットボール部、ななくま元気にするっ隊、応援指導部リーダー部門応援団、一般学生、永田潔文理学部教授、地域住民

12. 研究員の受入れ

〔①研究期間 ②研究テーマ ③指導教育職員〕

<理学部>

○上林 浩行、徳永 幸大

(東レ株式会社フィルム加工製品開発センター)

①2015年4月1日～2016年3月31日

②X線反射率法による薄膜構造解析の研究

③物理科学科 香野 淳 教授

○Thomas Carle

(九州大学、ポストドクター、フランス)

①2015年4月1日～2016年3月31日

②肉食昆虫オオカマキリの臭覚に関する生理学的形態学的研究

③地球圏科学科 横張 文男 教授

○徳永 幸大

(東レ株式会社フィルム加工製品開発センター)

①2015年4月1日～2016年3月31日

②X線反射率法による薄膜構造解析の研究

③物理科学科 香野 淳 教授

○脇田 久伸

(佐賀大学シンクロトン光応用研究センター)

①2015年4月1日～2016年3月31日

②各種材料の構造解析と評価

③化学科 山口 敏男 教授

<理学研究科 国際交流事業・外国人研究員等特別招聘>

○Wei Guoxin (魏 国新)

(華南師範大学教授)

①2015年7月10日～8月9日

③応用数学専攻 成瀬 慶明 教授

○Klaus-Robert Mueller

(ベルリン工科大学教授)

①2015年10月14日～30日

③応用数学専攻 藤木 淳 教授

○Hannu Eskola

(タンペレ工科大学教授)

①2016年2月2日～2月27日

③応用物理学専攻 寺田 貢 教授

○Nils Börje INGMAR PERSSON

(スウェーデン農業科学大学教授)

①2016年3月2日～3月30日

③化学専攻 山口 敏男 教授

13. 学生の国際交流活動状況

(1) 本学学生の海外研修状況

ニューカッスル大学（イギリス） 2015 年 8 月 8 日～8 月 30 日

・応用数学科 2 年次生 1 名

グリフィス大学（オーストラリア） 2016 年 2 月 13 日～3 月 12 日

・応用数学科 3 年次生 1 名

(2) 理学部の学科等が推進する国際交流事業

○第 11 回日韓交流セミナー

学 科：化学科および物理科学科

学 年：4 年次生

人 数：17 名

目 的：国際交流を通して英語によるコミュニケーション能力の向上と国際感覚の涵養

交 流：蔚山大学の学生（大学院生と学部 3 年次生と 4 年次生）37 名と引率教員 3 名が来学

期 間：2015 年 8 月 18 日～21 日

担当教員：化学科教員数名

○材料科学国際演習

学 科：ナノサイエンス・インスティテュート

学 年：3 年次生

人 数：15 名

目 的：国際交流を通して英語教育とプレゼンテーション教育を行うため。

交 流 先：上海交通大学金属基複合材料国家重点実験室

期 間：2015 年 8 月 18 日～22 日

担当教員：物理科学科・化学科教員 4 名

14. 教員の国際交流活動状況

(1) 短期海外研修員（1ヶ月未満）

氏 名	学 科	国 名	研 究 先	期 間
香野 淳	物理科学科	アメリカ	Moscone West, Marriott Marquis	4月5日～11日
石原与四郎	地球圏科学科	オーストリア	Austria Center Vienna	4月11日～19日
奥野 充	地球圏科学科	韓国	韓国地質資源研究院	4月14日～17日
上野 勝美	地球圏科学科	タイ王国、ラオス	チェンライ、ランパン他	4月24日～5月4日
吉田 亨次	化学科	アメリカ	オーク・リッジ国立研究所	5月12日～16日
白石 浩一	地球圏科学科	ノルウェー	ニーオルスン日本観測基地	5月30日～6月11日
奥野 充	地球圏科学科	アラスカ	The University of Alaska-Anchorage campus	5月10日～15日
大熊健太郎	化学科	フランス	カーン大学	6月13日～6月20日
成瀬 慶明	応用数学科	中国	復旦大学、武漢大学	6月18日～6月27日
小隈龍一郎	物理科学科	カナダ	Whistler	6月28日～7月3日
田尻 恭之	物理科学科	スペイン	Palau de Congressos de Catalunya Avda, Diagonal, 661-671, Barcelona	7月6日～7月14日
山口 敏男	化学科	中国	中国科学院青海塩湖研究所	7月7日～7月12日
濱田 龍義	応用数学科	オーストリア	Johannes Kepler University Linz	7月13日～7月20日
奥野 充	地球圏科学科	アメリカ	Islands of four Mountains	7月14日～8月12日
上野 勝美	地球圏科学科	ロシア	Kazan Federal University	8月4日～8月17日
成瀬 慶明	応用数学科	中国	河南師範大学	8月9日～8月23日
渡辺 啓介	化学科	アメリカ	マサチューセッツ工科大学等	8月25日～9月5日
山口 敏男	化学科	チェコ共和国	the Bohemia Technical University 等	8月29日～9月3日
吉田 亮次	化学科	ドイツ	Rostock 大学	9月5日～9月11日
奥野 充	地球圏科学科	フィリピン	Parker 火山および Matutum 火山	9月11日～9月18日
田口 幸洋	地球圏科学科	インドネシア	バリ島のブヤン・ブラタンカルデラ等	9月14日～9月20日
成瀬 慶明	応用数学科	中国	復旦大学と河南師範大学	9月20日～9月27日
田口 幸洋	地球圏科学科	中華民国	国立 台湾大学	9月30日～10月4日
奥野 充	地球圏科学科	中華民国	国立 台湾大学	10月4日～10月8日
香野 淳	物理科学科	インドネシア	CrasiaHotelSemarang (Semarang, Indonesia)	10月5日～10月9日
田上 響	地球圏科学科	アメリカ	The Society of Vertebrate Paleontology 75th	10月13日～10月18日
奥野 充	地球圏科学科	フィリピン	San Pablo 火山群およびイロシンカルデラ	10月21日～10月30日
上野 勝美	地球圏科学科	タイ	バンコク、チェンマイ、ランパン	10月24日～11月2日

氏 名	学 科	国 名	研 究 先	期 間
濱田 龍義	応用数学科	韓国	KNUE, NIMS	10 月 24 日～10 月 31 日
田上 響	地球圏科学科	中華民国	中国科学院古脊椎動物与古人類研究所	11 月 9 日～11 月 15 日
成瀬 慶明	応用数学科	中国	復旦大学	11 月 16 日～11 月 21 日
上野 勝美	地球圏科学科	ラオス	ビエンチャン、ウドムサイ、ルアンプラバン	12 月 4 日～12 月 16 日
藤木 淳	応用数学科	チリ	ICCV2015	12 月 9 日～12 月 20 日
成瀬 慶明	応用数学科	韓国	Korea Institue for Advance Study	12 月 10 日～12 月 12 日
奥野 充	地球圏科学科	インドネシア	バリ島のバツール火山等	12 月 11 日～12 月 19 日
原 圭一郎	地球圏科学科	アメリカ	サンフランシスコ・Moscone Cente	12 月 13 日～12 月 20 日
勝本 之昌	化学科	アメリカ	ハワイコンベンションセンター	12 月 13 日～12 月 20 日
仁部 芳則	化学科	アメリカ	ハワイコンベンションセンター	12 月 14 日～12 月 21 日
長洞 記嘉	化学科	アメリカ	ハワイ州ホノルル市	12 月 14 日～12 月 21 日
林田 修	化学科	アメリカ	ハワイ州ホノルル市	12 月 15 日～12 月 18 日
古賀 裕二	化学科	アメリカ	ハワイ州ホノルル市	12 月 15 日～12 月 20 日
塩路 幸生	化学科	アメリカ	ハワイ州ホノルル市	12 月 15 日～12 月 20 日
福田 将虎	化学科	アメリカ	ハワイ州ホノルル市	12 月 15 日～12 月 21 日
川田 知	化学科	アメリカ	ハワイ州ホノルル市	12 月 16 日～12 月 21 日
松原 公紀	化学科	アメリカ	ハワイコンベンションセンター	12 月 16 日～12 月 23 日
上野 勝美	地球圏科学科	タイ	コンケン、ロエイ、ワサフン、バンコク	2 月 14 日～2 月 20 日
田口 幸洋	地球圏科学科	インドネシア	国立ガジャマダ大学等	2 月 23 日～2 月 28 日
奥野 充	地球圏科学科	インドネシア	ジョグジャカルタ市およびバリ島	2 月 23 日～3 月 3 日
白石 浩一	地球圏科学科	ノルウェイ	ニーオルスン日本観測基地	2 月 26 日～3 月 10 日
小田 信行	応用数学科	アメリカ	Ohio state University at Newark	3 月 2 日～3 月 16 日
田口 幸洋	地球圏科学科	インドネシア	エネルギー・鉱物資源省地質資源センター	3 月 5 日～3 月 10 日
奥野 充	地球圏科学科	フィリピン	フィリピン火山地震研究所	3 月 6 日～3 月 8 日
奥野 充	地球圏科学科	中華民国	香港ジオパーク	3 月 13 日～3 月 17 日
成瀬 慶明	応用数学科	中国	広西師範大学	3 月 19 日～3 月 30 日

学部における就職・進路支援センターのデータから、理学部分を抜粋して以下にまとめる。

求人件数は4,486件で、昨年度より11.3%増であった。

理学部の就職決定率は97.0%で、昨年度より2.9ポイントの増であり、大学全体の平均値96.2%より高い値となっている。

学科別の就職決定率を、表1に示す。活動中の項目で、教員志望の学生の比率が多いことが理学部の特徴となっている。本採用になる前に、非常勤教員として数年間、現場を経験するケースが多いためである。

※算出方法：就職決定者／（就職決定者＋企業希望未決定者）

表2 2015年度 博士課程〔前期・後期〕就職状況(専攻別進路内訳)(人数)

	就 職				進 学	その他	合 計
	企 業	公務員	教 員	大学・ 研究機関			
応用数学専攻	0	—	1	—	—	4	5
応用物理学専攻	7	1	1	—	—	1	10
化学専攻	16	—	※1	—	4	—	21
地球圏科学専攻	5	—	—	—	1	—	6
理学研究科	28	1	3	0	5	5	42
※ 非常勤講師							

研究室名
基礎数学研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
基礎数学研究室は、小田、石黒、秋山、佐藤、宮内、中岡の6名で構成され、代数学および位相数学に関連する分野を研究している。研究の具体的内容は次の通りである。 小田・中岡は位相空間の部分集合族に対して定義される作用子を用いて、一般化された開集合族を定義しその性質を調べている。さらに小田はBBT積を用いて、非常に弱い条件の下で得られる随伴写像を用いて位相不変量の一般化の研究を行っている。また、一般の圏において戸田積の様々な一般化と応用の研究を行っている。 石黒はコンパクト連結Lie群の分類空間の有理数係数のコホモロジー環がWeyl群の作用による不変式環で表されるが、dual表現など多くの表現について研究を広げ、射影的Lie群の分類空間について調べている。そのためには対称群の既約なintegral表現について、位相的な観点から対応するコホモロジー環の代数的構造を理解することが重要である。特殊ユニタリー群以外のLie群にも目を向け、ホモトピー論的部分群や被覆空間との関係など更に研究すべきことが多く残されている。また、不変式環の幾何的非実現性に関連した問題およびペアリング問題についても考察している。 秋山はデザイン理論の中で、クラス正則な対称横断デザインに対応する一般アダマール行列の構成と分類の研究を、位数が小さな群について行っている。また、位数が素数べきでない射影平面の存在について研究を行っている。 佐藤はトーリック多様体を組み合わせ論的な技術を用いて研究している。特に、第二チャーン指標が非負になるようなトーリック多様体の構造を決定することを目指しており、森理論の立場から、様々な端射線を持つ場合について、そのような多様体の構造を研究している。 宮内は位相空間のCW-複体としての構造における胞体の接着写像のホモトピー類と乗法的一般コホモロジー論におけるカップ積の関係の一般化と、それによるホモトピー群と一般コホモロジー論の相互関係について研究を行っている。また、その関係を用いたL-SカテゴリやTopological Complexityなどの位相不変量への応用の研究を行っている。 キーワード：位相不変量、Lie群、コホモロジー、一般アダマール行列、ホモトピー、トーリック多様体
研究員の構成員
小田信行（教授）・理学博士 石黒賢士（教授）・Ph. D 秋山獻之（教授）・博士（理学） 佐藤 拓（准教授）・博士（理学） 宮内敏行（助教）・博士（数理学） 中岡史絵（助手）・学士（教育学）

2014 年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
M1：1 名 分類空間のトポロジー 4 年次生：5 名 ホモロジー論； 4 名：位相幾何学；
教員の担当科目
小田信行：(学部) 数学総合Ⅱ、集合と距離Ⅰ、集合と距離Ⅱ、基礎数学、数学入門、 基礎数学研究、行列と行列式Ⅰ、行列と行列式Ⅱ 石黒賢士：(学部) 基礎線形代数及び演習、線形代数及び演習、行列と行列式Ⅰ、幾何学Ⅱ、 基礎数学研究、卒業研究 (大学院) 位相数学講究Ⅱ、現代代数学入門、基礎数学特論Ⅱ 秋山獻之：(学部) 行列と行列式Ⅰ、行列と行列式Ⅱ、基礎数学、数学入門、数学総合Ⅰ、 代数学、教育実習事前・事後指導、基礎数学研究 佐藤 拓：(学部) 数学入門、基礎数学、微分積分Ⅰ、微分積分Ⅱ、統計入門、代数学序論、 離散数学、基礎数学研究 宮内敏行：(学部) 行列と行列式Ⅰ、数学A、微分積分Ⅳ、数学Ⅳ、数学総合Ⅰ
教員の所属学会
小田信行：日本数学会 石黒賢士：日本数学会、米国数学会 秋山獻之：日本数学会 佐藤 拓：日本数学会 宮内敏行：日本数学会 中岡史絵：日本数学会
最近 5 年間の学術論文
F. Nakaoka and N. Oda, Maximal objects and minimal objects in the sets with operations, Fukuoka University Science Reports (理学集報) 45 (2015), 1--7. T. Inoue, T. Miyauchi and J. Mukai, Group extensions of the 31-stem homotopy groups of S^n ($n=9, 10$), J. Fac. Sci. Shinshu Univ. vol 46 (2015), 1--19. (査読有) F. Nakaoka and N. Oda, Interiors and closures in a set with an operation, Communications of the Korean Mathematical Society 29 (2014), 555--568. (査読有) K. Ishiguro and F. Yayama, Pairing and admissible maps, Fukuoka University Science Reports, vol 44 (1), 2014, 53--64. K. Ishiguro, S. Kudo and T. Nakano, Pairings and monomorphisms of classifying spaces, Topology and its Applications 160, 2013, 264--272. (査読有) K. Ishiguro and S. Kudo, Generators of invariant rings and modular representations of symmetric groups, Fukuoka University Science Reports, vol 43 (1), 2013, 1--9. J.-R. Kim and N. Oda, The set of cyclic-element preserving maps, Topology and its Applications 160 (2013), 794--805. (査読有)

H. Sato, トーリック・ファノ多様体の第二チャーン指標, RIMS Kokyuroku 1897 (2013), 111-116. N. Iwase, M. Mimura, N. Oda and Y. S. Yoon, The Milnor-Stasheff filtration on spaces and generalized cyclic maps, Canadian Mathematical Bulletin, 55 (2012), 523--536. (査読有) H. Kihara and N. Oda, Homotopical presentations and calculations of algebraic K_0-groups for rings of continuous functions, Publications of the Research Institute for Mathematical Sciences, 48 (2012), 65--82. (査読有) H. Sato, The numerical class of a surface on a toric manifold, Int. J. Math. Math. Sci. 2012, 1--9. (査読有) T. Inoue, T. Miyauchi and J. Mukai, "Self-homotopy of a suspension of the real 5-projective space, JP J. Geom. Topol. 12 (2012), 111--158. (査読有) Y. Hirashima and N. Oda, Exponential homeomorphisms in the category of topological spaces with base point, Topology and its Applications 158 (2011), 445--456. (査読有) H. J. Marcum and N. Oda, Long box bracket operations in homotopy theory, Applied Categorical Structures, 19 (2011), 137--173. (査読有) H. J. Marcum and N. Oda, Hopf invariants, Toda brackets and the reduced diagonal map, Topology and its Applications 158 (2011), 15--37. (査読有) K. Ishiguro and S. Kudo, Invariant theory and the Topology of classifying spaces (in Japanese), Fukuoka University Science Reports, vol 41 (1) (2011), 83-101 K. Ishiguro, Invariant rings and dual representations of dihedral groups, J. Korean Math. Soc. 47, no. 2 (2010), 299--309. (査読有)
最近5年間の学術著書
該当なし
最近5年間の学術(国際)会議での発表
秋山 獻之「点クラスおよびブロッククラス上に半正則に作用する自己同型群をもつ $STD \lambda [k; u]$」 熊本組合せ論研究集会—代数的デザイン理論とその周辺—, 熊本大学 2015年1月9日 佐藤 拓「トーリック・ファノ多様体の分類定理の紹介」、福岡大学理学部、第132回日本数学会九州支部例会特別講演、2015年2月14日. 小田 信行 (Jae-Ryong Kim と共同)「Cocyclic elements preserving maps」、ホモトピー論における有限と無限、九州大学西新プラザ 2015年2月20日. 宮内 敏行「Matrix Toda brackets in the EHP sequence」ホモトピー論における有限と無限 九州大学西新プラザ 2015年2月19日. 佐藤 拓「トーリック・ファノ多様体の第二チャーン指標」、福岡大学セミナーハウス、福岡大学微分幾何研究会、2014年10月31日-11月3日. 宮内 敏行「Determination of the 2-primary components in 32-stem unstable homotopy groups of spheres」2014年度日本数学会年会 学習院大学 2014年3月15日 佐藤 拓「トーリック多様体の weak factorization theorem について」、東北大学大学院理学研

究科、杜の都代数幾何学研究集会、 2013年2月14-15日、 佐藤 拓「トーリック・ファノ多様体の第二チャーン指標」、 京都大学数理解析研究所、 研究集会 " Fano多様体の最近の進展"、 2013年12月16-18日、 宮内敏行 「SO(10)のL-Sカテゴリ」 Diffeology in Karatsu 唐津市民交流プラザ 2013年12月22日 石黒賢士、 矢山史恭「コンパクトLie群の分類空間のペアリング」 2013年度秋季総合分科会（於：愛媛大学）2013年9月26日 Nobuyuki Oda 「Brown-Booth-Tillotson products and exponentiable spaces」 Topology Seminar at The Ohio State University The Ohio State University, Columbus, Ohio, U.S.A. March 19, 2013 秋山獻之「On generalized Hadamard matrices」 Workshop on Algebraic Combinatoric 神戸学院大、2013年3月7日 石黒賢士、 工藤翔太郎、 中野智弘 「Pairings and monomorphisms of classifying spaces」 2012年 度秋季総合分科会 九州大学 2012年9月18日 佐藤 拓 「ファノ多面体の分類理論 (I)、 (II)」 (二回連続講演)、 九州大学マス・フォア・イン ダストリ研究所、 研究集会「学習理論における組合せ論」、 2012 年 9 月 18-20 日、 宮内敏行「Top cell attaching map in 3-cell complex」 Studio Phones Seminar 神戸大学 2012 年 6 月 12 日 宮内敏行「Unstable homotopy group」 Studio Phones Seminar 神戸大 2012 年 6 月 11 日 石黒賢士「分類空間のペアリング問題と admissible maps」福岡大学トポロジーセミナー 2012 年 6 月 4 日 石黒賢士「Millerの定理について」福岡大学トポロジーセミナー 2012年4月23日 秋山獻之「GH(u, λ) の構成と分類」組合せ論セミナー 大分高専 2012 年 3 月 1 日 秋山獻之「点上, ブロック上に半正則に作用する位数 21 の巡回群を自己同型にもつ STD7 [21 ; 3] の構成と分類」 有限幾何とその周辺 崇城大学 2011 年 12 月 26 日 佐藤 拓「 On the classification of toric 2-Fano manifolds」、 京都大学理学部、 研究集会「特異点 論とそのひろがり」、 2011 年 8 月 22-26 日、 佐藤 拓 「Toric manifolds whose Chern characters are non-negative」、 Pacific National University, Khabarovsk, Russia, International Conference ``Toric Topology and Automorphic Functions", 2011 年 9 月 5-10 日、 宮内敏行「特性数の一般化とCW複体の胞体構造について」 RIMS 研究集会「空間の代数的・ 幾何的モデルとその周辺」京都大学数理解析研究所 2011 年 9 月 9 日 中岡史絵、小田信行 「Kasahara operation の応用について」位相空間論とその応用 福岡大学セミナーハウス 2011年8月21日 宮内敏行「懸垂実6次元射影空間の自己ホモトピー集合の群構造について」 第4回福岡・札幌 幾何セミナー 西新プラザ 2010 年 2 月 21 日
最近5年間の学術的会議の開催実績（応用数学科・専攻のみ）
「福岡ホモトピー論セミナー」、2015 年 1 月 11 日～1 月 12 日、

福岡大学セミナーハウス、小田信行・石黒賢士 「代数的組合せ論ミニ集会」、2014 年 3 月 7 日、 神戸学院大学ポートアイランドキャンパス、秋山獻之 「福岡ホモトピー論セミナー」、2014 年 1 月 12 日～1 月 13 日、 福岡大学セミナーハウス、小田信行・石黒賢士 「福岡ホモトピー論セミナー」、2013 年 1 月 12 日～1 月 13 日、 福岡大学セミナーハウス、小田信行・石黒賢士 「有限幾何とその周辺」、2012 年 9 月 29～30 日、福岡大学理学部、秋山獻之 「福岡ホモトピー論セミナー」、2012 年 1 月 7 日～1 月 8 日、 福岡大学セミナーハウス、小田信行・石黒賢士 「有限幾何とその周辺」、2011 年 8 月 27～28 日、福岡大学理学部、秋山獻之 「福岡ホモトピー論セミナー」、2011 年 1 月 8 日～1 月 9 日、福岡大学セミナーハウス、 小田信行・石黒賢士
最近 5 年間の代表者としての学外資金導入実績
科学研究費（基盤研究（C））、平成 23～平成 26 年度 研究課題：指数位相により定まる写像空間とホモトピー不変量の研究 研究代表者：小田信行
科学研究費（基盤研究（C））、平成 23 年度～平成 27 年度 研究課題：トーリック森理論の発展と応用に関する研究 研究代表者：佐藤 拓
最近 5 年間の代表者としての学内資金導入実績
2012 年度理学研究科高度化推進事業 研究課題：高度情報化社会における数学・情報教育の研究 研究代表者：石黒賢士
研究推進部領域別研究 2012 年度～2014 年度 研究課題：位相不変量による空間のトポロジーの研究 研究代表者：石黒賢士
研究推進部領域別研究 2009 年度～2011 年度 研究課題：図形の群論的研究 研究代表者：秋山獻之
最近 5 年間の学会等学術団体における役職など
該当なし
最近 5 年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
該当なし
最近 5 年間の一般（非学術）集会での発表論文
該当なし
最近 5 年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など

SSH（スーパーサイエンスハイスクール）の講師、城南高等学校 2012 年～2014 年 講義担当者：石黒賢士（担当補助：中岡史絵）
その他特筆事項
矢山 史恭（M2） 2014 年度京都府公立学校教員採用選考試験 大学推薦特別選考合格 2013 年 6 月 11 日 工藤 翔太郎（D3） 第一回九州若手数学賞を受賞 2013 年 2 月 11 日

研究室名
微分幾何学研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
本研究室では微分幾何学と大域解析学に関する様々な研究課題について研究を行っている。特に、下記の研究課題に対して、顕著な進展を与えた。 1）4次元空間形内の共形平坦な超曲面の研究について、①ユークリッド空間内の共形平坦な超曲面の双対共形平坦計量を持つ多様体が、またユークリッド空間内の超曲面として実現できることを示した。この時の双対超曲面の各点での接空間が、最初の超曲面の接空間と対応する点で平行になるように実現できることを得た。双対超曲面の(最初の超曲面の情報による)積分表示も与えた。②1つの共形平坦な超曲面から5次元のパラメータを持って(共形的に異なる)共形平坦な超曲面の対が構成できた。③1つの共形平坦な超曲面の Guichard net から5次元のパラメータを持ってGuichard netのRibaucour pairを構成した。④ユークリッド空間内の共形平坦な超曲面を6次元ミンコフスキー空間内で考えた時、その随伴族による連続変形の中に、双対超曲面や Ribaucour pair が存在することを証明した。これらの結果は、Guichard曲面等の曲面論の結果が（その内容を超える形で）高次元部分多様体にまで拡張できる事を示したもので、画期的な成果である。⑤共形平坦な超曲面の存在は、Guichard net と呼ばれる座標系とある種の3次元計量の存在と同値である。しかし、Guichard net から空間形内の超曲面を実際に構成する方法はわかっていなかった。この問題を解決し、超曲面をユークリッド空間内に構成する具体的方法を発見した。⑥1つの Guichard net からその Ribaucour partner を代数的に求める方法を発見した。⑦genericで共形平坦な超曲面から成る空間を決定する問題は、E. Cartan による1917年の論文以来 open problem となっていたが、この空間を負の定曲率を持つ2次元計量の1変数族の空間と対応づけることにより、open problemを完全に解決し、現在論文を執筆中である。この結果は、負の定曲率を持つ2次元計量の空間で、発展方程式系を解くことにより得られる。このような方法は斬新的であり、また、得られた結果は新しい曲面論の展開を示唆するものとなっている。 2）リーマン多様体における微分作用素の固有値問題に関する研究について、①Fourier 変換を巧く利用して、Li-Yau はユークリッド空間内の有界領域におけるラプラス作用素の第 k 番目の固有値 の下限を研究し、最適な下限を得た。完備リーマン多様体に対して、Fourier 変換のような道具が存在しないので、Li-Yau の方法とは全く違った新たな分析道具が必要であ

る。独創的、斬新的な研究方法で完備リーマン多様体内の有界領域におけるラプラス作用素の固有値に関する最適な下限を得た。②張り詰められた状態でのプレートの振動の臨界状態を表す双調和作用素の固有値問題の固有値に関する研究について独創的且つ新しい研究方法で試験関数を構成し、1955 年に Payne-Polya-Weinberger により提案された固有値に関する普遍不等式の難問を解決し、固有値に関する普遍不等式の研究に対して重要な貢献を与えた。張り詰められた状態でのプレートの振動を表す双調和作用素の Dirichlet 固有値問題の固有値を研究し、固有値に関する最適な上限を得た。さらに、固有値の下限に関する研究に対して、顕著な進展を与えた。

3) 平均曲率フローのセルフ-シュリンカーに関する研究について、多項式面積増大度を持つ完備セルフ-シュリンカーの第 2 基本形式の長さの第 2 ギャップが存在することを示した。さらに、完備リーマン多様体上のラプラス作用素の Omori-Yau の広義最大値原理を、平均曲率フローの完備セルフ-シュリンカー上の L -作用素に拡張し、それを用いて平均曲率フローの完備セルフ-シュリンカーの分類研究で成果を上げ、多項式面積増大度に関する条件を仮定せず、平均曲率フローの完備セルフ-シュリンカーの剛体性定理を示した。さらに、重み付き体積保存平均曲率フローの λ -超曲面の研究について、良い性質を持つ関数に L -作用素を適用することにより、多項式面積増大度をもつ完備 λ -超曲面のギャップ定理を得た。さらに、ラプラス作用素の Omori-Yau の広義最大値原理を、重み付き体積保存平均曲率フローの λ -超曲面上の L -作用素に拡張し、多項式面積増大度を仮定しない完備 λ -超曲面のギャップ定理も得た。

4) 一次元弾性体の数学的モデルである Kirchhoff 弾性棒やエラスティカに関して、次のような成果を得た。①高次元空間形内のエラスティカと Kirchhoff 弾性棒を比較し、これらの幾何学的性質に大きな違いがあることを示した。具体的には、4 次元以上の空間形において、エラスティカは必ずある 3 次元全測地的部分多様体の中に収まってしまうことが知られている。これに対し低い次元の全測地的部分多様体に決して収まらないような Kirchhoff 弾性棒を構成した。②5 次元空間形内に、螺旋ではない充満な Kirchhoff 弾性棒が無限個存在することを証明し、その自然曲率を sn 関数を用いて具体的に表示した。この結果から Kirchhoff 弾性棒は、単に変分問題の解としてだけではなく、高次元空間形内の曲線論の観点から見ても興味深い例を与えることが分かる。③Kirchhoff 弾性棒は常微分方程式の解であり、初期値問題の大域解の存在問題は、基本的かつ重要な問題である。完備リーマン多様体において、Kirchhoff 弾性棒の方程式の初期値問題を考察し、大域解が一意的に存在することを証明した。④Kirchhoff 弾性棒の、可積分系の観点からの一般化であるソリトン曲線について研究し、次の結果を得た。3 次元 Euclid 空間内の準周期的な第 4 ソリトン曲線の族を Jacobi の楕円関数によって陽に表した。さらに、この族の中に周期的なものが存在することを証明した。そして、この周期的第 4 ソリトン曲線を用いて、空間曲線版変形 KdV 方程式の周期的な合同解を構成した。

本研究室全体の活動として、福岡大学微分幾何学セミナーを毎週木曜日定期的に行っている。九州中心とする研究者と大学院生は参加している。

キーワード：リーマン多様体・共形平坦な超曲面・Kirchhoff 弾性棒・固有値・ラプラス作用素
研究室の構成員
陶山芳彦（教授）・理学博士 成瀬慶明（教授）・博士(理学) 川久保哲（助教）・博士(理学) 森 和子（助手）・理学士
2014 年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
2015 年 3 月修士修了者 1 名： 修士論文題目：セルフ-シュリンカーと λ -超曲面に関する研究 大学院生（M1）1 名 研究課題：球面のコンパクト超曲面に関する研究 卒業生 6 名 研究課題：平均曲率一定の回転面について、 研究課題：離散的頂点を持つ卵形線の構成、
教員の担当科目
陶山芳彦：(学部) 微分積分Ⅱ及び演習、幾何学特論、卒業研究Ⅰ・Ⅱ、統計、 微分積分Ⅱ、微分積分Ⅳ、幾何学序論 成瀬慶明：(学部) 幾何学Ⅰ、数学総合Ⅰ、統計、数学B、卒業研究Ⅰ・Ⅱ、基礎数学研究、 微分積分Ⅰ及び演習 (大学院) 現代幾何学入門Ⅰ、幾何学講究Ⅰ(通年) 川久保哲：(学部) 数学総合Ⅰ、応用線形代数入門、行列と行列式Ⅰ、微分積分Ⅱ、統計 森 和子：(学部) 教育実習事前・事後指導(補助)、数学科教育法Ⅲ(補助)、 教職のための数学演習(補助)、教員採用試験のための 勉強会(補助)
教員の所属学会
陶山芳彦：日本数学会 成瀬慶明：日本数学会 川久保哲：日本数学会 森 和子：情報処理学会
最近 5 年間の学術論文
U. Hertrich-Jeromin, Y. Suyama, M. Umehara and K. Yamada, A duality for conformally flat hypersurfaces, Beitr Algebra Geom, DOI 10.1007/s13366-014-0225-3. (査読有) to appear U. Hertrich-Jeromin and Y. Suyama, Ribaucour pairs corresponding to dual pairs of comformally flat hypersurfaces, Progress in Mathematics” Geometry and Analysis on Manifolds”, 308(2015),

- Birkhauser. (査読有)
- Qing-Ming Cheng and G. Wei, A gap theorem of self-shrinkers, *Trans. Amer. Math. Soc.*, 367(2015), 4895-4915. (査読有)
- Qing-Ming Cheng and Y. Peng, Complete self-shrinkers of the mean curvature flow, *Calculus of Variations and PDEs*, DOI 10.1007/s00526-014-0720-2, 52(2015), 497-506. (査読有)
- Qing-Ming Cheng, Estimates for eigenvalues of the Paneitz operator, *J. Diff. Eqns.*, 257(2014), 3868-3886. (査読有)
- Qing-Ming Cheng, H. Li and G. Wei, The stability index of hypersurfaces with constant scalar curvature in spheres, *Proc. Royal Soc. Edinburgh*, 144A (2014), 447-453. (査読有)
- Satoshi Kawakubo, Extendability of Kirchhoff elastic rods in complete Riemannian manifolds, *J. Math. Phys.* 55 (2014), 083525. (査読有)
- 川久保哲, 第4ソリトン曲線について, 2013年度福岡大学微分幾何研究会報告集 (2014), 3--8.
- Satoshi Kawakubo, Kirchhoff elastic rods in five-dimensional space forms whose centerlines are not helices, *J. Geom. Phys.* 76 (2014), 158--168. (査読有)
- U. Hertrich-Jeromin and Y. Suyama, Ribaucour pairs corresponding to dual pairs of conformally flat hypersurfaces, 福岡大学微分幾何研究会 2013 報告集, 187--207.
- Qing-Ming Cheng and Y. Peng, Self-shrinkers of the mean curvature flow, *Proceedings of the workshop on differential geometry of submanifolds and its related topics*, World Sci. 2013, pp. 147--163. (査読有)
- Qing-Ming Cheng, H. Sun, G. Wei and L. Zeng, Estimates for lower bounds of eigenvalues of the poly-Laplacian and quadratic polynomial operator of the Laplacian, *Proc. Royal Soc. Edinburgh*, 143A(2013), 1147--1162. (査読有)
- Qing-Ming Cheng and Guoxin Wei, Upper and lower bounds for eigenvalues of the clamped plate problem, *J. Diff. Eqns.*, 255(2013), 220--233. (査読有)
- 川久保哲, 完備 Riemann 多様体内の長さ無限大の Kirchhoff 弾性棒, 福岡大学理学集報 43 (2013), 137--142.
- Udo Hertrich-Jeromin and Yoshihiko Suyama, Conformally flat hypersurfaces with Bianchi-type Guichard net, *Osaka J. Math.* 50(2013), 1--30. (査読有)
- Qing-Ming Cheng and Yejuan Peng, Estimates for eigenvalues of L operator on self-shrinkers, *Comm. Contemporary Math.*, 15(2013), 1350011-1-1350011-23.. (査読有)
- Qing-Ming Cheng, Xuerong Qi and Guoxin Wei, A lower bound for eigenvalues of the poly-Laplacian with arbitrary order, *Pacific J. Math.*, 262(2013), 35--47. (査読有)
- Satoshi Kawakubo, Global solutions of the equation of the Kirchhoff elastic rod in space forms, *Bull. Aust. Math. Soc.* 88 (2013), 70--80. (査読有)
- Satoshi Kawakubo, Congruence solutions to the localized induction hierarchy in three-dimensional space forms, *Osaka J. Math.* 50 (2013), 921--945. (査読有)
- 川久保哲, 完備 Riemann 多様体内の長さ無限大の Kirchhoff 弾性棒, 2012 年度 福岡大学微分幾何研究会報告集 (2013), 1--7.

- Qing-Ming Cheng and Xuerong Qi, Eigenvalues of the Laplacian on Riemannian manifolds, International J. Math., 23(2012), No.7, 1250067-1-1250067-20. (査読有)
- Qing-Ming Cheng and Hongcang Yang, Universal bounds for eigenvalues of a buckling problem II, Trans. Amer. Math. Soc., 364(2012), 6139--6158. (査読有)
- Daguang, Chen, Qing-Ming Cheng, Qiaoling Wang and Cangyu Xia, On eigenvalues of a system of elliptic equations and of the biharmonic operator, J. Math. Anal. Appl., 387(2012), 1146--1159. (査読有)
- Yoshihiko Suyama, Conformally flat hypersurfaces --- Existence of an associated family and a dual hypersurface---, 2011 年度 福岡大学微分幾何研究会報告集 (2011), 43--50.
- Qing-Ming Cheng and G. Wei, A lower bound for eigenvalues of a clamped plate problem, Calculus of Variations and PDEs, 42(2011), 579--590. (査読有)
- Qing-Ming Cheng and Hongcang Yang, Universal inequalities for eigenvalues of a clamped plate problem on a hyperbolic space, Proc. Amer. Math. Soc., 139 (2011), 461--471. (査読有)
- 川久保哲, Kirchhoff 弾性棒の方程式の第一積分と大域解, 福岡大学理学集報 41(2011), 147--153.
- 川久保哲, 5次元空間形内の螺旋でない Kirchhoff 弾性棒, 福岡大学理学集報 41 (2011), 1--6.
- Satoshi Kawakubo, Kirchhoff elastic rods in higher-dimensional space forms, Proc. Japan Acad. Ser. A Math. Sci. 87 (2011), 5--9. (査読有)
- Qing-Ming Cheng, Haizhong Li and Guoxin Wei, Embedded hypersurfaces with constant mean curvature in a unit sphere, Comm. Contemporary Math., 12(2010), 997--1013. (査読有)
- Qing-Ming Cheng, Haizhong Li and Guoxin Wei, On some rigidity results of hypersurfaces in a sphere, Proc. Royal Soc. Edinburgh, 140A (2010), 477--493. (査読有)
- Qing-Ming Cheng, Xingxiao Li and Xuerong Qi, A classification of hypersurfaces with parallel para-Blaschke tensor in S^{m+1} , International J. Math., 21(2010), 297--316. (査読有)
- Qing-Ming Cheng, Guangyue Huang and Guoxin Wei, Estimates for lower order eigenvalues of a clamped plate problem, Calculus of Variations and PDEs, 38(2010), 409--416. (査読有)
- Qing-Ming Cheng, Takamichi Ichikawa and Shinji Mametsuka, Estimates for eigenvalues of a clamped plate problem on Riemannian manifolds, J. Math. Soc. Japan, 62(2010), 673--686. (査読有)
- 川久保哲, 5次元空間形内の螺旋でない Kirchhoff 弾性棒, 2010 年度 福岡大学微分幾何研究会報告集 (2011), 1--8.
- 川久保哲, 3次元空間形内の局所誘導階層について, 福岡大学理学集報 40 (2010), 155--161.

最近5年間の学術著書

- 成瀬慶明, 濱田龍義, 川久保哲, 松浦望編著, 2014年度 福岡大学微分幾何研究会報告集, 2015年3月.
- 陶山芳彦編著, 2013年度 福岡大学微分幾何研究会報告集, 2014年3月.
- 陶山芳彦編著, 2012年度 福岡大学微分幾何研究会報告集, 2013年3月.

陶山芳彦編著, 2011年度 福岡大学微分幾何研究会報告集, 2012年3月.

陶山芳彦編著, 2010年度 福岡大学微分幾何研究会報告集, 2011年3月.

最近 5 年間の学術国際会議での発表

*は国際会議

陶山芳彦, 共形平坦な超曲面の作る空間, 2014年度福岡大学微分幾何研究会,
2014年11月2日, 福岡大学セミナーハウス.

*Qing-Ming Cheng, From self-shrinkers to λ -hypersurfaces, August 17, 2014, Beijing Normal University, Beijing, China.

*Qing-Ming Cheng, The weighted volume-preserving variations, Workshop on Differential Geometry, August 28, 2014, Henan Normal University, China.

*Qing-Ming Cheng, Critical points of the weighted area functional, The 10th Geometry Conference for the Friendship of China and Japan, September 6-12, 2014, Fudan University, Shanghai, China

Qing-Ming Cheng, 重み付き体積保存変分について, 広島幾何学研究集会 2014, 2014年10月8日-11日, 広島大学.

*Qing-Ming Cheng, Eigenvalues of the Paneitz operator, November 13, 2014, Tsinghua University, Beijing, China.

*Qing-Ming Cheng, The weighted volume-preserving mean curvature flow, Jan. 15, 2015, South China Normal University, Guangzhou, China.

*Qing-Ming Cheng, On critical points of functional, March 3, 2015, Beijing Normal University, Beijing, China.

Qing-Ming Cheng, 重み付き体積を保つ平均曲率フロー, 研究集会「リーマン幾何と幾何解析」, 2015年3月6日-7日, 筑波大学.

*Qing-Ming Cheng, Complete λ -hypersurfaces of the weighted volume-preserving mean curvature flow, March 24, 2015, Sichuan University, Chengdu, China.

*Qing-Ming Cheng, On the weighted area functional, August 7, 2014, Nankai University, Tianjin, China.

*Satoshi Kawakubo, Fourth soliton curves of the localized induction hierarchy, Transformations & Singularities, September 16, 2014, Vienna University of Technology, Vienna, Austria.

*Y. Suyama, Ribaucour pairs corresponding to dual pairs of conformally flat hypersurfaces, March 25, 2014, Fujian Normal University, Fuzhou, China.

*Qing-Ming Cheng, Critical points of the weighted volume functional, March 25, 2014, Fujian Normal University, Fuzhou, China.

*Qing-Ming Cheng, A survey on complete self-shrinkers, March 4, 2014, Beijing Normal University, Beijing, China

*Qing-Ming Cheng, On eigenvalues of Laplace operator, Feb. 28, 2014. Guangxi Normal University. Guilin, China

*Y. Suyama, Ribaucour pairs corresponding to dual pairs of conformally flat hypersurfaces,

International Workshop on Differential Geometry 2014, Feb. 14-16, 2014,
Hotel New Imari, Imari.

*Qing-Ming Cheng, Self-shrinkers of mean curvature flow, International Workshop on Differential
Geometry 2014, Feb. 14-16, 2014, Hotel New Imari, Imari.

川久保哲, 局所誘導階層の第4ソリトン曲線, 測地線及び関連する諸問題,
2014年1月11日, 熊本大学.

*Qing-Ming Cheng, The rigidity of complete self-shrinkers of the mean curvature flow, Jan. 3, 2014,
South China Normal University, Guangzhou, China.

*Qing-Ming Cheng, Complete self-shrinkers of the mean curvature flow, The Eleventh Pacific Rim
Geometry Conference, December 10-14, 2013, Fudan University, Shanghai, China.

川久保哲, 第4ソリトン曲線について, 2013年度福岡大学微分幾何研究会,
2013年11月1日, 福岡大学セミナーハウス.

成瀬慶明, 平均曲率フローの完備セルフシュリンカーについて, 九州大学幾何学セミナー,
2013年9月22日, 九州大学

*Qing-Ming Cheng, Applications of universal estimates for eigenvalues, August 15, 2013, Beijing
Normal University, Beijing, China

*Qing-Ming Cheng, Universal estimates for eigenvalues and applications, ICCM 3013 The Sixth
International Congress of Chinese Mathematics, July 14-19, 2013, National Taiwan
University, Taipei, Taiwan.

*Qing-Ming Cheng, Eigenvalues of the eigenvalue problem of Laplacian, Geometric Analysis
Workshop 2013, June 3-8, 2013, Ningxia University, Yinchuan, China.

*Yoshihiko Suyama, Conformally flat hypersurfaces --- Existence of an associated family, a dual
hypersurface and a Riccaur pair---, The Fourth International Workshop on Differential
Geometry, 2013年3月26日, 虹ノ松原ホテル.

*Satoshi Kawakubo, Kirchhoff elastic rods of infinite length in a complete Riemannian
manifold, The Fourth International Workshop on Differential Geometry,
2013年3月25日, 虹ノ松原ホテル.

*Qing-Ming Cheng, Applications of universal inequalities for eigenvalues, Fudan University,
Shanghai, China, March 15, 2013.

*Qing-Ming Cheng, Self-shrinkers of the mean curvature flow, Geometry and topology of
submanifolds, Fujian Normal University, Fuzhou, China, November 20-25, 2012.

川久保哲, 完備 Riemann 多様体内の長さ無限大の Kirchhoff 弾性棒, 2012年度 福岡大学微分
幾何研究会, 2012年11月1日, 福岡大学セミナーハウス.

Qing-Ming Cheng, Complete self-shrinkers, 2012年度 福岡大学微分幾何研究会,
2012年11月1日-4日, 福岡大学セミナーハウス.

*Qing-Ming Cheng, Estimates for eigenvalues of the Paneitz operator, The International Conference
on Differential Geometry, Fudan University, Shanghai, China, September 21-25, 2012.

川久保哲, 高次元空間形内の Kirchhoff 弾性棒, 第59回幾何学シンポジウム, 2012年8月30日,

- 九州大学.
- *Qing-Ming Cheng, Universal bounds for eigenvalues of Laplacian, Jeju National University, Jeju, Korea, May 4, 2012.
- *Qing-Ming Cheng, Estimates for eigenvalues of L on self-shrinker, Kyungpook National University, Taegu, Korea, May 3, 2012.
- *Qing-Ming Cheng, Complete self-shrinkers of the mean curvature flow, Kyungpook National University, Taegu, Korea, May 3, 2012.
- 川久保哲, 高次元空間形内の Kirchhoff 弾性棒, 第 1 回室蘭連続講演会, 2012 年 1 月 11-13 日, 室蘭工業大学.
- Qing-Ming Cheng, ラプラシアン固有値の上限と下限について, 松江微分幾何学研究集会 2011, 2011 年 12 月 16-17 日, 島根大学.
- *Qing-Ming Cheng, Estimates for eigenvalues and applications, Beijing Normal University, Beijing, China, November 22, 2011.
- Yoshihiko Suyama, Conformally flat hypersurfaces --- Existence of an associated family and a dual hypersurface---, 2011 年度 福岡大学微分幾何研究会, 2011 年 11 月 3 日, 福岡大学セミナーハウス.
- Qing-Ming Cheng, Universal bounds for eigenvalues of the biharmonic operator, 2011 年度 福岡大学微分幾何研究会, 2011 年 11 月 3--6 日, 福岡大学セミナーハウス.
- *Qing-Ming Cheng, Universal estimates for eigenvalues of the biharmonic operator, South China Normal University, Guangzhou, China, September, 2011.
- 川久保哲, Kirchhoff 弾性棒の方程式の第一積分と大域解, 福岡大学微分幾何セミナー, 2011 年 7 月 7 日, 福岡大学.
- *Qing-Ming Cheng, A new obstruction on minimal immersions, International workshop on geometry of submanifolds and related topology, Xinxiang Normal University, Henan, China, April 21-24, 2011.
- *Qing-Ming Cheng, Estimates for eigenvalues on complete Riemannian manifolds, Differential Geometry and Geometric Analysis, Osaka City University, March 13-15, 2011.
- Qing-Ming Cheng, バックリング問題の固有値に関する普遍不等式について, 金沢大学幾何学セミナー, 2010 年 11 月 24 日, 金沢大学.
- 川久保哲, 5 次元空間形内の螺旋でない Kirchhoff 弾性棒, 2010 年度 福岡大学微分幾何研究会, 2010 年 10 月 8 日, 福岡大学セミナーハウス.
- *Qing-Ming Cheng, A new process on universal estimates for eigenvalues of the buckling problem, Fudan University, Shanghai, China, Sept. 10, 2010.
- *Qing-Ming Cheng, Can one hear the shape of a drum? Xianyang Normal University, Xianyang, China, Sept. 1, 2010.
- Qing-Ming Cheng, バックリング問題の固有値に関する予想及びその新展望について, 九州大学幾何学セミナー, 2010 年 7 月 23 日, 九州大学.
- Qing-Ming Cheng, バックリング問題の固有値に関する普遍不等式の研究についての新展望,

東北大学幾何学セミナー, 2010年7月13日, 東北大学.

*Qing-Ming Cheng, A conjecture on eigenvalues of the buckling problem, Wuhan University, Wuhan, China, April 30, 2010.

*Qing-Ming Cheng, On eigenvalues of Laplacian, Hubei University, Wuhan, China, April 29, 2010.

最近 5 年間の学術的会議の開催実績 (応用数学科・専攻のみ)

福岡大学微分幾何研究会 : Geometry and Analysis, 2014 年 10 月 31 日-3 日, 福岡大学セミナーハウス, 成瀬慶明、濱田龍義、川久保哲、松浦望

The 5th international workshop on differential geometry and analysis, Karatsu, May 31-June 4, 2014, Qing-Ming Cheng, Satoshi Kawakubo and Yoshihiko Suyama

International Workshop on Differential Geometry 2014 2014 年 2 月 14~16 日
ホテルニュー 伊万里 濱田龍義、川久保哲

福岡大学微分幾何研究会、2013 年 11 月 1--4 日 (福岡大学セミナーハウス) 陶山芳彦

The 9th geometry conference for the friendship of Japan and China, August 31-September 6, 2013, 北海道大学とその他, China: Qing Ding, An-Min Li, Haizhong Li, Changping Wang, Yuanlong Xin, Weiping Zhang, Xi-Ping Zhu and Japan: R. Miyaoka, A. Futaki, T. Mabuchi, Q.-M. Cheng, R. Kobayashi, Y. Ohnita, H.Furuhata, K.Shibuya

A memorial symposium for Professor Shoshichi Kobayashi, 2013 年 5 月 22~25 日 (東京大学) 落合卓四郎 (東京大学)、満渕俊樹 (大阪大学)、前田吉昭 (慶応大) 陶山芳彦 (福岡大学)、他 2 名

The Fourth International Workshop on Differential Geometry 2013 年 3 月 25~28 日 唐津市虹の松原ホテル 成瀬慶明、川久保哲、陶山芳彦

Seminar on Differential Geometry of Submanifolds 2013 年 2 月 13 日~23 日 福岡大学 成瀬慶明

福岡大学微分幾何研究会 2012 2012 年 11 月 1 日~4 日 福岡大学 陶山芳彦

第 59 回幾何学シンポジウム 2012 年 8 月 27 日~30 日 九州大学 納谷信 (名古屋大学)、成瀬慶明 (福岡大学)、芥川和雄 (東北大学)、梅原雅顕 (東京工業大学)、小磯深幸 (九州大学)、勝田篤 (九州大学)

部分多様体の微分幾何学及び関連課題 2012 年 8 月 4 日~6 日 佐賀大学 成瀬慶明(福岡大学)、足立俊明(名古屋工業大学)、庄田敏宏(佐賀大学)、坊向伸隆(東京理科大学)、奥村和浩(旭川工業高等専門学校)

福岡大学微分幾何研究会 2011 2011 年 11 月 3 日~6 日 福岡大学 陶山芳彦

福岡大学微分幾何研究会2010 2010年11月8日～11日 福岡大学 陶山芳彦

最近5年間の代表者としての学外資金導入実績

学術振興会 2 国間共同研究（日本－オーストリア）2014 年度～2015 年度

研究課題：曲面論の新展開－変換と特異性－

研究代表者： 陶山芳彦

総額：475 万円

科学研究費（基盤研究(C)）2014 年度～2017 年度

研究課題：共形平坦な超曲面の双対性と変換の研究

研究代表者： 陶山芳彦

総額：360 万円（直接経費）

科学研究費（基盤研究(C)）2009 年度～2013 年度

研究課題：4 次元空間形内の共形平坦な超曲面の研究

研究代表者： 陶山芳彦

総額：310 万円（直接経費）

科学研究費（基盤研究(C)）2008 年度～2010 年度

研究課題：部分多様体の幾何学とリーマン多様体上の微分作用素の固有値理論との融合及び
発展

研究代表者： 成瀬慶明

総額：340 万円（直接経費）

科学研究費（基盤研究(B)）2012 年度～2016 年度

研究課題：幾何学と固有値理論に関する最先端的な研究

研究代表者： 成瀬慶明

総額：1210 万円（直接経費）

科学研究費（挑戦的萌芽研究）2013 年度～2015 年度

研究課題：平均曲率フローのセルフ-シュリンカーとその応用に関する挑戦的研究

研究代表者： 成瀬慶明

総額：300 万円（直接経費）

科学研究費（基盤研究(C)）2015 年度～2018 年度

研究課題：リーマン多様体内の1次元弾性体の数学的モデルとその応用

研究代表者： 川久保哲

総額：320 万円（直接経費）

科学研究費（基盤研究(C)）2011 年度～2014 年度

研究課題：空間形内のキルヒホッフ弾性棒を中心とした1次元弾性体の研究

研究代表者： 川久保哲

総額：330 万円（直接経費）

最近5年間の代表者としての学内資金導入実績

理学部大学院高度化推進事業 研究科分 2014 年度
研究課題：大域解析学と微分幾何学に関する研究
研究代表者：成瀬慶明

理学部大学院高度化推進事業 外国人研究者招へい 2014 年度
招へい者： Francis Burstall (Bath University：教授)
招へい担当者：陶山芳彦

研究推進部領域別研究 2013 年度～2015 年度
研究チーム名：幾何学とその応用に関する研究チーム
研究課題：幾何学とその応用に関する研究
研究代表者：成瀬慶明

研究推進部領域別研究 2009 年度～2012 年度
研究チーム名：超曲面論とその応用
研究課題：超曲面論とその応用
研究代表者：陶山芳彦

理学部大学院高度化推進事業 研究科分 2013 年度
研究課題：多様体上の幾何学研究及び非可換微分幾何の研究
研究代表者：陶山芳彦

理学部大学院高度化推進事業 外国人研究者招へい 2013 年度
招へい者： Li Haizhong (清華大学：教授)
招へい担当者：成瀬慶明

理学部大学院高度化推進事業 外国人研究者招へい 2012 年度
招へい者： Udo Hertrich-Jeromin (ウィーン工科大学：教授)
招へい担当者：陶山芳彦

最近 5 年間の学会等学術団体における役職など

成瀬慶明 日本数学会幾何学分会 幹事会幹事 2014 年度
日本数学会全国区代議員 2013 年度
日本数学会幾何学分会 評議員 2013 年度
日本数学会全国区代議員 2012 年度
日本数学会幾何学分会 評議員 2012 年度

最近 5 年間の一般向け論文と著書、行政報告書など

該当なし

最近 5 年間の一般（非学術）集会での発表論文

該当なし

最近 5 年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など

該当なし

その他特筆事項

該当なし

研究室名
解析・関数解析研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
井上、黒瀬、高倉は、非有界作用素環とその量子物理学への応用について、研究している。Hilbert 空間上の準閉作用素のつくる $*$-代数 ($0*$-代数), 部分 $*$-代数 (部分 $0*$-代数) は純粋に数学的な立場だけでなく量子物理への応用の面からも重要であり, 多くの数学者・物理数学者により研究されている。この分野には多くの未解決問題があり, 我々はそれらの解決に向け, 共同研究をすすめている。 井上は, $0*$-代数のクロス積, $GW*$-代数の分類についてと, 一般化された Weyl relation について研究をすすめている。 黒瀬は, 非有界作用素環の立場から量子群の研究をすすめている。 高倉は, weak Weyl commutation relation をみたす 2 つの可閉な非有界作用素から生成される部分 $0*$-代数の構造について研究をすすめている。 福島は, 多変量の複素解析について, 正則関数や正則写像の接続について研究している。特に, 多重調和関数や多重調和写像についても正則関数や正則写像と同様に議論できることを調べている。 キーワード: 非有界 $*$-代数、$C*$-代数、複素解析
研究室の構成員
井上 淳 (教授)・理学博士 黒瀬秀樹 (教授)・理学博士 福島幸生 (教授)・博士 (数理学) 高倉真由美 (助教)・博士 (理学)
2014 年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
M2: Non-Selfadjoint operators defined on Riesz bases (修士論文) M2: Riesz base and Coherent states (修士論文) 4 年次生: 11 名 Hilbert 空間上の sesquilinear form, 信号処理, コーシー積分公式, JAVA 言語
教員の担当科目
井上 淳: (学部) 解析学 I、数学総合 I、解析学特論、基礎数学研究、卒業研究 I・II (大学院) 関数解析学講義 I・II 黒瀬秀樹: (学部) 基礎線形代数及び演習、線形代数及び演習、基礎数学研究、卒業研究 I・II 福島幸生: (学部) 関数論 I・II、数学科教育法 II、基礎数学研究、卒業研究 I・II 高倉真由美: (学部) 基礎微分積分及び演習、微分積分 I 及び演習、数学総合 I
教員の所属学会
井上 淳: 日本数学会

黒瀬秀樹：日本数学会 福岡幸生：日本数学会 高倉真由美：日本数学会
最近 5 年間の学術論文
F. Bagarello, A. Inoue and C. Trapani, Non-selfadjoint hamiltonians defined by Riesz bases. J. Math. Physics 55 (2014), 12pp. (査読有) F. Bagarello, A. Inoue and C. Trapani, Weak commutation relations of unbounded operators : Nonlinear extensions, J. Math. Phys. 53 (2012), 14pp. (査読有) F. Bagarello, A. Inoue and C. Trapani, Induced and reduced unbounded operator algebras, Annali di Matematica Pura ed Applicata 191 (2012), 285--292. (査読有) F. Bagarello, A. Inoue and C. Trapani, Representable linear functionals on partial $\ast$-algebras Mediterranean J. Math. 9(2012), 153-163. (査読有)
最近 5 年間の学術著書
該当なし
最近 5 年間の学術(国際)会議での発表
該当なし
最近 5 年間の学術的会議の開催実績 (応用数学科・専攻のみ)
研究推進部領域別研究 2014 年 10 月 14 日 福岡大学理学部、 講演者 Alexander Helemski (モスクワ大学) 題目 Homologically best modules in classical and quantum functional analysis 主催者 井上 淳 高度化推進講演会 2014 年 10 月 24 日 福岡大学理学部、 講演者 Maria Fragouloupoulou (アテネ大学) 題目 A comparison between classical and abstract differential geometry 主催者 井上 淳 高度化推進講演会、2014 年 3 月 6 日、福岡大学理学部、 講演者 廣島 文生 (九州大学) 題 目 Time operators associated with semi-bounded self-adjoint operators 主催者 井上 淳 高度化推進講演会、2013 年 9 月 13 日、9 月 16 日、福岡大学理学部、 講演者 Klaus-Detlef Kuersten (ライプチヒ大学) 題 目 Crossed products of algebras of unbounded operators I, II 主催者 井上 淳

高度化推進講演会、2012 年 5 月 29 日、6 月 5 日、福岡大学理学部、 講演者 Fabio Bagarello (パレルモ大学) 題 目 Recent works on the pseudo-bosons I, II 主催者 井上 淳
最近 5 年間の代表者としての学外資金導入実績
科学研究費（基盤研究（C））2012 年度～2015 年度 研究課題：非有界作用素環のクロス積と GW^* -代数の構造 研究代表者：井上 淳
科学研究費（基盤研究（C））2008 年度～2011 年度 研究課題：非有界作用素の構造と表現 研究代表者：井上 淳
最近 5 年間の代表者としての学内資金導入実績
研究推進部領域別研究 2012 年度～2014 年度 研究チーム名：非有界作用素環 研究課題：非有界作用素環のクロス積の研究 研究代表者：井上 淳
研究推進部領域別研究 2009 年度～2011 年度 研究チーム名：応用関数解析 研究課題：関数解析学の応用に関する研究 研究代表者：黒瀬秀樹
最近 5 年間の学会等学術団体における役職など
該当なし
最近 5 年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
該当なし
最近 5 年間の一般（非学術）集会での発表論文
該当なし
最近 5 年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
該当なし

研究室名
微分方程式研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
自然現象、社会現象、生物現象、もの作りのための設計・制御等をモデル化し、数式で表現すると微分方程式が得られる。するとこれらの微分方程式を解析的に(数式のみで)あるいは数値計算を援用して「解く」、「その性質を調べる」必要が生じる。 山田はハミルトン・ヤコビ方程式の弱結合系に対して粘性解の定性的性質を弱 KAM 理論の

立場から明らかにすることを目的として研究を進めた。三竹大寿（広島大学）、A. Siconolfi（ローマ大学）、H. V. Tran（シカゴ大学）と議論を深めた。 田中は空間の領域の形状が滑らかではなく、角や尖点などの特異性を持つ場合に、領域の幾何学的な特異性がどのように解の解析的な特異性に伝わるかという点に重点を置き、流体力学に現れる代表的な非線型の偏微分方程式について考察した。 柳はハイゼンベルグ群上の平均曲率流方程式について解析を行い、その方程式の粘性解の一意性と存在性を考察した。さらに、離散的微分ゲーム理論による新たな手法を用い、二階放物型方程式の解の凸保存性などについて簡単な別証明を与えた。それらの課題に関して J. J. Manfredi (Univ. Pittsburgh), F. Ferrari (Univ. Bologna), A. Schikorra (Univ. Basel), X. Zhou (Univ. Pittsburgh)等と共同研究を行った。 小林は有限要素法、境界要素法を用いて偏微分方程式の逆問題について数値解析的な研究を遂行した。 キーワード：粘性解、流体力学、ハイゼンベルグ群、平均曲率流方程式、ハミルトン・ヤコビ方程式、弱 KAM 理論
--

研究室の構成員
山田直記（教授）・理学博士 田中尚人（教授）・博士（理学） 柳 青（助教）・博士（数理科学）2015 年 2 月着任 小林錦子（助手）・理学学士
2014 度の大学院生および卒論生の名簿と研究テーマ
4 年次生：8 名：卒業研究のテーマ「太鼓の膜の振動と Bessel 関数」、「アトラクタの分類」 大学院 1 年次生：2 名：ゼミテキスト「楕円関数と仲良くなろう」、「偏微分方程式入門」 大学院 2 年次生：1 名：修士論文題目「平均曲率流とその近似について」
教員の担当科目
山田直記：（学部）解析学Ⅱ、基礎数学研究（応用数学科）、微分積分Ⅰ,Ⅱ、 行列と行列式Ⅰ,Ⅱ（工学部）、微分方程式（経済学部）、数学入門、 基礎数学（共通教育） （大学院）非線形解析特論Ⅰ,Ⅱ 田中尚人：（学部）基礎数学研究、数学総合Ⅲ、数理ファイナンス、微分方程式（応用数学科）、 統計（工学部）、数理統計、統計入門（共通教育）、 （大学院）現代解析学入門Ⅰ,Ⅱ
教員の所属学会
山田直記：日本数学会、American Mathematical Society, International Foundation of Nonlinear Analysis 田中尚人：日本数学会

柳 青：日本数学会

小林錦子：日本応用数理学会、日本計算数理工学会

最近 5 年間の学術論文

(すべて査読有)

Q. Liu (with F.Ferrari and J. J. Manfredi), On the characterization of p -harmonic functions on the Heisenberg group by mean value properties, Discrete Contin. Dyn. Syst., Vol. 34 (2014), 2779--2793.

Q. Liu and H. Mitake (with Y. Giga), Singular Neumann problems and large-time behavior of solutions of noncoercive Hamilton-Jacobi equations, Trans. Amer. Math. Soc., Vol. 366 (2014), 1905--1941.

Q. Liu (with F. Ferrari and J. J. Manfredi), On the horizontal mean curvature flow for axisymmetric surfaces in the Heisenberg group, Commun. Contemp. Math., Vol. 16 (2014).

Q. Liu, Waiting time effect for motion by positive second derivatives and applications, NoDEA Nonlinear Differential Equations Appl., Vol. 21 (2014), 589--620.

Q. Liu and H. Mitake (with Y. Giga), Large-time asymptotics for one-dimensional Dirichlet problems for Hamilton-Jacobi equations with noncoercive Hamiltonians, J. Differential Equations, Vol. 252 (2012), 1263--1282.

Q. Liu, Fattening and comparison principle for level-set equations of mean curvature type, SIAM J. Control Optim., Vol. 49 (2011), 2518--2541.

Q. Liu (with Y. Giga), A billiard-based game interpretation of the Neumann problem for the curve shortening equation, Adv. Differential Equations, Vol. 14 (2009), 201--240

H. Mitake (with G. Barles and H. Ishii) On the large time behavior of solutions of Hamilton-Jacobi equations associated with nonlinear boundary conditions, Arch. Ration. Mech. Anal., 204 (2012), 515--558.

H. Mitake (with G. Barles and O. Ley) Short time uniqueness results for solutions of nonlocal and non-monotone geometric equations, Math. Ann., 352(2012), 409--451.

H. Mitake (with G. Barles) A PDE approach to large-time asymptotics for boundary-value problems for nonconvex Hamilton-Jacobi equations, Comm. Partial Differential Equations., 37(2012), 136--168.

H. Mitake (with H. V. Tran) Remarks on the large time behavior of viscosity solutions of quasi-monotone weakly coupled systems of Hamilton--Jacobi equations, Asymptot. Anal., 77(2012), 43--70.

H. Mitake On convergence rates for solutions of approximate mean curvature equations, Proc. Amer. Math. Soc., 139(2011), 3691--3696.

N. Yamada (with K. Maruo) Existence of non-radially symmetric viscosity solutions to semilinear degenerate elliptic equations with radially symmetric coefficients in the plane, Part II, Diff. Eq. Appl., 2(2010), 377--408.

N. Tanaka (with M. Kurokiba, and A. Tani) Maximal attractor and initial sets for

Eguchi-Oki-Matsumura equation, J. Math. Anal. Appl., 365(2010), 638--645.
最近 5 年間の学術著書
該当なし
最近 5 年間の学術国際会議での発表
*は国際会議 Q. Liu, Game theory for nonlinear partial differential equations and applications, 福岡大学応用数学教室談話会、2014年7月 *Q. Liu, Games for mean curvature flow equations and applications, Max Plank Institute for Mathematics in the Science, Nov. 2013, Germany. *Q. Liu, A game-theoretic interpretation of convexity preserving for curve shortening flow, Institute Mittag-Leffler, Nov. 2013, Sweden. *Q. Liu, A game-theoretic approach to curvature flow equations and related topics, PDE and Analysis Seminar, June, 2013, Tongji, Univ. Shanghai. *Q. Liu, Horizontal mean curvature flow for axisymmetric surfaces in the Heisenberg group, The third Ohio river analysis meeting, Mar. 2013, Univ Cincinnati, *H. Mitake, A new method for large-time asymptotics for degenerate viscous Hamilton-Jacobi equations by the nonlinear adjoint technique, Fukae workshop on partial differential equations, Jan. 25, 2013, Kobe University. *H. Mitake, A dynamical approach to the large time asymptotics for weakly coupled systems of Hamilton-Jacobi equations, Weak KAM Theory and Related Topics, Jan. 16, 2013, Univ. Tokyo. H. Mitake (with H. Ishii, G. Barles) ハミルトン・ヤコビ方程式に対する非線形ノイマン型境界値問題の解の長時間挙動、2012年度日本数学会秋季総合分科会、2012年9月20日、九州大学 H. Mitake (with H. Tran) ハミルトン・ヤコビ方程式の弱結合型システムに関する漸近問題、2012年度日本数学会秋季総合分科会、2012年9月20日、九州大学 H. Mitake, ハミルトン・ヤコビ方程式の解の長時間挙動：力学的アプローチ、第9回ハミルトン力学系セミナー、2012年3月7日、大阪大学 H. Mitake, Homogenization of weakly coupled systems of Hamilton-Jacobi equations with fast switching rates, 非線形偏微分方程式研究会、2012年3月5日、早稲田大学 H. Mitake, Homogenization of weakly coupled systems of Hamilton-Jacobi equations with fast switching rates, 第5回若手のための偏微分方程式と数学解析、2012年2月14日、九州大学 H. Mitake, ハミルトン・ヤコビ方程式の解の長時間挙動の応用と最近の発展、第6回岐阜数理科学セミナー、2012年2月10日、岐阜大学 H. Mitake, 結晶成長をモデルとした非強圧的ハミルトン・ヤコビ方程式の解の長時間挙動、第5回RDSセミナー、2012年1月30日、明治大学

- *H. Mitake, Large time asymptotics for noncoercive Hamilton-Jacobi equations in crystal growth, Dynamical Optimization in PDE and Geometry, Applications to Hamilton Jacobi, Ergodic Optimization, Weak KAM, Dec. 17, 2011, Institut de Mathematiques, Universite Bordeaux 1.
- N. Yamada, 2重非線形ハミルトンヤコビ方程式の粘性解について、北九州地区における偏微分方程式研究集会、2011年11月13日、北九州工業大学
- H. Mitake, ハミルトン・ヤコビ方程式に現れる解の漸近的単調性、第1回室蘭非線形解析セミナー、2011年10月28日、室蘭工業大学
- H. Mitake, 非凸型Hamilton-Jacobi方程式に対する境界値問題の解の長時間挙動、2011年度日本数学会秋季総合分科会、2011年9月29日、信州大学
- H. Mitake, 近似平均曲率流方程式の解に対する収束率、2011年度日本数学会秋季総合分科会、2011年9月29日、信州大学
- *H. Mitake, Large-time asymptotics for Hamilton-Jacobi equations with noncoercive Hamiltonians appearing in crystal growth, The 4th Mathematical Society of Japan Seasonal Institute, Sept. 15, 2011, Kyushu University.
- *H. Mitake, On the large time behavior of solutions of weakly coupled systems of Hamilton-Jacobi equations, Front propagation, biological problems and related topics: viscosity solution methods for asymptotic analysis, Sept. 9, 2011, Hokkaido University.
- H. Mitake, On the large time asymptotics for weakly coupled systems of Hamilton-Jacobi equations, PDE Seminar in U. C. Berkeley, Apr. 15, 2011, Berkeley U. S. A.
- *H. Mitake, Review and recent works on the large time asymptotics for Hamilton-Jacobi equations, Seminar at Mathematical Sciences Research Institute, Apr. 11, 2011, Berkeley, U. S. A.
- H. Mitake, On the large-time asymptotics for nonconvex Hamilton-Jacobi equations, PDE Seminar in U. C. Berkeley, Jan. 28, 2011, Berkeley U. S. A.

最近5年間の学術的会議の開催実績（応用数学科・専攻のみ）

第132回日本数学会九州支部例会、2月14日、福岡大学理学部

支部会担当評議員：山田直記

講演者：（一般講演）滝本篤志（九大）、Jerome Dimabayao（九大）、工藤桃成（九大）、工藤嵩裕（福岡大）、緒方志保（福岡大）、今村周平（熊本大）、山本卓宏（九産大）、泉優行（九大）、後藤隼（九大）、村原英樹（九大）、入江洋右（九大）、中屋智瑛（九大）、伊野翔次（九大）、笹淵伸也（九大）、横山俊一（九大）、沖田匡聡（九大）、高田芽味（九大）、森直文（九大）、五十嵐諒（熊本高専）、山口尚哉（九大）、寺井伸浩（大分大）、長内遼太郎（九大）、花元誠一（九大）、鈴木由佳（九大）、井上直哉（熊本大）、岩佐龍太郎、中村能久（熊本大）、津田和幸（九大）、上妻賢亮（熊本大）、（特別講演）佐藤拓（福岡大）

題目：多数のため省略

URL: www2.math.kyushu-u.ac.jp/~kyushushibu/

第32回九州における偏微分方程式研究集会、2015年1月28—30日、九州大学 西新プラザ

世話人：山田直記（福岡大）、川島秀一、隠居良行、杉山由恵（九州大）

講演者：俣野博（東大）、Cyrill Muratov (New Jersey Inst. Tech.), Tristan Roy (Nagoya Univ.),
佐々木浩宣（千葉大）、木村正人（金沢大）、長澤壯之（埼玉大）、Ondrej Kreml (Acad.
Sci. Czech Republic), 相木雅次（東京理科大）、小菌英雄（早稲田大）、砂川秀明（大
阪大）、和田健志（島根大）、高坂良史（神戸大）、飯田雅人（宮崎大）、仙葉隆（九
州工業大）

題目：多数のため省略

URL: www2.math.kyushu-u.ac.jp/FE-Seminar/kyu-pde/

第31回九州における偏微分方程式研究集会、2014年1月27—29日、福岡大学メディカルホール、

世話人：山田直記（福岡大）、川島秀一、隠居良行、杉山由恵（九州大）

講演者：柴田良弘（早稲田大学）、Shu Wang (Beijin Univ. Tech.), Heinrich Freistuehler (univ.
Konstanz), 赤木剛朗（神戸大）、川下美潮（広島大）、谷口雅治（岡山大）、Ghao-Nien
Chen (Nat. Changhua Univ. Edu.), 柳田英二（東京工業大）、前田昌也（千葉大）、三竹
大寿（広島大）、中西賢次（京都大）、久保英夫（北海道大）、片山聡一郎（和歌山大）

題目：多数のため省略

URL: www2.math.kyushu-u.ac.jp/FE-Seminar/kyu-pde/

第30回九州における偏微分方程式研究集会、2013年1月29--31日、福岡大学2号館、

世話人：山田直記（福岡大）、川島秀一、隠居良行、杉山由恵（九州大）

講演者：柴田徹太郎（広島大）、小川知之（明治大）、田中和永（早稲田大）、前川泰則
（神戸大）、M. Paicu(Univ. Bordeaux 1)、谷温之（慶応大）、杉山由恵（九州大）、石下和弘
（東北大）、小野寺栄治（高知大）、眞崎聡し（広島大）、林仲夫（大阪大）、中村誠
（東北大）、片山聡一郎（和歌山大）

題目：多数のため略

URL: www2.math.kyushu-u.ac.jp/FE-Seminar/kyu-pde/

The 4th Mathematical Society of Japan Seasonal Institute Nonlinear Dynamics in Partial Differential

Equations (第4回 日本数学会季期研究所 偏微分方程式における非線形ダイナミクス)、

2011年9月12日～21日、九州大学医学部百年記念講堂、

Member of Organizing Committee：山田直記、田中尚人

講演者: Plenary speakers 5名、Invited speakers 18名、 Speakers in Organized session
38名、Contributed speakers 51名。

講演題目：多数のため略

URL:<http://www2.math.kyushu-u.ac.jp/~tohru/msjsi11/>

最近5年間の代表者としての学外資金導入実績

学術振興会、研究活動スタート支援、2012～2013 年度 研究課題：完全非線形偏微分方程式系の漸近問題に関する解析 研究代表者：三竹大寿
科学研究費（基盤研究(C)) 平成 20～22 年度 研究課題：角がある領域における非定常 Navier-Stokes 方程式の数学解析 研究代表者：田中尚人
住友財団研究助成金、2012 年度 研究課題：完全非線形偏微分方程式の弱結合系の解構造解析と漸近問題への応用 研究代表者：三竹大寿
学術振興会、特別研究員奨励費、2010～2011 年度 研究課題：非局所 2 階完全非線形偏微分方程式に対する粘性解理論 研究代表者：三竹大寿
最近 5 年間の代表者としての学内資金導入実績
研究推進部領域別研究 平成 22～24 年度 研究課題名：流体力学の数理 研究代表者：田中尚人（平成 24 年度は山田直記に変更）
大学院高度化推進経費 研究科特別経費 平成 23 年度 研究課題名：微分方程式に対する粘性解の理論の展開と関連分野への応用 研究代表者：山田直記
大学院高度化推進経費 外国人特別招聘 平成 25 年度 招聘者氏名（所属）： Diogo Aguiar Gomes (Universita Lisboa and King Abdullah University, Professor)
大学院高度化推進経費 外国人特別招聘 平成 22 年度 招聘者氏名（所属）： Albert Fathi (Ecole Normale Superieure de Lyon, Professor)
最近 5 年間の学会等学術団体における役職など
山田直記：九州関数方程式セミナー：世話人 Mathematical Review: Reviewer Applied Mathematical Analysis: Editorial Board
最近 5 年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
該当なし
最近 5 年間の一般（非学術）集会での発表論文
該当なし
最近 5 年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
山田直記 高校生に向けた模擬講義---多数（24 年度 15 回など）
その他特筆事項
三竹大寿 2011 年度日本数学会建部賢弘賞（2011 年 9 月 29 日） 業績題目：ハミルトン・ヤコビ方程式の解の長時間漸近挙動の研究

研究室名
応用数理研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
応用数理研究室では、確率・統計に関する研究を行っている。統計多様体の幾何構造を調べる情報幾何学も本研究室の主要研究分野である。連続から離散への拡張を含み、研究成果は実データの解析に応用されている。 渡辺は、古典的な確率近似法を主に含むより一般化した確率近似過程の定式化とその応用に関する研究を進めている。特に観測誤差列が従属確率変数列により構成されている場合の近似過程の収束性を中心に考察している。これらの定式化により、従属確率変数列に関する大数の法則やノンパラメトリックな確率密度関数の推定等に適用可能になる。 田中は、指数型分布族と非指数型分布族を統一的に扱うことができるような情報幾何学の枠組みを具体的に構成し、一般的な統計多様体の余次元 1 のはめ込みに関してさまざまな幾何学的性質を調べている。また、q-指数型分布族のフラクタルのような自己相似型構造を発見し、その統計的な意義について考察を進めている。さらに、この情報幾何学の枠組みを他分野へ応用することを視野に入れながら研究を進めている。 杉万は、確率添字の列を伴った確率要素列の極限定理を得るための条件の研究を行っている。特に、確率過程の逐次観測に対する妥当な停止規則の構成方法を与えることを目的として、種々の極限定理に導入が可能な確率添字の列の発散の速さの評価を与えることを目指している。 松浦は、曲線と曲面の差分幾何について離散可積分系の立場から研究を進めている。とくに離散的な幾何学的オブジェクトの運動を統制するための新しい数学的枠組みを作ることにより、産業技術と数理とを結ぶ分野のひとつを構築することを目指している。 保坂は、神経系で観測されたデータについて統計的観点から解析を行なっている。特に、点過程・非線形振動子・非線形力学系を用いた観測データの数理モデル化、同期・因果性の推定、行動と統計量の相関の解析を行ない、局所神経回路のネットワーク構造・ダイナミクスの推定を行なっている。 キーワード：確率近似法、従属確率変数列、大数の法則、統計的推測、パターン認識、情報幾何学、極限定理、確率添字、逐次推定、差分幾何、離散可積分系、計算論的神経科学
研究室の構成員
渡辺正文（教授）・理学博士 田中 勝（教授）・理学博士 杉万郁夫（准教授）・博士（理学） 松浦 望（助教）・博士（情報科学） 保坂亮介（助教）・博士（工学）
2014 度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ

大学院生：2名 ・非負行列因子分解法を用いた画像の特徴抽出 ・指数型分布族の幾何学的性質について ～ τ-情報幾何学の視点から ～ 4年次生：11名(藤木ゼミとの共同ゼミ生含む) ・ニューラルネットワークを用いたパターン認識 ・擬似乱数とイジングモデル ・ゴミ投棄ゼロの社会へ ～協力・非協力ゲームを用いたアプローチ～ ・マッチング問題 ～人と仕事・より良い会社へ～ ・最適な投票方式 ～認定投票とは～ ・社会学のマルコフ連鎖モデル「集団圧力と同調」 ～新しいモデルの導入を目指して～
教員の担当科目
渡辺正文：(学部) 数学総合I、確率、統計入門、数理統計、数理統計I・II、多変量解析、基礎数学研究 田中 勝：(学部) システム分析特論・実習、情報数理、数理モデルI・II、情報システム論II、情報社会と倫理、基礎研究I・II、卒業研究I・II 杉万郁夫：(学部) 統計入門、情報と社会、統計、統計入門、科学・技術・情報と社会、社会数理のための数学実習I、離散数学、データ解析特論・実習、リスク管理の数理、基礎研究I・II、卒業研究I・II 松浦 望：(学部) 社会数理のための数学実習III、統計、数式処理実習、データ処理実習、微分積分III 保坂亮介：(学部) プログラミング I、プログラミング実習 I、微分積分 III、社会数理のための数学実習 II、情報実習
教員の所属学会
渡辺正文：日本数学会 田中 勝：電子情報通信学会 杉万郁夫：日本数学会、統計科学研究会 松浦 望：日本数学会、日本応用数理学会 保坂亮介：電子情報通信学会、北米神経科学学会、日本神経科学学会
最近5年間の学術論文
藤木淳, <u>田中勝</u>, 坂野鋭, 木村昭悟, "類の通信としてのフィッシャーの判別分析", 信学技報, vol.114, no.474, SIP2014-143, pp.163-168, Mar.3rd, 2015. 藤木淳, <u>田中勝</u>, 坂野鋭, 木村昭悟, "フィッシャーの線型判別分析の幾何学" IBIS2014, 2014年11月17日信学技報, vol. 114, no. 306, IBISML2014-72, pp. 279-286, 2014年11月. Jun-ichi Inoguchi, Kenji Kajiware, <u>Nozomu Matsuura</u> and Yasuhiro Ohta, "Discrete mKdV and discrete sine-Gordon flows on discrete space curves," Journal of Physics. A. Mathematical and Theoretical 47 (2014) 235202 (26pp). (査読有)

田中勝, " τ -情報幾何学：可測関数空間上の平行移動", PRMU/CNR研究会, 2014.2.13, 福岡大学, 信学技報, vol. 113, no. 431, PRMU2013-133, pp. 67-72, 2014年2月.

井ノ口順一, 梶原健司, 松浦望, 太田泰広, "空間離散曲線の等周変形と離散SKS曲面", 応用力学研究所研究集会報告25AO-S2 (2014), pp. 1--7. (査読有)

Ryosuke Hosaka, Toshi Nakajima, Kazuyuki Aihara, Yoko Yamaguchi, and Hajime Mushiake, "The suppression of beta oscillations in the primate supplementary motor complex reflects a volatile state during the updating of action sequences," Cerebral Cortex, in press. (査読有)

保坂亮介, "神経データの因果性解析," システム制御情報学会誌, in press. (査読有)

Ryosuke Hosaka, Toshi Nakajima, Kazuyuki Aihara, Yoko Yamaguchi, and Hajime Mushiake, "Arm-use dependent lateralization of gamma and beta oscillations in primate medial motor areas," Neural Networks, Vol. 62, 62-66, 2015. (査読有)

保坂亮介, 中島敏, 虫明元, "運動野におけるベータリズムとガンマリズム," Clinical Neuroscience, Vol.32, No, 7, pp. 747--750, 2014.

田中 勝, "エントロピーと非加法性," PRMU/IBISML/IPSJ-CVIM研究会, 2013.9.2, 鳥取大学, 信学技報, vol. 113, no. 196, PRMU2013-39, pp. 39-46, 2013年9月.

田中 勝, "エスコート分布と期待値," PRMU/IBISML/IPSJ-CVIM研究会, 2013.9.2, 鳥取大学, 信学技報, vol. 113, no. 196, PRMU2013-38, pp. 31-38, 2013年9月.

Toshi Nakajima, Ryosuke Hosaka, Ichiro Tsuda, Jun Tanji, and Hajime Mushiake, "Two-dimensional representation of action and arm sequences in the pre-supplementary and supplementary motor areas," Journal of Neuroscience, Vol. 33, pp.15533--15544, 2013. (査読有)

Shin-ichiro Osawa, Masaki Iwasaki, Ryosuke Hosaka, Yoshiya Matsuzaka, Hiroshi Tomita, Toru Ishizuka, Eriko Sugano, Eiichi Okumura, Hiromu Yawo, Nobukazu Nakasato, Teiji Tominaga, and Hajime Mushiake, "Optogenetically Induced Seizure and the Longitudinal Hippocampal Network Dynamics," PLoS One, Vol.8(4), e60928, 2013. (査読有)

城真範, 藤木淳, 赤穂昭太郎, 田中勝, "来るべき宇宙世紀へ向けて 一亜光速下における画像からの静止系座標一," 日本物理学会年次大会予稿集, 13aSP-7, 2012.

藤木淳, 城真範, 赤穂昭太郎, 田中勝, "準光速で等速直線運動するカメラの幾何学," Proc. of MIRU2012, IS3-28, 2012.

松浦望, "曲線と曲面の差分幾何", 日本応用数理学会論文誌, Vol. 23, No. 1, 2013, pp. 55~107 (査読有)

Jun-ichi Inoguchi, Kenji Kajiwar, Nozomu Matsuura, and Yasuhiro Ohta, "Motion and Bäcklund transformations of discrete plane curves", Kyushu Journal of Mathematics 66 (2012), pp. 303--324. (査読有)

松浦望, "曲線の差分幾何", 数理解析研究所講究録別冊B30(2012), pp. 053--075. (査読有)
Nozomu Matsuura, "Discrete KdV and discrete modified KdV equations arising from motions of planar discrete curves," International Mathematics Research Notices 2012 (2012), pp. 1681--1698. (査読有)

Jun-ichi Inoguchi, Kenji Kajiwara, Nozomu Matsuura, and Yasuhiro Ohta, "Explicit solutions to semi-discrete modified KdV equation and motion of discrete plane curves," Journal of Physics A: Mathematical and Theoretical 45 (2012), 045206 (16pp). (査読有)

田中 勝, “q-正規分布とそのエスコート分布との関係について エスコート分布とは何なのか? -,” 信学技法, 2010.

Masaru Tanaka, “Meaning of an escort distribution and q -transformation,” Journal of Physics: Conference Series vol.201, 012007, 2010.

Nozomu Matsuura, A discrete analogue of the affine Bäcklund transformation, Fukuoka university science reports 40 (2010), pp. 163--173.

最近 5 年間の学術著書

Jun-ichi Inoguchi, Kenji Kajiwara, Nozomu Matsuura and Yasuhiro Ohta, "Discrete Models of Isoperimetric Deformation of Plane Curves," A Mathematical Approach to Research Problems of Science and Technology, Mathematics for Industry 5 (2014), Springer Japan, pp. 89--99.

Jun-ichi Inoguchi, Kenji Kajiwara, Nozomu Matsuura and Yasuhiro Ohta, "Discrete Isoperimetric Deformation of Discrete Curves," Mathematical Progress in Expressive Image Synthesis I, Mathematics for Industry 4 (2014), Springer Japan, pp. 111--122.

Daiki Tanaya, Masaru Tanaka, and Hiroshi Matsuzoe, “Notes on geometry of q -normal distributions”, in Recent progress in differential geometry and its related fields, pp.137--149, World Sci. Publ., Hackensack, NJ, 2012; MR2882536

松浦望, "Discrete differential geometry of curves", 離散可積分系・離散微分幾何チュートリアル2012, 井ノ口順一・太田泰広・笥三郎・梶原健司・松浦望(編), COE Lecture Note Vol. 40, Kyushu University, pp. 75--86, 2012.

最近 5 年間の学術国際会議での発表

*は国際会議

Hitoshi Sakano, Akisato Kimura, Jun Fujiki, Masaru Tanaka, "Fusion of Fisher's Discriminant Analysis and its Subspace Extension" MIRU2014, 2014年7月30日

田中勝, 藤木淳, 坂野鋭, 木村昭悟, "拡張型判別分析の情報量最大化基準に基づくパーセプトロンによる実装実験" MIRU2014, 2014年7月29日

坂野鋭, 木村昭悟, 藤木淳, 田中勝, "特徴の統合に基づく判別分析の情報圧縮率の改善", MIRU2014, SS2-43, 2014年7月30日.

田中勝, "ゲージ理論としての情報幾何学" 福岡大学微分幾何研究会, 2014年10月31日

田中勝, "測度空間上のゲージ理論 ～ q -情報幾何学 ～" IBIS2014, 2014年11月18日

田中勝, "測度空間と情報幾何" 統計多様体の諸分野への応用 (RIMS), 2014年11月20日

松浦望, "離散曲線の変形", 日本数学会2015年度年会 (明治大学) における特別講演, 2015年3月21日.

梶原健司・黒田利信・松浦望, "平面離散曲線の等角変形と離散Burgers階層II", 日本数学会2015年度年会 (明治大学), 2015年3月21日.

梶原健司・黒田利信・松浦望, "平面離散曲線の等角変形と離散Burgers階層I", 日本数学会2015年度年会 (明治大学), 2015年3月21日.

*Nozomu Matsuura, "Deformations of discrete curves, Transformations and Singularities " (Vienna University of Technology), 2014年9月19日.

Ryosuke Hosaka, Toshi Nakajima, Kazuyuki Aihara, Yoko Yamaguchi, and Hajime Mushiake, "Beta power suppression in early delay period reveals volatile representation in updating action sequence in the primate supplementary motor complex," 脳と心のメカニズム, 第15回冬のワークショップ, (北海道ルスツ), 2015年1月7-9日.

*Ryosuke Hosaka, "Inferring Functional Connectivities of Networks with Discrete and Continuous Observables," International Conference on Nonlinear Theory and its Applications (Luzern, Switzerland), Sep. 14-18, 2014.

Masaki Iwasaki, Shin-ichiro Ohsawa, Ryosuke Hosaka, Yoshiaya Matsuzaka, Hiroshi Tomita, Toru Ishizuka, Eriko Sugano, Eiichi Okumura Hiromu Yawo, Nobukazu Nakasato, Teiji Tominaga, and Hajime Mushiake, "光遺伝学的てんかん発作モデルと海馬のネットワークダイナミクス," 日本神経科学大会 (横浜), 2014年9月11-13日.

Ryosuke Hosaka, Toshi Nakajima, Kazuyuki Aihara, Yoko Yamaguchi, and Hajime Mushiake, "Arm-use dependent lateralization of LFP oscillations in primate medial motor areas," 日本神経回路学会, (函館), 2014年8月27-29日.

梶原健司, 黒田利信, 松浦望, "平面離散曲線の等角変形と離散Burgers階層", 第10回日本応用数理学会研究部会連合発表会 (京都大学), 2014年3月20日.

井ノ口順一, 梶原健司, 松浦望, 太田泰広, "離散mKdV方程式と離散sine-Gordon方程式による空間離散曲線の変形", 日本数学会2014年度年会 (学習院大学), 2014年3月16日.

松浦望, "曲線の離散微分幾何", 離散可積分系・離散微分幾何チュートリアル2014 (九州大学), 2014年2月22--23日.

松浦望, "空間離散曲線の等周等距離変形と離散SKS曲面", 福岡微分幾何研究会 (福岡大学セミナーハウス), 2013年11月2日.

井ノ口順一, 梶原健司, 松浦望, 太田泰広, "空間離散曲線の等周変形と離散K曲面", 平成25年度九大応力研共同利用研究集会「非線形波動研究の拡がり」 (九州大学), 2013年10月31日.

井ノ口順一, 梶原健司, 松浦望, 太田泰広, "Discrete mKdV flow on discrete space curves", 日本応用数理学会2013年度年会 (アクロス福岡), 2013年9月9日.

- *Ryosuke Hosaka, Toshi Nakajima, Kazuyuki Aihara, Yoko Yamaguchi, and Hajime Mushiake, "Laterality of LFP Oscillations in Medial Motor Area of Monkey," International Conference on Energy, Environment and Human Engineering, (Yangon, Myanmar), Dec, 21-23, 2013.
- Nozomi Sugiura, Kantaro Fujiwara, Ryosuke Hosaka, Kenya Jinno, Tohru Ikeguchi, "Estimation of Lyapunov exponents in chaotic response of the Izhikevich neuron model," 電子情報通信学会非線形問題研究会, (HongKong City University, HongKong), 2013年12月6-7日.
- Ryosuke Hosaka, Toshi Nakajima, Kazuyuki Aihara, Yoko Yamaguchi, Hajime Mushiake, "Different lateralization of gamma and beta oscillations in primate medial motor area," 電子情報通信学会非線形問題研究会, (HongKong City University, HongKong), Dec 6-7, 2013.
- *Toshi Nakajima, Haruka Arisawa, Ryosuke Hosaka, Keisetsu Shima, Hajime Mushiake, "The influence of arm-movement preparation on interhemispheric beta synchronization in the medial motor areas," Annual Meeting of SfN (San Diego, USA), Nov.9-13, 2013.
- Ryosuke Hosaka, Toshi Nakajima, Kazuyuki Aihara, Yoko Yamaguchi, and Hajime Mushiake, "Laterality of Gamma-Oscillations in Primate Medial Motor Area during Visually-Guided Movements," 電子情報通信学会ソサイエティ大会 (福岡工業大学), 2013年9月17-20日.
- Ryosuke Hosaka, Toshi Nakajima, Kazuyuki Aihara, Yoko Yamaguchi, and Hajime Mushiake, "Modulation of Beta and Gamma Oscillations of LFP in Monkey Medial Motor cortex," 回路とシステムワークショップ (淡路島), 2013年7月29-30日.
- 杉浦希望, 藤原寛太郎, 保坂亮介, 池口徹, "Izhikevichニューロンにおけるカオス応答とその解析," 電子情報通信学会 非線形問題研究会 (宮古島), July 7-8, 2013.
- Ryosuke Hosaka, Shin-ichiro Ohsawa, Masaki Iwasaki, Yoshiya Matsuzaka, Hiroshi Tomita, Toru Izhizuka, Eriko Sugano, Eiichi Okumura Hiromu Yawo, Nobukazu Nakasato, Teiji Tominaga, and Hajime Mushiake, "Continuous Time Causality analysis and its application to epileptic seizure genesis," 電子情報通信学会 非線形問題研究会 (宮古島), 2013年7月7-8日.
- *Haruka Arisawa, Ryosuke Hosaka, Toshi Nakajima, and Hajime Mushiake, International Conference on Cognitive Neurodynamics (Sigtuna, Sweden), June 23-27, 2013.
- *Ryosuke Hosaka, Toshi Nakajima, Kazuyuki Aihara, Yoko Yamaguchi, and Hajime Mushiake, "Laterality of Gamma-Oscillations in Primate Supplementary Motor Area during Performance of Visually-Guided Movements," International Conference on Cognitive Neurodynamics (Sigtuna, Sweden), June 23-27, 2013.
- *Nozomu Matsuura, "Discrete differential geometry of curves and surfaces, " The Fourth International Workshop on Differential Geometry, Niji Matsubara Hotel, March 27, 2013.
- *Ryosuke Hosaka, Shin-ichiro Osawa, Masaki Iwasaki, Yoshiya Matsuzaka, Hiroshi Tomita,

Toru Ishizuka, Eriko Sugano, Eiichi Okumura, Hiromu Yawo, Nobukazu Nakasato, Teiji Tominaga, and Hajime Mushiake, "Causality analysis in Epileptic Seizure Genesis," International Symposium on Nonlinear Theory and its Applications (Spain), Oct.22-26, 2012.

*Ryosuke Hosaka, Toshi Nakajima, Kazuyuki Aihara, Yoko Yamaguchi, and Hajime Mushiake, "Reciprocal activation of beta and gamma oscillations in primate medial motor areas," Annual Meeting of SfN, (New Orleans), Oct.13-17, 2012.

*Toshi Nakajima, Ryosuke Hosaka, Ichiro Tsuda, Jun Tanji, and Hajime Mushiake, "Modular representation of multiple motor sequences based on action and effector use in the medial motor areas," Annual Meeting of SfN (New Orleans, USA), Oct.13-17, 2012.

松浦望, "曲線と曲面の差分幾何", 計算による数理科学の展開2013 (神戸大), 2012年12月27日.

井ノ口順一, 梶原健司, 松浦望, 太田泰広, "空間曲線の等周変形と τ 関数による明示公式", 日本応用数理学会2012年度年会 (稚内全日空ホテル), 2012年8月29日.

松浦望, "曲線の差分幾何", 第59回幾何学シンポジウム (九州大学), 2012年8月28日.

Ryosuke Hosaka, Toshi Nakajima, Kazuyuki Aihara, Yoko Yamaguchi, and Hajime Mushiake, "Laterality of Gamma-Oscillations in Monkey Medial Motor Cortex," 電子情報通信学会 非線形問題研究会 (福岡大学), 2013年3月27-28日.

井ノ口順一, 梶原健司, 松浦望, 太田泰広, "離散空間曲線の等周変形と semi-discrete modified KdV方程式", 日本数学会2012年度年会 (東京理科大), 2012年3月28日.

松浦望, "曲線の離散微分幾何", 離散可積分系・離散微分幾何チュートリアル2012 (九州大学), 2012年2月23日.

松浦望, "空間折線の変形", 福岡微分幾何研究会 (福岡大学セミナーハウス), 2011年11月3日.

松浦望, "曲線の差分幾何", RIMS研究集会「可積分系数理の進化」 (京都大学数理解析研究所), 2011年8月17日.

Ryosuke Hosaka, "Responses of the two-dimensional Hindmarsh-Rose model," 電子情報通信学会 非線形問題研究会 (五島列島), 2012年3月27-28日.

*Ryosuke Hosaka, Toshi Nakajima, Kazuyuki Aihara, Yoko Yamaguchi, and Hajime Mushiake, "Modulation of LFP oscillations during updating a motor plan in the primate medial motor cortex," The 11th Japan-Korea-China Joint Workshop On Neurobiology and Neuroinformatics (OIST), 2011年12月18-19日.

Ryosuke Hosaka, Toshi Nakajima, Kazuyuki Aihara, Yoko Yamaguchi, and Hajime Mushiake, "Modulation of LFP oscillations at a novel movement in the primate medial motor cortex," 電子情報通信学会 ニューロコンピューティング研究会 (九州大学), 2011年10月19-20日.

*Daiki Tanaya, Masaru Tanaka and Hiroshi Matsuzoe, "Notes on geometry of q-normal distributions", Proceedings of the 2nd International Colloquium on Differential Geometry and its Related Fields (Veliko Tarnovo), Sep. 6–10, 2010

井ノ口順一, 梶原健司, 松浦望, 太田泰広, "平面離散曲線のedge tangential flowと semi-discrete mKdV方程式", 日本数学会2011年度年会 (早稲田大), 2011年3月22日.

井ノ口順一, 梶原健司, 松浦望, 太田泰広, "semi-discrete modified KdV方程式の解と平面離散曲線の連続的運動", 平成22年度九州大学応用力学研究所共同利用研究集会「非線形波動研究の新たな展開---現象とモデル化---」 (九大応力研), 2010年10月29日.

松浦望, "曲線と曲面の差分幾何", 平成22年度九州大学応用力学研究所共同利用研究集会「非線形波動研究の新たな展開---現象とモデル化---」 (九大応力研), 2010年10月29日.

井ノ口順一, 梶原健司, 松浦望, 太田泰広, "平面折線の運動 (その2・Backlund変換と厳密解)", 日本数学会2010年度秋季総合分科会 (名古屋大), 2010年9月24日.

井ノ口順一, 梶原健司, 松浦望, 太田泰広, "平面折線の運動 (その1・構成とミウラ変換)", 日本数学会2010年度秋季総合分科会 (名古屋大), 2010年9月24日.

井ノ口順一, 梶原健司, 松浦望, 太田泰広, "ユークリッド平面上の離散曲線の運動と Backlund変換", 日本応用数理学会2010年度年会 (明治大), 2010年9月8日.

*Ryosuke Hosaka, Toshi Nakajima, Kazuyuki Aihara, Yoko Yamaguchi, and Hajime Mushiake, "Modulation of LFP beta oscillation while updating motor plan in primate medial motor areas," Annual meeting, Society for Neuroscience (San Diego, USA), Nov. 2010

*Toshi Nakajima, Ryosuke Hosaka, Jun Tanji, and Hajime Mushiake, "Neuronal activity in the medial motor areas reflects the switching of arm use and switching of action during performance of a bimanual sequential motor task," Annual meeting, Society for Neuroscience (San Diego, USA), Nov. 2010

保坂亮介, "ランダム入力を受けたニューロンの奇妙な応答・ランダム入力とSTDP学習則によるニューラルネットワークの同期発火," Brain-ISセミナー (九州工業大学), 2010年12月

保坂亮介, "運動計画更新時に見られるサル内側運動野のLFPベータ振動の減少," Kagoshima workshop on Nonlinear and Nonequilibrium Dynamics (鹿児島大学), 2010年10月

Ryosuke Hosaka, Yutaka Sakai, and Kazuyuki Aihara, "Strange responses of the 2-dimensional Hindmarsh-Rose model to fluctuated inputs," 日本電気学会 (熊本大学), 2010年9月

保坂亮介, "前頭葉・運動野の機能とLFPから探る内側運動野のダイナミクス," 社会性と脳型ロボットを考える合同研究会2010 (九州工業大学), 2010年8月

保坂亮介, 中島敏, 虫明元, 合原一幸, 山口陽子, "新規運動準備期に見られる内側運動野LFPの β 振動の減少," 日本物理学会 春期大会 (岡山大学), 2010年3月

最近5年間の学術的会議の開催実績 (応用数学科・専攻のみ)

松浦望: 離散可積分系・離散微分幾何チュートリアル2014,九州大学,2014年2月22日～23

日. <u>松浦望</u>：離散可積分系・離散微分幾何チュートリアル2012,九州大学,2012年2月22日～24日. <u>保坂亮介</u>：電子情報通信学会 非線形問題研究会 現地世話人,長崎県五島市,2012年3月27日～28日.
最近5年間の代表者としての学外資金導入実績
住友財団 基礎科学研究助成 2014年11月～2016年10月 研究課題名：抑制性シナプスに STDP 学習を持つ神経ネットワークの情報変換機能 研究代表者：<u>保坂亮介</u> 科学研究費（基盤研究(C)） 2010年度～2014年度 研究課題：離散可積分系の観点による曲線の差分幾何 研究代表者：<u>松浦望</u>
最近5年間の代表者としての学内資金導入実績
研究推進部領域別研究 2010年度～2012年度 研究課題名：構造を持つデータからの特徴抽出 研究代表者：<u>田中勝</u>
最近5年間の学会等学術団体における役職など
<u>保坂亮介</u> ：Special Session Co-chair, International Symposium on Nonlinear Theory and its Applications 2012
最近5年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
該当なし
最近5年間の一般（非学術）集会での発表論文
該当なし
最近5年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
該当なし
その他特筆事項
日本応用数理学会 2014 年度論文賞 (サーベイ部門) <u>松浦望</u>,「曲線と曲面の差分幾何」日本応用数理学会論文誌 23 (2013), pp. 55--107. 研究発表奨励賞, <u>Ryosuke Hosaka</u>, Toshi Nakajima, Kazuyuki Aihara, Yoko Yamaguchi, and Hajime Mushiake, "Different lateralization of gamma and beta oscillations in primate medial motor area," 電子情報通信学会 非線形問題研究会, NLP2013-114, 2013. ベストポスタープレゼンテーション賞, <u>Ryosuke Hosaka</u>, Toshi Nakajima, Kazuyuki Aihara, Yoko Yamaguchi, and Hajime Mushiake, "Laterality of LFP Oscillations in Medial Motor Area of Monkey," International Conference on Energy, Environment and Human Engineering, Yangon, Myanmar, Dec,21-23, 2013.

研究室名
情報数理研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要

情報数理研究室では、コンピュータを用いた各種の応用研究の理論的な基礎研究および実際の応用システムの構築を行っており、現在の具体的な研究テーマとしては、モバイルプログラミング、データベースシステム構築、パターン認識、コンピュータによる幾何学の可視化などに関する研究を中心に行っている。

白石は現在、データベースシステムの構築並びにモバイルコンピューティングの研究を行っている。データベースに関しては、パスカルデジタルアーカイブを構築し公開している。モバイルに関しては ebook system の開発を進めている。

藤木はコンピュータビジョンにおいて頻繁に用いられる非線形問題を線形化するための用いられる特徴空間の性質について研究し、それを画像の較正や画像からの直線や曲線検出などの具体的な問題へ応用する研究も行なっている。

濱田は数学研究支援および数学教育、数学の可視化等に特化されたソフトウェアに注目し、可搬性、可塑性の高い計算機環境の構築について研究を行なっている。

キーワード：自然言語処理・データベース・パターン認識・可視化、モバイル、コンピュータビジョン、パターン認識、数式処理、数学ソフトウェア

研究室の構成員

白石修二（教授）・理学博士
藤木 淳（准教授）・博士（工学）
濱田龍義（助教）・博士（理学）
岡松弘子（助手）・理学士

2014 年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ

4 年次生 4 名、モバイルプログラミングの研究
4 年次生 3 名、パターン認識に関する研究
4 年次生 2 名、イジングモデルと乱数に関する研究

教員の担当科目

白石修二：(学部) 情報入門Ⅰ・Ⅱ、プログラミングⅡ、情報システム論Ⅰ、
ネットワークとセキュリティ、統計入門、基礎研究Ⅰ・Ⅱ、
卒業研究Ⅰ・Ⅱ
(大学院) 情報システム講究Ⅰ・Ⅱ、情報システム特論Ⅱ
藤木 淳：(学部) アルゴリズムとデータ構造、情報数学特論、数学A、統計入門、
行列と行列式Ⅱ、基礎数学研究、卒業研究Ⅰ,Ⅱ
(大学院) 数理情報特論Ⅰ,Ⅱ、数理情報講究Ⅰ
濱田龍義：(学部) 数学総合Ⅰ、応用微分積分入門、マルチメディア概論、統計、微分積分Ⅰ、
行列と行列式Ⅱ

教員の所属学会

白石修二：人文科学とコンピュータ研究会、統計科学研究会

藤木 淳：電子情報通信学会

濱田龍義：日本数学会、日本数式処理学会

岡松弘子：情報処理学会

最近 5 年間の学術論文

J.Fujiki (with K.Nishida and T.Kobayashi) "Video image recovery for occluded skier's form by combining forward and backward prediction using motion feature," Science and Skiing, vol.6, pp.251-259, Meyer and Meyer Sport, Jan. 2015. (査読有)

J.Fujiki (with K.Nishida and T.Kobayashi) "The Effect of 2nd-Order Shape Prediction on Tracking non-Rigid Object," In Proc. of the 7th International Conference on Patterns and Application (PATTERNS2015), pp.60-63, March 2015. (査読有)

藤木 淳(with 田中勝, 坂野鋭, 木村昭悟), "類の通信としてのフィッシャーの判別分析," 信学技報, vol.114, no.474, SIP2014-143, pp.163-168, Mach 2015.

藤木 淳(with 田中勝, 坂野鋭, 木村昭悟), "フィッシャーの線型判別分析の幾何学," 信学技報, vol.114, no.306, IBISML2014-45, pp.81-86, Nov. 2014.

T. Hamada "MathLibre: personalizable computer environment for mathematical research", Poster session of ISSAC2014, ACM Communication in Computer Algebra 48 (3) Issue 189, pp116—117, Nov. 2014. (査読有)

T. Hamada "MathLibre: modifiable desktop environment for mathematics", Mathematical Software – ICMS2014, Lecture Notes in Computer Science 8592, Springer, pp702—705, Jul. 2014. (査読有)

J.Fujiki (with K.Nishida and T.Kobayashi) "Tracking by shape with deforming prediction for non-rigid objects," In Proc. of 3rd International Conference on Pattern Recognition Applications and Methods (ICPRAM 2013), pp.580-587, Mar. 2014. (査読有)

J.Fujiki (with K.Nishida and TKobayashi) " Video image recovery for occluded skier's form by combining forward and backward prediction using motion feature," In abstract book of the 6th International Congress on Science and Skiing, p.77, Nov. 2013. (査読有)

J.Fujiki (with H.Hino, S.Akaho, Y.Mochizuki and N.Murata) " Pairwise Similarity for Line Extraction From Distorted Images," In Proc. of CAIP2013, pp.250-257, Aug. 2013. (査読有)

J.Fujiki (with S.Akaho) " Flexible hypersurface fitting with RBF kernels," In Proc. of CAIP2013, pp.286-293, Aug. 2013. (査読有)

藤木 淳 (with 坂野鋭, 木村昭悟), "クラス部分空間に着目した判別分析," MIRU2013, SS6, Aug. 2013.

J.Fujiki (with K.Kano, Y.Sato, and S.Akaho) " Motion and remanent magnetization of particles in eruption-fed density currents: Late Eocene scoria deposits, Oga Peninsula, NE Japan," IAVCEI 2013 Scientific Assembly Forecasting Volcanic Activity, Session 3G, 3W_3G-P3, Kagoshima, July, 2013.

- 藤木 淳 (with 日野英逸, 赤穂昭太郎, 望月義彦, 村田昇) "データ対の直線性に基づく画像上の類似度の定義 ～ 歪曲画像からの直線検出への応用 ～," 信学技報PRMU, vol.IEICE-113, no.75, pp.29-34, June 2013.
- J.Fujiki, " Finding discriminant axes from multiple viewpoints," In Proc. the 13th IAPR in International Conference on Machine Vision Applications (MVA2013), pp.73-76, May 2013. (査読有)
- Tatsuyoshi Hamada, "Some real hypersurfaces of complex projective space", Proceedings of the workshop on Differential Geometry of Submanifolds and its Related Topics, 82-97, 2013. (査読有)
- 白石修二 Markable book system の開発 情報処理学会第 75 回全国大会講演論文集 (2013)
- J.Fujiki (with S.Akaho, H.Hino and N.Murata), Robust hypersurface fitting based on random sampling approximations. In Proceedings of 19th International Conference on Neural Information Processing, pp.520-527, Nov. 2012. (査読有)
- 濱田龍義, 数学ソフトと歩く曲線の世界', 数学通信, 17, 3, (2012), pp.14—22, Nov. 2012.
- T. Hamada, "Live exhibitions in the classroom with mathematical software", "Proceedings of the Korean Society of Mathematical Education, Fall meeting, Cheongju, Korea", 2012, pp.13--16, Nov. 2012. (査読有)
- 藤木 淳 (with 城真範, 赤穂昭太郎, 田中勝), 来るべき宇宙世紀へ向けて 一亜光速下における画像からの静止系座標一, 日本物理学会年次大会概要集, 13aSP-7, Sep. 2012.
- 藤木 淳 (with 城真範, 赤穂昭太郎, 田中勝), 準光速で等速直線運動するカメラの幾何学, MIRU2012 論文集, IS3-28, Aug. 2012.
- T. Hamada, Y. Hoshikawa, H. Tamaru, Curvatures properties of Lie hypersurfaces in the complex hyperbolic space, Journal of Geometry, Journal of Geometry, Vol.103, 2012, pp.247--261, Aug. 2012. (査読有)
- J.Fujiki (with K.Nishida, T.Kobayashi, C.Tsuchiya, S.Tanaka and T.Kurita), Road Region Detection by Spatio-Temporal Graph Segmentation of Optical Flows Using On-Board Camera, In Proceedings of International Conference on Signal Processing, Pattern Recognition and Applications, pp.9-16, Jun. 2012. (査読有)
- 濱田龍義, KNOPPIX/Math/2011 について, 数理解析研究所講究録 1793, Developments in Computer Algebra Research, 2011 年 7 月 6 日, 研究代表者 小原功任, 2012 年 pp.46—49, Apr, 2012
- T. Hamada and KNOPPIX/Math committers, KNOPPIX/Math: a live system for mathematics, Proceedings of the Second CREST-SBM International Conference, Harmony of Groebner Bases and the Modern Industrial Society edited by Takayuki Hibi, World Scientific, 2012, pp.41--44, Mar. 2012. (査読有)
- 藤木 淳 (with 赤穂昭太郎), 曲線あてはめにおける特徴空間についての一考察, 信学技報 PRMU, vol.111, no.379, pp.85-90, Jan. 2012.
- J.Fujiki (with H.Hino, S.Akaho and N.Murata), Calibration of radially symmetric distortion based on linearity in the calibrated image, In Proceedings of OMNIVIS2011 - The 11th Workshop on

- Omnidirectional Vision, DVD-ROM, Nov. 2011. (査読有)
- J.Fujiki (with K.Nishida, and T.Kurita). Ensemble random-subset SVM, In Proceedings of International Conference on Neural Computation Theory and Applications, pp.334-339, Oct. 2011. (査読有)
- 濱田龍義, USB 起動 KNOPPIX/Math/2010 について, 数理解析研究所講究録 1759, 数式処理研究の新たな発展, Developments in Computer Algebra Research, 2010 年 7 月 8 日, 研究代表者 照井章, pp.74—80, Sep. 2011.
- J.Fujiki (with K.Nishida, and T.Kurita), Multiple random subset-Kernel learning, In Proceedings of International Conference on Computer Analysis of Images and Patterns, pp.343-350, Aug. 2011. (査読有)
- J.Fujiki (with S.Akaho, H.Hino and N.Murata), Robust hyperplane fitting based on k-th power deviation and alpha-quantile, In Proceedings of International Conference on Computer Analysis of Images and Patterns, pp.278-285, Aug. 2011. (査読有)
- J.Fujiki (with S.Akaho), Hypersurface fitting via Jacobian nonlinear PCA on Riemannian space, In Proceedings of International Conference on Computer Analysis of Images and Patterns, pp.236-243, Aug. 2011. (査読あり)
- 藤木 淳 (with 赤穂昭太郎, 日野英逸, 村田昇), 較正画像における直線度の最大化に基づく放射対称歪曲の較正, MIRU2011 論文集, Jul. 2011.
- 藤木 淳 (with 西田健次, 栗田多喜夫), 訓練セットのランダムサンプリングによるマルチカーネル学習法, MIRU2011 論文集, Jul. 2011.
- 藤木 淳 (with 赤穂昭太郎, 日野英逸, 村田昇), 最適抽出可能性に基づく 1 次元低い超平面や超曲面のあてはめ～ランダムサンプリングは大域的最適解の夢をみるか?～, MIRU2011 論文集, Jul. 2011.
- 藤木 淳 (with 赤穂昭太郎, 日野英逸, 村田昇), ランダムサンプリングに基づく超曲面あてはめ, 信学技報 PRMU, vol.111, no.48, pp.69-74, May 2011.
- 藤木 淳 (with 赤穂昭太郎), 1 次元低い超平面あてはめにおける最適抽出可能性, 信学技報 PRMU, vol.111, no.48, pp.63-68, May 2011.
- J.Fujiki (with S.Akaho), Global convergence of independent component analysis based on semidefinite programming relaxation, In Proceedings of International Conference on Acoustics, Speech and Signal Processing, pp.4264-4267, May 2011. (査読有)
- 藤木 淳 (with 赤穂昭太郎), 回帰大作戦～1 次元低い超平面あてはめとしての回帰～, 信学技報 IBISML, vol.110, no.476, pp.85-92, Mar. 2011.
- J.Fujiki (with K.Nishida, C.Tsuchiya, S.Tanaka and T.Kurita), Road Plane Detection using Differential Homography Estimated by Pair Feature Matching of Local Regions, In Proceedings of International Conference on Signal Processing, Pattern Recognition and Applications, pp.23-29, Feb. 2011. (査読有)
- J.Fujiki (with Y.Usami, D.G.Stork, H.Hino, S.Akaho and N.Murata), Improved methods for dewarping images in convex mirrors in fine art: Applications to van Eyck and Parmigianino, In Proceedings

of SPIE, Computer Vision and Image Analysis of Art II, Jan. 2011. (査読有)

藤木 淳 (with 日野英逸, 宇佐見由美, 赤穂昭太郎, 村田昇), 較正画像における直線度に基づく放射対称歪曲の較正, 信学技報 PRMU, vol.110, no.330, pp.79-84, Dec. 2010.

濱田龍義, ICM 報告記/ハイデラバードの熱い夏, 数学セミナー, 2011 年 1 月号, 特集「国際数学会議 2010」, pp.8—13, Dec. 2010.

J.Fujiki (with Y.Usami, H.Hino, S.Akaho and N.Murata), Estimation of a rotationally symmetric mirror shape from a frontal image of the mirror, In Proceedings of 25th International Conference Image and Vision Computing New Zealand, USB proceedings, Nov. 2010. (査読有)

藤木 淳 (with 赤穂昭太郎), 半定値計画緩和による多項式コスト関数の大域的最適化, 第 13 回情報論的学習理論ワークショップ, Nov. 2010.

J.Fujiki (with H.Hino, Y.Usami, S.Akaho and N.Murata), Self-calibration of radially symmetric distortion by model selection, In Proceedings of 20th International Conference on Pattern Recognition, pp.1812-1815, Aug. 2010. (査読有)

藤木 淳 (with 宇佐見由美, 日野英逸, 赤穂昭太郎, 村田昇), 放射対称歪曲の較正に基づく回転対称鏡面形状の推定, MIRU2010 論文集, Jul. 2010.

藤木 淳 (with 赤穂昭太郎), 頑健なヤコビ核主成分分析を用いた部分空間あてはめ, 情報処研報 CVIM, vol.171, no.7, pp.1-8, Mar. 2010.

藤木 淳 (with 日野英逸, 宇佐見由美, 赤穂昭太郎, 村田昇), 極射影平面を利用した放射対称歪曲の較正, 信学技報 PRMU, vol.109, no.470, pp.377-382, Mar. 2010.

濱田龍義, 数学ソフトウェアあれこれ - オープンソースというひとつの流れ -, 数学セミナー, 2010 年 9 月号, 特集「数学を発展させるコンピュータソフト」, pp.8—14., Aug. 2010.

J.-T. Cho, T. Hamada and J. Inoguchi, On three dimensional real hypersurface in complex space form, Tokyo Journal of Mathematics, 33, 2010, pp.31--47, Jun. 2010. (査読有)

T. Hamada and J. Inoguchi, Ruled real hypersurfaces of complex space forms, Kodai Mathematical Journal, 33, 2010, pp.123--134, Mar. 2010. (査読有)

濱田龍義, "大学初年級における GeoGebra の教育利用", 数理解析研究所講究録 1674, pp.112--119, Jan. 2010.

最近 5 年間の学術著書

Tatsuyoshi Hamada, "Warm-up Drills and Tips for Mathematical Software", Gröbner Bases - Statistics and Software Systems, Hibi, Takayuki (Ed.), 55-106, Springer, 2013.

白石修二 「例題で学ぶ Excel 統計入門」第 2 版 森北出版 160 頁 2012 年 1 月

濱田龍義「グレブナー道場」JST CREST 日比チーム 編, 共立出版, 第 2 章「数学ソフトウェア受身稽古」 66-127 頁, 2011 年 9 月

最近 5 年間の学術（国際）会議での発表

*は国際会議

*T. Hamada, MathLibre: computer environment for mathematical education and presentation, International Congress of Mathematics 2014, Aug. 19th, 2014.

*T. Hamada, MathLibre: modifiable desktop environment for mathematics, The 4th International Congress on Mathematical Software, Aug. 6th, 2014.

藤木淳, 特徴の統合に基づく判別分析の情報圧縮率の改善, 第17回画像の認識・理解シンポジウム (MIRU2014), Jul. 30th, 2014. (with 田中勝, 坂野鋭, 木村昭悟)

藤木淳, 拡張型判別分析の情報量最大化基準に基づくパーセプトロンによる実装実験, 第17回画像の認識・理解シンポジウム (MIRU2014), Jul. 29th, 2014. (with 田中勝, 坂野鋭, 木村昭悟)

濱田龍義, 描いて動かして楽しむ数学, 高等学校・大阪市立大学連携数学協議会第9回シンポジウム, Nov. 23th, 2013.

*濱田龍義, 数学とオープンソース, 平成25年度大阪市立大学国際シンポジウム「都市の最創造」, Sept. 19th 2013.

濱田龍義, GitHub と Debian Live による MathLibre の構築, 数学ソフトウェアとフリードキュメント XVI, Mar. 19th 2013.

濱田龍義, MathLibre の構築とカスタマイズについて, Risa/Asir Conference 2013 + 第5回六甲博多計算代数会議, Mar 16th 2013.

白石修二, Markable book system の開発, the 75th National Convention of IPSJ, Mar. 8th, 2013. (with 中島 一)

*T. Hamada, Plenary talk "Live exhibitions in the class room with mathematical software", at Fall meeting of the Korean Society of Mathematical Education, Korea National University of Education, Nov. 3rd, 2012.

*T. Hamada, "MathLibre: portable computer environment for mathematics", 第139回 Colloquium 於韓国教員大学校, Nov 1st, 2012.

濱田龍義, Prezi は黒板の代わりになるか, 数学ソフトウェアとフリードキュメント XV 於九州大学, Sep. 17th 2012.

*T. Hamada, "Pedagogical practice cases of some trajectories with dynamic geometry software", RIMS 研究集会「数学ソフトウェアと教育」於京都大学数理解析研究所, Aug. 22nd 2012.

*T. Hamada, "Math software in Japan", short communication at DG 10: New Challenges in Developing Dynamic Software for Teaching and Learning Mathematics, ICME-12, COEX, Seoul, Korea, Jul. 14th, 2012.

濱田龍義, 数学ソフトウェア再考, RIMS 共同研究「数式処理研究の新たな発展」於京都大学数理解析研究, Jul. 5th 2012.

濱田龍義, KNOPPIX/Math から MathLibre へ, 第21回日本数式処理学会大会 於山口大学, Jun 8th 2012.

濱田龍義, Sage Days 韓国訪問記, Sage Days 39, 於九州大学, Mar. 26th 2012.

T. Hamada, "Mathematical software for research, education, and exhibition" at Special Session "Tools and Techniques in Math Research and Education" of Spring meeting of the Korean

Mathematical Society, Sookmyung Women's University, Apr. 28th 2012.

濱田龍義, GeoGebra が成功している 15 の理由を検証, 数式処理学会教育分科会 於 東京理科大学, Mar. 26th 2012.

濱田龍義, 動的数学ソフトウェア GeoGebra について, 数学ソフトウェアとフリースペクト XIV, 於 東京理科大学, Mar 25th 2012.

濱田龍義, 動的数学ソフトウェア GeoGebra の最新機能, 日本数式処理学会基礎理論分科会システム分科会合同研究会, 於 仙台青葉カルチャーセンター, Jan. 21st 2012.

藤木 淳, 曲線あてはめにおける特徴空間の特性について, 第 14 回情報論的学習理論ワークショップ, Nov. 9th, 2011.(with 赤穂昭太郎)

濱田龍義, KNOPPIX/Math/2011dojo について, 第 20 回日本数式処理学会大会 於 神戸大学, Sep. 10th 2011.

濱田龍義, 数学とオープンソース, 数電機シンポジウム 於 首都大学東京, Feb 19th 2012.

濱田龍義, KNOPPIX/Math に見る数学ソフトウェアの世界, 研究集会 計算代数システムの進展 於 九州大学, Aug. 29th, 2011.

濱田龍義, 複素空間形内の実超曲面の話題について, 第 58 回幾何学シンポジウム 於 山口大学, Aug. 27th 2011.

濱田龍義, KNOPPIX/Math/2011 について, RIMS 共同研究「数式処理研究の新たな発展」 於 京都大学数理解析研究所, Jul 8th, 2011.

濱田龍義, KNOPPIX/Math/2011 について, Risa/Asir Conference 2011 於 神戸大学瀧川学術記念学術交流会館, Mar 22nd 2011.

濱田龍義, 数学ソフトウェア実行環境の将来について, 第 3 回日本数式処理学会システム分科会研究会 於 福岡大学, Jan. 22nd 2011.

藤木 淳, 測鉛線原理に基づく放射対称歪曲の較正, 第 3 回広島画像情報学セミナー, Dec. 6th, 2010.

*T. Hamada, “An introduction of ICMS-DVDs”, ICMS2010, The Third International Congress of Mathematical Software 2010, Kobe University, Sep. 13rd, 2010.

*T. Hamada, “KNOPPIX/Math: a open source desktop environment for mathematics”, ICM2010, International Congress of Mathematicians 2010, HICC, Hyderabad, India, Aug. 25th 2010.

濱田龍義, Lie hypersurfaces in the complex hyperbolic space, 第 57 回幾何学シンポジウム 於 神戸大学, Aug. 9th 2010.

濱田龍義, USB 起動 KNOPPIX/Math/2010 について, 数式処理研究の新たな発展 於 京都大学数理解析研究所, Jul. 7th 2010.

*T. Hamada, “KNOPPIX/Math: a live system for mathematics”, Harmony of Groebner bases and the modern industrial society, Hotel Hankyu Expopark, Osaka, Jun. 29th 2010.

濱田龍義, KNOPPIX/Math/2010 The Next Generation について, 第 19 回日本数式処理学会大会 於 名古屋大学, Jun. 12th 2010.

濱田龍義, KNOPPIX/Math/2010, Risa/Asir Conference 2010 於 神戸大学瀧川学術記念学術交流会館, Mar. 18th 2010.

最近 5 年間の学術的会議の開催実績（応用数学科・専攻のみ）
数学ソフトウェアとフリードキュメント XIX 広島大学, Sep. 24th 2014. 濱田龍義 数学ソフトウェアとフリードキュメント XVIII 学習院大学, Mar. 14th 2014. 濱田龍義 電子情報通信学会 PRMU 研究会, 福岡大学, Feb. 13th-14th, 2014. 藤木 淳 数学ソフトウェアとフリードキュメント XVII 愛媛大学, Sep. 23th 2013. 濱田龍義 数学ソフトウェアとフリードキュメント XVI 京都大学, Mar. 19th 2013. 濱田龍義 数学ソフトウェアとフリードキュメント XV 九州大学, Sep. 17th 2012. 濱田龍義 京都大学数理解析研究所 RIMS 共同研究「数式処理研究の新たな発展」, 京都大学数理解析研究所, Jul 4-6 2012. 濱田龍義 数学ソフトウェアとフリードキュメント XIV 東京理科大学, Mar. 25th 2012. 濱田龍義 数学ソフトウェアとフリードキュメント XIII 信州大学, Sep. 27th 2011. 濱田龍義 数学ソフトウェアとフリードキュメント XII 早稲田大学, Mar. 19th 2011. 濱田龍義（東日本大震災により中止） 第 3 回日本数式処理学会システム分科会研究会, 福岡大学, Jan 22nd 2011. 濱田龍義 数学ソフトウェアとフリードキュメント XI 名古屋大学, Sep. 21st 2010. 濱田龍義 数学ソフトウェアとフリードキュメント X, 慶応大学, Mar. 23rd 2010. 濱田龍義
最近 5 年間の代表者としての学外資金導入実績
科学研究費（基盤研究(C)）2011 年度～2012 年度 研究課題：プライバシー保護のための情報幾何的協調フィルタリング 研究予算：4290 千円 研究代表者：赤穂昭太郎 研究分担者：藤木 淳 科学研究費（挑戦的萌芽研究）2011 年度～2013 年度 研究課題：半正値四次形式の比の和で表される関数の最適化とその幾何学 研究予算：3770 千円 研究代表者：藤木 淳 科学研究費（基盤研究(C)）2013 年度～2015 年度 研究課題：特徴空間の幾何構造を利用した学習アルゴリズムの構築 研究予算：4940 千円 研究代表者：赤穂昭太郎 研究分担者：藤木 淳 科学研究費（基盤研究(C)）2013 年度～2016 年度 研究課題：微分幾何学への代数計算理論の適用と応用 研究予算：4810 千円

研究代表者：濱田龍義 科学研究費（基盤研究(C)）2013 年度～2016 年度 研究課題：計算代数の最近の成果と連携した微分幾何の研究 研究予算：4420 千円 研究代表者：濱田龍義 科学技術振興機構 JST CREST 数学と諸分野の協働によるブレークスルーの探索 研究課題：現代の産業社会とグレブナー基底の調和 2008 年～2013 年 研究予算：6000 千円 研究代表者：日比孝之 共同研究者：濱田龍義
最近 5 年間の代表者としての学内資金導入実績 研究推進部領域別研究 2012 年度 研究課題：社会情報システム研究 研究代表者：白石修二
最近 5 年間の学会等学術団体における役職など 藤木 淳：電子情報通信学会 PRMU 専門委員(2013 年度, 2014 年度) 画像の認識・理解シンポジウム (MIRU) 領域チェア(2012 年度) 電子情報通信学会英文誌編集委員 (2011 年度、2012 年度、2013 年度、2014 年度) 電子情報通信学会学会誌編集委員 (2011 年度) 情報処理学会論文誌論文賞選定委員(2010 年度) 濱田龍義：日本数学会情報システム運用委員会運営委員 (2011 年度, 2012 年度) 日本数式処理学会代表会員 (2011 年度, 2012 年度, 2013 年度, 2014 年度) 日本数式処理学会常任委員 (2011 年度, 2012 年度, 2013 年度, 2014 年度) 日本数式処理学会理事 (2012 年度, 2013 年度, 2014 年度)
最近 5 年間の一般向け論文と著書、行政報告書など 該当なし
最近 5 年間の一般（非学術）集会での発表論文 該当なし
最近 5 年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など 白石修二: 福岡大学市民カレッジ公開講座 スマートフォンプログラミング講座 (年 8 回、2014 年度)

研究室名
理論核物理学研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
原子の中心に位置する原子核は陽子と中性子からなり，その個数は高々200 前後である。この孤立した有限個数の量子多体系は陽子数，中性子数の違いによって様々な構造を示す。近年の放射活性ビームを用いた実験により，研究の対象になる原子核が飛躍的に増大し，原子核物理学は新たな時代を迎えている。我々の研究室では，核構造論のスタンダードな模型である殻模型を用いて，fp 殻領域（中性子数が 40 近傍）の原子核に見られる急激な構造変化のメカニズムを研究している。 自然界に存在する鉄より重い元素の起源は、ダークマター、ダークエネルギーの正体に次いで自然科学の大きな課題となっている。これらは中性子捕獲反応で生成されると考えられているが、その起源となる天体現象はあきらかではない。本研究室では、主に理論物理学の見地から、最新の原子核実験の結果や天体観測のデータを用いて、中性子捕獲元素がどこで生成されるのか、どのような環境のもとで生成されるのかを探っている。 キーワード：原子核，殻模型，構造変化，元素合成、星の進化
研究室の構成員
田崎 茂（教授）・理学博士 大槻かおり（助教）・博士（理学）
2014 年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
M1 : 0 名 M2 : 0 名 4 年次生 : 4 名
教員の担当科目
田崎 茂：(学部) 物理科学入門、物理の世界、AS ゼミ I、AS ゼミ II、物理学 A、物理学 B、量子力学 I、量子力学 II、物理科学研究 I、物理科学研究 II、卒業論文 (大学院) 基礎物理学演習、量子物理学特論、解析力学（工学研究科） 大槻かおり：(学部) 物理科学実験 I、物理科学実験 II、物理学基礎ゼミナール、戦争と平和、力学演習（2012 年度のみ）
教員の所属学会
田崎 茂：日本物理学会 大槻かおり：日本天文学会、日本物理学会、International Astronomical Union(IAU)
最近 5 年間の学術論文
K. Kaneko, K. Mizusaki, T. Sun, Y., and Tazaki, S., “Systematical shell-model calculation in the pairing-plus-multipole Hamiltonian with a monopole interaction for the $pf_{5/2}g_{9/2}$ shell”, Phys. Rev. C 92 , 044331 (2015). （査読有）

Kaneko, K., Sun, Y., Mizusaki, T., Tazaki S., “Isospin nonconserving interaction in the T=1 analogue states of the mass-70 region”, Physical Review C 89(3) 031302 (2014). (査読有)

Kaneko, K., Mizusaki, T. Sun, Y., Tazaki S., “Toward a unified realistic shell-model Hamiltonian with the monopole-based universal force”, Physical Review C 89(1) 011302 (2014). (査読有)

Wang, HK, Sun, Y, Jin, H, Kaneko, K, Tazaki, S, “Structure analysis for hole-nuclei close to Sn-132 by a large-scale shell-model calculation”, Physical Review C 88(5), 054310 (2013). (査読有)

Kaneko, K, Sun, Y, Mizusaki, T, Tazaki, S, “Variation in Displacement Energies Due to Isospin-Nonconserving Forces”, Physical Review Letters 110 (17), 172505 (2013). (査読有)

Jin, H (Jin, Hua), Sun, Y (Sun, Yang), Kaneko, K, Tazaki, S, “Shell model description with neutron g(9/2) excitation for neutron-rich Mn57-62 isotopes”, Physical Review C 87(4), 044327 (2013). (査読有)

K. Kaneko, T. Mizusaki, Y. Sun, S. Tazaki, G. de Angelis, “Coulomb Energy Difference as a Probe of Isospin-Symmetry Breaking in the Upper fp-Shell Nuclei”, Physical Review Letters 109 (9), 092504 (2012). (査読有)

Y. Sun, YC. Yang, H. Jin, K. Kaneko, S. Tazaki, “Projected shell model study for neutron-rich, odd-odd Mn isotopes”, Physical Review C 85(5), 054307 (2012). (査読有)

大槻かおり, S. TYpel, G.Martinez-Pinedo, K. Langanke, “r過程元素合成における中性子直接捕獲反応の役割”, 福岡大学理学集報 42(1), 15 (2012).

H. Jin, M. Hasegawa, S. Tazaki, K. Kaneko, Y. Sun, “Large-scale shell-model calculation with core excitation for neutron-rich nuclei beyond Sn-132”, Physical Review C 84(4), 044324 (2011). (査読有)

K. Kaneko, S. Tazaki, T. Mizusaki, Y. Sun, M. Hasegawa, G. de Angelis, “MIRROR ENERGY DIFFERENCE AT HIGH SPONS IN THE MIRROR PAIR Se-67 AND AS-67”, ACTA PHYSICA POLONICA B 42(3-4), 439-442 (2011). (査読有)

M. Hasegawa, Y. Sun, S. Tazaki, K. Kaneko, T. Mizusaki, “Characteristics of the 21/2(+) isomer in Mo-93: Toward the possibility of enhanced nuclear isomer decay”, Physics Letters B 696(3), 197-200 (2011). (査読有)

大槻かおり、G.J. Mathews, J. Wilson, A. Burrows
 “重力崩壊型超新星爆発におけるr過程元素合成の研究”、福岡大学理学集報45 (1)、9 (2015)

最近 5 年間の学術著書

該当なし

最近 5 年間の学術国際会議での発表

該当なし

最近 5 年間の代表者としての学外資金導入実績

該当なし

最近5年間の代表者としての学内資金導入実績
該当なし
最近5年間の学会等学術団体における役職など
該当なし
最近5年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
大槻かおり「宇宙の中の私たち」七隈の杜 2014/第10号記念号
最近5年間の一般（非学術）集会での発表論文
大槻かおり：「元素で知る宇宙」，EMIS2012 市民講座，くにびきメッセ国際会議場、松江、2012年12月2日 大槻かおり：「星がかがやくしくみ---みんな星から生まれた---」大野城市北コミュニティセンター講演会、福岡、2013年9月21日
最近5年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
大槻かおり：「中学生のためのキャリアデザイン啓発事業」福岡市市民局男女共同参画課主催（2012年10月25日城南中学校、同年11月6日箱崎中学校、2013年9月17日壱岐丘中学校、2014年11月11日原中学校、2015年6月28日香椎第3中学校），中学生を対象に「研究者としてのロールモデル」、「宇宙の研究者になるひとつの方法」という題目で講演を行った。 大槻かおり：サイエンスパブ世話人として、九州大学、九州産業大学の教員らとともに一般市民に宇宙図を解説し、天文学や物理について話し合うサイエンスパブを開催した。 （第15回2012年7月22日、第16回同年9月30日、第17回2013年3月15日、第18回同年6月29日、第19回同年10月11日、第20回同年12月14日、第21回2014年3月6日、第22回同年6月27日、第23回同年11月15日、第24回2015年3月6日、第25回同年7月6日、第26回同年11月27日、第27回2016年3月5日に開催）

研究室名
理論天体物理学研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
重力崩壊型超新星は太陽質量の約10倍を超える大質量星がその進化の最終段階に示す大爆発現象である。超新星は一天体現象ではありながら、それ自体が中性子星、ブラックホール、マグネターといった極限的コンパクト天体の形成過程そのものであり、超新星の爆発機構を明らかにすることは、恒星進化論の最重要テーマの一つである。この問題に対して、星が持つ自転、磁場のようなマクロ物理と、ニュートリノ反応を始めとするミクロ物理の効果に着目した上で、主に数値シミュレーションを用いた研究を行なっている。 キーワード：恒星進化論、スーパーコンピューター、ニュートリノ、重力波、高密度状態方程式
研究室の構成員
固武 慶（准教授）・博士（理学）
2015年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
M2: 1名（理論天体物理：超新星爆発の数値シミュレーション） M1: 1名（理論天体物理：数値流体コードの作成・改良）

4 年次生：4 名(理論天体物理学、ソフトウェア開発) 3 年次生：4 名(理論天体物理学)
教員の担当科目
固武 慶：(学部) 宇宙天体物理学、連続体力学、相対論、力学A、物理学A、 物理科学研究、卒業論文、物理学基礎ゼミナール (大学院)宇宙物理学特論
教員の所属学会
固武 慶： 日本物理学会、日本天文学会、理論天文学宇宙物理学懇談会
最近 5 年間の学術論文
(すべて査読有) ① Kuroda, Takami; Takiwaki, Tomoya; Kotake, Kei, “A New Multi-energy Neutrino Radiation-Hydrodynamics Code in Full General Relativity and Its Application to the Gravitational Collapse of Massive Stars”, The Astrophysical Journal Supplement Series (ApJS), 222, 20, 27pp, (2016) ② Suwa, Yudai, Yamada, Shoichi, Takiwaki, Tomoya, Kotake, Kei. “The Criterion of Supernova Explosion Revisited: The Mass Accretion History”, ApJ, 816, 43, 16 pp. (2016) ③ Nakamura, Ko; Takiwaki, Tomoya; Kuroda, Takami; Kotake, Kei, Systematic features of axisymmetric neutrino-driven core-collapse supernova models in multiple progenitors, PASJ, 67, Issue 6, id.10716, 107 (2015) ④ Hayama, Kazuhiro; Kuroda, Takami; Kotake, Kei; Takiwaki, Tomoya “Coherent network analysis of gravitational waves from three-dimensional core-collapse supernova models”, Physical Review D, Volume 92, Issue 12, id122001, (2015) ⑤ Masada, Youhei; Takiwaki, Tomoya; Kotake, Kei, “Magnetohydrodynamic Turbulence Powered by Magnetorotational Instability in Nascent Protoneutron Stars”, Astrophysical Journal Letters, Volume 798, Issue 1, article id. L22, 7 pp. (2015) ⑥ Horiuchi, S.; Nakamura, K.; Takiwaki, T.; Kotake, K.; Tanaka, M, “The red supergiant and supernova rate problems: implications for core-collapse supernova physics”, Monthly Notices of the Royal Astronomical Society: Letters, Volume 445, Issue 1, p.L99-L103, (2014) ⑦ Nakamura, Ko; Kuroda, Takami; Takiwaki, Tomoya; Kotake, Kei, “Impacts of Rotation on Three-dimensional Hydrodynamics of Core-collapse Supernovae”, The Astrophysical Journal, Volume 793, Issue 1, article id. 45, 14 pp. (2014). ⑧ Takiwaki, Tomoya; Kotake, Kei; Suwa, Yudai, “A Comparison of Two- and Three-dimensional Neutrino-hydrodynamics Simulations of Core-collapse Supernovae”, The Astrophysical Journal, Volume 786, Issue 2, article id. 83, 8 pp. (2014). ⑨ Kuroda, Takami; Takiwaki, Tomoya; Kotake, Kei, “Gravitational wave signatures from low-mode spiral instabilities in rapidly rotating supernova cores” Physical Review D, Volume 89, Issue 4, id.044011, (2014) ⑩ Nakamura, Ko; Takiwaki, Tomoya; Kotake, Kei; Nishimura, Nobuya, “Revisiting Impacts of Nuclear Burning for Reviving Weak Shocks in” Neutrino-driven Supernovae, Astrophysical Journal, 782, 91, 14 pp. (2014) ⑪ Yasutake, Nobutoshi; Kotake, Kei; Kutsuna, Masamichi; Shigeyama, Toshikazu, “An Investigation into Surface Temperature Distributions of High-B Pulsars”, Publications of the Astronomical Society of Japan, Volume 66, Issue 2, id.50 ⑫ Kotake, Kei, “Multiple physical elements to determine the gravitational-wave

	signatures of core-collapse supernovae” , Comptes rendus - Physique, 14, 4, pp. 318-351, (2013)
⑬	Ando, Shin' ichiro et al. (29人中24番). “Colloquium: Multimessenger astronomy with gravitational waves and high-energy neutrinos” Reviews of Modern Physics, 85, 4, pp. 1401-1420, (2013)
⑭	Suwa, Yudai; Takiwaki, Tomoya; Kotake, Kei; Fischer, Tobias; Liebendörfer, Matthias; Sato, Katsuhiko, “On the Importance of the Equation of State for the Neutrino-driven Supernova Explosion Mechanism” , Astrophysical Journal, 764, 99, 19 pp. (2013)
⑮	Sawai, H.; Yamada, S.; Kotake, K.; Suzuki, H, “Effects of Resistivity on Magnetized Core-collapse Supernovae” Astrophysical Journal, 764, 10, 38 pp. (2013)
⑯	Masada, Youhei; Takiwaki, Tomoya; Kotake, Kei; Sano, Takayoshi, “Local Simulations of the Magnetorotational Instability in Core-collapse Supernovae” , Astrophysical Journal, 759, 110, 11 pp. (2012)
⑰	Ono, M.; Hashimoto, M.; Fujimoto, S.; Kotake, K.; Yamada, S, “Explosive Nucleosynthesis in Magnetohydrodynamical Jets from Collapsars. II --- Heavy-Element Nucleosynthesis of s, p, r-Processes” , Progress of Theoretical Physics, 128, No. 4, pp. 741-765 (2012)
⑱	Kotake, Kei; Sumiyoshi, Kohsuke; Yamada, Shoichi; Takiwaki, Tomoya; Kuroda, Takami; Suwa, Yudai; Nagakura, Hiroki, “Core-collapse supernovae as supercomputing science: A status report toward six-dimensional simulations with exact Boltzmann neutrino transport in full general relativity” , Progress of Theoretical and Experimental Physics, 1, id.01A301, (2012)
⑲	Kotake, Kei; Takiwaki, Tomoya; Harikae, Seiji, “Gravitational Wave Signatures of Hyperaccreting Collapsar Disks” , Astrophysical Journal, 755, 84, 14 pp. (2012)
⑳	Kuroda, Takami; Kotake, Kei; Takiwaki, Tomoya, “Fully General Relativistic Simulations of Core-collapse Supernovae with an Approximate Neutrino Transport” , Astrophysical Journal, 755, 11, 21 pp. (2012)
21	Kotake Kei, Nakano-Iwakami Wakana, Naofumi Ohnishi, “Effects of Rotation on Stochasticity of GWs” Astrophysical Journal 736. 124, 15pp (2011)
	Takiwaki, Tomoya; Kotake, Kei
22	“Gravitational Wave Signatures of Magnetohydrodynamically Driven Core-collapse Supernova Explosions” , Astrophysical Journal, 743, 30, 13 pp. (2011)
最近5年間の学術著書	
該当なし	
最近5年間の学術国際会議での発表	
①	Kotake Kei: “Explosion theory of core-collapse supernovae” (招待講演), IAU XXIV general assembly: Bridging Laboratory Astrophysics and Astronomy, Honolulu, Hawaii (2015年8月)
②	Kotake Kei: “Probing Supernova Core-Collapse Physics with Gravitational Wave Detections” (招待講演), Fourteenth Marcel Grossmann (MG14), University of Rome La Sapienza, Rome (2015年7月)
③	Kotake Kei: “Peeling the Nature of Core-Collapse Supernovae by Multi-Messenger observables” (招待講演), FOE: Fifty-One Erg - International Conference on the physics and observations of supernovae and supernova remnants, NC State University, USA (2015年6月)
④	Kotake, Kei: “Multi-D Core-Collapse Supernova Models and the Multi-Messenger Observables” (招待講演) International Workshop on Neutrino Physics and Astrophysics, Mimar Sinan Fine Arts University, Istanbul, トルコ, (2015年3/18)
⑤	Kotake, Kei: “Multimessenger observables from core-collapse supernovae: some strategies” (招待講演) Brainstorming meeting, Basel University, Basel, スイス (2014年9/23)
⑥	Kotake, Kei: “Multimessenger observables from multi-D

- core-collapse supernova simulations” Nuclear Physics and Astrophysics of Neutron-Star Mergers and Supernovae, and the Origin of R-Process Elements, ECT*, Trento, (2014 年 9/10), イタリア
- ⑦ Kotake, Kei: “Multi-D Core-Collapse Supernova Explosions and the Multi-Messenger Signatures” (招待講演) The 40th COSPAR Scientific assembly, Lomonosov Moscow State University, Moscow, (2014 年 8/2) ロシア
- ⑧ Kotake, Kei: “Cutting-edge issues in core-collapse supernova theory” (招待講演), Origin of Matter and Evolution of Galaxies (OMEG12), (2013 年 11/19), エポカルつくば
- ⑨ Kotake, Kei: “Multi-D Core-Collapse Supernova Explosions and the Multi-Messenger Signatures” (招待講演), Supernovae and Gamma-ray bursts in Kyoto, (2013 年 10/29), 京都大学
- ⑩ Kotake, Kei: “Explosion mechanism of core-collapse supernovae and the astrophysical multi-messengers”, 13th International Conference on Topics in Astroparticle and Underground Physics (TAUP), (2013 年 9/12), Asilomar, California USA
- ⑪ Kotake, Kei: “Simulations of Core-Collapse Supernovae” (招待講演) Inauguration symposium of Center of Nuclear Astrophysics, (2013 年 5/31), Jiao Tong University (上海交通大学), 中国
- ⑫ Kotake Kei: “Current status of multi-D hydrodynamic simulations of core-collapse supernovae (招待講演)” NIC XII satellite workshop on r-process Nucleosynthesis, (2012 年 8/4-10), ケアンズ、オーストラリア
- ⑬ Kotake, Kei: “Brainstorming on core-collapse supernova theory with perspectives toward multi-messenger astronomy (招待講演)”, Nuclear Theory program INT-12-2a, Core-Collapse Supernovae : Models and observable Signals, (2012 年 7/13-23), University of Washington, institute of nuclear theory
- ⑭ Kotake Kei: “Gravitational Waves from Core-Collapse Supernovae and Collapsars” (招待講演) Marcel Grossmann Meeting, (2012 年 7/1-7), スtockホルム
- ⑮ Kotake Kei: “From micro- to macrophysical impacts on the mechanism of core-collapse supernovae”, (招待講演) Modeling at the interface between nuclear physics and nuclear astrophysics, (2012 年 6/17-22), Beijing (Kavli 研究所)
- ⑯ Kotake Kei: “Fostering Core-Collapse Supernovae by General Relativity, 3D hydrodynamics, and anything else ?” CompStar2012 (2012 年 6/3-9), Tahiti
- ⑰ Kotake Kei: “3D vs. GR: which one will help the onset of CCSN ?” 16th workshop on nuclear and astrophysics. (2012 年 3/26-30). Ringberg, Munich, Germany
- ⑱ Kotake Kei: “Cutting-edge issues in the theory of CCSN” IAU Symposium 279 (招待講演). (2012 年 3/12-16). 日光、栃木県、日光千姫ホテル
- ⑲ Kotake Kei: “Cutting-edge issues in CCSN modeling” Formations of compact objects (招待講演). (2012 年 3/7-9). 早稲田大学
- ⑳ Kotake Kei: “Multimessenger from CCSN” Microphysical probe into nuclear astrophysics (招待講演). (2011 年 7/16-24). Institute of nuclear theory, アメリカ

最近 5 年間の代表者としての学外資金導入実績

科研費：若手研究 A 「マルチメッセンジャー天文学で迫る高密度爆発的天体現象の理論的解明」(期間 2014~2016 年度、金額 6890 千円)

基盤研究 C 「次世代計算機・観測から迫る高密度爆発的天体現象の理論的解明」(期間 2011 年度~2013 年度、金額：4160 千円)

若手研究 B 「非対称超新星の爆発機構の解明と重力波、ニュートリノ放射の定量的評価」(期間 2010 年度~2012 年度、金額 2860 千円)

最近 5 年間の代表者としての学内資金導入実績

学部長預り金：「次世代計算機・次世代宇宙観測で迫る高密度天体現象の爆発機構の解明」(期間 2013 年度、3000 千円)

総合科学研究:「Core-Collapse Supernova Astronomy」(期間 2015～2016 年度、3000 千円)
最近 5 年間の学会等学術団体における役職など
日本物理学会誌 編集委員 (2009 年 9 月～2011 年 9 月) 理論天文学宇宙物理学懇談会 運営委員(2013 年 10 月～) 国立天文台:すばる望遠鏡 TAC 委員, シミュレーションプロジェクト運営委員会委員 欧州学術会議(European Research Council) 審査委員、米国科学財団(National Science Foundation) 審査委員, Astroparticle Physics, Publication of Astronomical Society of Japan 編集委員 (editorial board member)
最近 5 年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
該当なし
最近 5 年間の一般 (非学術) 集会での発表論文
該当なし
最近 5 年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
2015年9/19, 固武 慶:壮絶なる星の最期:超新星爆発、リフレッシュ理科教室、応用物理学会、リフレッシュ理科教室実行委員会、飯塚コミュニティセンター 2015年8/1, 固武 慶:宇宙の不思議:超新星爆発, リフレッシュ理科教室, 応用物理学会、リフレッシュ理科教室実行委員会、福岡少年科学館 2014年10/18 固武 慶:壮絶なる星の最後:超新星爆発, 大分NHKカルチャーセンター 2012年3/10 固武 慶:超新星からの新メッセンジャー 朝日カルチャーセンター新宿「超新星爆発研究の最前線」 2012年1/16 固武 慶:激しい星の最後:超新星爆発 ふれ合い天文学:葛飾区立住吉小学校 (5年生)
その他特筆事項
該当なし

研究室名
物理情報科学研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
物理科学科物理情報科学研究室では、応用物理学分野における情報通信技術(ICT: Information Communication Technology)を有効に活用することと天文学分野における観測データの巨大化に対応する技術を実用化することを目指して研究活動を行っている。 応用物理学分野における ICT の適用として、計測・制御および教育を対象としている。計測分野では、アドホックネットワークキングによる、センサーネットワークの応用である。近距離無線通信規格 IEEE802.15.4 に基づいて策定された通信プロトコル ZigBee を用いて構築されたセンサーネットワークは、センサーノードを任意に設置するだけでノードどうしが自律的にネットワーク接続を確立する点で、多様な応用が期待される。その一例を 2009 年末に発行された Measurement Science Review 誌 第 9 巻 第 6 号に“Application of ZigBee sensor network to data acquisition and monitoring”として報告している。制御分野では、実験機器をインターネット経由で操作する、遠隔実験(Remote Laboratory)の開発を、積極的に展開している。教育分野では、学習管理システム(LMS: Learning Management System)や Social Mediaなどを講義など

で実際に利用し、それらを利用する効果を検証している。2012 年後期から 2013 年前期までの在外研究では、フィンランドのタンペレ工科大学において行った医療分野への ICT の適用が研究課題に加わり、タンペレ工科大学の研究者との共著論文が *Journal of Atherosclerosis and Thrombosis* 誌に掲載された。

天文学分野においては、現在、観測データの巨大化の進行が著しい。例えば、南米チリで稼働している世界最高性能の電波望遠鏡「Atacama Large Millimeter/submillimeter Array (ALMA)」では、生データのレベルで数 100TB、利用者がすぐに解析できる標準校正済みデータの形でも TB サイズのデータが、たった一晩の観測から生み出される。これが 2020 年代になると、校正済みデータすら 100 TB を超えると見込まれている。つまり我々は、あと 5～10 年のうちに PB～EB スケールのデータを自由自在に取り扱い、そこから科学的知見を取り出す技術を実用化する必要がある。ところが、計算機の性能はせいぜい「数年で 2 倍」程度しか伸びていない。すなわち、今までの「標準的な天文データの取り扱い手法」をただ拡張するだけでは、巨大化するデータに対応できないことは明白である。そこで当研究室では、観測データを管理・公開するデータベース部分に着目し、ディスク・アクセスを大規模並列化することでこの問題に切り込んでいる。同様の研究は欧米の国立の天文台や宇宙機関を中心に既に始まっているが、我々のアプローチは

1. 計算機リソースは自前では持たず、商用クラウドサービスを活用する
2. オープンソースのソフトウェアを活用するとともに、それらパッケージには極力手を入れないことで、動作ハードウェアを限定しない設計とする

という点でユニークである。

これにより開発・運用コストを大幅に削減できるとともに、天文データベース特有の要求「同じデータを数 10 年は公開し続けられるソフトウェア設計」も同時に満足することができる。特に現在は、分散処理フレームワーク「Hadoop」およびその上で動く SQL-like データベース「Hive」を採用し、その上で効率的にデータを管理するためのアルゴリズムの開発を行っている。

キーワード：センサーネットワーク、遠隔実験と物理教育、データアーカイブ、分散データベース、クラウドコンピューティング

研究室の構成員
寺田 貢（教授）・工学博士、江口 智士（助教）・博士(理学)
2015 度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
4 年次生：4 名 卒業研究テーマ： ・ CCD カメラを用いたポリスチレン微粒子のブラウン運動の観測 ・ ペルチェ素子の熱電発電特性の測定 ・ 斜面を用いた物体の摩擦係数の測定 ・ 二輪駆動ロボット用走行プログラムの作成
教員の担当科目
寺田 貢：(学部) 情報活用演習、情報処理概論、コンピュータシミュレーション、

薬学物理学入門、物理の世界(薬学部共通教育科目)、物理科学入門、 物理の世界(共通教育科目)、アカデミックスキルズゼミⅠ・Ⅱ、 物理科学研究Ⅰ・Ⅱ、卒業論文 (大学院) 物理情報計測講究、物理情報計測実験、計測情報処理特論、修士論文 江口 智士：(学部) 物理科学実験Ⅰ・Ⅱ、物理学基礎ゼミナール、ナノサイエンス基礎演習、 物理学実験
教員の所属学会
寺田 貢：応用物理学会、日本リメディアル教育学会、日本物理教育学会、物理教育研究会 江口 智士：日本天文学会
最近5年間の学術論文
寺田 貢，“日本リメディアル教育学会の活動”，リメディアル教育研究 11(1), 1-2(2016). (依頼記事) 寺田 貢 他，“第32回物理教育研究大会実行委員会の活動記録”，日本物理教育学会九州支部会報 九州の物理教育 2, 7-16(2016). (査読なし) 寺田 貢，“基礎電子回路学習における学習者の誤解パターン”，日本物理教育学会九州支部会報 九州の物理教育 2, 43-46(2016). (査読なし) 寺田 貢，“受講者の学習状況を把握しながら行う講義の試み”，物理教育 64 (1), 48-51(2016). (査読有) 寺田 貢，“日本リメディアル教育学会10年間の歩み”，リメディアル教育研究 10(1), 3-8(2015). (依頼記事) 寺田 貢，“フィンランドの教育と中学校における物理の授業”，九州の物理教育 1, 21-24(2015). (査読なし) 寺田 貢, Jarmo Viteli, “フィンランドの前期中等教育における実験を活用した物理の授業”，福岡大学理学集報 45(1), 63-68(2015). (査読なし) S. Eguchi, Y. Shirasaki, C. Zapart, M. Ohishi, Y. Mizumoto, W. Kawasaki, T. Kobayashi, G. Kosugi, “Blade Runner -What kind objects are there in the JVO ALMA Archive?-", ASP Conference Series (2015; 印刷中). (査読なし) 川崎 渉, 江口 智士, “JVOのALMAデータサービス”，天文月報, Vol.108, No.9, 566-571 (2015). (依頼記事) 寺田 貢, “多様な学習履歴を持つ学生に対する物理学教育”，大学教育と情報 2014(3), 16-20(2014). (依頼記事) 寺田 貢, “物理教育とリメディアル教育”，大学の物理教育 20-S, S29-S31(2014). (依頼記事) F.Santos, A. Joutsen, M. Terada, J. Salenius, H. Eskola, “A Semi-Automatic Segmentation Method for the Structural Analysis of Carotid Atherosclerotic Plaques by Computed Tomography Angiography”, Journal of Atherosclerosis and Thrombosis 21(9), 930-940(2014). (査読有) M. Terada, “Remote Experiments Operated with a User-Friendly Device”, World Conference on Educational Multimedia, Hypermedia and Telecommunications 2014(1), 1027-1031(2014). (査

読有)

寺田 貢, “日本リメディアル教育学会の会長として”, リメディアル教育研究 9(1), 1-2(2014).
(依頼記事)

寺田 貢, “日本の大学におけるグローバル人材教育を阻害する要因(理系教育の立場から)”,
リメディアル教育研究 9(1), 16-20(2014). (査読有)

江口 智士, “ALMA キューブデータ簡易解析 Web アプリケーションの開発”, 宇宙科学情報
解析論文誌, 第3号, 79 (2014). (査読有)

寺田 貢, Jarmo Viteli, “フィンランドの教育”, リメディアル教育研究 8(1), 95-100(2013). (査
読有)

S. Eguchi, ""Superluminal" FITS File Processing on Multiprocessors: Zero Time Endian Conversion
Technique", Publications of the Astronomical Society of the Pacific, 125, 565 (2013). (査読有)

K. Hiroi et al. (34人中5番目; S. Eguchi), "The First MAXI/GSC Catalog in the High Galactic-Latitude
Sky", Publications of the Astronomical Society of Japan, 63, S677 (2011). ’ (査読有)

S. Eguchi, Y. Ueda, H. Awaki, J. Aird, Y. Terashima, R. Mushotzky, "Suzaku View of the Swift/BAT
Active Galactic Nuclei. III. Application of Numerical Torus Models to Two Nearly Compton
Thick Active Galactic Nuclei (NGC 612 and NGC 3081)", the Astrophysical Journal, 729,
31(2011). (査読有)

最近 5 年間の学術著書

寺田 貢: 「高等教育における学習支援」, 大学におけるeラーニング活用実践集 大学eラ
ーニング協議会日本リメディアル教育学会監修 ナカニシヤ出版 2016年1月30日.

寺田 貢: 大学教育への提言 未知の時代を切り拓く教育とICT活用 公益社団法人私立大学情
報教育協会編 公益社団法人私立大学情報教育協会 学系別教育FD/ICT活用研究委員
会・分野別サイバーキャンパスコンソーシアム運営委員会・情報教育研究委員会発行
p135-p142(物理学教育FD/ICT活用研究委員会の委員との共著) 2012年11月.

寺田 貢: 大学における学習支援への挑戦 日本リメディアル教育学会監修 ナカニシヤ出版
Chapter 4編集担当 2012年9月15日.

最近 5 年間の学術国際会議での発表

S. Eguchi, Y. Shirasaki, C. Zapart, M. Ohishi, Y. Mizumoto, W. Kawasaki, T. Kobayashi, G. Kosugi,
“Blade Runner -What kind objects are there in the JVO ALMA Archive?-”, the 25th annual
Astronomical Data Analysis Software and Systems (ADASS) conference. Sydney Australia. 2015
年10月.

M. Terada, “Remote Experiments Operated with a User-Friendly Device”, EdMedia 2014, Tampere
Finland. 2014年6月.

S. Eguchi, W. Kawasaki, Y. Shirasaki, Y. Komiya, G. Kosugi, M. Ohishi, Y. Mizumoto, T. Kobayashi,
"Demonstration of a Data Distribution System for ALMA Data Cubes", the 23rd annual
Astronomical Data Analysis Software and Systems (ADASS) conference. Waikoloa, HI. 2013年
9月.

S. Eguchi, "Interactive Web Viewer for ALMA Cube Data and Zero Time Endian Conversion

Technique", IVOA Interoperability meeting May 2013. Heidelberg Germany. 2013年5月.

M. Terada, S. Akahoshi, A. Kohno, N. Hiramatsu, T. Manago, K. Nagata, H. Nishimura, M. Misono, N. Takesue, "Learning support system on 'Mechanics' for engineering freshman students with Social media", Interaktiivinen Tekniikka Koulutuksessa 2012. Hämeenlinna Finland. 2012年4月.

S. Eguchi, W. Kawasaki, Y. Shirasaki, Y. Komiya, G. Kosugi, M. Ohishi, Y. Mizumoto, "Prototype Implementation of Web and Desktop Applications for ALMA Science Verification Data and the Lessons Learned", the 22nd annual Astronomical Data Analysis Software and Systems (ADASS) conference. Urbana IL. 2012年11月.

Y. Shirasaki, W. Kawasaki, S. Eguchi, Y. Komiya, G. Kosugi, M. Ohishi, Y. Mizumoto, "Web and Desktop Applications for ALMA Science Verification Data", the 22nd annual Astronomical Data Analysis Software and Systems (ADASS) conference. Urbana IL. 2012年11月.

S. Eguchi, Y. Komiya, Y. Shirasaki, M. Ohishi, Y. Mizumoto, "Japanese Virtual Observatory III -Three Scientific Use Cases Utilizing Virtual Observatory-", IAU XXVIII General Assembly. Beijing China. 2012年8月.

S. Eguchi, "NED resolver TOPCAT extension and AGN candidates", IVOA Interoperability meeting May 2012. Urbana IL. 2012年5月.

S. Eguchi, Y. Shirasaki, Y. Komiya, M. Ohishi, Y. Mizumoto, Y. Ishihara, J. Tsutsumi, T. Hiyama, H. Nakamoto, M. Sakamoto, "Improvement of Service Searching Algorithm in the JVO Portal Site", Astronomical Data Analysis Software and Systems (ADASS) XXI conference. Paris France. 2011年11月.

最近5年間の代表者としての学外資金導入実績

江口 智士:

科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)(若手研究(B)), “超巨大天文データからなる全天アーカイブを Hadoop により超低費用で実現する研究”, 150 万円, 2015 年 4 月 1 日～2017 年 3 月 31 日.

平成 26 年度国立天文台(大学支援経費)委託研究, "分散処理フレームワーク「Hadoop」を用いた低予算型超大型天文データ・オンライン解析システムの開発に向けたハッシュ・アルゴリズムの開発", 160 万円, 2014 年 7 月 1 日～2015 年 3 月 31 日.

最近5年間の代表者としての学内資金導入実績

寺田 貢:

平成 27 年度 大学院高度化推進特別経費外国人研究員等特別招聘経費(短期), 70 万円
 タンペレ工科大学 Hannu Eskola 教授
 招聘期間: 2016 年 2 月 2 日～2 月 27 日

最近5年間の学会等学術団体における役職など

寺田 貢:

1)団体名: 日本リメディアル教育学会

活動: 2013 年 8 月より、会長として学会全体を運営している。それ以前には、2009 年 8 月より、副会長(2011 年 8 月まで)および事務局長として、学会全体の運営に携わり、学会の予算・決算、全国大会の実施(2011 年度は福岡大学で開催)、会誌・ニューズレターの発行、支部会・専門部会の活動を支援した。また、2011 年 8 月まで九州・沖縄支部会支部長として、支部大会の企画・運営および支部会に所属する会員への情報提供を行った。

役職：会長・会誌編集委員会副委員長・全国大会企画委員・2013年8月～現在、副会長・2009年8月～2011年8月、事務局長・2009年8月～2013年8月、第7回全国大会実行委員会委員長・2010年8月～2011年12月、第8回全国大会実行委員会委員・2011年8月～2012年12月、第10回全国大会実行委員会委員・2013年8月～2014年12月、九州・沖縄支部会支部長・2007年8月～2011年8月

2)団体名：The Institute of Electrical and Electronics Engineering, Inc.

活動：2012年9月より、IEEE P1876™ Standard for Networked Smart Learning Objects for Online Laboratories 規格化委員会の IEEE Networked Smart Learning Objects for Online Laboratories 作業部会に所属し、規格作成の作業に参加している。この規格化作業に伴い、実施された国際会議 EDUCON2013(2013年3月13日～15日、ドイツベルリン工科大学において開催)の Special Track "Standard on Networked Smart Learning Objects for Online Laboratories: IEEE-SA P1876™"にプログラム委員として参画した。

役職：Member; IEEE Networked Smart Learning Objects for Online Laboratories Working Group・2012年9月～、Program committee member; Special Track "Standard on Networked Smart Learning Objects for Online Laboratories: IEEE-SA P1876™" at EDUCON2013・2012年11月～2013年3月

3)団体名：応用物理学会

活動：2003年の第7回リフレッシュ理科教育(九州支部福岡会場)から実行委員として、企画運営およびテキストの編集・発行を担当している。

役職：リフレッシュ理科教育実行委員会委員・2003年～現在

4)団体名：日本物理教育学会九州支部

活動：2013年度に九州支部が発足し、支部監事とともに、2015年8月に九州大学で開催される日本物理教育学会第32回物理教育研究大会の実行委員を担当している。

役職：支部監事、第32回物理教育研究大会実行委員会 委員

最近5年間の一般向け論文と著書、行政報告書など

該当なし

最近5年間の一般（非学術）集会での発表論文

該当なし

最近5年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など

寺田 貢：

1)団体名：公益社団法人 私立大学情報教育協会

活動：2005年4月より社団法人 私立大学情報教育協会物理学教育 IT 活用研究委員会の委員に就任後、協会の法人名の変更および委員会の名称変更により公益社団法人 私立大学情報教育協会物理学教育 FD/ICT 活用研究委員会の委員として、現在に至るまで、大学における ICT(情報通信技術)を用いた物理学教育について検討を行っている。本活動のまとめとして、2012年11月に「大学教育への提言 未知の時代を切り拓く教育と ICT 活用」が発行された。

2014年12月21日に、物理学教育分野の分野別教育におけるアクティブ・ラーニングの事例研究対話集会在開催され、「オンラインフォーラムによる振り返り学修」と題して話題提供を行い、その模様は http://www.juce.jp/senmon/active/pdf/physics_03.pdf と http://www.juce.jp/senmon/al/butsurigaku_03.html に公開されている。

2015年12月27日には、分野連携アクティブ・ラーニング対話集会在開催され、「上級学年生による教え合い・学び合い学修の導入と効果・課題」と題して話題提供を行い、その模様が http://www.juce.jp/senmon/al/2015/pdf/butsurigaku_03.pdf と http://www.juce.jp/senmon/al/2015/butsurigaku_03.html に公開されている。

役職：物理学教育 FD/ICT 活用研究委員会 副委員長・2013 年 10 月～現在、委員・2005 年 4 月～現在 2)団体名：一般社団法人 日本私立大学連盟 活動：2011 年 4 月より一般社団法人 日本私立大学連盟(以下、私大連と記す)が実施するマネジメントサイクル(PDCA サイクル)修得研修運営委員会に参加し、委員として研修の運営に参画している。夏季休暇中に私大連に加盟する大学の教職員向けに実施される研修について、課題の設定などの準備、研修期間中の全国の大学の教職員のグループ作業におけるファシリテータ、研修終了後に参加者が作成したレポートの評価・採点などの作業を行っている。 役職：マネジメントサイクル(PDCA サイクル)修得研修運営委員会 委員・2011 年 4 月～現在 3)団体名：一般社団法人 日本技術者教育認定機構 活動：2014 年度より一般社団法人 日本技術者教育認定機構「物理・応用物理学関連分野」審査委員会に所属し、当該分野の JABEE の審査作業の運営に参画している。 役職：「物理・応用物理学関連分野」審査委員会 委員・2014 年 5 月～現在
その他特筆事項
該当なし

研究室名
光科学研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要 ・基本的な分子の分光学的性質を研究することは、基礎科学として重要であるだけでなく、環境問題や生命科学、材料科学の基礎としても極めて重要である。この研究において重要となるのが、優れた精度を持つ光周波数の目盛である。我々は、光周波数コムがこの目盛として利用できることに着目し、従来の分解能を大幅に上回る超高分解能レーザー分光システムの開発を行っている。さらに、このシステムを利用して、分子の超高分解能スペクトルを測定し、電子励起状態におけるエネルギー準位構造の詳細やダイナミクスの解明を行っている。 ・確率共鳴とは、ある種の非線形系において、コヒーレントな信号と雑音との協力効果により信号伝達が共鳴的に増大する現象である。双安定系や興奮系などでは、雑音強度を変化させると、伝達される情報量は、系に特有な雑音強度において共鳴的に増大する。従って、雑音の強度を最適化することにより、系の信号伝達を最適化することができる。我々は、このような非線形システムのフィードバックによる制御、論理素子としてみたときの振る舞い、多段接続した際の時空間パターン等について、光双安定系や非線形電子回路を利用した研究を行っている。 キーワード：超高分解能レーザー分光・光周波数コム・確率共鳴・光双安定系
研究室の構成員
御園雅俊（教授）・博士（理学）

2014 年度の大学院生および卒論生の名簿と研究テーマ
M2 : 1 名、光周波数コムを利用した Rb 原子のレーザー分光 M1 : 1 名、光周波数コムを利用したナフタレンの超高分解能レーザー分光 4 年次生 : 2 名、光ファイバーの自動アライメント
教員の担当科目
御園雅俊 : (学部) 物理学基礎ゼミナール、ナノサイエンス基礎演習、物理科学の世界、力学 A、力学 B、物理学実験、電磁気学 I、電磁気学 II、レーザー物理学、物理科学研究 I、物理科学研究 II、科学プレゼンテーション、卒業論文 (大学院) 光科学特論、物理情報計測実験、物理情報計測講究、物理情報計測特別研究
教員の所属学会
御園雅俊 : 日本物理学会、日本分光学会、分子科学会、レーザー学会
最近 5 年間の学術論文
西山明子, 御園雅俊, "光周波数コムを利用したナフタレンの高分解能レーザー分光," レーザー研究, 44 (3), 203 (2016). (査読有) A. Nishiyama, K. Nakashima, A. Matsuba, and M. Misono, "Doppler-free two-photon absorption spectroscopy of rovibronic transition of naphthalene calibrated with an optical frequency comb," J. Mol. Spectrosc., 318, 40 (2015). (査読有) 御園雅俊, "ヨウ素分子の高分解能分光," 分光研究, 64 (4), 477 (2015). (査読有) A. Nishiyama, A. Matsuba, and M. Misono, "Precise frequency measurement and characterization of a continuous scanning single-mode laser with an optical frequency comb," Opt. Lett., 39 (16), 4923 (2014). (査読有) A. Nishiyama, D. Ishikawa, and M. Misono, "Development of high resolution molecular spectroscopic system with an optical frequency comb," JPS Conf. Proc. 1, 013088 (2014). (査読有) 石川大樹, 西山明子, 御園雅俊, 宮川賢治, "光双安定系における論理的確率共鳴," 福岡大学理学集報, 43 (1), 1 (2014). 西山明子, 石川大樹, 御園雅俊, "光周波数コムと音響光学変調器を用いた分光システムの開発とナフタレン分子の高分解能分光計測への応用," 福岡大学理学集報, 44 (1), pp. 11 - 19 (2014).

A. Nishiyama, D. Ishikawa, and M. Misono, "High resolution molecular spectroscopic system assisted by an optical frequency comb," J. Opt. Soc. Am. B, 30 (8), 2107 (2013). (査読有)

K. Narahara, M. Misono, and K. Miyakawa, "External synchronization of oscillating pulse edge on a transmission line with regularly spaced tunnel diodes," Phys. Rev. E 87 (1), 012903 (2013). (査読有)

西山明子, 石川大樹, 御園雅俊, "光周波数コムによるヨウ素分子超微細構造の周波数計測," 福岡大学理学集報 43 (1), 21 - 28 (2013).

M. Misono, W. Nakashima, and K. Miyakawa, "Chaotic Behavior and Noise-Induced Order in a Laser Diode System with the Feedback Employing Rb Atom," J. Phys. Soc. Jpn. 80 (12), 124803 (2011). (査読有)

M. Misono and K. Miyakawa, "Noise-Induced Phase Locking and Frequency Mixing in an Optical Bistable System with Delayed Feedback," J. Phys. Soc. Jpn. 80 (11), 114801 (2011). (査読有)

最近 5 年間の学術著書

該当なし

最近 5 年間の学術国際会議での発表

A. Nishiyama, K. Nakashima, A. Matsuba, and M. Misono, "High Resolution Spectroscopy of Naphthalene Calibrated by an Optical Frequency Comb," International Symposium on Molecular Spectroscopy 70th Meeting, Champaign-Urbana, Illinois, USA, June 2015.

A. Nishiyama, A. Matsuba, and M. Misono, "High Resolution Spectroscopy of Naphthalene with an Optical Frequency Comb," The 23rd International Conference on High Resolution Molecular Spectroscopy, Bologna, Italy, September 2014.

A. Nishiyama, A. Matsuba, and M. Misono, "Doppler-free two-photon spectroscopy of naphthalene assisted by an optical frequency comb," International Symposium on Molecular Spectroscopy 69th Meeting, Champaign-Urbana, Illinois, USA, June 2014.

A. Nishiyama, D. Ishikawa, and M. Misono, "Development of high resolution molecular spectroscopic system with an optical frequency comb," The 12th Asia Pacific Physics Conference, Chiba, July 2013.

A. Nishiyama, D. Ishikawa, and M. Misono, "High Resolution Molecular Spectroscopy Assisted by an Optical Frequency Comb," The 10th Conference on Lasers and Electro-Optics Pacific Rim (CLEO-PR 2013), Kyoto, July 2013.

F. Sakamoto, A. Nishiyama, M. Misono, and K. Miyakawa, "Synchronization between Chemical Oscillators through Mechanical Contact and Connection. Self-organization and Emergent Dynamics in Active Soft Matter", Kyoto. 2013年2月.

最近5年間の代表者としての学外資金導入実績

御園雅俊：日本学術振興会・科研費・挑戦的萌芽研究・「光周波数コムと狭線幅色素レーザーを利用した超高分解能レーザー分光」・代表・310万円（直接経費）, 2012年度～2014年度

御園雅俊：日本学術振興会・科研費・基盤研究(C)・「光周波数コムと高フィネス光共振器を併用した超高分解能・超高感度レーザー分光計測」・代表・330万円（直接経費）, 2008年度～2010年度

御園雅俊：光科学技術研究振興財団・研究助成・「光周波数コムを利用した超高分解能レーザー分光」・代表・110万円, 2012年～2013年

最近5年間の代表者としての学内資金導入実績

御園雅俊：推奨研究プロジェクト・「星間分子と造岩鉱物の分光計測と理論的研究」・66万円・2014年度～2016年度（終了予定）（分担者：固武慶、藤昇一）

御園雅俊：領域別研究チーム・「励起分子ダイナミクス」・115.5万円・2013年度～2015年度（分担者：宮川賢治、坂本文隆）

御園雅俊：推奨研究プロジェクト・「非線形システムの超高分解能レーザー分光」・47万円・2011年度～2013年度（分担者：宮川賢治）

御園雅俊：領域別研究チーム・「超高分解能分光」・116.6万円・2010年度～2012年度（分担者：宮川賢治、坂本文隆）

最近5年間の学会等学術団体における役職など

第15回分子分光研究会世話人（2015年5月）
日本分光学会九州支部幹事（2014-）

最近5年間の一般向け論文と著書、行政報告書など

御園雅俊, 西山明子, "光周波数コムを利用した超高分解能レーザー分光," 化学工業, 63 (8), pp. 55-60 (2012).

最近5年間の一般（非学術）集会での発表論文

該当なし

最近5年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など

該当なし
その他特筆事項
西山明子：第 14 回分子分光研究会優秀講演賞受賞（2014 年 5 月）

研究室名
結晶物性研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
結晶材料には構造の欠陥や揺らぎがある。それらは材料の物性と深い関係を持つので、欠陥や揺らぎを詳しく分析することは重要である。その手法として、第一原理計算や量子ビームを用いた回折・分光法がよく用いられる。本研究室では、この手法で固体物質の研究分野における興味深い課題に取り組む。以下、現在取り組んでいる誘電体と鉱物の分野の研究内容について記す。 誘電体の分野では、ペロブスカイト酸化物誘電体結晶の構造安定性を表す指標を求め、それを用いた物性設計を行うことを研究目的とする。この物質群の構造安定性は、結晶格子を占有するイオンのサイズが格子に対して丁度良くフィットするかどうか（寛容性）による。現在、この寛容性の指標は、イオン球モデルに基づくイオン半径を用いた寛容性因子（tolerance factor）として数値化され、構造安定性の評価に使われているが、現在のイオン半径の典型データは、形式電荷と特定の結晶構造についてのものである。評価できる物質数は限られてしまい、任意のイオン種を含むペロブスカイト酸化物混晶・固溶体を評価できるまでには至っていない。そこで本研究では、任意のペロブスカイト酸化物について第一原理クラスター計算を行い、フレキシブルに使える寛容性の指標が得られるか検討してみた。得られた計算結果より、イオンのサイズと有効電荷の間に定量的な関係があることが分かり、その関係が寛容性の指標となり得ることが分かった。これからは、計算により分かったことを、量子ビームによる結晶構造解析と、誘電性・圧電性の物性測定により実証する。また、計算結果を利用して、高い誘電性・圧電性を持つペロブスカイト系誘電体を設計し、音力・振動力発電素子や、微小駆動体素子の素材を開発したい。さらには、同研究手法を、非ペロブスカイト系の酸化物に拡張したい。 天然に産出する結晶である鉱物の分野では、かんらん石および輝石を試料とし、透過型分析電子顕微鏡を用いた席占有率の測定法である ALCHEMI 法に関する基礎的研究を行った。さらに本年度は通常の ALCHEMI 法に加えて角度高分解電子チャネリング X 線分光（HARECXS）法による分析を行った。ALCHEMI 法は、電子線の入射方位を変化させ、その際に得られた特性 X 線のカウンタ数より不純物元素の位置や、規則構造の解析に用いられる。ALCHEMI 法を用いてかんらん石の席占有率を求めた研究は過去に数例あり、最もチャネリング効果が卓越しておこる回折条件を詳細に決定し、信頼性の高い席占有率を求めた研究も行われてきた。本研究でもそれらにならい、連続的に入射方位を変化させながら、特性 X 線の取り込みを行った。その結果、主要置換元素である、Mg と

Fe についてはほぼ同様のパターンを示したため、これらの2種の元素は無秩序化しているものと考えられる。しかし、この実験における取り込み時間が短かったため、微量元素の Mn と Ni が相反的な強度パターンを示すという特徴を、明確に捉えることができなかった。この点については、従来の ALCHEMI 法による長時間の測定を行う必要があると思われる。一方、斜方輝石については、その構造の複雑さから Mg と Fe および Si が分布するサイトが近接している。したがって、より詳細に角度分解を行う、HERACXS 法での実験を行った。その結果、Mg と Fe は入射方位の変化に対して同様の強度パターンをしめした。このことは、これらの元素が2つの結晶学的サイト間で無秩序に分布していることを示していると考えられる。これらのデータから席占有率を求めるためには、動力学理論に基礎を置いたシミュレーションとの対比が必要であるため、現在、検討中である。

キーワード：結晶学・回折・散乱・分光・電子顕微鏡法・相転移・物性・誘電体・鉱物・第一原理計算

研究室の構成員

武末 尚久（教授）・Ph. D.
藤 昇一（助教）・博士（理学）

2015 度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ

4 年次生：5 名

教員の担当科目

武末 尚久：（学部）物理学基礎ゼミナール、物理科学の世界、振動波動論Ⅰ、振動波動論Ⅱ、結晶物理学、物理科学研究Ⅰ、物理科学研究Ⅱ、卒業論文、物理学A、力学B（大学院）X線結晶学特論、物性物理学実験
藤 昇一：（学部）物理科学実験Ⅰ、物理科学実験Ⅱ、物理学基礎ゼミナール

教員の所属学会

武末 尚久：日本セラミック協会、日本金属学会、日本物理学会
藤 昇一：日本鉱物科学会、日本顕微鏡学会

最近 5 年間の学術論文

Takaaki Noguchi, Noriaki Ohashi, Shinichi Tsujimoto, Takuya Mitsunari, John P. Bradley, Tomoki Nakamura, Shoichi Toh, Thomas Stephan, Naoyoshi Iwata, Naoya Imae, “Cometary dust in Antarctic ice and snow: Past and present chondritic porous micrometeorites preserved on the Earth's surface”, Earth and Planetary Science Letters, 410/1-11, (2015). (査読有)
武末 尚久, 藤 昇一, “面心立方金属細密格子面内拡張転位の転位線形状と平均ヤング率による弾性定数決定”, 福岡大学理学集報, 44(1), 21-25 (2014). (査読有)
Shoichi TOH, Kensaku HATTORI, Seiichiro UEHARA and Jun SUGAWARA, “Thermal and Structural Properties of Ultra Low Thermal Expansion Cordierite Ceramics”, Fukuoka University Science Reports, 44, 2, 119-123 (2014). (査読有)
Guangqin Li, Hirokazu Kobayashi, Jared M. Taylor, Ryuichi Ikeda, Yoshiki Kubota, Kenichi Kato, Masaki Takata, Tomokazu Yamamoto, Shoichi Toh, Syo Matsumura and Hiroshi Kitagawa, “Hydrogen storage in Pd nanocrystals covered with a metal-organic framework”, nature materials, 44, 802-806 (2014). (査読有)
Kohei Kusada, Hirokazu Kobayashi, Ryuichi Ikeda, Yoshiki Kubota, Masaki Takeda, Shoichi Toh, Tomokazu Yamamoto, Syo Matsumura, Naoya Sumi, Katsutoshi Sato, Katsutoshi Nagaoka, and Hisoshi Kitagawa,

“Solid solution alloy nanoparticles of immiscible Pd and Ru elements neighbouring on Rh: changeover of the thermodynamic behavior for hydrogen storage and enhanced CO-Oxidizing ability”, Journal of the American chemical Society, 136, 1864-1871, (2014). (査読有) M. Tane, T. Nakano, S. Kuramoto, M. Niinomi, N. Takesue, H. Nakajima, “ω transformation in cold-worked Ti-Nb-Ta-Zr-O alloys with low body-centered cubic phase stability and its correlation with their elastic properties”, Acta Materialia 61, 139-150 (2013). (査読有) Kaveh Edalati, Hideaki Iwaoka, Shoichi Toh, Ken Sasaki and Zenji Horita, “Application of high-pressure torsion to WC-Co ceramic-based composites for improvement of consolidation, microstructure and hardness”, Materials Transactions, 54, 9, 1540-1548 (2013). (査読有) Kaveh Edalati, Shoichi Toh, Makoto Arita, Masashi watanabe, and Zenji Horita, “High-pressure torsion of pure cobalt: hcp-fcc phase transformations and twinning during severe plastic deformation”, Applied Physics Letters, 102, 181902-1-4 (2013). (査読有) Kaveh Edalati, Junko Matsuda, Hideaki Iwaoka, Shoichi Toh, Etsuo Akiba and Zenji Horita, “High-pressure torsion of TiFe intermetallics for activation of hydrogen storage at room temperature with heterogeneous nanostructure”, International Journal of Hydrogen Energy, 38, 4622-4627 (2013). (査読有) Yoshihiro Nakamura and Shoichi Toh, “Transformation of graphite to lonsdaleite and diamond in the Goelpare ureilite directly observed by TEM”, American Mineralogist, 98, 574-581 (2013). (査読有) Md Jafar Sharif, Miho Yamauchi, Shoichi Toh, Matsumura Syo, Shin-ichiro Noro, Kenichi Kato, Masaki Takata and Tatsuya Tsukuba, “Enhanced magnetization in highly crystalline and atomically mixed bcc Fe-Co nanoalloys prepared by hydrogen reduction of oxide composites”, NANOSCALE, 5, 1489-1493 (2013). (査読有) Kaveh Edalati, Shoichi Toh, Hideaki Iwaoka, Masashi Watanabe, Zenji Horita, Daisuke Kashioka, Kyosuke Kishida and Haruyuki Inui, “Ultrahigh strength and high plasticity in TiAl intermetallics with bimodal grain structure and nanotwins”, Scripta Materialia, 67, 814-817 (2012). (査読有) Kaveh Edalati, Shoichi Toh, Tadahiko Furuta, Shigeru Kuramoto, Masashi Watanabe and Zenji Horita, “Development of ultrahigh strength and high ductility in nanostructured iron alloys with lattice softening and nanotwins”, Scripta Materialia, 67, 511-514 (2012). (査読有) Hirokazu Kobayashi, Hitoshi Morita, Miho Yamauchi, Ryuichi Ikeda, Hiroshi Kitagawa, Yoshiki Kubota, Kenichi Kato, Masaki Takata, Shoichi Toh, Syo Matsumura, “Nanosize-Induced Drastic Drop in Equilibrium Hydrogen Pressure for Hydride Formation and Structural Stabilization in Pd-Rh Solid Solution Alloys”, Journal of the American Chemical Society, 134, 12390-12393 (2012). (査読有) Kaveh Edalati, Shoichi Toh, Hideaki Iwaoka, Zenji Horita, “Microstructural characteristics of tungsten-base nanocomposites produced from micropowders by high-pressure torsion”, Acta Materialia, 60, 3885-3893 (2012). (査読有) Kaveh Edalati, Shoichi Toh, Masashi Watanabe, Zenji Horita, “In situ production of bulk intermetallic-based nanocomposites and nanostructured intermetallics by high-pressure torsion”, Scripta Materialia, 66, 386-389 (2012). (査読有) M. Tane, T. Nakano, S. Kuramoto, M. Hara, M. Niinomi, N. Takesue, T. Yano, H. Nakajima, “Low Young’s modulus in Ti-Nb-Ta-Zr-O alloys: Cold working and oxygen effects”, Acta Materialia 59, 6975-6988 (2011). (査読有) K. Tanaka, N. Takesue, T. Yano, “Strengthening of alloys with elastic anomalies toward the ideal strengths – Gum Metal as an example”, Fukuoka University Science Report 41(2), 165-176 (2011). (査読有) Kaveh Edalati, Shoichi Toh, Yoshifumi Ikoma, Zenji Horita, “Plastic deformation and allotropic phase transformations in zirconia ceramics during high-pressure torsion”, Scripta Materialia, 65, 974-977 (2011). (査読有)
最近 5 年間の学術著書
該当なし
最近 5 年間の学術国際会議での発表
N. Takesue and S. Toh, “Local ionic arrangements of relaxors”, The 15th IUMRS-International Conference in Asia, Fukuoka, 2014年8月. N. Takesue and S. Toh, “Determination of elastic constants of a face-centered cubic crystal from line shapes of the extended half dislocations”, The 15th IUMRS-International Conference in Asia, Fukuoka, 2014年8月. Kaveh Edalati, Junko Matsuda, Makoto Arita, Shoichi Toh, Takeshi Daio, Etsuo Akida, Zenji Horita, “Hydrogen storage in nanostructured TiFe severely deformed by high-pressure torsion”, The 3rd Nano Today Conference, Singapore, 2013年12月. Shu-Sheng Liu, Michihisa Koyama, Shoichi Toh, Syo Matsumura, “Microstructure observation of Ni/YSZ

interface”, The 19th International Conference on Solid State Physics, Japan, 2013年6月. S. S. Liu, M. Koyama, S. Toh, S. Matsumura, “Microstructure Evolution of SOFC Anode during Sintering”, IUPAC 8th International Conference on Novel Materials and Synthesis (NMS-VIII) & 22nd International Symposium on Fine Chemistry and Functional Polymers (FCFP-XXII), China, 2012年10月. M. Tane, T. Nakano, S. Kuramoto, M. Hara, M. Niinomi, N. Takesue, T. Yano, H. Nakajima, “Elastic properties of Ti-Nb-Ta-Zr-O alloys”, TMS 2012 Annual Meeting & Exhibition. USA. 2012年3月. Hiroto UNNO, Shoichi TOH, Jun SUGAWARA, Kensaku HATTORI, Seiichiro UEHARA, Syo MATSUMURA, “Microstructures of La-doped Low Thermal Expansion Cordierite Ceramics”, 36th International Conference and Exposition on Advanced Ceramics and Composites, USA. 2012年1月. S. Matsumura, I. Ohnishi, E. Okunishi, K. Yamazaki, N. Aota, K. Miyatake, M. Nakanishi, Y. Ohkura, Y. Kondo, K. Yasuda, and S. Toh, “Steradian-Class X-ray Detector for Analytical Transmission Electron Microscopy”, Frontiers of Electron Microscopy in Materials Science 2011, USA, 2011年9月. I. Ohnishi, E. Okunishi, K. Yamazaki, N. Aota, K. Miyatake, M. Nakanishi, Y. Ohkura, Y. Kondo, K. Yasunaga, S. Toh, and S. Matsumura, “Development of Large Solid Angle SDD for TEM and its Applications”, Microscopy and Microanalysis 2011 Meeting, USA. 2011年8月.
最近5年間の代表者としての学外資金導入実績
藤 昇一： 研究助成寄付金、新日鉄住金マテリアルズ（株）電子材料事業部、「金属組織観察に関する研究助成のため」・50万4千円・2013年8月20日～2015年8月19日 日本学術振興会、科学研究費、基盤研究（C）「最先端電顕法による造岩鉱物の元素分配に関する実験的研究」・直接経費390万円・2011年4月～2016年3月
最近5年間の代表者としての学内資金導入実績
武末 尚久： 領域別研究、「物質極微領域先端構造解析」・30万8千円（2014年度）・2014年4月1日～2017年3月31日（分担者：藤 昇一）
最近5年間の学会等学術団体における役職など
日本顕微鏡学会第67回学術講演会実行委員、2010年7月～2011年5月
最近5年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
該当なし
最近5年間の一般（非学術）集会での発表論文
該当なし
最近5年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
該当なし
その他特筆事項
多根正和、原昌司、矢野壮、中野貴由、新家光雄、中嶋英雄、倉本繁、武末尚久：グローバル COE プログラム「構造・機能先進材料デザイン教育研究拠点」論文賞受賞（共著） 「Low Young's modulus in Ti-Nb-Ta-Zr-O alloys: Cold working and oxygen effects」 大阪大学、大阪、2012年2月14日

研究室名
構造物性研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
本研究室では誘電体や磁性体などのナノメートルサイズの粒子（ナノ粒子）や薄膜を作製する技術を開発するとともに、ナノメートルスケールで特徴的に発現する物性（ナノ物性、ナノ構造）とその応用について研究を行っている。現在の主なテーマは以下の通りである。 (1) 強誘電体薄膜の結晶配向制御と物性 高集積化・低消費電力・高速動作が期待できるトランジスタ型の強誘電体薄膜メモリの開発を目指して、$\text{Bi}_{4-x}\text{La}_x\text{Ti}_3\text{O}_{12}$ や $\text{SrBi}_2\text{Ta}_2\text{O}_9$ などの鉛を含まない強誘電体の薄膜をシリコン基板上に直

接堆積し、薄膜・界面の構造と物性制御の研究を行っている。結晶化過程を制御することで結晶配向や電気特性が制御できることを見出し、結晶配向が生じる機構の研究、界面制御の研究を進めている。 (2)フェロイックナノ粒子における構造と物性のサイズ効果の解明 近年注目を集めている複数のフェロイック特性を持つマルチフェロイック物質や高温超伝導体、磁性体、強誘電体などを対象として、ナノ粒子を粉体のメソ多孔体や Si 基板やガラス基板上に作製したメソ多孔体薄膜の細孔中で合成し、それらの結晶構造解析や磁気特性、光学特性、電気特性などの物性測定を行い、ナノ物性の解明に向けた研究を行っている。 (3)不純物過飽和ドーピングシリコンの物性 レーザーメルティング法を用いてシリコン表面近傍を急速に加熱溶解、固化させることで、平衡状態の固溶限を遥かに超える量の不純物をドーピングすることができる。S、Se などのカルコゲンを過飽和ドーピングした Si が（通常の Si が全く吸収を示さない）赤外光域にブロードでかつ巨大な吸収を生じる現象や鉄族遷移金属の過飽和ドーピング試料の作製と構造と物性について、局所構造や電子状態の観点から物性発現機構の研究を行っている。 (4)薄膜・ナノ粒子・界面の構造研究 X線回折法、X線反射率法、X線吸収微細構造解析などの手法を駆使して、薄膜、ナノ粒子、界面の構造を解明することに取り組んでいる。放射光科学研究施設、SPring-8、KEK PF、Saga-LS のシンクロトロン光を活用した研究も行っている。 キーワード： 強誘電体，磁性体，薄膜，ナノ粒子，メソ多孔体，界面，X線
研究室の構成員
香野 淳（教授）・博士（理学） 田尻恭之（助教）・博士（工学） 上林浩行（研究員） 徳永幸大（研究員）
2015 年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
M1：1 名，「TiO₂ ナノ粒子内包薄膜における物性の粒子サイズ依存性の解明」 4 年次生：4 名，「強誘電体 Bi_{4-x}La_xTi₃O₁₂ 薄膜の結晶配向に関する研究」、「強誘電体 Bi_{4-x}La_xTi₃O₁₂ 薄膜の作製と膜構造の解析」、「メソポーラスシリカ薄膜の細孔サイズ制御」、「パルスレーザーメルティング法を用いた Si 単結晶へのコバルト過飽和ドーピング」
教員の担当科目
香野 淳：（学部）卒業論文、物理科学研究Ⅰ、物理科学研究Ⅱ、力学Ⅰ、力学演習Ⅰ、物理学基礎ゼミナール（ナノサイエンス基礎演習）、物性物理学Ⅰ、理科教育法Ⅱ、力学A、物理学実験 （大学院）ナノ物理学講究、ナノ物理学実験、結晶物理学特論 田尻恭之：（学部）物理学基礎ゼミナール、物理学実験、力学演習Ⅰ、ナノ材料科学実験Ⅱ
教員の所属学会

香野 淳：日本物理学会、応用物理学会、日本結晶学会、日本 MRS、MRS

田尻恭之：日本物理学会、応用物理学会

最近 5 年間の学術論文

T. Tajiri, Y. Ando, H. Deguchi, M. Mito, A. Kohno, “Magnetic Properties and Crystal Structure of DyMn₂O₅ Nanoparticles Embedded in Mesoporous Silica”, Physics Procedia 75, 1181-1186 (2015). (査読有)

M. Mito, H. Goto, K. Nagai, K. Tsuruta, H. Deguchi, T. Tajiri, K. Konishi, “High pressure effects on isotropic Nd₂Fe₁₄B magnet accompanying change in coercive field”, Journal of Applied Physics 118, 145901 [6 pages] (2015). (査読有)

H. Saigyo, H. Hori, T. Tsukamoto, R. Yamase, K. Hario, K. Tsuruta, H. Deguchi, M. Mito, T. Tajiri, (他 18名), “Magnetic properties of Hagi ware”, Journal of the Ceramic Society of Japan 123, 649-655 (2015). (査読有)

M. Mito, T. Tajiri, K. Tsuruta, H. Deguchi, J. Kishine, K. Inoue, Y. Kousaka, Y. Nakao, J. Akimitsu, “Investigation of structural changes in chiral magnet Cr_{1/3}NbS₂ under application of pressure”, Journal of Applied Physics 117, 183904 [6 pages] (2015). (査読有)

T. Tajiri, S. Saisho, M. Mito, H. Deguchi, K. Konishi, A. Kohno, “Size Dependence of Crystal Structure and Magnetic Properties of NiO Nanoparticles in Mesoporous Silica”, The Journal of Physical Chemistry C 119, 1194-1200 (2015). (査読有)

柳生数馬, 田尻恭之, 香野淳, 高橋和敏, 枋原浩, 友景肇, 鈴木孝将, “SiC(0001)基板に成長させたゼロ層グラフェンへの銅インターカレーション”, Journal of the Vacuum Society of Japan 57, 266-271 (2014).

G. Oomi, T. Yayoi, T. Nakano, K. Saito, K. Takanashi, S. Mitani, A. Kohno, and K. Sagara, “Effect of Pressure and Ion Beam Irradiation on the Giant Magnetoresistance of Fe/Cr Magnetic Multilayers”, IEEE Transactions on Magnetics 50, 1500304 [4 pages] (2014). DOI: 10.1109/TMAG.2013.2277875. (査読有)

K. Yagy, T. Tajiri, A. Kohno, K. Takahashi, H. Tochiara, H. Tomokage T. Suzuki, “Fabrication of a single layer graphene by copper intercalation on a SiC(0001) surface”, Applied Physics Letters 104, 053115-[1]-[4] (2014). (査読有)

I. Umezu, M. Naito, D. Kawabe, Y. Koshiba, K. Nagao, A. Sugimura, T. Aoki, M. Inada, T. Saitoh, and A. Kohno, “Hyperdoping of silicon with deep-level impurities by pulsed YAG laser melting”, Applied Physics A, published online: 23 February, 2014. DOI : 10.1007/s00339-014-8313-7 (2014). (査読有)

香野 淳, “強誘電体FET メモリーにおける界面構造”, KEK Proceedings 2013-10, 19-20 (2014).

T. Tajiri, N. Terashita, K. Hamamoto, H. Deguchi, M. Mito, Y. Morimoto, K. Konishi, A. Kohno, “Size dependences of crystal structure and magnetic properties of DyMnO₃ nanoparticles”, Journal of Magnetism and Magnetic Materials 345, 288-293 (2013). (査読有)

T. Tajiri, A. Kohno, K. Hamamoto, Y. Ando, H. Deguchi, M. Mito, “Synthesis and magnetic properties of

DyMnO₃ nanoparticles in mesoporous silica”, Journal of the Korean Physical Society 63, 826-829 (2013). (査読有) M. Mito, Y. Komorida, H. Deguchi, <u>T. Tajiri</u>, T. Iwamoto, Y. Kitamoto, “Artificial material manipulation of magnetic anisotropy in FePt magnetic nanoparticles through application of hydrostatic pressure”, Journal of Applied Physics 113, 044302-[1]-[6] (2013). (査読有) M. Mito, T. Imakyurei, H. Deguchi, K. Matsumoto, <u>T. Tajiri</u>, H. Hara, T. Ozaki, H. Takeya, and Y. Takano, “Uniaxial Strain Effects on Cuprate Superconductor YBa₂Cu₄O₈”, Journal of the Physical Society of Japan 81, 113709-[1]-[4] (2012). (査読有) <u>T. Tajiri</u>, S. Hohdai, K. Hamamoto, H. Deguchi, M. Mito and <u>A. Kohno</u>, “Magnetic Properties of La_{2-x}Sr_xCuO₄ Nanoparticles in Mesoporous Silica”, Journal of Physics: Conference Series 400, 032095-[1]-[4] (2012). (査読有) 梅津郁朗, 香野 淳, 川邊大介, 松田祐樹, 中川将, 杉村陽, “パルスレーザーメルティング法によって深い準位をとる不純物を過飽和ドーブしたシリコンの赤外光吸収”, 電気学会研究会資料 OQD-12-010, 47-50 (2012) . <u>A. Kohno</u>, T. Gondo, K. Koga, and <u>T. Tajiri</u>, “Structural and Optical Characteristics of TiO₂ Nanoparticles-Containing Mesoporous Silica (SBA-15) Thin Films”, IOP Conf. Series: Materials Science and Engineering 24, 012019-[1]-[8] (2011). (査読有) S. Kohiki, K. Okada, M. Mitome, <u>A. Kohno</u>, T. Kinoshita, K. Iyama, F. Tsunawaki, and H. Deguchi, “Magnetic and Magnetoelectric Properties of Self-Assembled Fe_{2.5}Mn_{0.5}O₄ Nanocrystals”, ACS Applied Materials Interfaces 3, 3594–3601 (2011). (査読有) I. Umezu, <u>A. Kohno</u>, J. M. Warrender, Y. Takatori, Y. Hirao, S. Nakagawa, A. Sugimura, S. Charnvanichborikarn, J. S. Williams, and M. J. Aziz, “Strong mid-infrared optical absorption by supersaturated sulfur doping in silicon”, AIP Conference Proceedings (PHYSICS OF SEMICONDUCTORS) 1399, 51-52 (2011). (査読有) K. Okada, S. Kohiki, S. Luo, <u>A. Kohno</u>, <u>T. Tajiri</u>, S. Ishii, D. Sekiba, M. Mitome, F. Shoji, “Oxygen annealing for deuteriumdoped indium tin oxide thin films”, Physica Status Solidi A 208, 829-833 (2011). (査読有) <u>T. Tajiri</u>, S. Saisho, Y. Komorida, M. Mito, H. Deguchi, and <u>A. Kohno</u>, “Effects of anisotropic strain on perovskite LaMnO_{3+δ} nanoparticles embedded in mesoporous silica”, Journal of Applied Physics 110, 044307-[1]-[5] (2011). (査読有) K. Okada, S. Kohiki, S. Luo, D. Sekiba, S. Ishii, M. Mitome, <u>A. Kohno</u>, <u>T. Tajiri</u>, F. Shoji, “Correlation between resistivity and oxygen vacancy of hydrogen-doped indium tin oxide thin films”, Thin Solid Films 519, 3557-3561 (2011). (査読有)
最近 5 年間の学術著書
該当なし
最近 5 年間の学術国際会議での発表

- A. Kohno, T. Tajiri, “Formation and Characteristics of BaTiO₃ Nanoparticles in the Pores of Mesoporous Silica Thin Films”, 28th International Microprocesses and Nanotechnology Conference (MNC2015), Toyama, Japan, December 2015.
- A. Kohno, “Synthesis and Materials Properties of Oxide Nanoparticles in the Pores of Mesoporous Silica Thin Films”, (Plenary Talk) The 2015 International Conference on Advanced Materials Science and Technology, Semarang, Indonesia, October 2015. [Invited].
- T. Tajiri, Y. Ando, H. Deguchi, M. Mito, A. Kohno, “Magnetic Properties and Crystal Structure of DyMnO₅ Nanoparticles Embedded in Mesoporous Silica”, 20th International Conference on Magnetism, Barcelona, Spain, July 2015.
- A. Kohno, M. Kumagae, T. Tajiri, “Optical Property of Titanium Dioxide Nanoparticles in Pores of Mesoporous Silica Thin Film”, 2015 MRS Spring Meeting and Exhibit, San Francisco, USA, April 2015.
- T. Tajiri “Size Effects of Crystal Structure and Magnetic Properties on Perovskite Manganite RMnO₃ (R = La, Dy) Nanoparticles” The 15th IUMRS-International Conference in Asia, Fukuoka, Japan, August 2014. [Invited]
- T. Niino, Y. Ando, T. Tajiri, H. Deguchi, M. Mito, M. Naito, A. Kohno, “Magnetic Properties and Crystal Structure of DyMn₂O₅ Nanoparticles in Mesoporous Silica” The 15th IUMRS-International Conference in Asia, Fukuoka, Japan, August 2014.
- K. Yagyu, T. Tajiri, A. Kohno, K. Takahashi, H. Tochiara, H. Tomokage, T. Suzuki, “Cu intercalation under a graphene grown on SiC(0001) surface”, 12th international workshop on beam injection assessment of microstructures in semiconductors, Tsukuba, Japan, June 2014.
- T. Toyota, T. Tajiri, and A. Kohno, “Electrical and Optical Properties of Ferroelectric Lanthanum-Substituted Bismuth Titanate Thin Films Composed of Nanometer-Scale Grains”, International Symposium on Syntheses, Characterizations and Applications of Oxide Nanocomposites Materials, 23rd Annual Meeting of MRS-J, Yokohama, Japan, December 2013. [Invited]
- A. Kohno, Y. Hidaka, T. Tajiri, “Optical and Electrical characterization of nanoparticles synthesized in the pores of mesoporous silica SBA-15 thin film: the case of titanium oxide nanoparticles”, 2013 MRS Fall Meeting & Exhibit, Boston, USA, December 2013.
- A. Kohno, T. Tajiri, and T. Sameshima, “Effect of High-Pressure H₂O Vapor Heat Treatment on Structure and Electronic States of SiO₂ Film Prepared by Oxygen Plasma”, 2013 JSAP-MRS Joint Symposia, Kyoto, Japan, September 2013.
- A. Kohno, Y. Hidaka, T. Tajiri, “Synthesis and characterization of TiO₂ nanoparticles synthesized in the pores of mesoporous silica thin film on silicon substrate”, EMRS 2013 Spring Meeting, Strasbourg, France, May 2013.
- K. Yagyu, T. Tajiri, A. Kohno, K. Takahashi, H. Tochiara, H. Tomokage, and T. Suzuki, “Cu intercalation to graphene sheets grown on SiC(0001)”, 15th International Conference on Solid Surfaces (ICSS-15), Paris, France, September 2013.

K. Koga, T. Tajiri, and A. Kohno, “Control of Structure of Mesoporous Silica Thin Film on Silicon and Formation of TiO₂ Nanoparticles in the Pores”, International Union of Materials Research Society – International Conference in Asia – 2012 (IUMRS-ICA2012), Busan, Korea, August 2012.

T. Tajiri, K. Hamamoto, Y. Ando, H. Deguchi, M. Mito, and A. Kohno, “Synthesis and Magnetic Property of Multiferroic DyMnO₃ Nanoparticles in Mesoporous Silica”, 19th International Conference on Magnetism, Busan, Korea, July 2012.

T. Imakyurei, K. Nagai, M. Mito, H. Deguchi, T. Tajiri, Y. Nakao, Y. Kousaka, J. Akimitsu, “Pressure-induced suppression of magnetic ordering in a chiral magnet Cr_{0.33}NbS₂”, 19th International Conference on Magnetism, Busan, Korea, July 2012.

A. Kohno, T. Tajiri, S. Yoshidomi, M. Hasumi, and T. Sameshima, “Chemical Bonding and Valence Band States of SiO₂ Thin Film Prepared by Oxygen Plasma Followed by High-Pressure H₂O Vapor Heat Treatment”, 24th International Conference on Amorphous and Nanocrystalline Semiconductors, Nara, August 2011.

T. Tajiri, S. Hohdai, K. Hamamoto, H. Deguchi, M. Mito, A. Kohno, “Magnetic Properties of La_{2-x}Sr_xCuO₄ Nanoparticles in Mesoporous Silica”, 26th International Conference on Low Temperature Physics, Beijing, August 2011.

最近 5 年間の代表者としての学外資金導入実績

香野 淳（分担者：田尻恭之）：(独) 科学技術振興機構，研究成果展開事業・研究成果最適展開支援プログラム A-STEP，フイージビリティスタディステージ・探索タイプ，「規則配列ナノ細孔薄膜への酸化物ナノ粒子形成技術とメモリ素子への展開」，1,700,000 円（総計），2013～2014 年度。

香野 淳：研究助成寄附金，東レ株式会社，4,000,000 円（総計），2011～2015 年度。

田尻恭之：科学研究費補助金（若手研究（B））「マルチフェロイック物質ナノ粒子の電気磁気サイズ効果とナノ粒子内包薄膜の創製」，4,290,000 円（総計），2013～2015 年度。

最近 5 年間の代表者としての学内資金導入実績

香野 淳（分担者：永田潔文，眞砂卓史，脇田久伸，匠 正治，田尻恭之，栗崎 敏）：領域別研究チーム「物質材料微細構造の物性と制御」，487,000 円，2011 年。

香野 淳（実施責任者・分担者：眞砂卓史），高度化推進研究・研究科特別経費（タイプ I）：「スピノンポンピング効果を用いたスピンの発生」，4,022,000 円，2011 年。

香野 淳（分担者：田尻恭之），高度化推進研究・研究科特別経費（タイプ I）：「機能性材料創製のためのナノ構造制御プロセスの開発」，4,530,000 円，2013 年。

最近 5 年間の学会等学術団体における役職など

香野 淳：

- (1) (公社)応用物理学会 代議員（第 52 期～第 55 期），2013 年～現在。
- (2) (公社)応用物理学会 教育企画委員会 委員，2015 年～現在。
- (3) (公社)応用物理学会 九州支部 理事，2008 年～現在。
- (4) (社)日本 MRS 経営企画委員会 委員，2014 年～2015 年。
- (5) リフレッシュ理科教室・実行委員（主催：応用物理学会），1999 年～現在。
- (6) International Microprocesses and Nanotechnology Conference, Program Committee, 2008 年～現在。
- (7) International Microprocesses and Nanotechnology Conference, Section Subhead (Nanofabrication), 2012 年～2013 年。
- (8) 27th International Microprocesses and Nanotechnology Conference (MNC2014), Steering Committee

Members (Local), 2014 年.
(9) Japanese Journal of Applied Physics (Special Issue: Microprocesses and Nanotechnology), Editor, 2011 年, 2013 年.
(10) International Union of Materials Research Societies- The IUMRS International Conference in Asia 2014, Local steering committee Vice chair, 2013 年～2014 年.
<u>田尻恭之</u> :
(1) リフレッシュ理科教室・実行委員 (主催: 応用物理学会), 2011 年～現在.
(2) International Union of Materials Research Societies- The IUMRS International Conference in Asia 2014, Local steering committee, 2013 年～2014 年.
最近 5 年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
該当なし
最近 5 年間の一般 (非学術) 集会での発表論文
<u>香野 淳</u> , 「X 線反射・X 線回折による薄膜・界面・ナノ構造の計測と構造評価」, 東レ株式会社・社内講演会, 大津市, 2014 年 1 月 20 日. 【依頼講演】.
<u>香野 淳</u> , 「規則配列ナノ細孔薄膜中へのナノ粒子の形成と構造物性」, 佐賀大学シンクロトロン光応用研究センター講演会, 鳥栖市, 2013 年 12 月 19 日. 【招待講演】.
<u>香野 淳</u> , 「ナノ粒子およびナノ薄膜の作製と構造解析・状態分析の手法」, 第 8 回おおむた産学官連環交流会, 大牟田, 2011 年 3 月 18 日.
<u>A. Kohno</u> , “Nanomaterials Research for Green Technology – fundamental and applied sciences”, Seminar at College of Natural Sciences, University of Incheon, Korea, December 2, 2011.
最近 5 年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
該当なし
その他特筆事項
特許: 鮫島俊之, 神谷秀博, 白樫淳一, 蓮見真彦, 東清一郎, <u>香野 淳</u> . (共同出願: 東京農工大学, 広島大学, 福岡大学), 「直列接続型ソーラーセルおよびソーラーセルシステム」, 特願 2011-068760 号 (2011 年 3 月 25 日出願), 特開 2012-204673 (公開日: 2012 年 10 月 22 日).
特許: <u>香野 淳</u> , <u>田尻恭之</u> , 上林浩行, 徳永幸大, 吉田 実. (出願人: 福岡大学, 東レ株式会社), 「フィルム試料固定方法及び固定ホルダ並びにそれらを用いたフィルム特性分析方法」 (出願人: 福岡大学, 東レ株式会社), 特願 2013-14301 (出願日 2013 年 1 月 29 日), 特開 2014-145658 (公開日: 2014 年 8 月 14 日).
特許: <u>香野 淳</u> , <u>田尻恭之</u> , 徳永幸大, 上林浩行, 吉田実. (出願人: 福岡大学, 東レ株式会社), 「表面分析用フィルム試料およびフィルム試料サンプリング治具とサンプリング方法」, 特願 2013-79301 (出願日 2013 年 4 月 5 日), 特開 2014-202620 (公開日: 2014 年 10 月 27 日).

研究室名
量子電子物性研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
量子電子物性研究室では、電子物性の中で特に固体中のスピンに着目したスピントロニクス分

野の研究を行っている。 金属スピントロニクスについては、スピン流の生成・検出に取り組んでおり、近年は高周波応用の観点から、強磁性共鳴、スピン波伝搬やスピンプンピングによるスピン注入を行っている。スピン波スピン流では、パーマロイ中を伝搬する静磁表面スピン波の生成・検出実験を行い、スピン波の波数や減衰長などを見積り、スピン波の非相反性や群速度に関する膜厚依存性など、基礎物性を明らかにする研究を行っている。特に、アンテナと磁性層間の距離を変化させることによって非相反性を制御できる可能性を見出し、理論面からもその制御性について検討中である。また、Py が金属であるため導電性の影響の検討や、スピン波の干渉や変調、磁壁の影響などの解明に向けた研究を行っている。(九州大学、物質材料研究機構と一部共同研究) 半導体スピントロニクスについては、狭ギャップ化合物半導体 InSb 系の量子井戸を用いて、キャリア密度、移動度、スピン軌道相互作用などの電子伝導物性についてドーピング濃度や井戸幅の依存性、幅広い温度領域にわたって系統的な測定を行っている。本年度は微小磁場測定の評価のための測定装置を立ち上げ中であり、ホール素子によるナノテスラオーダー計測への準備を進めている。(野口研究所、旭化成と共同研究) またスピン波実験に用いる磁性絶縁膜の作製に関して、YIG 薄膜の作製および微細加工についての検討に取り組み始めた。 キーワード: スピントロニクス・スピン流・スピン波・狭ギャップ化合物半導体・微小磁場計測・スピン軌道相互作用・ナノテクノロジー
研究室の構成員
眞砂卓史 (教授)・博士 (理学) 笠原健司 (助教)・博士 (工学)
2015 年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
M2 : 2 名 スピン波伝搬に関する基本特性の解明 金属中を伝搬するスピン波の減衰特性 4 年次生 : 4 名 面内スピバルブ素子の作製および純スピン流の非局所測定 MSSW の非相反性における層間絶縁膜の膜厚が与える影響 III-V 族半導体ホール素子の特性評価 MOD 法による YIG 薄膜の作製
教員の担当科目
眞砂卓史 : (理学部) 基礎電磁気学Ⅱ、基礎電磁気学演習Ⅱ、ナノ構造科学、物理学基礎ゼミナール・ナノサイエンス基礎演習、ナノサイエンス入門、材料科学国際演習、物理科学研究Ⅰ・Ⅱ、科学プレゼンテーション、卒業論文 (工学部) 力学 B、物理学実験 (大学院) 磁性物理学特論、ナノ物理学実験、ナノ物理学講究 笠原健司 :

(理学部) 物理学基礎ゼミナール (工学部) 物理学実験
教員の所属学会
眞砂卓史：応用物理学会、日本物理学会、日本磁気学会 笠原健司：応用物理学会、日本磁気学会
最近5年間の学術論文
M. Ota, K. Yamanoi, S. Kasai, S. Mitani, <u>T. Manago</u> "Saturation of attenuation length of spin waves in thick permalloy films " Jpn. J. Appl. Phys., 54, 113001 (5 pages) (2015). (査読有) <u>T. Manago</u>, S. Ishida, H. Geka, I Shibasaki "Relationship between transport properties and band diagrams in $\text{In}_x\text{As}_{1-x}\text{Sb}/\text{Al}_{0.1}\text{In}_{0.9}\text{Sb}$ quantum wells" AIP Advance, 5, 067149 (9 pages) (2015). (査読有) M. Nakayama, K. Yamanoi, S. Kasai, S. Mitani, <u>T. Manago</u> "Thickness dependence of spin wave nonreciprocity in permalloy film" Jpn. J. Appl. Phys. 54, 083002 (5 pages) (2015). I Shibasaki, S. Ishida, H. Geka, <u>T. Manago</u> (査読有) "Low temperature transport property of the InSb and InAsSb quantum wells with $\text{Al}_{0.1}\text{In}_{0.9}\text{Sb}$ barrier layers grown by MBE" J. Crystal Growth, 425, 76-79 (2015). (査読有) <u>T. Manago</u>, K. Yamanoi, S. Kasai, S. Mitani "Damping Factor Estimation using Spin Waves Attenuation in Permalloy Film" J. Appl. Phys. 117, 17D121 (3 pages) (2015). (査読有) <u>T. Manago</u>, S. Ishida, H. Geka, I Shibasaki "Interfacial trap states and improvement of low-temperature mobility by doping in InSb/AlInSb quantum wells" J. Appl. Phys. 117, 065701 (4 pages) (2015). (査読有) <u>K. Kasahara</u>, Y. Nagatomi, K. Yamamoto, H. Higashi, M. Nakano, S. Yamada, D. Wang, H. Nakashima, and K. Hamaya "Electrical properties of pseudo-single-crystalline germanium thin-film-transistors fabricated on glass substrates" Appl. Phys. Lett. 107, 142102 (5 pages) (2015). (査読有) H. Higashi, <u>K. Kasahara</u>, K. Kudo, H. Okamoto, K. Moto, J.-H. Park, S. Yamada, T. Kanashima, M. Miyao, I. Tsunoda, and K. Hamaya "A pseudo-single-crystalline germanium film for flexible electronics" Appl. Phys. Lett. 106, 041902 (5 pages) (2015). (査読有) 眞砂卓史、石田修一、外賀寛崇、柴崎一郎

"狭ギャップ半導体 InSb 系量子井戸の最近の進展" (解説)

J. Vac. Soc. Jpn. (「真空」), 57, 259 (2014).

H. Kuramochi, H. Asada, T. Uzumaki, H. Yui, M. Iitake, F. Takano, H. Akinaga, T. Manago,

"Material Dependence of Magnetic Force Microscopy Performance using Carbon Nanotube Probes: Experiment and Simulation",

J. Appl. Phys. 115, 093907 (6 pages) (2014). (査読有)

K. Yamanoi, S. Yakata, T. Kimura, T. Manago,

"Spin Wave Excitation and Propagation Properties in a Permalloy film",

J. Jpn. Appl. Phys. 52, 083001 (5 pages) (2013). (査読有)

T. Manago, K. Yamanoi, S. Yakata, T. Kimura,

"Size Dependence of Ferromagnetic Resonance in a Submicron Patterned Magnet",

Jpn. J. Appl. Phys., 52, 053001 (4 pages) (2013). (査読有)

K. Yamanoi, S. Yakata, T. Kimura, T. Manago,

"Ferromagnetic Resonance of a Single Micron Dot using Vector Network Analyzer",

J. Korea Phys. Soc., 63, 800-803 (2013). (査読有)

T. Manago, H. Asada, H. Kuramochi,

"Micromagnetic Simulation of CNT-MFM Probes under Magnetic Field",

J. Korea Phys. Soc., 62, 1883-1886 (2013). (査読有)

D. Tanabe, K. Tsukada, I. Yamaguchi, T. Manago,

"Preparation of YBa₂Cu₃O_{7-d} Patterned Film using Metal Organic Deposition with Electron Beam Irradiation",

Jpn. J. Appl. Phys. 51, 113101 (5 pages) (2012). (査読有)

T. Manago, H. Asada, T. Uzumaki, F. Takano, H. Akinaga and H. Kuramochi,

"The advantages of the magnetic structure in ferromagnetic-film-coated carbon nanotube probes",
Nanotechnology 23, 035501 (6 pages) (2012). (査読有)

最近 5 年間の学術著書

該当なし

最近 5 年間の学術国際会議での発表

T. Manago, and K. Yamanoi (Invited)

"Spin wave characteristics in permalloy films"

Energy Material Nanotechnology (EMN) Bangkok meeting, Bangkok, Thailand, 2015/11/11
(9~13)

M. Nakayama, M. Tashima, S. Kasai, S. Mitani, T. Manago

"Spin wave propagation in Permalloy films under tangentially magnetic fields with an arbitrary direction"

20th International conference on Magnetism (MMM), Barcelona, Spain, 2015/7/6 (5~10)
M. Ota, K. Yamanoi, S. Kasai, S. Mitani, T. Manago
"High group velocity and large attenuation length of spin-waves in thick Permalloy films"
20th International conference on Magnetism (MMM), Barcelona, Spain, 2015/7/6 (5~10)
T. Manago (Invited)
"Characterization of spin waves propagating in Permalloy film"
International Workshop "Nano-Spin Sciences", Saga, Yobuko, 2015/2/18 (18~19)
T. Manago, K. Yamanoi, S. Kasai, S. Mitani
"Damping Factor Estimation using Spin Waves Attenuation in Permalloy Film"
59th Annual Magnetism & Magnetic Materials Conference (MMM), Honolulu, Hawaii, 2014/11/7
(3~7)
I. Shibasaki, S. Ishida, H. Geka, T. Manago
"Low temperature transport property of the InSb and InAsSb quantum wells with AlInSb Barrier
layers grown by MBE"
The 18th International Conference on Molecular Beam Epitaxy (MBE 2014), Arizona, USA,
2014/9/9 (7~12)
T. Manago, S. Ishida, H. Geka, I. Shibasaki
"Mobility Improvement at Low Temperature by Intentionally Doping in InSb/AlInSb Quantum
Wells"
International Conference on Superlattices, Nanostructures and Nanodevices (ICSNN 2014),
Savannah, USA, 2013/8/14 (3~8)
M. Ota, K. Yamanoi, S. Kasai, S. Miatani, T. Manago
"Long Range Propagation of Spin-wave in Thick Permalloy Films"
The 15th IUMRS International Conference in Asia (IUMRS-ICA 2014), Fukuoka, Japan
2014/8/26 (24~30)
M. Nakayama, A. Yamamoi, K. Yamanoi, S. Kasai, S. Miatani, T. Manago
"Non-reciprocity of Spin-wave in Permalloy Films Measured by Vector Network Analyzer"
The 15th IUMRS International Conference in Asia (IUMRS-ICA 2014), Fukuoka, Japan
2014/8/26 (24~30)
T. Manago, S. Ishida, H. Geka, I. Shibasaki,
"Comparative Study of Transport Properties in AlInSb/InSb and AlInSb/InAsSb Quantum Wells",
17th International Conference on Crystal Growth and Epitaxy (ICCGE17), Warsaw, Poland,
2013/8/14 (11~16)
K. Yamanoi, S. Yakata, K. Kimura, T. Manago,
"Ferromagnetic Resonance of a Single Micron Dot using Vector Network Analyzer",
The 19th International Conference on Magnetism, Busan, Korea 2012/7/12 (8~13).
T. Manago, H. Asada, H. Kuramochi,
"Micromagnetic Simulation of CNT-MFM Probes under Magnetic Field",

The 19th International Conference on Magnetism, Busan, Korea 2012/7/9 (8~13). H. Asada, H. Kubo, H. A. Seman, <u>T. Manago</u>, H. Kuramochi, "Micromagnetic study on the perturbative effect of MFM probe on 90°asymmetric Neel walls in a soft magnetic material", The 19th International Conference on Magnetism, Busan, Korea 2012/7/12 (8~13).
最近5年間の代表者としての学外資金導入実績
眞砂卓史：科研費・基盤(C)「狭ギャップ半導体の電子物性とスピン物性の基礎研究と工学的応用の検討」・代表・380万円（直接経費）・2015年度～2017年度 眞砂卓史：科研費・基盤(C)「狭ギャップ化合物半導体の基礎電子物性とスピン物性の探求」・代表・420万円（直接経費）・2012年度～2014年度
最近5年間の代表者としての学内資金導入実績
眞砂卓史：福岡大学・領域別研究部研究チーム「スピントロニクス研究チーム」・36.6万円・2015年度（分担者：宮原慎・田尻恭之） 眞砂卓史：福岡大学・領域別研究部研究チーム「スピントロニクス研究チーム」・46.2万円・2014年度（分担者：宮原慎・田尻恭之） 眞砂卓史：福岡大学・領域別研究部研究チーム「物質材料微細構造の物性と制御」・32.1万円・2013年度（分担者：田尻恭之・匠正治・栗崎敏） 眞砂卓史：福岡大学・領域別研究部研究チーム「物質材料微細構造の物性と制御」・35.1万円・2012年度（分担者：田尻恭之・匠正治・脇田久伸・栗崎敏）
最近5年間の学会等学術団体における役職など
眞砂卓史： 応用物理学会九州支部 支部役員、2015～現在 日本磁気学会 編集委員、～2013 応用物理学会 リフレッシュ理科室 実行委員、2010～現在 International Union of Materials Research Societies- The IUMRS International Conference in Asia 2014, Local steering committee, 2013～2014
最近5年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
眞砂卓史、「磁石と省エネルギー」、福岡大学研究者コラム、平成26年度 http://www.fukuoka-u.ac.jp/research/column/14/04/15000000.html 眞砂卓史、「微小磁性体の高周波ダイナミクスの研究」、ナノテクノロジープラットフォーム事業 微細加工プラットフォーム 平成25年度利用報告書、p.56. 眞砂卓史、「微小磁性体の高周波ダイナミクスの研究」、ナノテクノロジープラットフォーム事業 微細加工プラットフォーム 平成24年度利用報告書、p.46. 眞砂卓史、「局所強磁性共鳴によって誘起される直流電圧の研究」、先端研究施設共用イノベーション創出事業 ナノテクノロジー・ネットワーク 平成23年度報告書、p.86-87. 眞砂卓史、「CNT-MFM 探針の作製と特性評価」、ナノプロセッシング・パートナーシップ・プラットフォーム 平成23年度報告書.
最近5年間の一般（非学術）集会での発表論文
該当なし

最近 5 年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
眞砂卓史、「磁石について」講師、香椎小学校校区育成会、2014 年 2 月 1 日

研究室名
計算物性物理学研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
近年のコンピュータ技術の発展・進歩により、物性物理研究における数値計算の役割が増大し、コンピュータを用いた研究活動は質的にも量的にも大きな進展を遂げつつある。我々の研究室では、コンピュータを用いた理論研究、データ解析、シミュレーションなどを行っている。コンピュータを数値実験の道具として活用することで、物性物理、量子物理学、統計力学などのさまざまな分野の問題を解明することを目指している。 キーワード：量子スピン系、マルチフェロイクス、磁化プラトー、フラストレーション
研究室の構成員
宮原 慎（准教授）・博士（理学） 椿原晋介（助教）・博士（工学）
2014 年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
M1：0 名、M2：0 名、4 年次生：5 名 卒論生の研究テーマ ● 強磁性体におけるスピン波の輸送現象の理論 ● マルチフェロイックス RMnO_3 のナノ粒子の磁性 ● コランダム格子ハイゼンベルグ模型における量子相転移 ● 力学運動に関する画像解析システムの高精度化
教員の担当科目
宮原 慎：統計力学 I、物理数学 I、計算物理学、物理学 B、力学 C 椿原晋介：物理学基礎ゼミナール、物理科学実験 I、物理科学実験 II
教員の所属学会
宮原 慎：日本物理学会 椿原晋介：応用物理学会、高分子学会
最近 5 年間の学術論文
1. S. Miyahara and N. Furukawa “Theory of antisymmetric spin-pair-dependent electric polarization in multiferroics”, Phys. Rev. B 93, 014445 (2016) 2. M. Tokunaga, M. Akaki, T. Ito, S. Miyahara, A. Miyake, H. Kuwahara & N. Furukawa “Magnetic control of transverse electric polarisation in BiFeO_3”, Nature Communication 6 5878 (2015) 3. S. Miyahara and N. Furukawa, Theory of magneto-optical effects in helical multiferroic materials via toroidal magnon excitation, Phys. Rev. B 89, 195145 (2014) 4. S. Miyahara and N. Furukawa, Electromagnon in multiferroic materials with Dzyaloshinsky-Moriya-interaction-induced helical spin structure, Journal of the Korean Physical Society 62, 1763 (2013) 5. R. S. Fishman, J. T. Haraldsen, N. Furukawa, and S. Miyahara, Spin state and spectroscopic modes of multiferroic BiFeO_3, Phys. Rev. B 87, 134416 (2013)

6. 椿原晋介、坂本一成、安庭宗久、ポリブチレンサクシネートの動的粘弾性測定による融解過程の解析、福岡大学理学集報 41 、1(2011)
最近5年間の学術著書
なし
最近5年間の学術国際会議での発表
1. S. Miyahara and N. Furukawa, Theory of antisymmetric spin-pair dependent electric polarization in multiferroic BiFeO₃, 20th International Conference on Magnetism, Barcelona, Spain, Jul. 2015 2. S. Miyahara and N. Furukawa, Theory of dynamical magnetoelectric effects in multiferroic materials via magnon excitation, 5th International Symposium on Terahertz Nanoscience, Schoelcher, Martinique, Dec. 2014 3. S. Miyahara and N. Furukawa, Theory of magnetoelectric effects in multiferroics CuFeO₂ and BiFeO₃, 27th International Conference on Low Temperature Physics, Buenos Aires, Argentina, Aug. 2014 4. S. Miyahara and N. Furukawa, Theory of magnetoelectric effects in multiferroics CuFeO₂ and BiFeO₃, Highly frustrated Magnetism, Cambridge, Great Britain, July 2014 5. S. Miyahara and N. Furukawa, Toroidalmagnon in 2D Antiferromagnet Ba₂CoGe₂O₇, Strongly Correlated Electron Systems, Tokyo, Aug. 2013
最近5年間の代表者としての学外資金導入実績
1. 新学術領域研究(研究領域提案型) 2015-16 年度、研究題目:エレクトロマグノン過程に伴うスピン波スピン流の生成理論、研究代表者: 宮原 慎
最近5年間の代表者としての学内資金導入実績
なし
最近5年間の学会等学術団体における役職など
なし
最近5年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
なし
最近5年間の一般（非学術）集会での発表論文
なし
最近5年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
なし
その他特筆事項
なし

研究室名
複雑系物理学研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
複雑系物理学研究室では、生命現象を支配する基本原理を解明することを最終目標としている。“生きている物”を、エネルギーの流れの中で自発的に質の転換を起こして秩序を自己生成する非線形非平衡システムとして捉え、生命の基本原理を物理学の観点から追究する中で、新しい非線形非平衡科学の分野を切り開いていくことを目的としている。本研究室の最近の研究では、生きている証としてのリズムの自発的発生や同期、形態形成、神経ネットワークの情報処理などについて、反応拡散系で現れる自己組織化を基本にしたモデル系を構築した。マイクロエマルジョンを用いた連続反応場では、酸化還元反応スポットが対で現れる場合や交互に鎖状で現れ

る場合など、Turing 不安定性が引き金になって新奇な多重安定パターンが形成されることを見出した。自己触媒反応を内包させた活性素子からなるニューロネットワークのモデル系では、結合様式と揺らぎを鍵に、発火の時空コヒーレンス、相互同期、クラスタリングなど集団ダイナミクスを自在に制御できことを明らかにした。更に、高集束レーザー光場では、微小物体の高速回転や液晶の配向欠陥の制御など、多彩な非線形現象を誘起できることを明らかにした。 キーワード：自己組織化・反応拡散系・確率共鳴・非平衡パターン・ネットワーク・光トラッピング
研究室の構成員
宮川賢治（教授）・理学博士 坂本文隆（助教）・修士（理学）
2015 年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
M2：0 名 M1：0 名 4 年次生：4 名
教員の担当科目
宮川賢治：（学部）物理学基礎ゼミナール、力学 A，物理科学の世界、熱力学Ⅰ、熱力学Ⅱ、物理数学Ⅱ、物理学実験、物理科学研究Ⅰ、物理科学研究Ⅱ、卒業論文 （大学院）超分子物性講究、超分子物性実験、物理情報計測講究、物理情報計測実験、相転移物理学特論、応用数学特論Ⅰ、物理情報計測特別研究、修士論文 坂本文隆：（学部）物理学基礎ゼミナール、物理科学実験Ⅰ、物理科学実験Ⅱ
教員の所属学会
宮川賢治：日本物理学会、日本生物物理学会 坂本文隆：日本物理学会、日本生物物理学会、高分子学会、日本液晶学会
最近 5 年間の学術論文
坂本文隆，<u>宮川賢治</u>：2次元反応拡散系で現れる化学波の交差現象、福岡大学理学集報, 45 (2), 93-97 (2015) K. Miyakawa: Coherence Resonance of Small World Networks with Adaptive Coupling J. Phys. Soc. Jpn. 84, 064003-1-064003-4 (2015).（査読有） K. Miyakawa, T. Okano, and S. Yamazaki: Cluster Synchronization in a Chemical Oscillator Network with Adaptive Coupling. J. Phys. Soc. Jpn. 82, 034005-1-034005-6 (2013).（査読有） K. Narahara, M. Misono, and K. Miyakawa: External synchronization of oscillating pulse edge on a transmission line with regularly spaced tunnel diodes. Phys. Rev. E 87, 012902-1-012902-10 (2013).（査読有） 坂本文隆，宮川賢治：ノイズが誘起する新しいチューリング不安定性。福岡大学理学集報, 42 (1), 9-14 (2012).

M. Misono and K. Miyakawa: Chaotic Behavior and Noise-Induced Order in a Laser Diode System with the Feedback Employing Rb Atom. J. Phys. Soc. Jpn. 80, 124803-124803-6 (2011). (査読有)
M. Misono and K. Miyakawa: Noise-Induced Phase Locking and Frequency Mixing in an Optical Bistable System with Delayed Feedback. J. Phys. Soc. Jpn. 80, 114801-1-114801-6 (2011). (査読有)
K. Miyakawa, A. Yoshinaga, and D. Ariyoshi: Textures in thin films of nematic liquid crystals induced by strongly focusing a circularly polarized laser. Phys. Rev. E 83, 031704-1-031704-6 (2011). (査読有)
最近 5 年間の学術著書
該当なし
最近 5 年間の学術国際会議での発表
F. Sakamoto and K. Miyakawa: Oxidized and Reduced Spots induced in the Intermediate-State Background by the Turing Instability. (Workshop on Self-organization and Emergent Dynamics in Active Soft Matter. Kyoto. 2013年2月).
F. Sakamoto, A. Nishiyama, M. Misono, and K. Miyakawa: Synchronization between Chemical Oscillators through Mechanical Contact and Connection. (Workshop on Self-organization and Emergent Dynamics in Active Soft Matter. Kyoto. 2013年2月).
F. Sakamoto and K. Miyakawa: Localized Patterns of Oxidized and Reduced Spots in the Belousov-Zhabotinsky Reaction incorporated into a Microemulsion. (The IUMRS International Conference in Asia 2014, Fukuoka. 2014年8月).
最近 5 年間の代表者としての学外資金導入実績
宮川賢治：日本学術振興会・科研費・基盤研究（C）「神経ネットワークが創発する集団ダイナミクスのモデリング」・代表・400 万円（直接経費）・2012 年度～2014 年度
宮川賢治：日本学術振興会・科研費・基盤研究（C）「アダプティブ結合を持つ能動要素ネットワークの自己組織化—デザインと制御」・代表・340 万円（直接経費）・2009 年度～2011 年度
最近 5 年間の代表者としての学内資金導入実績
該当なし
最近 5 年間の学会等学術団体における役職など
該当なし
最近 5 年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
該当なし
最近 5 年間の一般（非学術）集会での発表論文
該当なし
最近 5 年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
該当なし

研究室名
ソフトマター構造物性・科学コミュニケーション研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要

当研究室では、長年にわたり長鎖有機分子の凝集構造とその物性について、各種の測定手法を使って研究してきた。近年の大きなテーマとして、天然や合成ゲルの低含水量域での分子鎖と水の相互作用を検討してきた。具体的には、天然高分子ゲルとして卵白ゲル、合成高分子ゲルとしてアクリルアミドゲルや N-イソプロピルアクリルアミドゲル（NIPA ゲル）、ポリビニルアルコールゲルについて調べている。その結果、分子鎖ネットワークに束縛された水と、自由に運動することができる水の、脱離過程における量的な割合の変化を明らかにすることができた。また、各種ゲル分子鎖の相互作用の違いによって、その様子が違う事を明らかにした。 以上の研究に加えて、科学技術コミュニケーションの方法論の研究を行なっている。具体的には、社会に受け入れられる科学技術コミュニケーションの方法について、理科読におけるファシリテーション技法の活用可能性を探っている。まず、コントロール対象群として、ファシリテーションの技法について系統だった知識経験のない被験者に理科読の企画立案運営を行なってもらい、その活動を詳細に記録した。次の年度には、引き続き理科読の企画立案運営を被験者に行っていただき、その活動を資料集として記録した。また、滝川洋二氏（東海大教授、ガリレオ工房理事）のサイエンスショーに参加してもらい、運営等の技術指導を行った。現在も活動は継続している。 キーワード：高分子・ゲル・分子凝集構造・相互作用・科学技術コミュニケーション、理科読
研究室の構成員
平松信康（教授）・工学博士 中村忠嗣（助教）・理学修士
2015 年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
4 年次生：4 名
教員の担当科目
平松信康：（学部）物理入門Ⅱ、物理学入門演習、基礎電磁気学Ⅰ、基礎電磁気学演習Ⅰ、物理科学研究Ⅰ、Ⅱ、卒業論文 （大学院）物性物理学講究、物性物理学実験、物性物理学特別研究、力学物性特論 中村忠嗣：（学部）物理科学実験Ⅰ・Ⅱ、物理学基礎ゼミナー
教員の所属学会
平松信康：応用物理学会、日本物理学会、日本 MRS、物理教育研究会 中村忠嗣：応用物理学会、日本物理学会、高分子学会、日本 MRS、日本結晶学会
最近 5 年間の学術論文
最近 5 年間の学術著書

最近 5 年間の学術国際会議での発表
N.Hiramatsu, R.Oguma, K.Nagata, A.Kohno, T.Manago, A.Nakamura, T.Tajiri, K.Hara, and S.Oish, "Rikadoku"(reading Science Books for Children), International Union of Materials Research Societies-International Conference in Asia, Fukuoka, 2014 年 8 月 M.Terada, N.Hiramatsu <i>et.al.</i> "Learninga support system on "Mechanics" for engineering freshman students with social media" (http://www.itk.fi/2012/ohjelma/puhuja/330), 2012 年 4 月. A. Nakamura, K. Hara, N. Hiramatsu, "Relationship Between Exothermic Peak and Heat of Fusion of Low Water Content Gel in The Heating Process", International Union of Materials Research Societies – International Conference in Asia, Korea, 2012 年 8 月. A. Nakamura, K. Hara, N. Hiramatsu, "Comparison of Thermal Behavior between Gel and Sol of Poly(<i>N</i>-isopropylacrylamide) in Low Water Content", International Union of Materials Research Societies – International Conference in Asia, Taipei, 2011 年 9 月.
最近 5 年間の代表者としての学外資金導入実績
平松信康（代表者）（分担者は多数の実行委員）： 応用物理学会平成 25 年度リフレッシュ理科教室の開催資金 65 万円（応用物理学会） 応用物理学会平成 24 年度リフレッシュ理科教室の開催資金 80 万円（応用物理学会） 応用物理学会平成 23 年度リフレッシュ理科教室の開催資金 45 万円（応用物理学会） 応用物理学会平成 22 年度リフレッシュ理科教室の開催資金 50 万円（応用物理学会）
最近 5 年間の代表者としての学内資金導入実績
平松信康（代表者）： 2012 年～2013 年度の総合科学研究部研究チーム「社会に受け入れられる科学技術コミュニケーションの方法についての研究」・237.7 万円（2012 年）（学内分担者：永田潔文・村上剛人・鶴田直之）
最近 5 年間の学会等学術団体における役職など
平松信康： 公益社団法人応用物理学会 理事（2010 年～2014 年 3 月） 公益社団法人応用物理学会 九州支部長（2012 年～2014 年 3 月） IUMRS-ICA2014 準備現地実行委員長(Chair of local steering committee) 日本技術者教育認定機構 基準総合調整委員会委員（日本技術者教育認定機構（JABEE））（2014 年 3 月まで） 長崎大学地域教育連携支援センター外部評価委員会委員（2014 年 4 月～2015 年 3 月）
最近 5 年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
最近 5 年間の一般（非学術）集会での発表論文
平松信康： 「出張リフレッシュ理科教室 in 対馬 2015」平成 27 年度応用物理学会九州支部学術講演会 於琉球大学（2015.12.5） 「九州支部におけるリフレッシュ理科教室の取り組み」第 76 応用物理学会秋期学術講演会 於名古屋国際会議場（2015.09.16）

「理科読のすすめ」平成26年度応用物理学会九州支部学術講演会 於大分大学 (2014.12.6) 「科学的探究心を育む『理科読』 考え判断する子どもを育てる」第19回 New Education Expo 2014, 於大阪マーチャンダイズ・マート (2014.06.21) 「科学的探究心を育む『理科読』 考え判断する子どもを育てる」第19回 New Education Expo 2014, 於東京ファッションタウンビル西館2回 TFT ホール (2014.06.7) ・「理科読の実践報告」第11回理科読シンポジウム 於東京大学(東京都文京区)と福岡大学との同時中継による開催 (2013.6.29) ・「科学啓発活動の実践」平成24年度大分県科学体験指導者研修会 於大分市 (2013.3.13) ・「福岡県における理科読の実践報告-地域で理科読をどのように広めるか」-シンポジウム地域の科学教育・支援を取り巻く新しい潮流-、於福岡大学 (2012.12.25) ・「理科読をはじめよう」飯塚市学校図書館協議会講演会 (2012.7.)
最近5年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
平松信康： JST 地域ネットワーク支援推進事業「SAFnet の構築」常任運営委員 第53回～第57回 福岡県児童生徒発明くふう展 審査員長 小倉高等学校スーパーサイエンスハイスクール事業 コア SSH 運営指導委員 応用物理学会主催 第1回～第19回リフレッシュ理科教室 実行委員長 高校物理の授業に役立つ基本実験講習会 in 福岡 実行委員 世界一行きたい科学広場 in 宗像 大会運営委員 JST 地域ネットワーク支援推進事業 SAFnet キックオフシンポジウム 実行委員 「理科読(りかどく)のすすめ」(飯塚) 実行委員長 平成24年度-平成27年度「サイエンスモール in 飯塚」実行委員 遠隔地支援「みんなでたのしい科学教室」 於平戸大島中学校(長崎県) 実施責任者 (H24.5.18) 世界一行きたい科学広場 in 福岡 2014 (H26.11.8,9) 実行委員長 支部連携理科教室「遠隔地リフレッシュ理科教室 in 対馬 2015」 (H27.9.7,8) 実行委員長 第30回福岡県高等学校総合文化祭自然科学部門 福岡県大会(第16回福岡県高等学校生徒物理・地学研究発表大会)」 (H27.11.28) において審査および講評 物理チャレンジ2015(物理オリンピック予選) 理論問題コンテスト福岡大学会場責任者 (H27.7.12) 平松信康、中村忠嗣： 科学啓発活動(講師として) ・ こども祭り 於福岡市立少年科学文化会館 (1996年～2015年) ・ わくわくカーニバル 於少年科学文化会館 (2000年～2014年) ・ おもしろ理科教室, 於福岡市立那珂小学校 (2012年～2015年)
その他特筆事項
平松信康： 福岡市立少年科学文化会館(福岡市) 基本構想検討委員会 委員 第1級アマチュア無線技士従事者免許(免許証番号 HBLH00001) 取得

米国 Federal Communication Commission(FCC) Amateur Radio License (General Class)取得
小隈龍一郎、中村忠嗣、平松信康： 「万華鏡」意匠登録 登録第 1529668 号 特許庁 登録日：
平成 27 年 6 月 26 日

研究室名

形象物理学研究室

最近の研究課題とその取り組みの概要

合金における規則化相転移とそれに伴うドメイン構造形成の時間発展

合金における不規則状態から規則状態への相転移では、規則構造の位相や方位が異なる兄弟晶の領域が異位相境界や双晶境界によって区切られるドメイン構造が形成される。このような構造の発生と時間空間発展に関して、熱統計力学を基礎とする理論的解析を行っている。代表的ないくつかの規則化過程について、結晶対称性を考慮した連続媒質上のメゾスコピックな time-dependent-Ginzburg-Landau (TDGL) モデルを構築しており、そこから導かれる速度方程式に基づいた計算機シミュレーションと TEM による実験観察結果から、規則ドメイン構造の形態と時間発展に関する理解を試みている。

キーワード：規則不規則転移，合金，TDGL モデル

PostScript による規則性非周期図形の作画

PostScript はページ記述言語の 1 つで、再帰的な処理に向いており、一見複雑な図形を短いプログラムで描くことができる。これを用いて規則性のある非周期図形（例えば、ペンローズタイル）の作画法を研究している。

キーワード：ペンローズタイル，PostScript

計測と制御の物理

様々なセンサやアクチュエータと電子回路やパソコンを組み合わせる種々のシステムを構成し、計測と制御における諸物理過程について理解を深めることを目指している。

キーワード：信号処理，ヒトの入出力信号

研究室の構成員

赤星 信（准教授）・理学博士

小隈龍一郎（助教）・博士（工学）

2014 年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ

M1：0 名，M2：0 名

4 年次生：4 名 Raspberry Pi を用いた計測制御システム（スマートリモコン，赤外線監視カメラ，ホコリ検知器，温湿度&天気予報表示ガジェット）

教員の担当科目

赤星 信：（学部）物理学基礎ゼミナール、物理科学の世界、エレクトロニクス、

物理学基礎演習、物理学演習、物理科学研究Ⅰ、物理科学研究Ⅱ、 科学プレゼンテーション、卒業論文、薬学物理学入門、物理学 (大学院) 信号特論、物理情報計測実験、物理情報計測講究 小隈龍一郎：(学部) 物理科学実験Ⅰ、物理科学実験Ⅱ、物理学基礎ゼミナール
教員の所属学会
赤星 信：日本物理学会、応用物理学会 小隈龍一郎：日本金属学会、日本物理学会
最近５年間の学術論文
小隈龍一郎，松村晶，土井稔，波多聰，緒方啓丞，“Fe-Ni-Al合金の２段階相分離過程に対する ２個の球状ドメインを用いたシミュレーション”，福岡大学理学集報 43(2)，143-151 (2013). R. Oguma, S. Matsumura, M. Doi, S. Hata, K. Ogata, “Simulations of Structure Formation in B2 type Ordering with Two Step Phase Separation in Fe-Ni-Al Alloys”, AIP Conference Proceedings 1518, 703-709 (2013). (査読有) R. Oguma, S. Matsumura, M. Doi, S. Hata, K. Ogata, “Application of TDGL Model to B2 Type Ordering with Two Step Phase Separation in Fe-Ni-Al Alloys”, Proceedings of the MMM2012-6th International Conference on MULTISCALE MATERIALS MODELING, MRS online proceedings, 7 pages (2013), to be published. (査読有) R. Oguma, S. Matsumura, T. Eguchi, “Mesoscopic TDGL Model for Formation of Domain Structures in D0₁₉ Type Ordering”, Solid State Phenomena 172-174, Part 1, 602-607 (2011). (査読有)
最近５年間の学術著書
該当なし
最近５年間の学術国際会議での発表
<u>R. Oguma</u>, S. Matsumura, “Domain Growth and Formation of Boundary Structures in D0₁₉ Type Ordering in Binary Alloys”, The 15th IUMRS International Conference in Asia (IUMRS-ICA2014), August 24-30, 2014 Fukuoka, Japan. R. Oguma, S. Matsumura, M. Doi, S. Hata, K. Ogata, “Simulations of Structure Formation in B2 type Ordering with Two Step Phase Separation in Fe-Ni-Al Alloys”, The 4th International Symposium on Slow Dynamics in Complex Systems, December, 2012, Sendai, Japan. R. Oguma, S. Matsumura, M. Doi, S. Hata, K. Ogata, “Application of TDGL Model to B2 Type Ordering with Two Step Phase Separation in Fe-Ni-Al Alloys”, MMM 2012-Sixth International Conference on Multiscale Materials Modeling, October 15-19, 2012, Biopolis, Singapore. R. Oguma, S. Matsumura, T. Eguchi, “Domain Growth and Formation of Boundary Structures in D0₁₉ Type Ordering in Binary Alloys”, The 4th Discussion Meeting on Glass Transition, February 28-March 2, 2011, Sendai, Japan.
最近５年間の代表者としての学外資金導入実績

該当なし
最近 5 年間の代表者としての学内資金導入実績
該当なし
最近 5 年間の学会等学術団体における役職など
小隈龍一郎：IUMRS-ICA2014(於福岡大学)における現地実行委員
最近 5 年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
該当なし
最近 5 年間の一般（非学術）集会での発表論文
該当なし
最近 5 年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
赤星 信：リフレッシュ理科教室実行委員 小隈龍一郎：理科読いづか実行委員,世界一行きたい科学広場 in ふくおか実行委員

研究室名
生物物理研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
生物物理研究室では、高速原子間力顕微鏡を用いてタンパク質や生体膜をはじめとする生体分子の構造ダイナミクスの直接観察を通して、生体分子の機能発現機構の解明に向けた研究を行っている。さらに、高速原子間力顕微鏡装置の高性能化に関する研究も行っており、生体分子の振る舞いをより高精度で解析することも目指している。 (1) p97 の構造動態解析： p97 は細胞分裂後の小胞体、ゴルジ体、核膜の再構築やタンパク質の脱凝集等、さまざまな細胞機能に関わる 6 量体リング構造のタンパク質である。p97 の ATP 加水分解反応サイクルに伴う構造変化を高速原子間力顕微鏡で直接観察することで、p97 の機能に直結した化学ー力学変換メカニズムの解析を進めている。 (2) 光合成膜タンパク質の観察：光合成反応は地球上の生命環境維持のために必須の反応である。植物においては光吸収による水の分解と酸素発生はグラナ膜中で生じ、その反応には主に光化学系 II と LHCII が関与している。これらタンパク質の複合体構造やその動態の高速原子間力顕微鏡測定を通して、グラナ膜の膜内組織構造や環境適応システムの解明に向けた研究を行っている。 (3) バクテリオロドプシン球殻構造体形成機構の解明：光駆動プロトンポンプであるバクテリオロドプシンは細胞膜において紫膜と呼ばれる 2 次元結晶を形成する。界面活性剤存在下において紫膜はその膜構造を平坦なシート状から球殻状に変換することが知られているが、その分子的な機構は未解明である。高速原子間力顕微鏡により球殻構造体内におけるバクテリオロドプシン分子の空間配置と分子間相互作用を解析することで、球殻化の機構解明に取り組んでいる。 (4) CPR-HO 相互作用の解析：NADPH-シトクロム P450 還元酵素（CPR）ーヘムオキシゲナーゼ（HO）相互作用解析の研究に取り組んでいる。これらタンパク質はヘム代謝系関連酵素

であり、複合体の結晶構造は解かれているものの、CPR の構造変化と共役した結合・解離の作用機序については未解明の点も存在する。高速原子間力顕微鏡による CPR-HO 結合・解離の 1 分子直接観察に向けた研究を行っている。
キーワード：タンパク質・生体膜・高速原子間力顕微鏡・1 分子計測
研究室の構成員
山本大輔（准教授）・博士（理学）
2015 度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
M2：1 名 4 年次生：2 名
教員の担当科目
山本大輔：（学部）現代物理学入門、原子物理学、力学Ⅱ、力学演習Ⅱ、ナノサイエンス入門、物理学実験、材料科学国際演習、物理学 A、物理学 D、物理科学研究Ⅰ、物理科学研究Ⅱ、卒業論文 （大学院）ナノ物理学講究、ナノ物理学実験、生物物理学特論
教員の所属学会
日本生物物理学会、日本蛋白質科学会、日本物理学会
最近 5 年間の学術論文
A. Sumino, D. Yamamoto, M. Iwamoto, T. Dewa and S. Oiki “Gating-associated clustering-dispersion dynamics of the KcsA potassium channel in a lipid membrane” Journal of Physical Chemistry Letters 5(3), 578-584 (2014) （査読有） K. Noi, D. Yamamoto, S. Nishikori, K. Arita-Morikawa, T. Kato, T. Ando and T. Ogura “High-speed atomic force microscopic observation of ATP-dependent rotation of the AAA+ chaperone p97” Structure 21(11), 1992-2002 (2013) （査読有） S. Inoue, T. Uchihashi, D. Yamamoto, T. Ando, “Direct observation of surfactant aggregate behavior on a mica surface using high-speed atomic force microscopy”, Chemical Communications 47(17), 4974-4976 (2011) （査読有）
最近 5 年間の学術著書
該当なし
最近 5 年間の学術国際会議での発表
A. Sumino, D. Yamamoto, M. Iwamoto, T. Dewa, S. Oiki “Clustering-dispersion dynamics of the KcsA potassium channel in a lipid membrane”, Biophysical Society 58th Annual Meeting, San Francisco, USA. 2014年2月 T. Ogura, K. Noi, T. Okuno, K. Arita-Morikawa, D. Yamamoto, A. Okawa, H. Tsuchiya, Y. Saeki, T. Ando, M. Esaki and K. Yamanaka “Dynamics of p97 and the 26S proteasome in action revealed by high-speed atomic force microscopy”, EMBO workshop on AAA+ Proteins: from mechanism and disease to targets, Neuss, Germany 2013年9月

K. Noi, D. Yamamoto, S. Nishikori, K. Arita-Morioka, T. Ando, T. Ogura, “High-speed atomic force microscopy of ATP-dependent rotational movements of p97/VCP and its interaction with amyloid fibrils of TDP-43”, 3rd Kanazawa Bio-AFM Workshop. Kanazawa. 2012年11月
最近5年間の代表者としての学外資金導入実績
山本大輔：熊本大学発生医学研究所・発生医学の共同研究拠点・旅費支援「高速原子間力顕微鏡によるAAA型シャペロンの機能動態解析」・8万円・2014年度 山本大輔：熊本大学発生医学研究所・発生医学の共同研究拠点・旅費支援「高速原子間力顕微鏡観察技術の適正化とAAA型シャペロン群の動態観察」・8万円・2013年度 山本大輔：熊本大学発生医学研究所・発生医学の共同研究拠点・旅費支援「AAAタンパク質の高速原子間力顕微鏡によるナノ動態観察とデータ解析」・8万円・2012年度
最近5年間の代表者としての学内資金導入実績
山本大輔：高度化推進研究・研究科特別経費（タイプI）「高速原子間力顕微鏡による膜タンパク質群の構造解析」、4,519,030円、2015年
最近5年間の学会等学術団体における役職など
該当なし
最近5年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
該当なし
最近5年間の一般（非学術）集会での発表論文
該当なし
最近5年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
該当なし
その他特筆事項
該当なし

研究室名
超高圧物性・ナノ物理学研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
当研究室では2つのテーマで研究を行っている。 1) 超高圧下における物質の構造と性質 高圧力を加えることによって、同じ元素からなる物質(主として硫黄、セレン、テルルなどカルコゲン単体とその化合物)の状態を絶縁体相から半導体相を経て金属相まで変化させている。この一連の金属化の過程で、原子配列や化学結合、電気的性質や光学的性質がどのように変化していくかを調べ、それを価電子の状態変化から統一的に理解していこうとしている。そうすることによって物質の理解を深め、半導体など物質設計の基本的な方針を得ようとしている。 2) 走査プローブ顕微鏡による薄膜の観察 1個の分子でスイッチやメモリになる分子素子の開発を行うには、分子が自己組織化する仕組みを知る必要がある。そのために基板や分子、あるいは分子の基板への吸着条件を種々変えて基板に単分子膜を作成し、その分子配列を走査トンネル電子顕微鏡を使って観察することによって、薄膜作成条件と分子配列との関係を明らかにしようとしている。 3) メタマテリアルを用いた量子光学、トポロジカルフォトリニクスの研究

プローブ波長よりも小さな人工構造を持つメタマテリアルを用いた、量子光学及びトポロジカルフォトリニクスの研究を行っている。特にプラズモニクス・スピントロニクスに注目し、ナノ構造における光と物質の相互作用とその位相幾何学的な効果について明らかにする。 キーワード：高圧、半導体、分子配列制御、相転移、構造、物性、走査プローブ顕微鏡、メタマテリアル、量子光学、トポロジー
研究室の構成員
永田潔文（教授）・工学博士 匠 正治（助教）・修士 中山和之（助教）・博士（理学）
2014年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
M2：走査型プローブ顕微鏡によるフラーレンの観察 M2：走査型プローブ顕微鏡によるカルコゲン分子の観察 M2：高圧下における TCNQ 架橋平面型 Cu(II)核錯体の光吸収スペクトル M1：高圧走査型プローブ顕微鏡によるフラーレンの観察 B4：セレンの電子密度分布 B4：高圧下における TCNQ 架橋平面型 Cu(II)二核錯体の電気的性質 B4：モデルロケットの開発 B4：C#による計測機器の制御
教員の担当科目
永田潔文：(学部) ナノサイエンス入門、物理学実験、物理学入門Ⅰ、物理学A、力学B、ナノ材料科学実験Ⅱ、物理科学研究Ⅰ、物理科学研究Ⅱ、材料科学国際演習、ナノ科学応用実習、光学、科学プレゼンテーション、卒業論文 (大学院) ナノ物理学講究、ナノ物理学実験、応用物理学特論 匠 正治：(学部) 物理学実験、ナノサイエンス基礎演習、ナノ材料科学実験Ⅱ 中山和之：(学部) 物理学基礎ゼミナール、ナノサイエンス基礎演習、物理科学実験Ⅰ、物理科学実験Ⅱ
教員の所属学会
永田潔文：高分子学会、応用物理学会、日本物理学会、日本高圧力学会、日本分光学会 匠 正治：日本物理学会、高圧力学会、応用物理学会 中山和之：日本物理学会、アメリカ物理学会
最近5年間の学術論文
匠正治, 服部憲幸, 山田太郎, 西村秀紀, 永田潔文, “α型, β型, γ型Ga₂Se₃結晶の結晶化条件”, 福岡大学理学集報 46(1), 13–20 (2016). 匠正治, 武田在満, 金井照満, 永田潔文, “高圧下におけるn-C₃₃H₆₈の構造相転移”, 福岡大学理学集報 44(1), 27–37 (2014). 匠正治, 平井信弘, 永田潔文, “高圧下におけるテルルの赤外吸収スペクトル”, 福岡大学理学集報 42(1), 1–8 (2012).

Y. Moritake, K. Nakayama, T. Suzuki, H. Kurosawa, T. Kodama, S. Tomita, H. Yanagi, and T. Ishihara, "Lifetime reduction of a quantum emitter with quasiperiodic metamaterials," Phys. Rev. B 90, 075146 (2014). (査読有) K. Kusaka, H. Kurosawa, S. Ohno, Y. Sakaki, K. Nakayama, Y. Moritake, and Teruya Ishihara, "Waveguide-mode interference lithography technique for high contrast subwavelength structures in the visible region," Opt.Express 22, 18748-18756 (2014). (査読有) H. Suo, K. Takano, S. Ohno, H. Kurosawa, K. Nakayama, T. Ishihara, and M. Hangyo, "Polarization property of terahertz wave emission from gammadion-type photoconductive antennas," Appl. Phys. Lett. 103, 111106 (2013). (査読有)
最近 5 年間の学術著書
中山和之: ナノ散乱体の集団のモデリングにおける単一双極子近似, Filippo Capolino (編)／萩行正憲・石原照也・真田篤志 (監訳) メタマテリアルハンドブック基礎編, 講談社, 173-190 (2015). 中山和之: ハイパーレンズを用いた超高解像度イメージング, Filippo Capolino (編)／萩行正憲・石原照也・真田篤志 (監訳) メタマテリアルハンドブック応用編, 講談社, 83-95 (2015).
最近 5 年間の学術国際会議での発表
K. Nakayama, S. Tomita, K. Imakita, and M. Fujii, "Analysis of enhanced light-matter coupling with quasiperiodic metamaterials." Quantum Plasmonics 2015, Benasque, Spain. 2015年3月. K. Nakayama, Y. Moritake, T. Suzuki, H. Kurosawa, T. Kodama, S. Tomita, H. Yanagi, and T. Ishihara, "Manipulation of Spontaneous Emission with Quasi-periodic Metamaterials." The 10th Conference on Lasers and Electro-Optics Pacific Rim, Kyoto. 2013年7月. S. Ohno, M. Shingu, H. Kurosawa, Y. Moritake, K. Nakayama, and T. Ishihara, "Fabrication and Terahertz Response of "split-tube" Arrays." The 10th Conference on Lasers and Electro-Optics Pacific Rim, Kyoto. 2013年7月. Y. Moritake, K. Nakayama, T. Suzuki, H. Kurosawa, T. Kodama, S. Tomita, H. Yanagi, and T. Ishihara, "Controlling spontaneous emission using a quasi-periodically stratified metal-dielectric metamaterial." 3rd Korea-Japan Metamaterials Forum, Seoul 2013年6月.
最近 5 年間の代表者としての学外資金導入実績
中山和之: 日本学術振興会・科研費・基盤研究(C)・「準周期構造を利用したトポロジカルスピン波デバイスの開発」・代表・270万円 (直接経費) , 2016年度～2018年度 中山和之: 日本学術振興会・科研費・若手研究(B)・「メタマテリアルを用いた単一光子源の開発と輻射場制御」・代表・320万円 (直接経費) , 2012年度～2013年度
最近 5 年間の代表者としての学内資金導入実績
中山和之: 推奨研究プロジェクト・「メタマテリアル表面上のナノ微粒子からの蛍光偏光解析の研究」・169万円・2013年度～2015年度 (分担者: 田尻恭之, 原田拓典)
最近 5 年間の学会等学術団体における役職など
IUMRS-ICA2014 開催地実行委員会委員
最近 5 年間の一般向け論文と著書、行政報告書など

該当なし
最近５年間の一般（非学術）集会での発表論文
該当なし
最近５年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
（社）応用物理学会、福岡市立少年科学文化会館、リフレッシュ理科教室（九州支部福岡会場） 実行委員、2011 年～2015 年 （社）応用物理学会、飯塚市、飯塚市教育委員会、リフレッシュ理科教室（九州支部飯塚会場） 実行委員、2011 年～2015 年 福岡市こども未来局、背振少年自然の家「チャレンジクラブ」講師、2011 年～2015 年 福岡市教育委員会、福岡市立片江小学校サポーター会議構成員、2011 年～2015 年 福岡市立少年科学文化会館、こどもまつり 講師、2011 年～2015 年 福岡市立少年科学文化会館、わくわく科学カーニバル 講師、2011 年～2014 年 福岡市立那珂小学校、小学生のためのオモシロ理科教室 講師、2011 年～2015 年 飯塚市立潤野小学校、みんなで楽しい科学教室 講師、2012 年 福岡市片江公民館、親子科学教室 講師、2011 年～2014 年 福岡市片江公民館、親子天体観測教室 講師、2011 年～2014 年 福岡市別府公民館、親子科学教室 講師、2011 年～2013 年 福岡市保育協会、保育研修会Ⅰ 講師、2012 年～2014 年 小倉高等学校コアSSH事業、自然観察&天体観測合宿 講師、2012 年 福岡大学くじゅうの杜キャンパス、紅葉のくじゅう山歩き教室 講師、2012 年～2013 年 世界一行きたい科学広場 in ふくおか2014 実行委員、2014 年

研究室名
機能生物化学研究室（タンパク質）
最近の研究課題とその取り組みの概要
当研究班では、「酵素と阻害剤」をキーワードに、主に「毒ヘビ」と「ユリ科植物」の 2 つを研究対象とし、特定のタンパク質の構造や性質、さらにはその遺伝子構造を調べている。 蛇毒には獲物の恒常性を破壊する様々な生理活性を示す毒タンパク質が含まれる。これに対して、毒ヘビ自身の血液中には、これらの毒成分に対する阻害タンパク質が含まれている。当研究班では、ハブ、マムシ、エラブウミヘビなどの毒、およびその血液から多くの新規タンパク質を発見し、構造と機能解析を行ってきた。ここ数年は、蛇毒タンパク質の作用を阻害する数種の低分子タンパク質（Small Serum Proteins）を毒ヘビの血液から単離し、その阻害機構の解明を行っている。 これまで、ヒヤシンス球根から十数種の新規 Bowman-Birk 型トリプシンインヒビター（LHTI）を発見し、その性質や構造を調べてきた。その結果、複数の LHTI が linker 配列を隔てて一つながりの前駆体としてコードされ、限定分解によって成熟型になることが示された。現在、LHTI の全遺伝子構造を解明すること、また LHTI の限定分解・成熟に関わるヒヤシンスの芽抽出物中に存在するプロセシング酵素の同定を目的として研究を行っている。 キーワード：ヘビ毒タンパク質、プロテアーゼ、毒ヘビの自己防御系、植物酵素インヒビター、前駆体プロセシング
研究室の構成員
寺田成之（教授）・博士(理学) 塩井(青木)成留実（助教）・博士(理学)
2015 年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
M1：3 名 ・LHTI 前駆体配列のゲノム解析 ・毒ヘビ CRISP の生理機能の解明と変異体解析 ・ハブ毒メタロプロテアーゼに対するハブ血清 SSP-1 の阻害部位の同定 4 年次生：2 名 ・ハブ毒金属プロテアーゼ flavorase の機能解析 ・ハブ血清タンパク質 SSP-3 のペプチドライブラリの作製
教員の担当科目
寺田成之：(学部) 自然界と物質の化学、生物化学B、生物化学C、放射化学、機能生物化学実験、生化学実験、化学特別研究、卒業論文 (大学院) 化学講究Ⅳ、化学特別実験Ⅳ、機能生物化学特論Ⅰ 塩井(青木)成留実：(学部) 化学演習、基礎化学実験、基礎生物化学実験、生化学実験
教員の所属学会
寺田成之：日本生化学会、日本農芸化学会

塩井(青木)成留実：日本生化学会、日本農芸化学会、日本蛋白質科学会、日本ペプチド学会、日本化学会、毒素シンポジウム学会

最近 5 年間の学術論文

Narumi Shioi*, Ayumi Nishijima and Shigeyuki Terada, Flavorase, a novel non-haemorrhagic metalloproteinase in *Protobothrops flavoviridis* venom, is a target molecule of small serum protein-3, J. Biochem., 2015, 158, 37-48, 査読有

N. Shioi, M. Deshimaru, S. Terada, Structural analysis and characterization of new small serum proteins from the serum of a venomous snake (*Gloydus blomhoffii*), Bioscience, Biotechnology, and Biochemistry, 2014, 78 (3), 410-419, 査読有

Y. Tanaka, N. Shioi(Aoki), S. Terada, M. Deshimaru, Accelerated evolution of fetuin family proteins in *Protobothrops flavoviridis* (Habu snake) serum and discovery of an L1-like genomic element in the intronic sequence of a fetuin-encoding gene, Bioscience, Biotechnology, and Biochemistry, 2013, 77, 582-590, 査読有

S. Terada, T. Hattori, Characterization of brevilysin H2, an α -fibrinogenolytic metalloproteinase from the venom of Chinese snake (*Gloydus blomhoffi brevicaudus*), Fukuoka Univ. Sci. Rep., 2013, 43, 29-38, 査読無

N. Shioi, E. Ogawa, Y. Mizukami, S. Abe, R. Hayashi, S. Terada, Small serum protein-1 changes the susceptibility of an apoptosis-inducing metalloproteinase HV1 to a metalloproteinase inhibitor in habu snake (*Trimeresurus flavoviridis*), J. Biochem., 2013, 153, 121-129, 査読有

寺田成之、渡部敦子、古田佳孝、前川枝里奈、上村真由、ヒヤシンス・トリプシンインヒビター (LHTI) の構造と作用機序、理学集報、2012、第42巻、頁19-28、 査読無.

N. Shioi, M. Narasaki, and S. Terada, Novel function of antihemorrhagic factor HSF as an SSP-binding protein in Habu (*Trimeresurus flavoviridis*) serum, Fukuoka Univ. Sci. Rep., 2011, 41, 177-184, 査読無.

N. Shioi, S. Terada, Isolation and characterization of a novel subunit of phospholipase A2 inhibitor in the serum of *Trimeresurus flavoviridis*, Fukuoka Univ. Sci. Rep., 2011, 41, 185-193, 査読無.

S. Terada, Y. Tsumura, A. Kawabata, Characterization of brevilysin H1, an α -fibrinogenolytic metalloproteinase from the venom of Chinese snake (*Gloydus blomhoffi brevicaudus*), Fukuoka Univ. Sci. Rep., 2011, 41, 195-202, 査読無.

最近 5 年間の学術著書

Narumi Shioi(Aoki), Yoshitetsu Handa, Seijiro Shioi, **Shigeyuki Terada**, Peptide Science 2014, 29-32, ISBN 978-4-931541-15-3, 2015, 査読有

S. Shioi*, **N. Shioi(Aoki)***, Y. Okabe, S. Ando, Y. Karube, Preparation of a radiolabeled cationic peptide using an improved SUMO protein expression system, Peptide Science 2013, 2014, 169-172, ISBN 978-4-931541-14-6, 査読有, *equal contributors

S. Shioi, **N. Shioi(Aoki)**, Y. Karube, Biosynthesis of cationic peptide labeled with radioisotope, Peptide Science 2012, 2013, 151-154, ISSN;1344-7661, 査読有

最近 5 年間の学術国際会議での発表

N. Shioi(Aoki), S. Shioi, Y. Okabe, S. Ando, Y. Karube, Preparation of a radiolabeled cationic peptide using an improved SUMO, protein expression system, the 4th Asia-Pacific International Peptide Symposium (APIPS) and the 50th Japanese Peptide Symposium (JPS), 6-8th, November 2013

N. Shioi Aoki, Y. Tanaka, M. Deshimal, **S. Terada**, Accelerated evolution of anti-toxic protein in a Japanese viper serum, International Conference on Structural Genomics 2013-Structural Life Science-(ICSG2013-SLS), 29th July-1st August 2013

最近 5 年間の代表者としての学外資金導入実績

塩井(青木) 成留実：内藤記念科学振興財団 2015 年度内藤記念女性研究者研究助成
「毒ヘビ血液蛋白質群の毒素阻害機構の解明」・代表・200 万(年間)・2016 年 1 月～2018 年

塩井(青木) 成留実：公益財団法人国際科学技術財団 2014 年研究助成「毒ヘビが獲得してきた自己の毒に対する生体防御機能の解明」・代表・100 万（直接経費）・2014 年

塩井(青木) 成留実：日本学術振興会・科研費・若手研究 B「蛇毒酵素蛋白質に対する抗毒素蛋白質 SSP の分子認識機構の解明」・代表・330 万円（直接経費）・2010 年～2011 年

最近 5 年間の代表者としての学内資金導入実績

塩井(青木) 成留実：総合科学研究チーム「蛇毒に対する抗毒素薬のリード化合物についての研究 (課題番号 131042)」・代表・150 万円(年間)・2013 年～2014 年、
(分担者：九州大学薬学部田畑香織、福岡大学医学部倉原琳)

最近 5 年間の学会等学術団体における役職など

寺田成之：日本生化学会九州支部長(2011 年～2012 年)、平成 24 年日本生化学会九州支部例会責任者(世話役)、平成 25 年日本生化学会評議員および代議員

塩井(青木)成留実：毒素シンポジウム学会運営委員(2012～2014 年)、
平成 24 年日本生化学会九州支部実行委員

最近 5 年間の一般向け論文と著書、行政報告書など

塩井(青木)成留実：2015 年、「ヘビの毒について ～福大の毒ヘビ女からのメッセージ～」
七隈の杜 2015、No.11, p47-55

塩井(青木)成留実：2011 年、「蛋白質・抗毒素蛋白質複合体の立体構造解析よりその特異的認識機構の解明」、最先端研究施設共用促進事業 NMR 立体構造解析パイプライン・トライアルユース報告書(課題番号 10-500-009)
最近 5 年間の一般（非学術）集会での発表論文
該当なし
最近年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
塩井(青木)成留実：やさしい科学技術セミナー(企画・運営の責任者) 「さあ、一緒に考えよう！迷宮の謎を…なぜ、生物は毒をもつようになったのか？どうして毒をもつ生物は自分の毒がこわくないのか？」、福岡大学商学部棟・図書館棟、2014 年 11 月 8 日
その他特筆事項
塩井(青木)成留実：毒素シンポジウム若手奨励賞受賞 「毒ヘビの生体防御物質に関する研究」、塩井(青木)成留実、寺田成之、 第 59 回トキシシンポジウム、北海道帯広、2012 年 8 月

研究室名
機能生物化学研究室（細胞）
最近の研究課題とその取り組みの概要
機能生物化学研究室の細胞班では、酸化ストレスや高圧ストレスに対する細胞の応答を生化学的および生物物理化学的方法を用いて調べることで、細胞の構造と機能の関係を明らかにすることを目指して研究している。特に、細胞膜に着目し、膜の基本的な性質を理解するために、単分子膜の研究も展開している。酸化ストレスに関する研究では、培養細胞に対するパラコートの酸化傷害を、合成した両親媒性のアスコルビン酸誘導体が抑制するメカニズムについて研究を行っている。細胞に含まれる各種還元剤（グルタチオン、α-トコフェロールなど）との関連についても研究を進めている。高圧ストレスに関する研究では、高圧による赤血球の溶血、アポトーシスの誘導機構、アフリカツメガエル胚の発生異常について調べている。赤血球に関する最近の研究成果としては、Zn^{2+}がヒト赤血球のアニオン輸送タンパク質である Band 3 の細胞外ドメインのループ領域に含まれるヒスチジン-651 に結合して赤血球の凝集を引き起こすことを示した。最近では、赤血球膜への 2 価金属イオンやコレステロール誘導体の影響について、単分子膜での表面圧の測定結果も含めて検討している。 キーワード：酸化および高圧ストレス・赤血球膜・単分子膜・アスコルビン酸誘導体・細胞死
研究室の構成員
山口武夫（教授）・理学博士 田中英彦（兼任講師）・理学博士 永留重実（助教）・理学博士
2015 度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
M2：1 名、M1: 1 名、4 年次生：7 名 研究テーマ

• Inhibitory effect of 6-O-hexanoylascorbic acid on paraquat toxicity in NG108 cells • 熱ショックによるアポトーシス抑制への HSP90 の役割 • 両親媒性アスコルビン酸誘導体 6-o-hexanoylascorbic acid (HEA)によるパラコート細胞毒性の抑制における細胞内鉄の影響 • 酸化ストレスを受けた NG108 細胞へのアスコルビン酸と 6-o-hexanoylascorbic acid (HEA) の取り込み • リン脂質-Band 3 混合単分子膜挙動に対する金属イオンの添加効果 • スペクトリンの安定性に重要なシステイン残基の探索 (3) • DIDS をラベルした Band 3 の蛍光スペクトルに及ぼすプロテアーゼの影響 • 熱ストレスにより誘導されるアポトーシスの特性 • アフリカツメガエルの初期胚の発生に及ぼす熱および圧力の影響
教員の担当科目
山口武夫：(学部) 生物物理化学、基礎物理化学A、自然界と物質の化学、生活と環境の化学、基礎生物化学実験、機能生物化学実験、化学特別研究、卒業論文 (大学院) 機能生物学特論Ⅱ、化学講究Ⅳ、化学特別実験Ⅳ 田中英彦：(学部) 基礎生物化学実験、生化学実験 永留重実：(学部) 化学実験
教員の所属学会
山口武夫：日本生化学会、日本生物物理会、日本化学会、日本高圧力学会 田中英彦：日本生化学会、日本化学会、日本ビタミン学会 永留重実：日本化学会、日本油化学
最近 5 年間の学術論文
(すべて査読有) K. Kiyotake, H. Ochiai, T. Yamaguchi, Agglutination of human erythrocytes by the interaction of Zn^{2+} ion with histidine-651 on the extracellular domain of band 3, Colloids and Surface B: Biointerfaces. 2016, 141, 284-290 K. Kiyotake, S. Nagadome, T. Yamaguchi, Membrane perturbations induced by the interactions of zinc ions with band 3 in human erythrocytes, Biochem. Biophys. Reports, 2015, 2, 63-68 清武健斗, 山口武夫, ヒト赤血球の加圧溶血に関する2価金属イオンの効果, 高圧バイオサイエンスとバイオテクノロジー, 2015, 59- 66 山口武夫, 田尻佳大, レクチンにより凝集したヒト赤血球の加圧による溶血特性, 高圧バイオサイエンスとバイオテクノロジー, 2015, 67-74 T. Yamaguchi, K. Tajiri, K. Murata, S. Nagadome, Membrane damages under high pressure of human erythrocytes agglutinated by concanavalin A, Colloids and Surface B: Biointerfaces. 2014, 116, 695-699 山口武夫, ヒト赤血球でのアクアポリン阻害による加圧溶血の増大, 福岡大学理学集報, 2014,

44 (2), 143-148
T. Yamaguchi, S. Miyauchi, Y. Isahara, Pressure-induced hemolysis of in vivo aged human erythrocytes is enhanced by inhibition of water transport via aquaporin-1, High pressure Research, 2013, 33(2), 285-291
T. Yamaguchi, Y. Iwata, S. Miura, Y. Maehara, K. Nozawa, Enhancement of pressure-induced hemolysis by aquaporin-1 inhibitors in human erythrocytes, Bull. Chem. Soc. Jpn. 2012, 85(4), 497-503
T. Yamaguchi, Y. Iwata, S. Miura, K. Kawada, Reinvestigation of drugs and chemicals as aquaporin-1 inhibitors using pressure-induced hemolysis in human erythrocytes, Biol. Pharm. Bull. 2012, 35(11), 2088-2091
最近 5 年間の学術著書
該当なし
最近 5 年間の学術国際会議での発表
T. Yamaguchi, S. Miyauchi, Y. Isahara, Pressure-induced hemolysis is enhanced by inhibition of water transport via aquaporin-1 in human erythrocytes. 7 th International Conference on High Pressure Bioscience and Biotechnology (HPBB 2012) Otsu, 2012 年 10 月. Y. Uehara, N. Irie, Y. Kobayashi, T. Yamaguchi, Is pressure-induced apoptosis suppressed by heat shock proteins ? 7 th International Conference on High Pressure Bioscience and Biotechnology (HPBB 2012) Otsu, 2012 年 10 月.
最近 5 年間の代表者としての学外資金導入実績
該当なし
最近 5 年間の代表者としての学内資金導入実績
山口武夫：理学研究科高度化推進事業（タイプ 1）「赤血球の膜安定性におけるバンド 3 の役割」498 万・2015 山口武夫：領域別研究 「細胞のストレス応答」36.6 万・2015 山口武夫：学部長預り金「フレンド赤白血病細胞での高圧によるアポトーシス誘導機構の解明」113 万・2013
最近 5 年間の学会等学術団体における役職など
日本生化学会九州支部評議員（2011 年、2012 年、2013 年、2014 年、2015 年）
最近 5 年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
該当なし
最近 5 年間の一般（非学術）集会での発表論文
該当なし
最近 5 年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
福岡市立少年科学文化会館 主催 こどもまつり 「おもしろ化学」を担当 : 2011 年 5 月 5 日 ; 2012 年 5 月 5 日 ; 2013 年 5 月 5 日 ; 2014 年 5 月 5 日、2015 年 5 月 5 日

その他特筆事項

該当なし

研究室名

機能生物化学研究室（RNA プロセッシング）

最近の研究課題とその取り組みの概要

真核生物における遺伝子発現の過程では、転写により生じた mRNA 前駆体がさまざまなプロセッシングを受けて成熟 mRNA を生じる。mRNA のプロセッシングには、一般的に知られるキャッピング・スプライシング・ポリ A 付加に加えて、塩基部分の脱アミノ化・メチル化・結合異性化およびリボース部分のメチル化など多様なヌクレオチド修飾が含まれるが、これらは mRNA 分子のもつ遺伝暗号や立体構造の変化を介して生体機能の調節に重大な役割を果たす場合がある。当研究室では、主に mRNA のヌクレオチド修飾に関する次のような研究を行っている。

- (1) RNA 編集酵素 ADAR の標的特異性と生体内 RNA 編集機構の解明
- (2) RNA 編集酵素 ADAR の機能を外的要因に応じて調節する分子機構の解明
- (3) mRNA 配列中のシュードウリジルの生理的意義の解明
- (4) A-to-I RNA 編集の分子メカニズムと生理機能の解明
- (5) 生体内 RNA 編集を制御する低分子化合物の創製
- (6) RNA 編集機構を利用した部位特異的 RNA 変異導入法の開発

キーワード：転写後修飾・RNA 編集・機能性 RNA

研究室の構成員

弟子丸正伸（准教授）・博士（理学）

福田将虎（助教）・博士（エネルギー科学）

2016 年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ

D1：1 名、M2：2 名、M1：1 名、4 年次生：5 名

研究テーマ

- ・ミツバチの職階分化への A-to-I 編集の関与の解明
- ・mRNA 配列中に存在するシュードウリジンの生理的意義の解明
- ・ナトリウムチャネル遺伝子 *Scn1a* に変異導入したてんかんモデルマウスの作製
- ・RNA 編集酵素 ADAR の標的特異性と基質 RNA 構造の関係
- ・生体内 A-to-I RNA 編集メカニズムの解明
- ・部位特異的に RNA 編集を誘導する機能性 RNA の構築と生体内タンパク質機能制御
- ・細胞を基盤とした RNA 編集阻害剤のスクリーニング法の開発
- ・生体内 RNA 上のイノシンが持つ生理機能の解析

教員の担当科目
弟子丸正伸：(学部) 生物化学A、生物化学D、化学入門、生体の化学、化学実験、機能生物化学実験、放射化学実験、化学特別研究、卒業論文 (大学院) 機能生物化学講究、機能生物化学特別実験、機能生物化学特論Ⅲ、修士論文 福田将虎：(学部) 化学実験、基礎化学演習、基礎生物化学実験、機能生物化学実験
教員の所属学会
弟子丸正伸：日本生化学会、日本分子生物学会、日本 RNA 学会 福田将虎：日本化学会、日本生化学会、日本分子生物学会、日本 RNA 学会
最近 5 年間の学術論文
Y. Ihara, Y. Tomonoh, M. Deshimaru, B. Zhang, T. Uchida, A. Ishii, S. Hirose, Retigabine, a Kv7.2/Kv7.3-Channel Opener, Attenuates Drug-Induced Seizures in Knock-In Mice Harboring Kcnq2 Mutations. <i>PLoS One</i> 11(2), e0150095 (2016). (査読有) M. Fukuda, Y. Oyama, A. Nishitarumizu, M. Omura, K. Nose, M. Deshimaru, Identification of an RNA element for specific coordination of A-to-I RNA editing on HTR2C pre-mRNA. <i>Genes Cells</i> 20(10), 834-46 (2015). (査読有) K. Okuma, T. Koga, S. Ozaki, Y. Suzuki, K. Horigami, N. Nagahora, K. Shioji, M. Fukuda, M. Deshimaru, One-pot synthesis of dibenzo[b,h][1,6]naphthyridines from 2-acetylaminobenzaldehyde: application to a fluorescent DNA-binding compound. <i>Chem Commun (Camb)</i>. 50(98), 15525-15528 (2014). (査読有) N. Shioi, M. Deshimaru, S. Terada, Structural analysis and characterization of new small serum proteins from the serum of a venomous snake (<i>Gloydius blomhoffii</i>). <i>Biosci. Biotechnol. Biochem.</i> 78(3), 410-419 (2014). (査読有) M. Fukuda, K. Kurihara, M. Deshimaru, Ribozyme design for selective target RNA cleavage depending on RNA modifications. <i>Fukuoka Univ. Sci. Rep.</i> 44 (1), 39-44 (2014) Y. Tomonoh, M. Deshimaru, K. Araki, Y. Miyazaki, T. Arasaki, Y. Tanaka, H. Kitamura, F. Mori, K. Wakabayashi, S. Yamashita, R. Saito, M. Itoh, T. Uchida, J. Yamada, K. Migita, S. Ueno, H. Kitaura, A. Kakita, C. Lossin, Y. Takano, S. Hirose, The kick-in system: a novel rapid knock-in strategy. <i>PLoS One</i> 9(2), e88549 (2014). (査読有) M. Fukuda, K. Kurihara, S. Yamaguchi, Y. Oyama, M. Deshimaru, Improved design of hammerhead ribozyme for selective digestion of target RNA through recognition of site-specific adenosine-to-inosine RNA editing. <i>RNA</i> 20(3), 392-405 (2014). (査読有) Y. Tanaka, N. Shioi, S. Terada, M. Deshimaru, Structural organization and evolution of a cluster of small serum protein genes of <i>Protobothrops flavoviridis</i> snake. <i>Fukuoka Univ. Sci. Rep.</i> 43(1), 59-66 (2013). Y. Tanaka, S. Oyama, S. Hori, K. Ushio, N. Shioi, S. Terada, M. Deshimaru, Accelerated Evolution of

Fetuin Family Proteins in <i>Protobothrops flavoviridis</i> (Habu Snake) Serum and the Discovery of an L1-Like Genomic Element in the Intronic Sequence of a Fetuin-Encoding Gene. <i>Biosci. Biotechnol. Biochem.</i> 77(3), 582-590 (2013). (査読有) S. Nakano, M. Fukuda, T. Tamura, R. Sakaguchi, E. Nakata, T. Morii, Simultaneous detection of ATP and GTP by covalently linked fluorescent ribonucleopeptide sensors. <i>J. Am. Chem. Soc.</i> 135(9), 3465-3473 (2013). (査読有) M. Fukuda, K. Kurihara, Y. Tanaka, M. Deshimaru, A strategy for developing a hammerhead ribozyme for selective RNA cleavage depending on substitutional RNA editing. <i>RNA</i> 18(9), 1735-1744 (2012). (査読有) F. F. Liew, T. Hasegawa, M. Fukuda, E. Nakata, T. Morii. Construction of dopamine sensors by using fluorescent ribonucleopeptide complexes. <i>Bioorg. Med. Chem.</i> 19(15), 4473-4481 (2011). (査読有) Y. Tanaka and M. Deshimaru. Alteration in editing profile of mRNA for 5-hydroxytryptamine 2C receptor depending on expression level of editing enzyme, ADAR1. <i>Fukuoka Univ. Sci. Rep.</i> 41(1), 15-21 (2011).
最近5年間の学術著書
該当なし
最近5年間の学術国際会議での発表
K. Nose, H. Umeno, A. Nishitarumizu, R. Noguchi, M. Fukuda, Construction of guide-RNA for site-directed RNA mutagenesis utilizing A-to-I RNA editing. RNA2016, Kyoto, Japan. Jun. 2016. K. Nose, A. Nishitarumizu, H. Umeno, H. Nakagawa, M. Deshimaru, M. Fukuda, Evaluating a molecular mechanism of the intracellular A-to-I RNA editing by analyzing a reaction behavior of ADARs in vitro and in the cell. Pacificchem 2015, Honolulu, Hawaii, Dec. 2015. H. Umeno, K. Nose, A. Nishitarumizu, M. Fukuda, Construction of artificial guide-RNAs for a site-directed RNA mutagenesis utilizing intracellular RNA editing by hADAR2. Pacificchem 2015, Honolulu, Hawaii, Dec. 2015. T. Uchida, M. Deshimaru, Y. Yanagawa, S. Koyama, S. Hirose, A <i>Kcnq2</i> mutation enhances firing and GABA release of GABAergic interneurons in the neonatal hippocampus. The 13th Asian and Oceanian Congress of Child Neurology. Taipei, Taiwan, Feb. 2015. M. Fukuda, K. Kurihara, M. Deshimaru, Construction of the functional RNAs for regulating the site-specific RNA editing Gordon Research Conference on RNA editing. Galveston, USA, Jan. 2013. M. Fukuda, K. Kurihara, M. Deshimaru, Construction of ribozymes recognizing specific RNA modifications in HTR2C mRNA. The 16th annual meeting of the RNA society, Kyoto, Japan, Jun. 2011. Y. Tanaka, S. Kato, M. Fukuda, M. Deshimaru, Editing pattern of serotonin 2C receptor mRNA depends on the expression levels of ADARs. The 16th annual meeting of the RNA society, Kyoto, Japan, Jun. 2011.
最近5年間の代表者としての学外資金導入実績

福田将虎：日本学術振興会・科研費・基盤研究 C「細胞内シグナル伝達の一過的な制御を目指した新規 RNA 変異導入技術の開発と応用」・代表・360 万円（直接経費・予定）・2016 年度～2018 年度 福田将虎：柿原科学技術研究財団科学技術研究助成事業・助成金「RNA 編集機構を利用した新規 RNA 変異導入法の開発」・代表・119 万円（直接経費）・2016 年度 弟子丸正伸：日本学術振興会・科研費・挑戦的萌芽研究「mRNA 配列中のシュードウリジンの生理的意義の解明」・代表・260 万円（直接経費）・2015 年度～2016 年度 福田将虎：日本学術振興会・科研費・若手研究 B「生体内 RNA 編集機構を利用した部位特異的変異導入法の開発」・代表・310 万円（直接経費）・2013 年度～2015 年度 弟子丸正伸：日本学術振興会・科研費・挑戦的萌芽研究「PWS における食欲亢進および性格異常の原因分子機構の解明」・代表・290 万円（直接経費）・2012 年度～2014 年度 福田将虎：日本学術振興会・科研費・若手研究 B「核小体低分子 RNA を基盤とした遺伝子発現制御方法の開発」・代表・210 万円（直接経費）・2011 年度～2012 年度
最近 5 年間の代表者としての学内資金導入実績
福田将虎：福岡大学総合科学研究チームⅣ・「小分子化合物による生体内 RNA 編集の制御とその機能解明」・300 万円・2015 年度～2016 年度（分担者：渡邊瑞貴、古賀裕二） 福田将虎：福岡大学総合科学研究チームⅣ・「疾病に関わる RNA 編集を薬剤標的とする小分子化合物の創製」・300 万円・2012 年度～2013 年度（分担者：佐藤慎一、古賀裕二） 弟子丸正伸：福岡大学総合科学研究チームⅣ・「mRNA におけるヌクレオチド修飾を介した生体機能調節機構の解明」・300 万円・2011 年度～2012 年度（分担者：松原公紀、長洞記嘉）
最近 5 年間の学会等学術団体における役職など
該当なし
最近 5 年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
該当なし
最近 5 年間の一般（非学術）集会での発表論文
該当なし
最近 5 年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
該当なし
その他特筆事項
該当なし

研究室名
有機生物化学Ⅰ研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
有機生物化学Ⅰ研究室では酸素、窒素、硫黄、リン、セレン、テルル等の典型元素を含む種々の有機合成を反応から機構およびその応用に至るまで幅広く行っている。特に典型元素を含む複素環化合物の合成を多方面から検討している。 酸素や窒素を含む化合物では、インドール、キノリン、イソクマリンなど生理活性を有する化合物を反応性の高いアライン誘導体から簡便に合成する方法を開発している。最近ではこれまでに合成例の無い窒素と酸素を含むベンゾオキサゼピン類の合成法の開発をした。硫黄を含む環状ポリスルフィド類の合成も容易に得られる天然物であるカンファーやフェンコンを用いて合成した。これらの反応機構を検討する過程において金属イオンやフッ化物イオンの重要性を明らか

にすることができ、新しい複素環化合物合成への手法が開拓された。

上記手法により得られた新しい反応や新規化合物の特性を利用して、細胞内シグナルを感受する蛍光プローブを開発し、これまで知られていなかった生命現象の詳細を明らかにしようとしている。

キーワード：チオカルボニル・ポリスルフィド・アライン・蛍光プローブ

研究室の構成員

大熊健太郎（教授）・理学博士

塩路幸生（准教授）・理学博士

長洞記嘉（助教）・博士（理学）および博士（工学）

2015年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ

D1 1名

機能性蛍光色素が導くミトコンドリア代謝の可視化と機構解明

M2 5名

アラインを用いた光学活性バイノールの合成とその反応

ハロゲン置換ホスフィニン類の合成とカップリング反応

細胞内微小器官に局在化する光応答性分子の合成とその光特性および細胞挙動

環内にリン原子を有する糖類似体をもつ蛍光プローブの合成

脂質修飾を受けるペプチドを用いた細胞内動態解析用プローブの合成と分析

M1 3名

アラインとアミン類の3成分反応

ケトンヒドラゾンとカルゴゲノハライドとの反応

ベンゾチオフェニウム及びベンゾセレンフェニウム塩の合成と反応

4年次生 7名

トリフルオロメチル基を含むベータージケトンとアラインの反応

硫黄、セレンおよびテルル原子を含む複素環類の合成

ジヒドロジベンゾナフチリジン類の合成とその光学的性質

ビスホスフィニン類の合成

新規ピリリウム二量体の合成

蛍光基を有するパラコート合成と性質

過酸化水素感受性基を有するシアノインドール誘導体の合成

生体分子と共有結合により結ばれる蛍光プローブの合成

教員の担当科目

大熊健太郎：（学部）有機化学C、有機材料合成化学、外書購読、化学Ⅲ、基礎有機化学実験、
有機生物化学実験、化学実験、卒業論文

（大学院）化学講究、有機生物化学実験、有機化学特論Ⅰ、修士論文

塩路幸生：(学部) 有機化学A、基礎有機化学Ⅱ、基礎有機化学実験、有機生物化学実験 (大学院) 化学講究、有機生物化学実験、有機化学特論Ⅲ、修士論文 長洞記嘉：(学部) 基礎有機化学実験、有機生物化学実験、ナノ材料科学実験Ⅰ
教員の所属学会
大熊健太郎：日本化学会、アメリカ化学会、有機合成化学協会、錯体化学会 塩路幸生：日本化学会、アメリカ化学会、有機合成化学協会、分析化学会、電子スピンスサイエンス学会 長洞記嘉：日本化学会、有機合成化学協会、ケイ素化学協会
最近5年間の学術論文
Synthesis of 2,3-Benzodiazepines and 2,3-Benzodiazepin-4-ones from Arynes and β-Diketones, K. Okuma, Y. Tanabe, N. Nagahora, K. Shioji, <i>Bull. Chem. Soc. Jpn</i>, 2015, 88, 1064-1073 (査読有) Enantioselective Synthesis of 4,4'-Biaryl-BINOLs from Arynes and β-Diketones, K. Okuma, K. Horigami, N. Nagahora, K. Shioji, <i>Synthesis</i>, 2015, 47, 2937-2944 (査読有) N. Nagahora, T. Ogawa, M. Honda, M. Fujii, H. Tokumaru, T. Sasamori, K. Shioji, K. Okuma, Syntheses, Structures, and Properties of Biphosphinines Tethered Aromatic π-System, <i>Chem. Lett.</i> 2015, 44, 706-708. (査読有) K. Okuma, T. Koga, S. Ozaki, Y. Suzuki, K. Horigami, N. Nagahora, K. Shioji, M. Fukuda, M. Deshimaru, One-pot synthesis of dibenzo[b,h][1,6]naphthyridines from 2-acetylaminobenzaldehyde: application to a fluorescent DNA-binding compound, <i>Chem. Commun.</i> 2014, 50, 15525-15528. (査読有) K. Okuma, K. Hirano, Y. Tanabe, R. Itoyama, A. Miura, N. Nagahora, K. Shioji, Novel one-pot synthesis of polysubstituted isocoumarins from arynes and trifluoroacetylated β-diketones, <i>Chem. Lett.</i> 2014, 43, 492-494. (査読有) K. Okuma, H. Matsui, Y. Mori, Reaction of seleno- or thiofenchone with propiolic acid. Wagner-Meerwein rearrangement, <i>Heteroatom Chem.</i> 2014, 25, 578-583. (査読有) S. Toyofuku, H. Morita, S. Ando, K. Okuma, N. Nagahora, Y. Aizawa, H. Nakagawa, K. Shioji, Synthesis and Analysis of the Intracellular Molecular Dynamics of a Novel Fluorescent Probe Having a Myristoylated Peptide <i>Peptide Science</i> 2014, 289-292. (査読有) S. Yasui, Y. Ogawa, K. Shioji, M. Mishima, S. Yamazaki, Dramatic Effect of Atmosphere on Product Distribution from Steady-State Photolysis of Triarylphosphines, <i>Bull. Chem. Soc. Jpn.</i> 2014, 87, 988-996. (査読有) K. Okuma, K. Munakata, H. Matsui, N. Nagahora, K. Shioji, Reaction of fenchone hydrazone with diselenium dibromide: novel formation of bicyclic diselenide, <i>Heterocycles</i> 2014, 89, 473-480. (査読有) K. Okuma, Reaction of propiolic acid and its derivatives: <i>Fukuoka Univ. Sci. Rep.</i> 2013, 43, 189-194. N. Nagahora, T. Wasano, K. Nozaki, T. Ogawa, S. Nishijima, D. Motomatsu, K. Shioji, K. Okuma, The First Formation of (1Z)-1-Alkylidene-1H-isobenzofuranium Amides and 1H-Inden-1-ones: Acid-

- Promoted 5-exo Cyclization and Hydration/Aldol Condensation Reactions of o-Ethynylbenzophenones: *Eur. J. Org. Chem.* 2014, 1423-1430. (査読有)
- K. Okuma, Y. Tanabe, R. Itoyama, N. Nagahora, K. Shioji, One-pot synthesis of 2,3-benzodiazepines from arynes and β -diketones: *Chem. Lett.* 2013, 42, 1260-1262. (査読有)
- K. Okuma, K. Hirano, C. Shioga, N. Nagahora, K. Shioji, Novel formation of oxazepino[4,5-a]quinolines by tandem 1,3-dipolar and insertion reaction of quinoline N-oxides with arynes: *Bull. Chem. Soc. Jpn.* 2013, 86, 615-619. (査読有)
- K. Okuma, Synthesis of Heterocycles From Thio- and Selenocarbonyl Compounds: Phosphorus, Sulfur, Silicon, and Related. *Elem.* 2013, 188, 340-348. (査読有)
- S. Yasui, Y. Ogawa, K. Shioji, S. Yamazaki "Atmosphere-controlled Dual Reactivity of Triarylphosphine in the Photoexcited State: P-C Bond Cleavage vs. Electron Transfer" *Chem. Lett.* 2013, 42, 1478-1480. (査読有)
- K. Okuma, R. Itoyama, A. Sou, N. Nagahora, K. Shioji, Tandem Carbon-Carbon Bond Insertion and Intramolecular aldol Reaction of Benzyne with Aroylacetones: *Chem. Commun.* 2012, 48, 11145-11147. (査読有)
- K. Okuma, K. Munakata, T. Tsubota, M. Kanto, N. Nagahora, K. Shioji, Y. Yokomori, Synthesis and Reaction of Tricyclic Tetrathiins and Pentathiepins: Novel Formation of α -Disulfines Tetrahedron 2012, 68, 5317-5320. (査読有)
- K. Okuma, Reaction of Arynes with Carbon-heteroatom double bonds, *Heterocycles* 2012, 85, 515-544 (review). (査読有)
- K. Okuma, N. Matsunaga, S. Ozaki, Reaction of benzyne with 2-hydroxy- and 2-aminophenyl ketones: synthesis of xanthenes and acridines, *Fukuoka University Science Reports* 2011, 41, 23-28.
- K. Okuma, A. Nojima, Y. Nakamura, N. Matsunaga, N. Nagahora, K. Shioji, Reaction of benzyne with formamides and acetylimidazole, *Bull. Chem. Soc. Jpn.* 2011, 84, 328-332. (査読有)
- K. Okuma, N. Matsunaga, N. Nagahora, K. Shioji, Y. Yokomori, Reaction of Arynes with Amino Acid Esters, *Chem. Commun.* 2011, 47, 5822-5824. (査読有)
- K. Okuma, S. Ozaki, N. Nagahora, K. Shioji, Synthesis of 3,1-Benzothiazines from 2-Alkenyl- and 2-Alkynylanilides and Lawesson Reagent, *Heterocycles* 2011, 83, 1303-1313. (査読有)
- K. Okuma, Reaction of Thiofenchone or Thiochamphor with Disulfur Dichloride: Novel Formation of Tricyclic Polysulfanes, Phosphorus, Sulfur, Silicon, and related Elements 2011, 186, 1196-1200. (査読有)
- H. Morita, S. Ando, K. Okuma, N. Nagahora, Y. Aizawa, M. Fukuda, H. Nakagawa, K. Shioji, Intracellular molecular dynamics of N-terminal motif of myristoylated peptide, *Peptide Science* 2011, 309-312. (査読有)

該当なし
最近 5 年間の学術国際会議での発表
K. Okuma, International Conference on Heteroatom Chemistry, Caen, France, Synthesis of 2,3-Benzodiazepine from Arynes and β-Diketones, KN-5-47, June 14-19, 2015 N. Nagahora, H. Tokumaru, K. Shioji, K. Okuma, The 2015 International Chemical Congress of Pacific Basin Societies, Synthesis, structures, and properties of biphosphinines tethered by aromatic system, Honolulu, Hawaii, December 15-20, 2015 N. Nagahora, I. Takemoto, M. Fujii, H. Tokumaru, K. Shioji, K. Okuma, The 2015 International Chemical Congress of Pacific Basin Societies, New insights into the electronic structures and electrochemical behavior of 2-benzothio- and 2-benzoselenopyrylium tetrafluoroborates, Honolulu, Hawaii, December 15-20, 2015 N. Nagahora, T. Ogawa, M. Fujii, H. Tokumaru, K. Shioji, K. Okuma, International Symposium on the Synthesis and Application of Curved Organic π-Molecules and Materials, Uji, Kyoto, October 19-22, 2014 K. Okuma, K. Munakata, Reaction of fenchone or camphor hydrazones with chalcogen halides 12th International Conference on the Chemistry of Selenium and Tellurium, OC-5, Cardiff, Wales, UK, July 22-26, 2013 招待講演 : K. Okuma, Synthesis of Heterocycles from Thio- and Selenocarbonyl Compounds, Kentaro Okuma, 25th International Symposium on the Organic Chemistry of Sulfur, IL03 Czestchowa, Poland, June 24-29, 2012. K. Okuma, T. Koga, S. Ozaki, N. Nagahora, K. Shioji, Synthesis of Benzothiazines, Quinolines, and Dibenzonaphthyridines from 2-Alkynyl- or 2-Alkenylnitrobenzenes, International Conference on Heteroatom Chemistry, Kyoto, Japan, May 22, 2012. K. Shioji, Y. Ogawa, T. Matsuki, H. Nakagawa, N. Nagahora, K. Okuma, Synthesis and Properties of Peryrenylphosphonium Salts having Triphenylphosphine, International Conference on Heteroatom Chemistry, Kyoto, Japan, May 22, 2012. N. Nagahora, M. Honda, T. Wasano, S. Nishijima, K. Shioji, K. Okuma, Synthesis and property of a new type of phosphinines and 2-phosphanaphthalenes, International Conference on Heteroatom Chemistry, Kyoto, Japan, May 22, 2012.
Synthe
塩路幸生 : 日本学術振興会・科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究・「細胞内に物理的摂動を与える分子の作成」・代表・312 万円・2013 年度～2014 年度 塩路幸生 : 日本学術振興会・科学研究費補助金・基盤研究 (C)・「細胞内微小器官局在化蛍光プローブを用いた正味の細胞内抗酸化活性測定」・代表・360 万円・2010 年度～2012 年度 長洞記嘉 : 日本学術振興会・科学研究費補助金・若手研究 (B)「炭素ーリン三重結合種を鍵試剤として用いた多環式芳香族化合物の系統的合成法の開発」・代表・310 万円 (直接経費)・2011 年度～2012 年度

最近5年間の代表者としての学内資金導入実績
大熊健太郎：領域別研究チーム・「典型元素化学研究」・115万円・2012年～2014年（分担者：山口武夫、田中英彦、塩路幸生） 塩路幸生：領域別研究チーム・「元素戦略で探る細胞死のメカニズム」・97万円・2009年～2011年（分担者：大熊健太郎、山口武夫、田中英彦、長洞記嘉） 長洞記嘉：福岡大学推奨研究プロジェクト・「新規なリン原子を含む芳香族化合物の系統的合成と物性の探究」・258万円・2012年度～2014年度（分担者：山田勇治）
最近5年間の学会等学術団体における役職など
大熊健太郎：九州大学特任教授 2012年、 塩路幸生：日本化学会九州支部幹事 2012年、
最近5年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
塩路幸生：新版大学の化学への招待・井上 亨・川田 知・栗原寛人・小寺 安・塩路幸生・脇田久伸、三共出版、206-221、2013年
最近5年間の一般（非学術）集会での発表論文
該当なし
最近5年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
該当なし
その他特筆事項
大熊健太郎：大牟田市産業廃棄物調整委員 2011～2015年度

研究室名
有機生物化学P研究室（生命分子化学）
最近の研究課題とその取り組みの概要
生命現象では酵素と基質やレセプターとリガンドなどが相互作用して分子認識され、時間や空間的に連携することで生命活動の重要な働きを司っている。一方、天然には極めて弱い認識能をもつ生体分子が寄り集まったクラスターが、より強い認識能を発揮することもある。例えば、細胞表層の糖鎖がクラスターを形成することに端を発する細胞接着や分化などは、巧みな分子認識現象の多重繰返から成り立っている。このような天然の仕組みを人工系で機能的にシミュレーションしようと、分子内空洞をもつ分子（ホスト）の開発研究が進められている。これまでに我々は、ホストとしてのシクロファンを集積したシクロファン多量体がクラスター効果によってゲストを強く捕捉できることを見出している。これら基盤ホストに係わる分子技術を展開させることで、更に精巧な分子認識能や新たな機能を発現させることを研究目的としている。具体的な研究課題としては、(i)薬剤性ゲストの捕捉・送達・放出を制御できるホスト多量体の分子設計と機能開発、(ii)動的共有結合としてジスルフィド結合などを利用した還元応答性ホストの開発、(iii)ビオチン・アビジン系を利用したホストによるタンパク質表面でのゲスト認識システムの開発、(iv)蛍光などの光特性を利用したホスト分子群の開発、(v)酵素親和性を有する機能性ペプチド類の開発、(vi)標的タンパク質を表面認識できるホスト分子群の開発などに取り組んだ。得られた研究成果は、国際学術雑誌への論文発表や国際シンポジウムでの学会発表などを通じて

情報発信を行った。 キーワード：分子認識・ホストゲスト・シクロファン・クラスター効果・薬剤送達・蛍光センシング・ペプチド・タンパク質表面認識
研究室の構成員 林田 修（教授）・博士（工学） 安東勢津子（講師）・理学博士 草野 修平（助教）・博士（理学）
2015年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ 大学院生 M2：5名、M1：3名、4年次生：4名 研究テーマ ・ 機能性ホストの合成と性質 ・ 機能性ホストの合成と評価 ・ 機能性ホストの分光学的研究 ・ 機能性ホストの蛍光特性 ・ 機能性ホストの会合特性 ・ 分子認識ユニットの合成と性質 ・ 分子認識ユニットの合成と評価 ・ 分子認識ユニットの分光学的研究
教員の担当科目 林田 修：（学部） 自然界と物質の化学、生活と環境の化学、ナノサイエンス入門、機能新素材科学、構造有機化学、ナノ材料科学実験Ⅰ、化学実験、卒業論文 （大学院） ナノ化学特論Ⅱ、有機生物化学特論Ⅳ、化学講究Ⅲ、化学講究Ⅴ、化学特別実験Ⅲ、化学特別実験Ⅴ 安東勢津子：（学部） 外書購読Ⅱ、化学Ⅴ、化学実験、基礎有機化学実験、有機生物化学実験、一般化学実験 草野修平：（学部） 化学実験、基礎有機化学実験、有機生物化学実験、ナノ材料科学実験Ⅰ
教員の所属学会 林田 修：日本化学会、有機合成化学協会、アメリカ化学会 安東勢津子：日本化学会、日本生化学会、日本ペプチド学会 草野修平：日本化学会、有機合成化学協会、ケミカルバイオロジー学会
最近5年間の学術論文

(すべて査読有)

- O. Hayashida, T. Matsuo, K. Nakamura, S. Kusano, Synthesis of water-soluble cyclophane hexamers having a triphenylene core and their enhanced guest-binding behavior, *J. Org. Chem.* 2016, 81 (10), 4196-4201.
- K. Nakamura, S. Kusano, O. Hayashida, Synthesis of a water-soluble macrocyclic anthracenophane and its size-selective molecular recognition, *J. Incl. Phenom. Macrocycl. Chem.* 2016, 85 (1), 121-126.
- O. Hayashida, K. Matsushita, S. Kusano, Synthesis and effect of linker length on guest-binding affinity of water-soluble Tetraazacyclophane Dimers, *J. Incl. Phenom. Macrocycl. Chem.* 2016, 84 (3), 237-243.
- O. Hayashida, M. Kojima, S. Kusano, Biotinylated cyclophane: Synthesis, cyclophane-avidin conjugates, and their enhanced guest-binding affinity, *J. Org. Chem.* 2015, 80 (19), 9722-9727.
- O. Hayashida, Y. Harada, M. Kojima, Synthesis of coumarin-appended cyclophanes and evaluation of their complexation with myoglobin, *J. Incl. Phenom. Macrocycl. Chem.* 2015, 83 (1-2), 111-117.
- O. Hayashida, K. Kojima, Entrapment and release of guest molecules by reduction-responsive Cyclophane Dimers Based on Disulfide Linkage, *Bull. Chem. Soc. Jpn.* 2015, 88 (5), 729-735.
- O. Hayashida, Y. Nakamura, T. Sato, Synthesis and guest-binding behavior of water-soluble cyclophanes bearing PEG residues, *Adv. Chem. Eng. Sci.* 2014, 4 (4), 409-416.
- O. Hayashida, Y. Kaku, Synthesis of a rhodamine-appended cyclophane as a fluorescence host in water, *Adv. Chem. Eng. Sci.* 2014, 4 (4), 401-408. (Invited Paper)
- O. Hayashida, D. Sato, Degradation properties and pH-responsive guest-release of cyclophanes having four ester side chains with terminal choline residues, *Chem. Lett.* 2014, 43(3), 322-324.
- O. Hayashida, Y. Kaku, Synthesis of dabsyl-appended cyclophanes and their heterodimer formation with pyrene-appended cyclophanes, *J. Org. Chem.* 2013, 78 (20), 10437 - 10442.
- O. Hayashida, K. Ichimura, D. Sato, T. Yasunaga, Synthesis, guest-binding, and reduction-responsive degradation properties of water-soluble cyclophanes having disulfide moieties, *J. Org. Chem.* 2013, 78 (11), 5463-5469.
- O. Hayashida, T. Nakashima, Y. Kaku, Synthesis and enhanced guest-binding affinities of dendrimer-based cyclophane tetramer and octamer, *Adv. Chem. Eng. Sci.* 2013, 3(3), 33-37.
- O. Hayashida, Y. Nakamura, Synthesis of water-soluble cyclophane pentamers using click chemistry as a multivalent host for daunorubicin and doxorubicin, *Bull. Chem. Soc. Jpn.* 2013, 86(2), 223-229. (Selected Papers)
- O. Hayashida, K. Ichimura, Synthesis and characterization of reduction-responsive cyclophane dimer based on disulfide linkage, *Chem. Lett.* 2012, 41(12), 1650-1651.
- O. Hayashida, T. Nakashima, Synthesis of peptide-based cyclophane oligomers having multivalently enhanced guest-binding affinity, *Bull. Chem. Soc. Jpn.* 2012, 85(6), 715-723.
- O. Hayashida, T. Nakashima, Synthesis of cyclophane dimer using cyclophane-tethered Fmoc-amino acid derivatives as a multivalent host, *Chem. Lett.* 2011, 40(2), 134-135.

- D. M. D. Rasika, T. Ueda, L. N. Jayakody, L. D. B. Suriyagoda, K. F. S. T. Silva, S. Ando, J. K. Vidanarachchi, ACE-inhibitory activity of milk fermented with *Saccharomyces cerevisiae* K7 and *Lactococcus lactis* subsp. *lactis* NBRC 12007 J. Natn. Sci. Foundation Sri Lanka 2015 43 (2), 141-151.
- K. Matsuki, O. Hayashida, S. Ando, Synthesis of water-soluble cyclophane derivatives having four peptide chains, *Peptide Science* 2014, 2015, 351-354.
- S. Toyofuku, H. Morita, S. Ando, K. Okuma, N. Nagahora, Y. Aizawa, H. Nakagawa, K. Shioji, Synthesis and analysis of the intracellular molecular dynamics of a novel fluorescent probe having a myristoylated peptide, *Peptide Science* 2014, 2015, 289-295.
- E. Yahiro, Y. Uehara, E. Kawachi, S. Ando, S. Miura, K. Sakua, Improved survival rate after myocardial infarction using an inducible cholesterol efflux (iCE) peptide: FAMP, *IJC Heart & Vessels* 2014, 4, 135–137.
- S. Shioi, N. Shioi(Aoki), Y. Okabe, S. Ando, Y. Karube, Preparation of a radiolabeled cationic peptide using an improved SUMO protein expression system, *Peptide Science* 2013, 2014, 169-172.
- [Y. Uehara](#), [S. Ando](#), [E. Yahiro](#), [K. Oniki](#), [M. Ayaori](#), [S. Abe](#), [E. Kawachi](#), [B. Zhang](#), [S. Shioi](#), [H. Tanigawa](#), [S. Imaizumi](#), [S. Miura](#), [K. Saku](#), FAMP, a Novel ApoA-I mimetic peptide, suppresses aortic plaque formation through promotion of biological HDL Function in ApoE-Deficient Mice. *Journal of the American Heart Association* 01/2013; 2(3):e000048.
- K. Arai, M. Noguchi, B. G. Singh, K. I. Priyadarsini, K. Fujio, Y. Kubo, K. Takayama, S. Ando, M. Iwaoka, A water-soluble selenoxide reagent as a useful probe for the reactivity and folding of polythiol peptides, *FEBS Open Bio*, 2013, 355–64.
- E. Kawachi, Y. Uehara, K. Hasegawa, E. Yahiro, S. Ando, Y. Wada, T. Yano, H. Nishikawa, M. Shiomi, S. Miura, Y. Watanabe, K. Saku, Novel molecular imaging of atherosclerosis with Gallium-68-Labeled apolipoprotein A-I mimetic peptide and positron emission tomography, *Circulation Journal*, 2013.
- Y. Kubo, A. Maeda, M. Yukawa, H. Ikeda, T. Ueda, H. Aki, S. Ando, Synthesis of peptidyl-alendronic acid derivatives as a prodrug for enhancing bioavailability (II), *Peptide Science* 2012, 2013, 259-262.
- Y. Kubo, M. Yukawa, H. Ikeda, H. Aki, T. Ueda, S. Ando, Synthesis and properties of alendronic acid containing dipeptide, *Peptide Science* 2011, 2012, 241-244.
- K. Hasegawa, E. Kawachi, R. Kuwabara, E. Yahiro, S. Ando, K. Oniki, R. Adachi, Y. Wada, T. Yano, Y. Uehara, S. Miura, K. Saku, Y. Watanabe, Synthesis of 68 Ga-DOTA-FAMP and PET imaging study with atherosclerotic plaques, *Peptide Science* 2011, 2012, 291-294.
- R. Adachi, K. Oniki, H. Aoyagi, S. Abe, Y. Uehara, K. Saku, K. Yamada, S. Ando, Correlation of structure in solution and lipid affinity of apolipoprotein A-I mimetic peptide (II), *Peptide Science* 2011, 2012, 237-240.
- S. Kusano, O. Hayashida, Development of tetraphenylethylene-appended tetraazacyclophanes: the evaluation of aggregation-induced emission property and the application for biomolecular sensing,

Chem. Lett. 2016, In press.

S. Kusano, S. Ishiyama, S. L. Lam, T. Mashima, M. Katahira, K. Miyamoto, M. Aida, F. Nagatsugi, Crosslinking reactions of 4-amino-6-oxo-2-vinylpyrimidine with guanine derivatives and structural analysis of the adducts, *Nucleic Acids Res.* 2015, 43, 7717-7730.

M. E. Diener, A. J. Metrano, S. Kusano, S. J. Miller, Enantioselective Synthesis of 3-Arylquinazolin-4(3H)-ones via Peptide-Catalyzed Atroposelective Bromination, *J. Am. Chem. Sci.* 2015, 137, 12369-12377.

最近 5 年間の学術著書

林田 修：「薬物送達のためのホストゲスト分子システムの構築」福岡大学理学集報，45巻1号 pp. 79-82 (2015)

林田 修、塩路 幸生、中川 裕之：「ナノ分子システムによる細胞内ホストゲスト化学の構築」研究部論集，2巻，pp. 7-13 (2015).

林田 修、松原 公紀、安東 勢津子、古賀 裕二：「機能性ナノ分子研究」Research, 18巻2号 pp. 36-37 (2013).

林田 修、市村 和明、木村 圭一朗、中村 勇気、中島 智美：「クラスター効果によって機能化された水溶性シクロファン類の創製とゲスト捕捉能」福岡大学理学集報，43巻1号 pp. 87-95 (2013).

最近 5 年間の学術国際会議での発表

O. Hayashida, Y. Nakamura, K. Kojima, K. Nishino, S. Kusano, Capture and release of guest molecules by reduction-responsive cyclophane oligomers having disulfide linkage, 2015 International Chemical Congress of Pacific Basin Societies, Honolulu, Hawaii, USA, 2015年12月

K. Nakamura, S. Kusano, O. Hayashida, Synthesis of cyclophane oligomers by RAFT polymerization and their host-guest properties, 2015 International Chemical Congress of Pacific Basin Societies, Honolulu, Hawaii, USA, 2015年12月

S. Shioi, N. Shioi(Aoki), Y. Okabe, S. Ando and Y. Karube, Preparation of a radiolabeled cationic peptide using an improved SUMO protein expression system, *Peptide Science* 2013, 2014, 169-172, 4th Asia-Pacific International Peptide Symposium,(APIPS 2013), 50th Japanese Peptide Symposium (第50回 日本ペプチド討論会 大阪 ホテル阪急 エキスポパーク，2013年11月

O. Hayashida, Synthesis and host-guest properties of functionalized cyclophanes, 超分子・超構造科学フォーラム第29回特別講演会生体関連化学技術の展開と応用, Kumamoto University, 2012年12月

O. Hayashida, K. Ichimura, K. Kimura, Y. Nakamura, T. Nakashima, SPR and fluorescence study on host-guest interactions of cyclophane oligomers having multivalently enhanced guest-binding affinity, Label-Free Technologies: Advances and Applications, NH Grand Krasnapolsky, Amsterdam, The Netherlands, 2012年11月

最近5年間の代表者としての学外資金導入実績
林田 修：日本学術振興会・科研費・基盤研究（C）・「ゲストの捕捉および放出を制御できる刺激応答性シクロファン型ホスト多量体の開発」・代表・430万円（直接経費）・2012～2014年 林田 修：日本学術振興会・科研費・基盤研究（C）・「クラスター効果に基づくシクロファン多量体の合成および標的ゲストの捕捉と検出」・代表・380万円（直接経費）・2009～2011年 林田 修：科学技術振興機構・研究成果展開事業 研究成果最適展開支援プログラム A-STEP フィーチャビリティスタディステージ探索タイプ・「ホストゲスト分子システムを基盤とする薬物送達および放出に関する探索研究」・代表・170万円（直接経費）・2011年 林田 修：福岡県産業・科学技術振興財団・I S T研究F S事業・「ホストゲストを基盤とした細胞内への薬物送達システムの開発」・代表・160万円（直接経費）・2011年 林田 修：科学技術振興機構・戦略的創造研究事業研究シーズ探索プログラム・「ホストゲスト化学に基づく薬物送達システムの開発」・代表・500万円（直接経費）・2010年 安東勢津子：日本学術振興会・科研費・基盤研究（C）・「薬剤の捕捉や送達及び放出が制御できる新規分子システムの開発」・代表・500万円（直接経費）・2013～2015年（予定） 草野 修平：日本私立学校振興・共済事業団 学術振興資金 若手研究者奨励金「タンパク質間相互作用の制御を目指した自己組織化分子の開発」・代表・50万円・2016年4月～2017年3月
最近5年間の代表者としての学内資金導入実績
林田 修：福岡大学領域別研究部理工学研究部研究チーム・「ナノ構造をもつシクロファン多量体の合成と機能」・119.2万円・2010年度～2012年度（分担者：松原 公紀（～2010年）・安東 勢津子・古賀 裕二（～2011年）） 林田 修：福岡大学推奨研究プロジェクト（一般）・「ナノ分子システムによる細胞内ホストゲスト化学の構築」・130万円・2011年度～2012年度（分担者：塩路 幸生・中川 裕之） 林田 修：福岡大学領域別研究部理工学研究部研究チーム・「機能性分子によるクラスター効果の発現とその制御に関する研究」・30.8万円（2014年度）、36.6万円（2015年度）・2014年度～2016年度（分担者：松原 公紀・草野 修平（2015年～））
最近5年間の学会等学術団体における役職など
林田 修：有機合成化学協会九州山口支部幹事、日本化学会九州支部幹事
最近5年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
林田 修：科学技術振興機構・戦略的創造研究事業研究シーズ探索プログラム研究成果報告書・「ホストゲスト化学に基づく薬物送達システムの開発」・2011年7月 http://www.jst.go.jp/kisoken/tansaku/seika.html 林田 修：科学技術振興機構・研究成果展開事業 研究成果最適展開支援プログラム A-STEP フィーチャビリティスタディステージ探索タイプ研究成果報告書・「ホストゲスト分子システムを基盤とする薬物送達および放出に関する探索研究」・2013年2月 http://www.jst.go.jp/a-step/hyoka/tansaku_h2502/tansaku_d.html
最近5年間の一般（非学術）集会での発表論文
該当なし
最近5年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
該当なし

研究室名
有機生物化学P研究室（有機金属化学）
最近の研究課題とその取り組みの概要
化学科有機生物化学P研究室有機金属化学グループでは、遷移金属元素に炭化水素化合物群が結合した有機金属化合物を新たに合成・構造決定し、触媒として用いて有機化学における新しい化学反応を開拓する研究を行っている。また、できるだけ効率良く燐光発光する機能的有機金属化合物を新たに設計・合成し、その評価を行っている。最近では、触媒として多用されているパラジウムやロジウムなどの貴金属元素に替わり、鉄・コバルト・ニッケル・銅を用いた触媒開発に注目し、特にニッケルを用いた研究では非常に珍しいニッケル 1 価の化合物の単離・構造決定に成功し、いくつかの化学反応に対して非常に高い触媒活性を持っていることを明らかにしている。また、これまでに明らかにされていない一連のコバルト化合物についても合成し、その構造と触媒能力について明らかにしている。 ラクトンや乳酸の 2 量体であるラクチドの開環重合を行う触媒の開発も行っている。Schiff 塩基を導入した 3 座の非対称型配位子を用意し、金属中心がキラリティをもつラセミ体錯体を使ってラセミ体ラクチドなどの立体選択的開環重合反応を開発している。これまでに、アルミニウム、マグネシウム錯体などを合成し、構造決定するとともに、重合触媒としての評価を行っている。 一方、イリジウム元素をもつ燐光発光性化合物の開発研究では、イリジウムに結合する配位子の結合配置に注目し、通常よりも高い量子収率で発光できる一連の化合物を発見している。また、配位子の構造に応じて発光特性がどのように変化するかを調査・考察している。
キーワード
有機金属化学、有機化学、錯体化学、高分子合成化学、発光材料
研究室の構成員
松原公紀（教授）・博士（工学） 古賀裕二（助教）・博士（理学）
2015 年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
D3：1 名、M2：2 名、M1：4 名、4 年次生：3 名 ・新規鉄触媒の開発研究 ・ニッケル 1 価錯体の開発と触媒反応開発研究 ・コバルト錯体を触媒とする不飽和炭化水素のヒドロホウ素化反応 ・ラクチドの開環重合を行うマグネシウム・亜鉛触媒の開発 ・発光性イリジウム錯体の設計と合成および発光特性
教員の担当科目
松原公紀：（学部）有機化学B、生物有機化学、基礎有機化学実験、有機生物化学実験、化学特別研究、卒業論文、化学実験、生活と環境の化学、基礎有機化学 I （大学院）化学講究、化学特別実験、有機生物化学特論 II 古賀裕二：（学部）基礎化学演習、化学実験、基礎有機化学実験、有機生物化学実験

教員の所属学会

松原公紀：日本化学会、高分子学会、有機合成化学協会、錯体化学会、アメリカ化学会
古賀裕二：日本化学会、高分子学会、有機合成化学協会

最近 5 年間の学術論文

- 古賀裕二・山崎裕美子・吉田奈々恵・鳥居香里・松本泰昌・松原公紀
ピリジンをもつ赤色燐光性イリジウムおよび白金錯体の合成と発光挙動 福岡大学理学集報, 45(1), 29-41 (2015).
- 松原 公紀
かさ高い N-ヘテロ環状カルベンをもつニッケル錯体触媒の開発とクロスカップリング反応への応用 有機合成化学協会誌, 72(10), 1110-1119 (2014).
- 松原 公紀・山本 瞳・長尾 慎哉・宮崎 智史・上野 景太・古賀 裕二
かさ高いカルベン配位子を持つニッケル分子触媒と触媒的クロスカップリング反応の開発 福岡大学理学集報, 42(2), 133-141 (2012).
(以降すべて査読有)
- H. Iwasaki, Y. Teshima, Y. Yamada, R. Ishikawa, Y. Koga, K. Matsubara, Bimetallic Cu(I) Complex with a Pyridine-Bridged Bis(1,2,3-triazole-5-ylidene) Ligand. Dalton Transactions 45, 5713–5719 (2016).
- H. Iwasaki, Y. Yamada, R. Ishikawa, Y. Koga, K. Matsubara, Isolation and Structures of 1,2,3-Triazole-Derived Mesoionic Biscarbenes with Bulky Aromatic Groups. Eur. J. Org. Chem. 1651-1654 (2016).
- H. Iwasaki, Y. Koga, K. Matsubara, Synthesis and Structure of Homoleptic Iron Complex Bearing Pincer-Type 1,2,3-Triazol-5-ylidene. Org. Chem. Curr. Res. S6, 1-5 (2016).
- K. Matsubara, A. Kumamoto, H. Yamamoto, Y. Koga, S. Kawata, Synthesis and Structure of Cobalt(II) Iodide Bearing a Bulky NHC ligand and Catalytic Activation of Bromoalkanes. J. Organomet. Chem., 727, 44-49 (2013).
- K. Matsubara, T. Sueyasu, M. Esaki, Y. Koga, S. Kawata, T. Matsumoto, Cobalt(II) Complexes Bearing a Bulky N-Heterocyclic Carbene Ligand: Preparation, Crystal Structures, and High Catalytic Activities toward Kumada-Tamao-Corriu Cross-Coupling Reaction. Eur. J. Inorg. Chem., (18), 3079-3086 (2012).
- K. Matsubara, C. Terata, H. Sekine, K. Yamatani, T. Harada, K. Eda, Y. Koga, M. Yasuniwa. Stereoselective Ring-Opening Polymerization of D,L-Lactide, Initiated by Aluminum Isopropoxides Bearing Tridentate Non-Chiral Schiff-Base Ligands. J. Polym. Sci. A: Polym. Chem., 50(5), 957-966 (2012).
- S. Nagao, T. Matsumoto, Y. Koga, K. Matsubara, Monovalent Nickel Complex Bearing a Bulky N-Heterocyclic Carbene Catalyzes Buchwald-Hartwig Amination of Aryl Halides under Mild Conditions. Chem. Lett., 40(9), 1036-1038 (2011).
- Y. Koga, M. Kamo, Y. Yamada, T. Matsumoto, K. Matsubara, Synthesis, Structures and Unique

Luminescent Properties of Tridentate C[∧]C[∧]N Cyclometalated Complexes of Iridium. Eur. J. Inorg. Chem., (18), 2869-2878 (2011).

B. Bichler, L. F. Veiros, Ö. Öztöpcü, M. Puchberger, K. Mereiter, K. Matsubara, K. A. Kirchner, Synthesis, Structure, Ligand Dynamics, and Catalytic Activity of Cationic [Pd(η^3 -allyl)(κ^2 (E,N)-EN-chelate)]⁺ (E = P, O, S, Se) Complexes. Organometallics, 30(21), 5928-5942 (2011).

最近 5 年間の学術著書

Y. Koga, K. Matsubara, "Synthesis and Luminescent Properties of Phosphorescent Iridium and Platinum Complex Polymers, Which Were Applied to OLED Devices", Organic Light Emitting Diode – Material, Process and Devices. Ed by S. H. Ko, InTech, 2011, Chapter 1, pp. 1-20.

最近 5 年間の学術国際会議での発表

Kouki Matsubara, Yuji Koga, Keita Nonaka, Takahiro Inatomi, Dinickel(I) Complexes Bearing Bulky NHC Ligand as Catalysts in the Kumada-Tamao-Corriu Coupling of Aryl Halides. PACIFICHEM2015, Hawaii, 2015年12月18日

Yuji Koga, Kouki Matsubara, Synthesis and Luminescence of Sterically Regulated Iridium Complexes. PACIFICHEM2015, Hawaii, 2015年12月18日

Takahiro Inatomi, Yuji Koga, Kouki Matsubara, Buchwald-Hartwig Amination of Aryl Halides Catalyzed by Ni(I) Complexes and Studies on the Reaction Mechanism. PACIFICHEM2015, Hawaii, 2015年12月18日

Keita Nonaka, Yuji Koga, Kouki Matsubara, Catalytic Hydroarylation Reaction of Alkenes Using Aryl Boronic Acid Ester. 13th International Kyoto Conference of Organic Chemistry, Kyoto, 2015年11月11日

Takahiro Inatomi, Yuji Koga, Kouki Matsubara, Buchwald-Hartwig Amination of Biaryl amines Catalyzed by Ni(I) Complexes and Studies on the Reaction Mechanism. 13th International Kyoto Conference of Organic Chemistry, Kyoto, 2015年11月11日

K. Matsubara, T. Inatomi, S. Tazaki, H. Iwasaki, Y. Koga, Monovalent Nickel Complexes as Catalysts in the Cross-Coupling Reactions. 2nd International Conference on Organometallics and Catalysis (OM&Cat-2014), Nara, 2014年10月27日

H. Iwasaki, Y. Koga, K. Matsubara, Synthesis and Structure of New Tridentate MesoIonic Carbene and Iron Complexes. 2nd International Conference on Organometallics and Catalysis (OM&Cat-2014), Nara, 2014年10月27日

K. Matsubara, A. Miura, H. Iwasaki, Y. Koga, Cobalt-Catalyzed Hydroboration of Unsaturated Hydrocarbons Using Pinacolborane. XVI International Conference on Organometallic Chemistry. Sapporo, 2014年7月17日

Y. Koga, K. Torii, K. Matsubara, Synthesis and Luminescence of Iridium Complexes with Liked Phenylpyridines. XVI International Conference on Organometallic Chemistry. Sapporo, 2014年7月17日

H. Iwasaki, Y. Koga, K. Matsubara, New Tridentate MesoIonic Carbene and its Iron Complexes.

XXVI International Conference on Organometallic Chemistry. Sapporo, 2014年7月17日 K. Matsubara, H. Yamamoto, Y. Koga, Dinickel(I) Catalysts Bearing Bulky NHC Ligand; Synthesis and Catalytic Behavior toward Cross-Coupling Reactions of Aryl Halides. XXV International Conference on Organometallic Chemistry. Lisbon, Portugal, 2012年9月3日 H. Yamamoto, Y. Koga, K. Matsubara, Dinickel(I) Complexes Bearing a Bulky N-Heterocyclic Carbene in Efficient Kumada-Tamao-Corriu Cross-Coupling Reactions: a Mechanistic Study. 10th International Conference of Hetero Atom Chemistry. Kyoto, 2012年5月22日 K. Matsubara, S. Nagao, H. Yamamoto, Y. Koga, Monovalent Nickel Mediated Efficient Buchwald-Hartwig Amination of Aryl Halides. 10th International Conference of Hetero Atom Chemistry. Kyoto, 2012年5月22日
最近5年間の学術的会議の開催実績（応用数学科・専攻のみ）
応用数学科・専攻のみ記載する。研究集会、談話会の主催について、集会名、日時、場所、講演者、題目を記す。
最近5年間の代表者としての学外資金導入実績
松原公紀：JST 科学技術振興機構・ALCA 戦略的創造研究創造事業「新規金属系負極の開発」・分担・2014年～2018年（終了予定）、日本学術振興会・科研費・基盤研究（C）「ニッケル1価錯体触媒開発を基軸とする汎用性触媒システムの開拓」・代表・410万円（直接経費）・2013年～2015年、日本学術振興会・科研費・基盤研究（C）「配位不飽和二核ニッケル錯体を鍵とする協奏触媒開発と汎用性触媒系の開拓」・代表・370万円（直接経費）・2011年～2013年（分担者：古賀裕二）
最近5年間の代表者としての学内資金導入実績
松原公紀：福岡大学推奨研究プロジェクト・「微細構造制御された有機－無機ナノハイブリッド材料の創製」・426万円・2011年～2013年（分担者：福田将虎）
最近5年間の学会等学術団体における役職など
松原公紀：有機合成化学協会・協会誌編集協力委員（2011年～2012年）、高分子学会九州支部幹事（2012年～2014年）、ISRN Organic Chemistry, Editorial Board（2011年～2013年）、Member of Organizing Committee, ICOMC2014（2013年～2014年）
最近5年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
古賀裕二、「有機EL技術のこれからと私たちの生活」七隈の杜, 8, 63-67 (2012).
最近5年間の一般（非学術）集会での発表論文
該当なし
最近5年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
該当なし
その他特筆事項
松原公紀：依頼講演・「かさ高いカルベン配位子を持つニッケル分子触媒の創生と触媒的クロスカップリング反応」・第46回有機金属若手の会 夏の学校・2013年7月、有機合成化学協会九州山口支部奨励賞受賞・「かさ高いカルベン配位子を持つニッケル分子触媒の創生と触媒的クロスカップリング反応の開発」・有機合成化学協会九州山口支部、2011年12月

研究室名
物質機能化学A研究室（機能性物質の分析化学）
最近の研究課題とその取り組みの概要
数十マイクロメートルサイズの液滴のマイクロ構造を解明するために、シンクロトロン放

射光とレーザー捕捉法を組み合わせ、エアロゾル液滴を測定できる X 線回折装置を開発している。得られた X 線回折データを EPSR シミュレーションにより、液滴のマイクロ構造を 3 次元で可視化する。エアロゾルを構成する種々の溶液の液滴のマイクロ構造を室温から過冷却温度にわたる決定することにより、液滴の物理化学的性質を構造化学的に考察し、液滴中の種々の化学プロセスのメカニズムを分子レベルで解明する。

1.0 GPa(1 万気圧)以上の高圧下の電解質水溶液は地殻やマントル上部に存在しており、金属鉱床や地殻中で進行する種々のプロセスに深く関わっている。超臨界状態を含む高温高圧水は、誘電率の減少やイオン積の増加により、常温常圧では得られない新機能性溶媒として振る舞う。金属鉱床や地殻中で進行する種々のプロセスや超臨界水を用いた金属酸化物ナノ微粒子の生成機構を明らかにするために、X 線・中性子回折やラマン散乱法、Empirical Potential Structure Refinement (EPSR) モデリングにより、高温高圧下の水、メタノール水溶液、電解質水溶液の構造を分子レベルで明らかにした。メソ細孔をもつ多孔性物質は、その大きな比表面積により触媒、吸着材、ドラッグデリバリーシステムなどの実用化研究が進められている。MCM-41 や Ph-PMO などの多孔性物質中に閉じ込めた水や有機溶媒の構造とダイナミクスを X 線・中性子散乱法により明らかにした。細孔中の低温水において高密度水-低密度水転位が 225 K で起こることを明らかにした。タンパク質をはじめとする生体関連分子はその周囲を取り巻く水によってユニークな構造に折り畳まれ、機能を発揮する。不凍タンパク質などを研究対象とし、その水和水の構造とダイナミクスを X 線・中性子散乱実験、分子動力学シミュレーションなど物理化学的手段で調べ、タンパク質の機能発現における水や溶媒の役割を分子論的に明らかにした。また、ナノ粒子分散液やリチウム電池電解液の溶媒の X 線・中性子散乱測定を行い、これら機能性流体の機能発現原理を液体のダイナミクスの観点から調べた。

高い機能性を有する新規機能性材料や金属錯体はその反応が主に溶液中で行われているため、高い機能を有する金属錯体の創成を行うためには、溶液中での溶存構造や反応機構を解明する必要がある。溶液中の金属イオンや金属錯体の溶存構造を明らかにするために、紫外可視吸光分光法と Discrete Variation – Multi Electron (DV-ME) 分子軌道法を用いて塩化チタン水溶液中のチタンイオンの水和構造を明らかにした。さらに、イオン液体中のリチウムおよびナトリウムイオンや金ナノ粒子の溶存構造を明らかにするために XPS 測定を行った。その結果、イオン液体の表面ではイオン液体の陽イオンと陰イオンの組成が溶質により異なっていることを明らかにした。また、機能性物質として酸化チタンに P などの軽元素を組み込んだ可視光応答型酸化チタンの合成および有機物の分解反応の研究を行った。軽元素を組み込む際に、市販の試薬を用いることで、合成時間の短縮が可能となった。また、新しく合成した酸化チタンを用いた触媒能実験から、従来法で合成した酸化チタンと同等の性能を有していることが示された。幕末から明治初期に作られた歴史鉄試料の蛍光 X 線および ICP-MS 測定を行った。試料中の希土類イオンの存在比や鉛の同位体比から原料の産地特定が可能であることを明らかにした。

キーワード：超臨界水、多孔性物質、水の構造とダイナミクス、タンパク質、X 線散乱、中性子散乱、水とイオン、酸化チタン、歴史鉄

研究室の構成員

山口敏男（教授）・理学博士 栗崎 敏（准教授）・博士（理学） 吉田亨次（助教）・博士（工学） Ingmar Persson (Swedish University of Agricultural Sciences)(Professor)(2016.03.02-2016.03.30) Mou, Chung-Yuan (National Taiwan University, Taiwan)(Professor)(2014.11.08-2014.12.07) Pierre Turq (Universite Pierre & Marie Curie Paris, France) (Professor)(2013.11.27-2013.12.12) Soper, Alan K. (ISIS, United Kingdom) (SFTC Senior Fellow) (2013.02.16 – 2013.03.03) Bellissent-Funel, Marie-Claire (Laboratoire Léon Brillouin, France) (Director of Research) (2012.12.03 – 2012.12.23) Kempter, Volker (Clausthal University of Technology, Germany) (Professor) (2012.12.03 – 2012.12.23)
2015 年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
M2:3 名、M1:3 名、4 年次生：11 名
教員の担当科目
山口敏男：（学部）科学英語、無機分析化学 A、物質機能化学 C、無機分析化学実験、ナノ材料評価実験、物質機能化学実験、化学特別研究、卒業論文 （大学院）物質機能化学特論Ⅱ、水圏物質化学特論Ⅱ、物質機能化学講究、物質機能化学特別実験、修士論文 栗崎 敏：（学部）機器分析化学、物質機能化学 C、環境分析化学、基礎無機化学、無機分析化学実験、物質機能化学実験、化学実験、化学特別研究、卒業論文 （大学院）物質機能化学特論Ⅰ、物質機能化学講究、物質機能化学特別実験 吉田亨次：（学部）情報化学、情報活用基礎、無機分析化学実験、物質機能化学実験、ナノ材料評価実験、卒業論文（補助） （大学院）修士論文（補助）
教員の所属学会
山口敏男：日本化学会、日本分析化学会、電気化学会、日本中性子科学会、日本放射光学会、日本結晶学会、化学工学会、日本高圧力学会、錯体化学会、分子科学会、溶液化学研究会 日本食品科学工学会 栗崎 敏：日本化学会、日本分析化学会、DV-Xα 研究協会、錯体化学会、希土類学会、日本結晶学会 吉田亨次：日本化学会、日本分析化学会、日本高圧力学会、溶液化学研究会、日本中性子科学会、日本生物物理学会、分子科学会
最近 5 年間の学術論文
（すべて査読有） K. Yoshida, A. Q. R. Baron, H. Uchiyama, S. Tsutsui, T. Yamaguchi, Structure and collective dynamics of hydrated anti-freeze protein type III from 180 K to 298 K by X-ray diffraction and inelastic X-ray scattering J. Chem. Phys. 144, 134505 (2016); doi: 10.1063/1.4944987 K. Yoshida, A. Tashiro, T. Yamaguchi, Thermal properties and hydration structure of poly-L-lysine,

- polyglycine, and lysozyme, *J. Mol. Liquids* 217, 57–61 (2016); doi:10.1016/j.molliq.2015.08.048
- T. Yamaguchi, T. Yonezawa, K. Yoshida, T. Yamaguchi, M. Nagao, A. Faraone, S. Seki, Relationship between Structural Relaxation, Shear Viscosity, and Ionic Conduction of LiPF₆/Propylene Carbonate Solutions, *J. Phys. Chem. B* 119 (51), 15675-15682 (2015); doi:10.1021/acs.jpcc.5b08701
- T. Takekiyo, E. Yamaguchi, K. Yoshida, M. Kato, T. Yamaguchi, Y. Yoshimura, Interaction Site between the Protein Aggregates and Thiocyanate Ion in Aqueous Solution: A Case Study of 1-Butyl-3-methylimidazolium Thiocyanate, *J. Phys. Chem. B* 119 (22), 6536–6544 (2015); doi:10.1021/acs.jpcc.5b01650
- 吉田 亨次、鳥越 基克、山口 敏男、メソ細孔性シリカ MCM-41 中のグリシンの水和構造, 福岡大学理学集報 45(2), 99-106 (2015).
- H. Wakita, T. Kurisaki, Y. Ohbana, T. Yamaguchi, C. Numako, T. Yokoyama, S. Nagano, Analytical Chemistry Study on Cannon Balls Prepared at Late Edo and Meiji Period from Saga, Izumo and South Morioka, *Proc. 5th International Symposium on History of Indigenous Knowledge*, 5, 127-137 (2015)
- 山口敏男、李孝成、山内希夫、福山菜美、吉田亨次、ラマン散乱、X 線回折、及び Empirical Potential Structure Refinement モデリングによる亜臨界硝酸マグネシウム水溶液の三次元構造の可視化、分析化学、64, 295-308 (2015).
- 吉田亨次、山口敏男「量子ビームで見るタンパク質の水和現象」, 分析化学, 64, 283-293 (2015)
- K. Yoshida, T. Yamaguchi, D. Kawana, T. Yokoo, S. Itoh, Neutron Brillouin scattering of hydrated β -lactoglobulin, *MLF Annual report 2013*, 33-34 (2014).
- K. Ito, K. Yoshida, M.-C. Bellissent-Funel, T. Yamaguchi, Dynamic Properties of Water Confined in Sephadex G15 Gel by Quasi-elastic Neutron Scattering and Neutron Spin Echo Measurements, *Bull. Chem. Soc. Jpn.* 87(5), 603-608 (2014) (Selected papers)
- 山口敏男、吉田亨次、「中性子散乱による原子・分子のダイナミクスの観測Ⅲ—1 細孔中の水のダイナミクス 過冷却水の相転移」, *RADIOISOTOPES*, 63(6), 331-342 (2014).
- T. Kurisaki; M. Etou; Y. Okaue; H. Wakita; T. Yokoyama, Acid Properties and Al³⁺ Complex Formation of Synthesized 2, 3-Dihydroxyterephthalic Acid, (DHTPA) at pH 3 as a Model Compound of Inogashira Fulvic Acid (IFA), *Polyhedron* 72, 135-139, (2014).
- Y. Obana, T. Kurisaki, C. Numako, S. Nagano, T. Yokoyama, T. Yamaguchi, Analysis of Historical Iron Samples Distribution all over Japan by Means of ICP-MS and Portable Type XRF *Proc. 4th International Symposium on History of Indigenous Knowledge*, 4, 138-144 (2014).
- K. Yoshida, Y. Fukushima, T. Yamaguchi, “A study of alcohol and temperature effects on aggregation of β -lactoglobulin by viscosity and small-angle X-ray scattering measurements”, *J. Mol. Liquids* 189, 1-8 (2014).
- 吉田 亨次、藤村 恒児、内 和哉、片山 芳則、山口 敏男「エネルギー分散 X 線回折と EPSR 法による高温高压水の構造解析」*高圧力の科学と技術*, 23(4), 309-318 (2013).
- K. Fujii, M. Shibayama, T. Yamaguchi, K. Yoshida, T. Yamaguchi, S. Seki, H. Uchiyama, A. Q. R. Baron,

- Y. Umebayashi, “Collective dynamics of room-temperature ionic liquids and their Li ion solutions studied by high-resolution inelastic X-ray scattering”, *J. Chem. Phys.* 138, 151101-1-4 (2013).
- C. Tahara, Y. Toyose, H. I. Ogawa, T. Yamaguchi, T. Yoshinaga, Specificity of lucigenin solubility and solvents and bases effects on lucigenin chemiluminescence, *Bull. Chem. Soc. Jpn.* 86(5), 635-641 (2013).
- S. Kittaka, S. Takahara, H. Matsumoto, Y. Wada, T. Satoh, T. Yamaguchi, Low temperature phase properties of water confined in mesoporous silica MCM-41: Thermodynamic and neutron scattering study, *J. Chem. Phys.* 138, 204714 (9 pages) (2013).
- K. Ito, K. Yoshida, K. Ujimoto, T. Yamaguchi, Thermal behavior and structure of low-temperature water confined in Sephadex G15 Gel by differential scanning calorimetry and large-angle X-ray diffraction measurements, *Anal. Sci.*, 29(3), 353–359 (2013).
- M. Aso, K. Ito, H. Sugino, K. Yoshida, T. Yamada, O. Yamamuro, T. Yamaguchi, Thermal behavior, structure, and dynamics of low-temperature water confined in mesoporous organosilica by differential scanning calorimetry, X-ray diffraction, and quasi-elastic neutron scattering, *Pure Appl. Chem.* 85(1), 289–305 (2013).
- T. Yamaguchi, S. Imura T. Kai, and K. Yoshida, Structure of Hexafluoroisopropanol–Water Mixtures by Molecular Dynamics Simulations”, *Z. Naturforsch.* 68a, 145-151 (2013).
- T. Kurisaki, Y. Matsuki, H. Wakita, Synthesis and Equilibrium Study of Nickel(II), Copper(II), and Zinc(II) Complexes with N,N',N'',N''',N''',N''''-Hexakis(2-aminoethyl)-1,4,7,10,13,16-hexaazacyclooctadecane in an Aqueous Solution *Polyhedron* 65, 200-205, (2013).
- M. Etou, T. Kurisaki, Y. Okaue, H. Wakita, T. Yokoyama, ¹³C and ²⁷Al NMR Study of Complexation between Aluminium Ion and Simple Dicarboxylic Acids under an Acidic Condition: New Peak Assignments of ²⁷Al NMR Spectra of Mixed Solutions of Al³⁺ and Simple Dicarboxylic Acids, *Anal. Sci.*, 29 843-848, (2013).
- M. Iwase, K. Yamada, T. Kurisaki, H. Wakita, Characterization and photocatalytic activity of nitrogen-doped titanium(IV) oxide prepared by doping titania with TiN powder, *Appl. Catal. A*, 455(30) 86-91 (2013).
- M. Iwase, K. Yamada, T. Kurisaki, O. O. Prieto-Mahaney, B. Ohtani, H. Wakita, Visible-light photocatalysis with phosphorus-doped titanium(IV) oxide particles prepared using a phosphide compound. *Appl. Catal. B*, 132-133(27) 39-44 (2013).
- T. Kurisaki, M. Hamano, H. Wakita, [Bromo(1,4,7,10,13-pentaazacyclohexadecane)cobalt(III) Bromide] Dihydrate. *Acta Cryst.*, E69, m179-m180 (2013).
- T. Yamaguchi, K. Fujimura, K. Uchi, K. Yoshida, Y. Katayama, “Structure of water from ambient to 4 GPa revealed by energy-dispersive X-ray diffraction combined with empirical potential structure refinement modeling”, *J. Mol Liquids* 176, 44-51 (2012).
- 吉田 亨次・早田 葵・麻生真以・伊藤華苗・橘高茂治・稲垣伸二・山口敏男, 「メソポーラスシリカならびに規則性メソポーラス有機シリカ内に閉じ込められた水の構造とダイナミク

ス」, 分析化学, 61 (12), 989-998 (2012).

K. Ito, K. Yoshida, S. Kittaka, T. Yamaguchi, "Pore Size Dependent Behavior of Hydrated Ag^+ Ions Confined in Mesoporous", Anal. Sci. 28, 639-642 (2012).

K. Yoshida, K. Vogtt, Z. Izaola, M. Russina, T. Yamaguchi, M.-C. Bellissent-Funel, "Alcohol Induced Structural and Dynamic Changes in β -Lactoglobulin in Aqueous Solution: A Neutron Scattering Study", BBA - Proteins and Proteomics, 1824, 502-510 (2012).

池田一貴、大友季哉、鈴谷賢太郎、三沢正勝、木下英敏、坪田雅巳、金子直勝、瀬谷智洋、福永俊晴、伊藤恵司、亀田恭男、山口敏男、吉田亨次、丸山健二、社本真一、樹神克明、川北至信、藤崎布美佳、高強度中性子全散乱装置NOVAによる水素貯蔵材料の構造解析、水素エネルギーシステム、37(4)、(2012).

K. Yoshida, T. Yamaguchi, S. Kittaka, M.-C. Bellissent-Funel, P. Fouquet, "Neutron spin echo measurements of monolayer and capillary condensed water in MCM-41 at low temperatures", J. Phys: Condens. Matter 24, (2012) 064101 (9pp).

T. Kurisaki, D. Tanaka, Y. Inoue, H. Wakita, T. Mimitsugi, S. Fukuda, S. Ishiguro, Y. Umebayashi, The Surface Analysis of Ionic Liquids Using X-ray Photoelectron Spectroscopy. J. Phys. Chem. B, 116, 10870-10875 (2012).

T. Yamaguchi, H. Sugino, K. Ito, K. Yoshida, S. Kittaka, "X-ray diffraction study on monolayer and capillary-condensed acetonitrile in mesoporous MCM-41 at low temperatures", J. Mol. Liq., 164, 53-58 (2011).

S. Kittaka, Y. Ueda, F. Fujisaki, T. Iiyama, T. Yamaguchi, Mechanism of freezing of water in contact with mesoporous silicas MCM-41, SBA-15 and SBA-16: role of boundary water of pore outlets in freezing, Phys. Chem. Chem. Phys., 13, 17222-17233 (2011).

T. Shimomura, T. Takamuku, T. Yamaguchi, Clusters of imidazolium-based ionic liquids in benzene solutions, J. Phys. Chem. B, 115, 8518-8527 (2011).

山口敏男、吉田亨次、伊藤華苗、橘高茂治、高原周一、メソポーラス物質MCM-41中に閉じ込めた低温水の熱挙動、構造とダイナミクス、分析化学、60(2)、115-130 (2011).

李孝成、藤村恒児、吉田亨次、山口敏男、X線回折法及びラマン散乱法による30 MPa一定、25°Cから350°Cにおける硝酸亜鉛(II)水溶液の構造解析、福岡大学理学集報, 41(1), 29-37 (2011).

岩瀬元希、藤尾侑輝、長濱 俊、山田啓二、栗崎 敏、脇田久伸、新規リンドーブ酸化チタンのXRD・XPSによる解析、X線分析の進歩、42、213-219 (2011).

最近5年間の学術著書

山口敏男、赤外吸収・ラマンスペクトル分析法（分担）、新版入門機器分析化学、庄野利之、脇田久伸（編者）、三共出版、2015、29-57.

山口敏男、X線分析法（分担）、新版入門機器分析化学、庄野利之、脇田久伸（編者）、三共出版、2015、87-118.

栗崎 敏、表面分析（分担）、新版入門機器分析化学、庄野利之、脇田久伸（編者）、三

共出版、2015、238-240.

山口敏男：溶媒の構造、「錯体の溶液化学」、横山晴彦・田端正明編著、三共出版、11~25頁、2012年5月

栗崎 敏：容量分析、「コンパクト分析化学」、脇田久伸・横山拓史編著、三共出版 32~66頁、2013年3月

栗崎 敏：X線を用いた溶存錯体の構造解析、「錯体の溶液化学」、横山晴彦・田端正明編著、三共出版、32~66頁、2012年5月

最近5年間の学術国際会議での発表

T. Yamaguchi, N. Fukuyama, K. Yoshida, O. Yagafarov, Y. Katayama, Structure of ion hydration in the Gigapascal range, 34th International Conference of Solution Chemistry, Prague, August 30 – September 3, 2015.

T. Yamaguchi, Y. Fukushima, K. Ito, K. Yoshida, Y. Goto, S. Inagaki, P. Fouquet, M.-C. Bellissent-Funel, K. Elamin, J. Swenson, Dynamics and structure of low-temperature water confined in mesoporous organosilica with hydrophilic-hydrophobic hybrid interface, 34th International Conference of Solution Chemistry, Prague, August 30 – September 3, 2015.

T. Yamaguchi, Y. Fukushima, K. Ito, K. Yoshida, Y. Goto, S. Inagaki, P. Fouquet, M.-C. Bellissent-Funel, K. Elamin, J. Swenson, Dynamics of low-temperature water confined in periodic mesoporous organosilica with different hydrophobic walls, 2015 MRS Fall Meeting, Boston, November 29 – December 4, 2015.

K. Yoshida, T. Yamaguchi, S. Hosokawa, A. Q. R. Baron, Collective dynamics of hydrated protein and polypeptides by Inelastic X-ray Scattering, EMLG-JMLG annual meeting 2015, Rostock, September, 2015.

K. Yoshida, T. Yamaguchi, T. Takekiyo, Y. Yoshimura, Stabilization of α -Helix structure of Ribonuclease A induced by Alkylammonium Nitrates, EMLG-JMLG annual meeting 2015, Rostock, September, 2015.

H. Wakita, T. Kurisaki, Y. Ohbana, T. Yamaguchi, C. Numako, T. Yokoyama, S. Nagano, Analytical Chemistry Study on Cannon Balls Prepared at Late Edo and Meiji Period from Saga, Izumo and South Morioka, 5th International Symposium on History of Indigenous Knowledge, China November 8-12, 2015

T. Yamaguchi, On the properties of confined water at the molecular level, The 15th IUMRS-International Conference in Asia (IUMRS-ICA 2014), August 24-30, 2014, Fukuoka (Japan). (Invited lecture)

T. Yamaguchi, K. Yoshida, S. Kittaka, M.-C. Bellissent-Funel, P. Fouquet, The experimental evidence of the liquid-liquid phase transition in confined water, 2nd J-PARC Symposium 2014, July 13-14, 2014, Tsukuba (Japan).

S. Kittaka, T. Miyatoh, M. Mizuno, K. Yoshida, T. Yamaguchi, M.-C. Bellissent-Funel, P. Fouquet, Low temperature dynamics of water confined in the micropore of SBA-16 studied by NMR and neutron spin echo measurements, 10th International Symposium on the Characterization of Porous

Solid (COPS-X), May 11-14, 2014, Granada (Spain).

T. Yamaguchi, K. Fujimura, N. Fukuyama, K. Yoshida, Y. Katayama, Structure of water and ion hydration in the Gigapascal range, International Conference on Water Science, April 14-17, 2014, Beijing, China (Invited lecture).

Y. Obana, T. Kurisaki, C. Numako, S. Nagano, T. Yokoyama, T. Yamaguchi, Analysis of Historical Iron Samples Distribution all over Japan by Means of ICP-MS and Portable Type XRF Proc. 4th International Symposium on History of Indigenous Knowledge, Saga, October 25-29, 2014

K. Yoshida, T. Yamaguchi, Thermal properties, structure, and dynamics of hydrated proteins, International Meeting on Applications of Statistical Mechanics of Molecular Liquid on Soft Matter, September 14–17, 2014, Bangkok, Thailand (Invited).

T. Yamaguchi, Structure and dynamics of liquids in hydrophilic to hydrophobic mesopores, EMLG/JMLG Annual Meeting, September 9 –13, 2013, Lille, France (Plenary lecture).

T. Yamaguchi, Thermal behavior, structure and dynamics of low-temperature water confined in mesoporous materials, Water at Interface, April 15-26, 2013, des Houches, France (Invited lecture).

K. Yoshida, T. Yamaguchi, “Structure and dynamics of hydrated proteins revealed by X-ray scattering”, EMLG/J MLG annual meeting, Lille (France), September, 2013.

K. Yoshida, N. Fukuyama, T. Yamaguchi, S. Hosokawa, H. Uchiyama, S. Tsutsui, A. Q. R. Baron, “Collective dynamics of liquid benzene”, EMLG/J MLG annual meeting, Lille (France), September, 2013.

K. Yoshida, T. Yamaguchi, “Terahertz dynamics and structure of hydrated protein studied by X-ray scattering”, 33rd International Conference on Solution Chemistry, Kyoto, July, 2013.

K. Yoshida, T. Yamaguchi, “Collective dynamics of hydrated protein measured by X-ray scattering”, Pre-symposium of 33ICSC (Wakita Symposium) “Recent Progress in Analytical Sciences”, Fukuoka, July, 2013.

Y. Fukushima, K. Yoshida, T. Yamaguchi, Effect of methanol and trifluoroethanol on thermal denaturation of β -lactoglobulin, 33rd International Conference on Solution Chemistry, Kyoto, July, 2013.

N. Fukuyama, X. C. Li, K. Yoshida, Y. Katayama, T. Yamaguchi, X-ray and neutron diffraction and EPSR modeling of an aqueous NaCl solution from ambient pressure to 2 GPa, 33rd International Conference on Solution Chemistry, Kyoto, July, 2013.

T. Kurisaki, D. Tanaka, Y. Inoue, H. Wakita, B. Minofar, S. Fukuda, S. Ishiguro and Y. Umebayash, The Surface Analysis of Ionic Liquids Using X-ray Photoelectron Spectroscopy, 33rd International Conference on Solution Chemistry, Kyoto, July, 2013.

T. Kurisaki, D. Tanaka, Y. Inoue, H. Wakita, B. Minofar, S. Fukuda, S. Ishiguro and Y. Umebayash, Electronic Structure Analysis of Ionic Liquids Using X-Ray Photoelectron Spectroscopy, ASIANALYSIS XII, Fukuoka, August, 2013.

N. Fukuyama, K. Yoshida, O. Yagafarov, Y. Katayama, T. Yamaguchi, X-ray diffraction of a 2 molal magnesium chloride solution from ambient pressure to 2 GPa, ASIANALYSIS XII, Fukuoka,

August, 2013.

- Y. Obana, T. Kurisaki, C. Numako, H. Wakita, T. Yamaguchi, Analysis of Historical Iron Samples in Edo and Meiji Era by Means of ICP-MS and Portable type XRF, ASIANALYSIS XII, Fukuoka, August, 2013.
- K. Ito, K. Yoshida, M.-C. Bellissent-Funel, T. Yamaguchi, Thermal behavior, structure and dynamic properties of water confined in Sephadex G15, Water at Interface; New Development in Physics, Chemistry, and Biology, des Houches, France, April 2013.
- T. Yamaguchi, M. Aso, K. Ito, K. Yoshida, T. Yamada, O. Yamamuro, Dynamics of water confined in some periodic mesoporous organosilica, QENS/WINS2012, Nikko (Japan), October, 2012 (Invited lecture).
- T. Yamaguchi, M. Aso, H. Sugino, K. Ito, K. Yoshida, T. Yamada, O. Yamamuro, Thermal behaviour, structure and dynamics of low-temperature water confined in periodic mesoporous organosilica, 12th Eurasia Conference on Chemical Sciences (EuAsC2S-12), Corfu (Greece), April, 2012(Invited lecture).
- T. Yamaguchi, M. Aso, H. Sugino, K. Ito, K. Yoshida, T. Yamada, O. Yamamuro, Thermal behaviour, structure and dynamics of low-temperature water confined in periodic mesoporous organosilica, EMLG/JMLG annual meeting, Eger (Hungary), September, 2012.
- T. Yamaguchi, M. Aso, K. Ito, K. Yoshida, T. Yamada, O. Yamamuro, Dynamics of water confined in some mesoporous organosilica, QENS2012, October 2012(Invited lecture).
- K. Yoshida, T. Yamaguchi, "Alcohol effect on structure, dynamics, and aggregation of peptide and protein", EMLG/JMLG annual meeting, Eger (Hungary), September, 2012.
- K. Yoshida, A. Soda, T. Yamaguchi, S. Kittaka, M.-C. Bellissent-Funel, P. Fouquet, "Structure and Dynamics of Monolayer and Capillary Condensed Water Confined in Mesoporous Silica MCM-41", 12th Eurasia Conference on Chemical Sciences (EuAsC2S-12), Corfu (Greece), April, 2012.
- T. Yamaguchi, Structure and Dynamics of Liquids and Solutions in Confinement, The 31st International Conference of Solution Chemistry, La Grande Motte, France, August 27-September 2, 2011 (Plenary lecture).
- T. Yamaguchi, K. Fujimura, K. Uchi, K. Yoshida, Y. Katayama, Structure of water and methanol-water mixture from ambient pressure to 4 GPa by energy dispersive X-ray and neutron diffraction and EPSR modelling, EMLG/JMLG Annual Meeting, Warsaw, Poland, September 11-15, 2011.
- T. Takamuku, T. Shimomura, T. Yamaguchi, Cluster of imidazolium-based ionic liquid in benzene solutions, EMLG/JMLG Annual Meeting, Warsaw, Poland, September 11-15, 2011.
- K. Yoshida, T. Yamaguchi, S. Kittaka, M.-C. Bellissent-Funel, P. Fouquet, D. Bowron, "Structure and dynamics of low-temperature water confined in porous silica", Liquid Matter Conference, Wien, Austria, September 6-10, 2011.
- M. Aso, K. Ito, H. Sugino, K. Yoshida, T. Yamada, O. Yamamuro, T. Yamaguchi, Dynamics of water confined in periodic mesoporous organosilica (PMO) by quasi-elastic neutron scattering,

International Conference of Analytical Sciences, Kyoto, May 22-26, 2011.

T. Yamaguchi, T. Nagaki, K. Ito, K. Yoshida, S. Kittaka, M.-C. Bellissent-Funel, P. Fouquet, Thermal behavior, structure and dynamics of low-temperature water confined in mesoporous MCM-41 materials, 1st Asia-Oceania Conference on Neutron Scattering, Tsukuba, November 20-24, 2011.

M. Aso, K. Ito, H. Sugino, K. Yoshida, T. Yamada, O. Yamamuro, T. Yamaguchi, Structure and dynamics of water confined in periodic mesoporous organosilica by X-ray diffraction and quasi-elastic neutron scattering, 1st Asia-Oceania Conference on Neutron Scattering, Tsukuba, November 20-24, 2011.

T. Yamaguchi, H. Sugino, K. Ito, K. Yoshida, T. Takamuku, S. Takahara, S. Kittaka, Structural and dynamic properties of liquids confined in mesoporous silica as drug delivery system, IUPAC International Congress on Analytical Sciences, Kyoto, May 2011.

M. Aso, K. Ito, H. Sugino, K. Yoshida, T. Yamada, O. Yamamuro, S. Inagaki, T. Yamaguchi, Dynamics of water confined in periodic mesoporous organosilica by quasielastic neutron scattering, IUPAC International Congress on Analytical Sciences, Kyoto, May 2011.

M.-C. Bellissent-Funel, K. Yoshida, T. Yamaguchi, S. Kittaka, P. Fouquet, "Dynamics of nano-confined water, 5th European Conference on Neutron Scattering", Prague, July, 2011.

Wakita, H., Kurisaki, T., Kokubu, S., Numako, C., Nagano, S., Analytical Chemical Study of Historical Iron Samples by Using Various X-Ray Analytical Methods. International Symposium on History of Indigenous Knowledge, China, October, 2011

Kurisaki, T., Sakogawa, Y., Miki, Y., Kokubu, S., Minami, K., Yokoyama, S., Wakita, H., The Characterization of light element ions in aqueous solution by soft X-ray absorption spectral measurement apparatus using polycapillary X-ray optics. International Conference of Analytical Sciences, Kyoto, May, 2011

Iwase, M., Yamada, K., Kurisaki, T., Wakita, H., X-ray analysis of phosphorus-doped TiO₂ with visible-light photocatalytic activity. International Conference of Analytical Sciences, Kyoto, May, 2011

最近5年間の代表者としての学外資金導入実績

吉田亨次：豊田中央研究所・共同研究「ナノ流体中の溶媒の構造解析」45万円（直接経費）・2015年

山口敏男：日本学術振興会・科研費・基盤研究B「X線を用いるエアロゾル液滴のマイクロ構造解析装置の開発とその応用」（26288073）（代表）670万円（直接経費）・2014～2017年（分担者：栗崎敏、石坂昌司）

山口敏男：日本学術振興会・科研費・基盤研究C「メソポーラス有機シリカ中の液体の構造とダイナミクス」（23550028）（代表）400万円（直接経費）・2011年～2013年

山口敏男：大学共同利用機関法人高エネルギー加速器研究機構・受託研究・「中性子実験装置による水素貯蔵材料に関する共通基盤研究」（100175）（代表）227万（直接経費）・2010～2011年（分担者：吉田亨次）

栗崎 敏：日本学術振興会・科研費・基盤研究 C「実験室系 XAFS および紫外可視吸収スペクトル同時測定装置の開発と触媒反応への応用」・代表・400 万円（直接経費）・2013～2015 年 栗崎 敏：日本学術振興会・科研費・基盤研究 C「金属錯体の溶存構造解析用実験室系 in-situ X 線吸収スペクトル測定装置の開発」・代表・360 万円（直接経費）・2010～2012 年 吉田亨次：日本学術振興会・科研費・基盤研究（C）「集団ダイナミクスと液体構造解析によるタンパク質水和水の液体-液体相転移の研究」(25390130)（代表）400 万円（直接経費）・2013～2015 年 吉田亨次：日本学術振興会・科研費・新学術領域研究(研究領域提案型)「水を主役とした ATP エネルギー変換」 公募研究 「中性子散乱によるアクチンフィラメント形成機構の解明」(23118718)（代表）360 万円（直接経費）2011 年～2012 年 吉田亨次：日本学術振興会・科研費・基盤研究（C）「不凍タンパク質の機能発現と水の動的クロスオーバーの関係」(22550024)（代表）360 万円（直接経費）2010 年～2012 年
最近 5 年間の代表者としての学内資金導入実績
山口敏男：推奨研究「新機能多孔性物質の合成・構造・物性」(127002)（代表）105 万円・2012～2014 年（分担者：川田 知、栗崎 敏） 山口敏男：領域別研究「ナノ多孔性材料の合成・構造・機能の研究」(125004)（代表）52.6 万円・2012～2014 年（分担者：吉田亨次） 山口敏男：大学院高度化推進特別経費（外国人招へい）（代表）70 万円・2012 年 吉田亨次：推奨研究「水和水を基調とした生体分子の分子認識機構の研究」・244 万円・2011～2013 年（分担者：塩井成留実）
最近 5 年間の学会等学術団体における役職など
山口敏男： 日本分析化学会九州支部幹事 1987 年 4 月～現在 日本分析化学会本部理事 2011 年 3 月～2013 年 2 月 日本分析化学会九州支部長 2010 年 3 月～2011 年 2 月 溶液化学研究会会長 2015 年 4 月～現在 溶液化学研究会副運営委員長 2006 年 4 月～2015 年 3 月 中性子課題審査分会分科会委員 2011 年 9 月～2013 年 3 月 独立行政法人日本原子力研究開発機構任期付研究員研究業績評価委員会委員 2013 年 3 月 中性子課題審査分会委員及び分科会委員 2013 年 7 月～2015 年 3 月 一般財団法人総合科学研究機構東海事業センター利用研究課題審査委員会「分科会」委員 2011 年 10 月～2013 年 3 月 一般財団法人総合科学研究機構利用研究課題審査委員会委員 2013 年 5 月～2015 年 3 月 一般財団法人総合科学研究機構利用研究課題審査委員会「分科会」委員 2013 年 7 月～2015 年 3 月 一般財団法人総合科学研究機構東海事業センター 利用研究課題審査委員会分科会レフェリー 2013 年 5 月～2015 年 3 月 国立研究開発法人 日本原子力研究開発機構 研究嘱託 2015 年 7 月～2016 年 3 月 一般財団法人総合科学研究機構 選定委員会委員 2015 年 5 月～2017 年 3 月

EMLG/JMLG International Advisory Board member 2003 年～現在 International Conference on Solution Chemistry Steering Committee member 2009 年～現在 Eurasia Conference of Chemical Sciences International Advisory Board member 2008 年～現在 Journal of Molecular Liquids, Editor-in-Chief 2013～現在 Journal of Solution Chemistry, Associate Editor 2008～現在 33rd International Conference on Solution Chemistry, Chairman 2013 年 7 月 栗崎 敏： 第 57 回分析化学講習会 実行委員 2015 年 日本分析化学会九州支部幹事 2005 年 3 月～現在 DV-X_α研究協会常任幹事 2010 年 4 月～現在 吉田 亨次： 日本中性子科学会 行事幹事 2015 年 3 月～現在 九州分析化学若手の会世話人 2016 年 日本高圧学会評議員 2014 年 9 月～現在 日本化学会新領域研究グループ「機能性ソフトマテリアルと分子統計化学」メンバー 2013 年 4 月～現在 公益財団法人新世代研究所 水和ナノ構造研究会委員 2013 年 4 月～2015 年 3 月 一般財団法人総合科学研究機構利用研究課題審査委員会分科会レフェリー 2011 年 8 月～現在 日本分析化学会九州支部幹事 2011 年 3 月～現在 日本分析化学会九州支部会計幹事, 2010 年 3 月-2011 年 2 月
最近 5 年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
該当なし
最近 5 年間の一般（非学術）集会での発表論文
該当なし
最近 5 年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
該当なし
その他特筆事項
山口敏男：日本分析化学会 学会賞を受賞 2013 年 9 月 伊藤華苗：日本分析化学会九州支部 九州分析化学奨励賞を受賞 2013 年 9 月 山口敏男：日本学術振興会・特別研究員等審査会専門委員及び国際事業委員会書面審査委員、2010 年 8 月～2012 年 7 月

研究室名
物質機能化学 I 研究室（金属錯体集積体）

最近の研究課題とその取り組みの概要
物質機能化学 I 研究室金属錯体集積体研究グループでは、ナノメートルサイズに集合した遷移金属錯体集積体の合成と物性を中心に研究している。遷移金属錯体をビルディングブロックとし、階層構造を有する金属錯体集積体は、複合化した構造と単一の金属錯体にはない量子的性質を持つことから、多面的な物性発現が期待されている。また、細孔構造を有する集積体においては、細孔の特異的な環境から生じるホストゲスト相互作用により、様々なゲスト分子の導入とそれをトリガーとする新規機能の発現が期待できる。本研究グループでは、クリスタルエンジニアリングの手法を用いて配位高分子状の集積体、あるいは多核錯体の集合体を新たに合成し、それらの物性、機能発現を検討している。たとえば、配位高分子状の集積体に関して、プロトン伝導性、磁性等の物性に対する結晶溶媒の吸脱着依存性、あるいは多核錯体の集合体に関して、特異的な磁気フラストレーション挙動を明らかにした。 キーワード：金属錯体集積体・配位高分子・多核錯体・ホストゲスト相互作用・クリスタルエンジニアリング
研究室の構成員
川田 知（教授）・理学博士 石川立太（助教）・博士（理学）
2015 年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
D2：1 名 M2：2 名 M1：3 名 4 年次生：5 名
教員の担当科目
川田 知：（学部）一般化学、物質機能化学 B、機能新素材科学、化学 A、化学 B、無機分析化学実験、物質機能化学実験、卒業論文 （大学院）化学講究 V、化学特別実験 V、ナノ化学特論 I、修士論文 石川立太：（学部）物質機能化学実験、無機分析化学実験、一般化学実験、基礎化学演習
教員の所属学会
川田 知：日本化学会、アメリカ化学会、錯体化学会、電気化学会、電子スピンサイエンス学会 石川立太：日本化学会、錯体化学会、電子スピンサイエンス学会
最近 5 年間の学術論文
（すべて査読有） M. Okamura, M. Kondo, R. Kuga, Y. Kurashige, T.i Yanai, S. Hayami, V. K. K. Praneeth, M. Yoshida, K. Yoneda, S. Kawata and S. Masaoka A pentanuclear iron catalyst designed for water oxidation <i>Nature</i>, 2016, 530, 465-468, DOI: 10.1038/nature16529. R. Ishikawa and S. Kawata

- Synthesis and magnetic properties of a hybrid molecular salt [Fe(qsal)₂][Fe(CA)(qsal)Cl]· MeNO₂
Synt. Met., **2015**, 208, 35-38, DOI:10.1016/j.synthmet.2015.05.009.
- R. Ohtani, K. Shimayama, A. Mishima, M. Ohba, R. Ishikawa, K. Kawata, M. Nakamura, L. F. Lindoy, and S. Hayami
 Impact of halogen ions on the guest dependent spin crossover behavior and the porous property in Co(II) one-dimensional coordination polymers [Co(4'-(4-pyridyl)-2,2':6',2''-terpyridine)X₂] (X = Cl and Br)
J. Mater. Chem. C., **2015**, 3, 7865-7869, DOI:10.1039/C5TC00864F.
- W. Sato, S. Komatsuda, R. Mizuuchi, N. Irioka, S. Kawata, and Y. Ohkubo
 Atomic-level observation of Ag-ion hopping motion in AgI
Hyperfine Interact. **2015**, 231, 107-113, DOI: 10.1007/s10751-014-1091-y.
- W. Sato, R. Mizuuchi, N. Irioka, S. Komatsuda, S. Kawata, A. Taoka, and Y. Ohkubo
 Extranuclear dynamics of ¹¹¹Ag(->¹¹¹Cd) doped in AgI nanoparticles
Chem. Phys. Lett., **2014**, 609, 104-107.
- M. Sy, F. Varret, K. Boukheddaden, G. Bouchez, Ing. J. Marrot, S. Kawata, and S. Kaizaki
 Structure-Driven Orientation of the High-Spin-Low-Spin Interface in a Spin-Crossover Single Crystal
Angew. Chem. Int. Ed., **2014**, 53(29), 7539-7542.
- Y. Tsunozumi, K. Matsumoto, S. Hayami, A. Fuyuhiko, and S. Kawata
 Bis[tetrakis(pyridin-2-yl)methane-κ³N,N',N'']cobalt(II) tetrakis(thiocyanato-κN)cobaltate(II) methanol monosolvate
Acta Crystallogr. E, **2014**, E70, m96-m97.
- S. Tanaka, A. Himegi, T. Ohishi, A. Fuyuhiko, and S. Kawata
 catena-Poly[[bis(ethanol-κO)manganese(II)]-μ-2,5-dichloro-3,6-dioxocyclohexa-1,4-diene-1,4-bis-(olato)-κ⁴O¹,O⁶:O³,O⁴]
Acta Crystallogr. E, **2014**, E70, m90-m91.
- A. Himegi and S. Kawata, Bis(*n*-dodecylammonium) bis(chloranilato)diethanolcuprate(II)
Acta Crystallogr. E, **2014**, E70, m63-m64.
- N. Katsuta, A. Mishima, A. Fuyuhiko, S. Hayami, and S. Kawata
 Bis[μ-3,5-bis(pyridin-2-yl)-1*H*-pyrazole]bis[dibromidoiron(III)]
Acta Crystallogr. E, **2013**, E69, m574.
- A. Mishima, N. Katsuta, M. Furushou, A. Fuyuhiko, and S. Kawata
 Bis[μ-3,5-bis(pyridin-2-yl)pyrazolato]bis[(hexafluorophosphato)copper(II)]
Acta Crystallogr. E, **2014**, E69, m455-m456.
- K. Matsubara, A. Kumamoto, H. Yamamoto, Y. Koga, and S. Kawata,
 Synthesis and Structure of Cobalt(II) Iodide Bearing a Bulky N-Heterocyclic Carbene Ligand, and Catalytic Activation of Bromoalkanes,
J. Organomet. Chem., **2013**, 727, 44-49.
- H. Kumagai, S. Kawata, and Y. Sakamoto,

- catena*-Poly[[[bis(4-pyridinealdoxime- κ^N)zinc]-1-benzene-1,4-dicarboxylato- $\kappa^2O^1:O^4$]4-pyridinealdoxime monosolvate]
Acta Crystallogr. E, **2013**, E69, m216.
- Y. Nishimura, A. Himegi, A. Fuyuhiko, S. Hayami, and S. Kawata,
catena-Poly[[[(2,2'-bipyridine- κ^2N,N')manganese(II)]- μ -(2,5-dichloro-3,6-dioxocyclo-hexa-1,4-diene-1,4-diolato)- $\kappa^4O^1,O^6:O^3,O^4$] ethanol disolvate]
Acta Crystallogr. E, 2013, E69, m119–m120.
- Y. H. Lee, M. R. Karim, Y. Ikeda, T. Shimizu, S. Kawata, A. Fuyuhiko, and S. Hayami,
Tris-Alkoxyphenylterpyridine Cobalt(II) Complexes: Synthesis, Structure, and Magnetic and Mesomorphic Behaviors
J. Inorg. Organomet. Polym., **2013**, 23(1), 186–192.
- R. Ishikawa, M. Nakano, B. K. Breedlove, and M. Yamashita
Syntheses, structures, and magnetic properties of discrete cyano-bridged heterodinuclear complexes composed of $Mn^{III}(\text{salen})$ -type complex and $M^{III}(\text{CN})_6$ anion ($M^{III} = \text{Fe, Mn, and Cr}$)
Polyhedron, **2013**, 64, 346–351.
- R. Ishikawa, R. Miyamoto, H. Nojiri, B. K. Breedlove, and M. Yamashita
Slow Relaxation of the Magnetization of an Mn^{III} Single Ion
Inorg. Chem., **2013**, 52, 8300–8302.
- W.-X. Zhang, R. Ishikawa, B. K. Breedlove, and M. Yamashita
Single-Chain Magnets: Beyond the Glauber Model
RSC Advances, **2013**, 3, 3772–3798 (Invited Review Article).
- R. Ishikawa, B. K. Breedlove, and M. Yamashita
Crystal Structure and Magnetic Properties of A Dinuclear High-Spin Iron(III) Complex with Face-to-Face Bis(Salen)-Type Ligand
Eur. J. Inorg. Chem., **2013**, 716–719 (Cluster issue of EurJIC on Spin-Crossover Complexes).
- T. Washizaki, R. Ishikawa, K. Yoneda, S. Kitagawa, S. Kaizaki, A. Fuyuhiko, and S. Kawata,
Reversible Solid State Hydration and Dehydration Process Involving Anion Transfer in a Self-Assembled Cu_2 System
RSC Advances, **2012**, 2(32), 12169–12172.
- H. Kumagai, Y. Sakamoto, S. Kawata, S. Matsunaga, and S. Inagaki,
Synthesis, Crystal Structures and Properties of a Series of Coordination Polymers Employing $R_4\text{terephthalate}$ ($R = \text{H, F, Cl, Br}$) and 4,4'-bipyridine as Bridging Ligands
Bull. Chem. Soc. Jpn., **2012**, 85(10), 1102–1111 (selected papers).
- K. Matsubara, T. Sueyasu, M. Esaki, A. Kumamoto, S. Nagao, H. Yamamoto, Y. Koga, S. Kawata, and T. Matsumoto
Cobalt(II) Complexes Bearing a Bulky N-Heterocyclic Carbene for Catalysis of Kumada–Tamao–Corriu Cross-Coupling Reactions of Aryl Halides
Eur. J. Inorg. Chem. **2012**, 3079–3086.

- Y. H. Lee, E. Kubota, A. Fuyuhira, S. Kawata, J. M. Harrowfield, Y. K. and S. Hayami,
Synthesis, structure and luminescence properties of Cu(II), Zn(II) and Cd(II) complexes with
4'-terphenylterpyridine
Dalton Trans., **2012**, 41(35), 10825–10831.
- Y. H. Lee, K. Kato, E. Kubota, S. Kawata, and S. Hayami,
Molecular Structure and Magnetic Properties of Pentapyridyl-based Iron(II) and Cobalt(II)
Complexes, *Chem. Lett.*, **2012**, 41(6), 620–621.
- Y. Komatsu, K. Kato, Y. Yamamoto, H. Kamihata, Y. H. Lee, A. Fuyuhira, S. Kawata, and S. Hayami,
Spin-Crossover Behaviors Based on Intermolecular Interactions for Cobalt(II) Complexes with Long
Alkyl Chains
Eur. J. Inorg. Chem., **2012**, 2769–2775.
- R. Ishikawa, K. Nishio, A. Fuyuhira, K. Yoneda, H. Sakamoto, S. Kitagawa, and S. Kawata,
Water Adsorption-Desorption Property of Stable Porous Supramolecular Assembly Composed of
Discrete Tetranuclear Iron(III) Complex Using $\pi \cdots \pi$ Interactions
Inorg. Chim. Acta, **2012**, 386, 122–128.
- H. Kumagai, Y. Sakamoto, S. Kawata and S. Inagaki,
Poly[[dodeca-aqua-(μ (4)-benzene-1,4-dicarboxyl-ato)(μ (2)-4,4'-bipyridine- κ (2) $N:N'$)dicerium(III)]
bis-(benzene-1,4-dicarboxyl-ate)]
Acta Crystallogr. E, **2012**, E68, m643–m644.
- T. Hamaguchi, Y. Inoue, K. Ujimoto, S. Kawata, and I. Ando
Control of Isomerization of Pyridinethiol-ruthenium Complexes via External Stimuli and Factors
Affecting Isomerization Behavior
Bull. Chem. Soc. Jpn., **2012**, 85(1), 61–68 (Selected Paper).
- R. Ishikawa, K. Katoh, B. K. Breedlove, and M. Yamashita
Mn^{III}(tetra-biphenyl-porphyrin)–TCNE Single-Chain Magnet via Suppression of the Interchain
Interactions
Inorg. Chem., **2012**, 51(16), 9123–9131.
- J.-F. Létard, S. Asthana, H. J. Shepherd, P. Guionneau, A. E. Goeta, N. Suemura, R. Ishikawa, and S.
Kaizaki
Photomagnetism of a *sym-cis*-Dithiocyanato Iron(II) Complex with a Tetradentate
N,N'-Bis(2-pyridylmethyl)1,2-ethanediamine Ligand
Chem.–Eur. J., **2012**, 18(19), 5924–5934.
- H. Miyasaka, T. Madanbashi, A. Saitoh, N. Motokawa, R. Ishikawa, M. Yamashita, S. Bahr, W.
Wernsdorfer, and R. Clérac
Cyano-Bridged Mn^{III}–M^{III} Single-Chain Magnets with M^{III} = Co^{III}, Fe^{III}, Mn^{III}, and Cr^{III}
Chem.–Eur. J., **2012**, 18(13), 3942–3954.
- T. Suzuki, H. Yamaguchi, A. Hashimoto, K. Nozaki, M. Doi, N. Inazumi, N. Ikeda, S. Kawata, M.
Kojima, and H. D. Takagi

Orange and Yellow Crystals of Copper(I) Complexes Bearing 8-(Diphenyl- phosphino)quinoline: A Pair of Distortion Isomers of an Intrinsic Tetrahedral Complex

Inorg. Chem., **2011**, 50(9), 3981–3987.

S. Komatsuda, W. Sato, S. Kawata, and Y. Ohkubo,

Strong Affinity between In and Al Impurities Doped in ZnO

J. Phys. Soc. Jpn., **2011**, 80, 095001.

A. Mishima, A. Fuyuhiko, H. Kumagai, and S. Kawata

Bis[μ -3,5-bis-(2-pyrid-yl)pyrazolato]bis-(hydrogensulfato)-dicopper(II) methanol disolvate

Acta Crystallogr. E, **2011**, E67, m1523–m1524.

T. Hamaguchi, T. Nagata, S. Kawata and I. Ando

Tris(pyridin-2-ylmethanol)nickel(II) hexafluoridophosphate trifluoroacetate

Acta Crystallogr. E, **2011**, E67, m1632.

H. Kumagai and S. Kawata

4,4'-Bipyridinium 2,3,5,6-tetrabromoterephthalate dehydrate

Acta Crystallogr. E, **2011**, E67, o2636.

W. Sato, Y. Ohkubo, Y. Itsuki, S. Komatsuda, D. Minami, T. Kubota, S. Kawata, A. Yokoyama, and T. Nakanishi

Local fields at impurity sites in ZnO

Proc. Radiochim. Acta, **2011**, 1, 435–438.

最近 5 年間の学術著書

川田 知：井上 亨、川田 知、栗原寛人、小寺 安、塩路幸生、脇田久伸、
新版化学への招待、三共出版、2013年3月

最近 5 年間の学術国際会議での発表

S. Ueno, R. Ishikawa, and S. Kawata, Synthesis and multi-redox property of a Mn pentanuclear cluster helicate, The 2015 International Chemical Congress of Pacific Basin Societies (Pacifichem), 2015 年12月ハワイ.

K. Kanazashi, R. Ishikawa, and S. Kawata, Structural control of chloranilate-based hybrid compounds, The 2015 International Chemical Congress of Pacific Basin Societies (Pacifichem), 2015年12月ハワイ.

R. Ishikawa, M. Furusho, S. Nifuku, and S. Kawata, Electrical conductivity of [$\{M^{II}(\text{bpyyz})_2\}$]-TCNQ coordination polymers, 5th Topical Meeting on Spins in Organic Semiconductors, 2014年10月姫路.

S. Kawata, Reversible Solid-State Hydration and Dehydration Process Involving Anion Transfer in a Self-Assembled System, International Union of Materials Research Societies -The 15th IUMRS International Conference in Asia-, 2014年7月福岡（招待講演）.

N. Katsuta, R. Ishikawa, S. Nifuku, M. Furusyou, A. Mishima, A. Fuyuhiko, M. Ohba, S. Hayami, and S. Kawata, Symmetry control of the triangle core in pentanuclear cluster helicate, International

Union of Materials Research Societies -The 15th IUMRS International Conference in Asia-, 2014年8月福岡.

S. Yoshioka, H. Konaka, R. Ishikawa, A. Fuyuhiko, S. Hayami, and S. Kawata, Synthesis and Characterization of Self-assembled Metal Complexes, International Union of Materials Research Societies -The 15th IUMRS International Conference in Asia-, 2014年8月福岡.

M. Furushou, R. Ishikawa, S. Nifuku, N. Katuta, Akio Mishima, H. Iguchi, A. Fuyuhiko, S. Hayami, and S. Kawata, Formation of supramolecular structures of TCNE and TCNQ by reaction with self-assembled dinuclear complex systems, International Union of Materials Research Societies -The 15th IUMRS International Conference in Asia-, 2014年8月福岡.

Shouei Nifuku, R. Ishikawa, Furusho, N. Katsuta, A. Mishima, A. Furushou, S. Hayami, S. Kawata, Investigation for synthesis and properties of polynuclear metal complexes from Hbpypz, International Union of Materials Research Societies -The 15th IUMRS International Conference in Asia-, 2014年8月福岡.

S. Michiwaki, R. Ishikawa, A. Fuyuhiko, S. Hayami, and S. Kawata, Metal-Complex Assemblies Constructed from a Flexible Ligand H2bhnq: Structural Versatility and Control of Cavity, International Union of Materials Research Societies -The 15th IUMRS International Conference in Asia-, 2014年8月福岡.

S. Yoshioka, H. Konaka, R. Ishikawa, A. Fuyuhiko, S. Hayami, and S. Kawata, Synthesis and Characterization of Self-Assembled Metal Complexes, 41st International Conference on Coordination Chemistry, 2014年7月シンガポール.

M. Furushou, R. Ishikawa, S. Nifuku, N. Katuta, A. Mishima, H. Iguchi, A. Fuyuhiko, S. Hayami, and S. Kawata, Formation of Supramolecular Structures of TCNE and TCNQ by Reaction with Self-Assembled Dinuclear Complex Systems, 41st International Conference on Coordination Chemistry, 2014年7月シンガポール.

N. Katsuta, R. Ishikawa, S. Nifuku, M. Furushou, A. Mishima, A. Fuyuhiko, Masaaki Ohba, S. Hayami, and S. Kawata, Symmetry Control of the Triangle Core in Pentanuclear Cluster Helicates, 41st International Conference on Coordination Chemistry, 2014年7月シンガポール.

S. Tanaka, A. Fuyuhiko, S. Hayami, and S. Kawata, Metal-Complex Assemblies Constructed from a Flexible Ligand H2bhnq: Structural Versatility and Control of Cavity, Challenges in Organic Materials and Supramolecular Chemistry (ISACS10), 2013年6月京都.

A. Himegi, A. Fuyuhiko, S. Hayami, and S. Kawata, Novel intercalation system based on metal-chloranilate assembled compounds, Challenges in Organic Materials and Supramolecular Chemistry (ISACS10), 京都, 2013年6月.

Y. Tsunozumi, S. Hayami, K. Matsumoto, and S. Kawata, Synthesis and characterization of metal-complex from polypyridylmethanes, International Symposium for the 70th Anniversary of the Tohoku Branch of the Chemical Society of Japan, 仙台, 2013年9月.

N. Katsuta, T. Washizaki, A. Fuyuhiko, M. Ohba, S. Hayami, and S. Kawata, Symmetry control of the $[M^H_3(\mu_3\text{-O/OH})]^{n+}$ triangle core in pentanuclear cluster helicates, International Symposium for the

70th Anniversary of the Tohoku Branch of the Chemical Society of Japan, 仙台, 2013年9月. M. Furushou, N. Katuta, T. Wasizaki, A. Misina, Y. Hamatake, A. Fuyuhiko, S. Hayami, and S. Kawata, Novel reactions of TCNE: formation of supramolecular structures by reaction with self-assembled M2-bpyz systems, International Symposium for the 70th Anniversary of the Tohoku Branch of the Chemical Society of Japan, 仙台, 2013年9月. S. Yoshioka, A. Fuyuhiko, S. Hayami, and S. Kawata, Role of the multi hydrogen-bonded organic-inorganic hybrid modules in formation of the supramolecular structures, International Symposium for the 70th Anniversary of the Tohoku Branch of the Chemical Society of Japan, 仙台, 2013年9月.
最近5年間の代表者としての学外資金導入実績
川田 知: 研究助成寄付金(第一稀元素)・90万円(直接経費)・2015年 石川立太: 科学研究費補助金・研究活動スタート支援・電気化学的自在スピン・電荷制御による単一分子磁性変換素子の開発・代表・190万円(直接経費)・2014年～2015年 川田 知: 研究助成寄付金(第一稀元素)・90万円(直接経費)・2014年 川田 知: 科学研究費補助金・基盤研究C・スピンプラストレーションを内在する金属錯体集合体を用いた交差相関物性の開拓・代表・410万円(直接経費)・2013年～2015年 川田 知: 科学研究費補助金・基盤研究C・多重水素結合無機—有機複合モジュールを用いた一次元階層構造の構築・代表・380万円(直接経費)・2010年～2012年 川田 知: 研究助成寄付金(日産化学)・18万円(直接経費)・2011年 川田 知: 私学助成金・教育基盤設備・1,670万円・2011年
最近5年間の代表者としての学内資金導入実績
川田 知: 福岡大学領域別研究部(理工学研究部)・「外場応答性錯体研究チーム」・117万円・2014年～2016年 川田 知: 福岡大学大学院理学研究科高度化推進事業タイプI・外場応答性を持つ金属錯体集積体の構築・458.5万円・2012年 川田 知: 福岡大学領域別研究部(理工学研究部)・「フラストレーション錯体研究チーム」・117万円・2011年～2013年
最近5年間の学会等学術団体における役職など
川田 知: 日本学術振興会特別研究員等審査会専門委員 川田 知: 日本化学会九州支部幹事 川田 知: 九州錯体化学懇談会運営委員
最近5年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
該当なし
最近5年間の一般(非学術)集会での発表論文
該当なし
最近5年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
該当なし

研究室名
物質機能化学 I 研究室 (単分子金属錯体)
最近の研究課題とその取り組みの概要

化学科物質機能化学Ⅰ研究室(単分子金属錯体研究グループ)では、単分子金属錯体を用いた新機能発現機構や機能性向上を明らかにすることを目指して、化学的及び物理的外部刺激による単分子錯体の物性変化を研究している。また、異なる物性をもつ錯体を連結させて構築した単分子多核錯体における機能発現についても検討している。

ルテニウムアンミン錯体の *Second Sphere Coordination* (化学的外部刺激) 応答を調べ、応答には選択性があることと、錯体の酸化還元電位に重要な影響を与える因子を明らかにした。また、酸化還元活性なキノン類を配位子とする錯体について、溶媒効果によりラジカル種をもつ錯体が安定に生成することを明らかにし、さらにキノン類配位子に導入した置換基の効果による、ラジカル種をもつ錯体の安定化について検討した。これらの結果をもとに機能性二核錯体の検討を行っている。

エネルギー問題を解決する一助として、電気化学的に水素を発生させる触媒の研究が盛んに行われている。我々は、精巧な分子設計により、二つの反応場が協調的に作用することで高活性を示す二核錯体触媒が構築できないかと考えている。現在、そのような二核錯体と、対照となる単核錯体を合成し、二つの錯体の触媒挙動の違いについて検討を行っている。

キーワード：単分子金属錯体・外部刺激応答・多核金属錯体・酸化還元活性・触媒

研究室の構成員

安藤 功(教授)・理学博士

濱口 智彦(助教)・博士(理学)

2015年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ

4年次生：4名

- ・架橋配位子の酸化還元を利用した新機能の創成 - *p*-quinonediiimine 架橋非対称 Ru 二核錯体 -
- ・多彩な酸化状態を示す架橋配位子による Ru 二核錯体構築の試み
- ・より強い物性発現を示す Ru 二核錯体を目的とした錯体配位子の検討
- ・電気化学的水素発生触媒となりうる Ni 錯体の構築

教員の担当科目

安藤 功:(共通教育)自然界と物質の化学、化学実験(理学部地球圏科学科)

(学部)無機分析化学B、無機化学概論、物質機能化学C、無機分析化学実験、物質機能化学実験、ナノ材料評価実験、化学特別研究、卒業論文

(大学院)化学講究Ⅰ、化学特別実験Ⅰ、物質機能化学特論Ⅲ

濱口 智彦:(学部)無機分析化学実験、物質機能化学実験、ナノ材料評価実験

教員の所属学会

安藤 功:日本化学会、日本分析化学会、錯体化学会、溶液化学研究会、九州錯体化学懇談会

濱口 智彦:日本化学会、錯体化学会、九州錯体化学懇談会

最近5年間の学術論文

T. Hamaguchi, M. D. Doud, J. Hilgar, J. D. Rinehart and C. P. Kubiak, Competing ferro- and antiferromagnetic interactions in a hexagonal bipyramidal nickel thiolate cluster, Dalton Trans., 2016, 45, 2374–2377 (査読有)

I. Ando, K. Hisatomi, K. Oku, T. Hamaguchi, Effect of second-sphere coordination 14. Adduct formation of ruthenium complexes with protic ligands of different types, Inorg. Chim. Acta, 2015, 435, 340-344 (査読有)

T. Hamaguchi and I. Ando, Synthesis and Characterisation of a New Six-coordinated Thermodynamic Ni Complexes, Inorg. Chim. Acta, 2015, 427, 144-149. (査読有)

K. Itoh, I. Ando,* K. Ujimoto, and H. Kurihara, Kinetics and Mechanism of the Slow Protolysis of Pyridine and 1,10-Phenanthroline Derivatives, Fukuoka Univ. Sci. Reports, 2015, 45, 15-20.

K. Itoh, I. Ando,* K. Ujimoto, and H. Kurihara, Thermodynamic Investigations for the Slow Protolysis of Pyridine and 1,10-Phenanthroline, Fukuoka Univ. Sci. Reports, 2015, 45, 21-27.

I. Ando, H. Katae, M. Okamura, Effect of second-sphere coordination 13. Consideration of factors affecting adduct formation of ruthenium-ammine complexes with crown ethers based on the stability constants, Inorg. Chim. Acta, 2014, 411, 56-60. (査読有)

T. Hamaguchi, I. Kawahara and I. Ando, Bis[(5-bromopyridin-2-yl)methanolato- k^2N,O]copper(II) monohydrate, Acta Cryst. 2013, E69, m585. (査読有)

T. Hamaguchi, Y. Kurashige, I. Ando, Identification of various electrochemical processes in the ruthenium complexes with a redox-active ligand by in situ spectroscopy and time-dependent density function theory calculation, Inorg. Chim. Acta, 2013, 405, 410-414. (査読有)

T. Hamaguchi, M. Kaneko, I. Ando, Effect of ligand basicity on electrochemically induced linkage isomerization in 2-mercaptopyridine–ruthenium complexes, Polyhedron, 2013, 50(1), 215–218. (査読有)

T. Hamaguchi, Y. Inoue, K. Ujimoto, S. Kawata, I. Ando, Control of isomerization of pyridinethiol–ruthenium complexes via external stimuli and factors affecting isomerization behavior,

Bull. Chem. Soc. Jpn. 2012, 85(1), 61-68. (査読有) I. Ando, T. Fukuishi, K. Ujimoto, H. Kurihara, Oxidation States and Redox Behavior of Ruthenium Ammine Complexes with Redox Active Dioxolen Ligands, Inorg. Chim. Acta, 2012, 390, 47-52. (査読有) T. Hamaguchi, I. Ando, Bis(2,2'-bipyridine)(pyridin-2-olato)ruthenium(II) hexafluoridophosphate benzene hemisolvate, Acta Cryst. 2011, E67(12), m1687. (査読有) T. Hamaguchi, T. Nagata, S. Kawata, I. Ando, Tris(pyridin-2-ylmethanol)nickel(II) hexafluoridophosphate trifluoroacetate, Acta Cryst. 2011, E67(11), m1632. (査読有)
最近5年間の学術著書
混合原子価錯体(3章2節), 伊藤 翼・山口 正・Brian K. BREEDLOVE・濱口 智彦, 金属錯体の電子移動と電気化学, 西原 寛・市村 彰男・田中 晃二 編著, 三共出版, 2013, pp. 88-101
最近5年間の学術国際会議での発表
T. Hamaguchi, Y. Inoue, M. Kaneko, I. Ando, Effect of ligand basicity on electrochemically induced linkage isomerization in 2-mercaptopyridine-ruthenium complexes, International Symposium for the 70th Anniversary of the Tohoku Branch of the Chemical Society of Japan, 日本(仙台市), 2013 年 9 月
最近5年間の代表者としての学外資金導入実績
該当なし
最近5年間の代表者としての学内資金導入実績
該当なし
最近5年間の学会等学術団体における役職など
安藤 功:九州錯体化学懇談会(運営委員)、錯体化学会第 66 回討論会事務局(運営委員) 濱口 智彦:錯体化学会男女参画委員会、錯体化学会第 66 回討論会事務局(運営委員)
最近5年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
該当なし
最近5年間の一般(非学術)集会での発表論文
該当なし
最近5年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
安藤 功:化学への招待(責任者)

研究室名
物理化学研究室（Ⅰ）
最近の研究課題とその取り組みの概要
物理化学研究室では、次の３つの課題についての研究を行っている。(1) 液晶の秩序構造とずり誘起構造との関係、(2) イオン液体の相挙動と秩序構造の解明、(3) 粗視化モデルによる界面活性剤ミセルの解析。それぞれの課題の詳細は、以下のとおりである。(1) 液晶にずり流動を与えながら誘電率を測定すると、ずり流動によって誘起される構造や運動を反映した結果が得られる。温度、周波数、ずり速度などを変化させて、誘電率がどのように変化するかを測定し、そのずり誘起構造や構造変化などの実体を明らかにする。(2) イオン液体は液体であるにもかかわらず、秩序構造が存在する液体である。また、一成分系であるにもかかわらず、複数の相が共存することも指摘されている。これらの秩序構造の実体を、誘電率、熱容量、Raman 散乱、X 線散乱などの実験から明らかにする。(3) 水溶液中で形成される会合体中での界面活性剤分子の配向及び分子間距離を NMR で実測し、これら結果を、コンピュータシミュレーションを使って、会合体の構造と疎水性相互作用から解析する。 キーワード：イオン液体・液晶・粗視化モデル・両親媒性分子
研究室の構成員
柊宜田啓史（教授）・理学博士 渡辺啓介（助教）・博士（理学） 村田義夫（非常勤講師）・理学博士 井上 亨（名誉教授）・理学博士
2015 年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
M1：2 名，4 年次生：5 名
教員の担当科目
柊宜田啓史：(学部) 化学数学 A、化学数学 B、物理化学 D、外書講読、化学 I (SE 向け)、基礎物理化学実験、構造物理化学実験、化学特別研究、卒業論文 (大学院) 化学講究Ⅱ、化学特別実験Ⅱ、構造物理化学特論Ⅲ、修士論文 渡辺啓介：(学部) 基礎物理化学実験、構造物理化学実験、基礎化学演習、一般化学実験、放射化学実験 村田義夫：(学部) 基礎物理化学実験、構造物理化学実験、放射化学実験 井上 亨：(学部) 物理化学 C、化学 A(SP 向け)、化学 B(SP 向け)、化学 IV(SE 向け)
教員の所属学会
柊宜田啓史：日本化学会，日本物理学会，日本熱測定学会，分子科学会，日本液晶学会 渡辺啓介：日本化学会，日本物理学会，日本熱測定学会，分子科学会，日本核磁気共鳴学会 村田義夫：日本化学会 井上 亨：日本化学会，日本油化学会
最近 5 年間の学術論文
K. Watanabe, A. Nagoe, M. Oguni, Low-Temperature Thermal Properties of Channel Water

Confined in Nanopores with Hydrophilic Crystalline and Silica Non-Crystalline Walls, <i>Curr. Inorg. Chem.</i> 2014, 4(3), 167-179. T. Inoue, T. Takasago, T. Ushifusa, Effect of hydrophilic additives on mesophase regions of aqueous nonionic surfactant mixture, <i>Fukuoka Univ. Sci. Rep.</i> 2013, 43(1), 39-50. 渡辺啓介, 黒木琢也, 祢宜田啓史, イオン液体($C_n\text{mim}$)BF₄ (n = 4, 6 and 8)の誘電的性質, 福岡大学理学集報, 2013, 43(1), 51-57. T. Inoue, K. Aburai, H. Sakai, M. Abe, Surface adsorption and vesicle formation of dilauroylphosphatidylcholine in room temperature ionic liquids, <i>J. Colloid Interface Sci.</i> 2012, 377, 262-268. K. Watanabe, M. Tadokoro, M. Oguni, Thermal characteristics of channel water confined in nanopores with crystalline pore-wall structure in $[M(\text{H}_2\text{bim})_3](\text{TMA}) \cdot n\text{H}_2\text{O}$, <i>J. Phys. Chem. C.</i> 2012, 116, 11768-11775. T. Inoue, K. Kawashima, Y. Miyagawa, Aggregation behavior of nonionic surfactants in ionic liquid mixtures, <i>J. Colloid Interface Sci.</i> 2011, 363, 295-300. T. Inoue, K. Maema, Self-aggregation of nonionic surfactants in imidazolium-based ionic liquids with trifluoromethanesulfonate anion, <i>Colloid Polym. Sci.</i> 2011, 289, 1167-1175. T. Misono, H. Sakai, K. Sakai, M. Abe, T. Inoue, Surface adsorption and aggregate formation of nonionic surfactants in a room temperature ionic liquid, 1-butyl-3-methylimidazolium hexafluorophosphate (bmimPF₆), <i>J. Colloid Interface Sci.</i> 2011, 358, 527-533. T. Inoue, H. Yamakawa, Micelle formation of nonionic surfactants in a room temperature ionic liquid, 1-butyl-3-methylimidazolium tetrafluoroborate: Surfactant chain length dependence of the critical micelle concentration, <i>J. Colloid Interface Sci.</i> 2011, 356, 798-802. S. Zhang, J. Yuan, H. Ma, N. Li, L. Zheng, T. Inoue, Aqueous phase behavior of ionic liquid-related Gemini surfactant revealed by differential scanning calorimetry and polarized optical microscopy, <i>Colloid Polym. Sci.</i> 2011, 289, 213-218. M. Iwahashi, T. Nozaki, K. Kamaya, K. Taguchi, M. Fujita, Y. Kasahara, H. Minami, H. Matsuzawa, S. Nakamura, K. Harada, Y. Ozaki, T. Inoue, Phase behavior of binary mixtures composed of ethylene carbonate and various organic solvents, <i>J. Chem. Thermodyn.</i> 2011, 43, 80-87.
最近5年間の学術著書
該当なし
最近5年間の学術国際会議での発表
K. Watanabe, T. Takamatsu, T. Komai, K. Negita, Annealing effect of the ordering behavior in the ionic liquid ($C_8\text{mim}$)BF₄, The International Symposium on Structural Thermodynamics 2014, Osaka, 2014年9月. K. Watanabe, T. Kuroki, A. Nimonji, K. Negita, Phase behavior and dielectric property of ionic liquid ($C_8\text{mim}$)BF₄, 33rd International Conference on Solution Chemistry, Kyoto, 2013年7月. K. Watanabe, T. Kuroki, A. Nimonji, K. Negita, Observation of the dynamics in ionic liquids ($C_n\text{mim}$)BF₄ (n = 4, 6, 8) by dielectric spectroscopy, 7th International Discussion Meeting on

Relaxations in Complex Systems, 2013年7月. K. Watanabe, Thermal behaviors of water confined within 2-D porous silica. 7th International Discussion Meeting on Relaxations in Complex Systems, Barcelona, 2013年7月. T. Inoue, Aggregation behavior of nonionic surfactants in some room temperature ionic liquids, World Congress on Oleo Science, Sasebo, 2012年10月. T. Inoue, K. Aburai, H. Sakai, M. Abe, Self-assembly and phase behavior of phospholipids in ionic liquids, 14th International Association of Colloid and Interface Scientists, Conference, Sendai, 2012年5月. Y. Murata, M. Eto, T. Inoue, M. Suzuki, M. Temperature dependence of surface adsorption and CMC of sodium oleate in aqueous solution. 14th International Association of Colloid and Interface Scientists, Conference, Sendai, 2012年5月. K. Watanabe, Y. Kanke, Calorimetric Observation of fusion and glass-transition phenomena of the water confined within porous silica: Effects of pore size and pore morphology, 14th International Association of Colloid and Interface Scientists, Conference, Sendai, 2012年5月.
最近5年間の代表者としての学外資金導入実績
該当なし
最近5年間の代表者としての学内資金導入実績
祢宜田啓史（分担者：仁部芳則，山田勇治・渡辺啓介）：領域別研究・「クラスターとその成長過程」・48.1万円（2013年度）・2013年度～2015年度 祢宜田啓史（分担者：井上 亨，渡辺啓介）：領域別研究・「複雑流体」・100.3万円・2010年度～2012年度 井上 亨：学部長預り金・「イオン液体中におけるリン脂質の界面吸着と会合挙動」・82万円・2011年
最近5年間の学会等学術団体における役職など
祢宜田啓史・渡辺啓介：日本熱測定学会、第53回熱測定討論会(福岡大)準備委員会委員（2015年10月30日～）
最近5年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
該当なし
最近5年間の一般（非学術）集会での発表論文
村田義夫・衛藤厚介・井上 亨・鈴木正夫、「オレイン酸ナトリウムと飽和脂肪酸塩の水溶液中の CMC と吸着挙動の差異」構造機能科学研究所研究交流会，けいはんなプラザ、2013年3月
最近5年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
村田義夫，「世界一行きたい科学広場 in 宗像」SAFnet，において，実験展示 No.29「化学と表面張力のふしぎを楽しむ」を担当，2014年8月9日（宗像ユリックス） 村田義夫，「世界一行きたい科学広場 in 宗像」SAFnet，において，実験展示 No.36「水と油－界面のサイエンス」を担当，2013年8月10日（宗像ユリックス） 村田義男，「世界一行きたい科学広場 in 宗像」SAFnet，において，実験展示 No.45「水と油－界面のサイエンス」を担当，2012年8月11日（宗像ユリックス）
その他特筆事項
該当なし

研究室名
物理化学研究室（Ⅱ）
最近の研究課題とその取り組みの概要
物理化学研究室Ⅱは、合成高分子の微視的構造と巨視的な溶液物性の相関関係について、(1) Poly(<i>N</i>-isopropylacrylamide) (PNiPAm)の立体規則度が水溶液の相分離挙動に与える影響、(2) ミクロハイドロゲルの粘性、(3) 両親媒性マルチブロック共重合体の溶液物性、の3つを軸に研究を行っている。それぞれの課題の詳細を項目ごとに述べる。 (1) PNiPAm 水溶液は下限臨界共溶(LCST)型の相分離を示すことが知られているが、その転移温度は高分子鎖の立体規則度によって変化する。また、立体規則度を制御した PNiPAm の透過率-温度曲線には昇温過程と降温過程では、ヒステリシスが観測される。そこで、昇温速度と降温速度を両方制御できる自動透過光測定装置を開発した。透過率の温度変化には明らかな立体規則度依存性があり、低濃度および低走査速度ではその傾向がより明確となった。また、蛍光プローブ法を用いた水和・脱水過程のヒステリシスの研究も始めている。 (2) ミクロハイドロゲル分散系は線状高分子水溶液とは異なる粘性挙動をもつため、化粧品や医薬品の粘性改質剤として研究・利用されている。しかし、ミクロハイドロゲルの化学構造と粘性の関係については未解明な点が多い。本研究では逆乳化重合を利用し、親水性モノマーを重合・架橋してミクロハイドロゲルを得た。得られたミクロハイドロゲルの粒径、固有粘度を測定し、分散液の充填率に対する粘性挙動の変化を調べている。 (3) これまで両親媒性高分子の研究では、親水性ブロックと疎水性ブロックを一つずつ有するジブロック共重合体やどちらかを二つ含むトリブロック共重合体の研究が行われてきたが、両者が複数含まれるマルチブロック共重合体の研究例は少ない。我々は Poly(ethylene oxide)と Poly(propylene oxide)の交互マルチブロック(AMB)共重合体を合成し、その溶液物性を調べている。表面張力測定、動的光散乱測定、蛍光プローブ法を用いて、AMB 共重合体のミセル化挙動を解明した。 キーワード：刺激応答性高分子・相分離・ヒステリシス・両親媒性高分子・ミクロゲル
研究室の構成員
勝本之晶（准教授）・博士（学術）
2014 度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
D1 (特別研究生，広島大学)：1 名「両親媒性マルチブロック共重合体の合成と基礎溶液物性の測定」 M2(特別聴講生，広島大学)：1 名「両親媒性マルチブロック共重合体とタンパク質の会合体形成」 B4：2 名「ペルチェ式温度制御による高分子水溶液の自動曇点測定装置の開発」 「水中における Poly(<i>N</i> -isopropylacrylamide) microgel の塩添加による凝集」
教員の担当科目
勝本之晶：（学部）物理化学A、物理化学B、自然界と物質の化学、生活と環境の化学、基礎物理化学実験、構造物理化学実験、化学特別研究、卒業論文
教員の所属学会
勝本之晶：高分子学会，日本化学会，アメリカ化学会，分子科学会，日本分光学会，溶液化学研究会

最近 5 年間の学術論文

1. 勝本之晶, "分子構造論的アプローチによる感熱応答性アクリルアミド系高分子の研究", 福岡大学理学集報 46, 39-47, 2016年3月, 査読有
2. K. Kinjo, T. Hirao, S. Kihara, Y. Katsumoto, and T. Haino, "Supramolecular Porphyrin Copolymer Assembled through Host-Guest Interactions and Metal-Ligand Coordination", Angew. Chem. Int. Ed. 54, 14830-14834, 2015年12月, 査読有
3. A. Kosaka, M. Aida, and Y. Katsumoto, "Reconsidering the activation entropy for anomerization of glucose and mannose in water studied by NMR spectroscopy", Journal of Molecular Structure, 1093, 195-200, 2015年3月, 査読有
4. S. Katsube, T. Harada, T. Umecky, T. Takamuku, T. Kaji, M. Hiramoto, Y. Katsumoto, and K. Nishiyama, "Structures of Naphthol-AOT Self-assembly Organogels and Their Applications to Dispersing Media of Rare-earth Complexes", CHEMISTRY LETTERS, 43/12, 1861-1863, 2014年12月, 査読有
5. S. Nakata, T. Ueda, T. Miyaji, Y. Matsuda, Y. Katsumoto, H. Kitahata, T. Shimoaka, and T. Hasegawa, "Transient Reciprocating Motion of a Self-Propelled Object Controlled by a Molecular Layer of a N-Stearoyl-p-nitroaniline: Dependence on the Temperature of an Aqueous Phase", JOURNAL OF PHYSICAL CHEMISTRY C, 118/27, 14888-14893, 2014年7月, 査読有
6. K. Nishi, K. Fujii, Y. Katsumoto, T. Sakai, and M. Shibayama, "Kinetic Aspect on Gelation Mechanism of Tetra-PEG Hydrogel", MACROMOLECULES, 47/10, 3274-3281, 2014年5月, 査読有

最近 5 年間の学術著書

「エッセンシャル化学」尾崎 幸洋, 勝本 之晶, 森田 成昭, 山本 茂樹, 森澤 勇介, 佐藤 春実, 培風館, (第4章, 化学熱力学), 2015年1月

最近 5 年間の学術国際会議での発表

- K. Rikiyama and Y. Katsumoto, Association behavior of bovine serum albumin with the PEO-PPO multi-block copolymer in water, The international chemical congress of pacific basin societies 2015, Hawaii (USA), Dec. 2015
- T. Horiuchi, S. Kondo, T. Sakai, and Y. Katsumoto, Two aggregation processes of thermo -responsive PEO-PPO multiblock copolymer in the aqueous solution, The international chemical congress of pacific basin societies 2015, Hawaii (USA), Dec. 2015
- K. Hamamura and Y. Katsumoto, Hysteresis in the phase change of the aqueous solution of the stereo-controlled PNIPAm, The international chemical congress of pacific basin societies 2015, Hawaii (USA), Dec. 2015
- Y. Katsumoto, Physical background of the blue shift in the CH stretching band of alcohol in water, Pure and Applied Chemistry International Conference 2014, Bangkok (Thailand), Jan. 2015, Invited Lecture.
- Y. Katsumoto, Relationship between the local structure and thermo-responsiveness of polymer solutions, International Meeting on Applications of Statistical Mechanics of Molecular Liquid on Soft Matter, Bangkok (Thailand), Sept. 2014, Invited Lecture.
- Y. Katsumoto, Molecular Pictures of the Stimuli-Responsive Polymers, Kathmandu Symposia on Advanced Materials – 2014 (Kathmandu, Nepal), Sept. 2014, Invited Lecture.
- Y. Katsumoto, Impact of the intermolecular interaction on the thermoresponsiveness of the acrylamide polymers, Seminar on *Material Chemistry-Progress and Challenges*, (Dhaka, Bangladesh) Sept. 2014, Invited Lecture.

最近 5 年間の代表者としての学外資金導入実績

科学研究費補助金 (基盤研究(C)) 水系刺激応答性ポリマー鎖間に働く疎水性相互作用の分子制御, 499 万円, 2014~2016 (予定)

最近 5 年間の代表者としての学内資金導入実績

該当なし

最近 5 年間の学会等学術団体における役職など

The 11th SPSJ International Polymer Conference, Local Committees 2015-2016
高分子学会九州支部 支部幹事 2015-
第 8 回分子科学討論会, 実行委員, 2014

最近5年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
該当なし
最近5年間の一般（非学術）集会での発表論文
該当なし
最近5年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
勝本之晶,「世界一行きたい科学広場 in ふくおか 2014」,において, 実験展示 No.4「レモン電池と酸化還元反応」, 2014年11月8日, 9日（ホークスタウンモール特設会場）
その他特筆事項
該当なし

研究室名
構造化学研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
構造化学研究室では、超音速ジェット法により分子間力で結合した分子クラスターと呼ばれる極低温分子集合体を作り出し、レーザー分子分光法の手法を使って研究する。この手法では、凝集状態のように無数の溶媒分子が時々刻々と変化することが無いため、単純なスペクトルが得られる。従って、複雑な解析手法が不要であり、対象分子同士の分子間相互作用についてより詳細な議論が可能となる。当研究室では、窒素原子や酸素原子を芳香環に含む複素芳香族分子を研究対象とし、これらの分子と溶媒としてよく用いられる水やメタノール等の分子が結合した水素結合クラスターについて、電子スペクトルや赤外吸収スペクトルを観測している。水素結合は OH や NH 基などの水素原子を介して形成されるため、これらの置換基の関与する振動は水素結合クラスターの構造に応じて、その振動数や強度が変化する。クラスター形成に起因するスペクトル変化を観測し、さらに理論計算と比較する。これらの研究を通じて、水素結合を形成する際のクラスター構造の決定が可能となり、その構造の違いによる複素芳香族分子の電子構造に及ぼす水素結合の影響等の解明を目的としている。 さらに、近年では、計算機の発達とともに様々な理論計算が可能となり、我々も新たに最新の非調和振動計算を研究対象系に適用させ、実験結果との比較を行なう事で、振動分光の立場から分子間相互作用に対する新たな展開を目指している。 キーワード：電子スペクトル、レーザー、水素結合、クラスター、超音速ジェット、赤外吸収
研究室の構成員
仁部芳則（准教授）・理学博士 山田勇治（助教）・博士（理学）
2015年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
M2：2名 複素芳香族分子の構造異性体の分光研究 4年次生：4名 レーザー分光及び量子化学計算を用いた極低温分子の研究
教員の担当科目
仁部芳則：（学部）量子化学A、量子化学B、量子化学C、基礎量子化学実験、

構造物理化学実験、化学実験、化学特別研究、卒業論文、量子化学概論 (大学院) 化学講究Ⅱ、化学特別実験Ⅱ、構造物理化学特論Ⅰ、修士論文 山田勇治：(学部) 基礎量子化学実験、構造物理化学実験、化学実験
教員の所属学会
仁部芳則：日本化学会、日本分光学会、分子科学会、日本コンピュータ化学会 山田勇治：日本化学会、日本分光学会、分子科学会
最近5年間の学術論文
H. Sasaki, S. Daicho, Y. Yamada, Y. Nibu, Comparable Strength of OH-O Versus OH-π Hydrogen Bond in Hydrogen-bonded 2,3-Benzofuran Clusters with Water and Methanol, J. Phys. Chem. A, 2013, 117(15), 3183-3189 (査読有) Y. Yamada, H. Ohba, Y. Noboru, S. Daicho, Y. Nibu, Solvation Effect on the NH Stretching Vibrations of Solvated Aminopyrazine, 2-Aminopyridine, and 3-Aminopyridine Clusters, J. Phys. Chem. A 2012, 116(37), 9271-9278. (査読有) Y. Yamada, Y. Noboru, T. Sakaguchi, Y. Nibu, Conformation of 2,2,2-Trifluoroethanol and the Solvation Structure of Its 2-Fluoropyridine Clusters, J. Phys. Chem. A 2012, 116(11), 2845-2854. (査読有) Y. Yamada, Y. Noboru, T. Sakaguchi, Y. Nibu, Isomer-Selected Vibrational Spectra of Solvated 2-Fluoropyridine Clusters with Water and 2,2,2-Trifluoroethanol Mixture: Effect of Cluster Formation on Conformation and Solvation Structure, Fukuoka Univ. Sci. Rep. 2012, 42(2), 109-124. (査読無) Y. Yamada, H. Ishikawa, K. Fuke, Solvation Structure and Stability of $[(CH_3)_2NH]_m[NH_3]_n$-H Hypervalent Clusters: Ionization potentials and Switching of Hydrogen-Atom Localized Site, J. Phys. Chem. A 2011, 115(30), 8380-8391. (査読有) Y. Nibu, A study on the Hydrogen-bonded Clusters of 2-Fluoropyridine based on IR-UV Double Resonance Spectroscopy. Fukuoka Univ. Sci. Rep. 2011, 41(2), 223-228. (査読無)
最近5年間の学術著書
該当なし
最近5年間の学術国際会議での発表
K. Nishizono, Y. Yamada, Y. Nibu, Study on the conformational structure of monomer and solvated cluster of benzyl methyl ether. 2015 International Chemical Congress of Pacific Basin Societies, Honolulu, 2015年12月 Y. Yamada, Y. Goto, H. Ohba, Y. Nibu, Switching of hydrogen-bond network and its effect on the excited state relaxation in hydrated Aminopyrazine clusters. Workshop on Nanoscale Atomic and Molecular Systems, Fukuoka, 2015年8月 Y. Yamada, K. Nishizono, S. Koreki, M. Kano, Y. Nibu, Conformational influence and deuterium-substitution effect on electronic spectra of benzyl methyl ether. 31th Symposium on Chemical Kinetics and Dynamics, Sapporo, 2015年6月 Y. Yamada, H. Sasaki, M. Kano, S. Koreki, Y. Nibu, Study on the Structure and Conformational

Influence on Electronic Spectra of Benzyl Methyl Ether. 30th Symposium on Chemical Kinetics and Dynamics, Himeji, 2014年6月 Y. Goto, Y. Yamada, Y. Nibu, Analysis for vibrational spectra of 2-aminopyridine-(H₂O)₂ and 2-aminopyridine-(H₂O)₃ clusters. 7th International Conference on Advanced Vibrational Spectroscopy, Kobe, 2013年8月 Y. Yamada, Y. Goto, H. Ohba, Y. Nibu, Switching of hydrogen-bond network in hydrated aminopyrazine clusters. 7th International Conference on Advanced Vibrational Spectroscopy, Kobe, 2013年8月 Y. Yamada, H. Ohba, Y. Fukuda, Y. Nibu, Switching of hydrogen-bond network and its effect on the excited state relaxation in hydrated aminopyrazine clusters. 29th Symposium on Chemical Kinetics and Dynamics, Sendai, 2013年6月 Y. Yamada, H. Fuji, T. Hashimura, Y. Nibu, Solvation structure and isomerization of hydrated Benzimidazole clusters. 28th Symposium on Chemical Kinetics and Dynamics, Fukuoka, 2012年6月
最近5年間の代表者としての学外資金導入実績
山田勇治：日本学術振興会・科研費・若手（B）「電子捕獲解離反応における水素原子付加ペプチドラジカルの反応中間体としての役割」・代表・340万円（直接経費）・2010年～2012年
最近5年間の代表者としての学内資金導入実績
該当なし
最近5年間の学会等学術団体における役職など
仁部芳則：分子科学会運営委員（2010年9月～2012年8月）、 第28回化学反応討論会実行委員（2011年11月～2012年6月） 山田勇治：第28回化学反応討論会実行委員（2011年11月～2012年6月）
最近5年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
該当なし
最近5年間の一般（非学術）集会での発表論文
該当なし
最近5年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
該当なし

研究室名
地球惑星気象学研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
地球惑星気象学研究室では、様々な大気の構造の研究を、データ解析・観測・数値計算などを用いて行っている。 1) 気象学データ解析 高低気圧や前線などのなじみのある天気現象を、最新の衛星画像や長期の統計データを用いることによって、新しい視点から見直してみるようなアプローチが代表的なテーマである。大雨などの災害に関する現象、全球規模気候変動など気象・気候学に関する幅広いテーマを研究している。 2) 惑星の観測と解析 惑星大気の観測・解析を行う。惑星の大気は、地球大気と共通点もあるが違うところも多く、まだまだ未知の現象が存在する。それらの解明のため、観測画像の解析より大気の雲構造などについて調べる。木星の雲層構造の可視・近赤外・電波による解析や、金星の雲模様の検出などを行ってきた。また木星大気の鉛直構造について理論計算を行い、電波観測との比較より鉛直構造について研究している。 キーワード：気象学、熱帯気象、総観気象、惑星大気
研究室の構成員
西 憲敬（准教授）・博士(理学) 竹内 寛（助教）・博士(物理)
2014年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
大学院生：3名 堀田 祥 梅雨期東シナ海上における降水の研究 山崎 健吾 木星大気の鉛直構造とマイクロ波熱放射 佐藤 令於奈 冬季における気温の平年値にみられる季節内変化 4年次生：6名 安倍松侑太 ラングレー法による木星反射率の較正 江藤ちなみ 発達した積雲の発生場所について 瀬戸口 彩 熱帯地域の準定在構造について 原 好亮 冬季における寒気の分布と移動経路 福永真弓 日本付近における山岳波の解析 村山竜基 大赤斑の観測とミンナルト則を用いた解析
教員の担当科目
西 憲敬：(学部) 物理学Ⅰ、数理情報、流体力学Ⅰ、地球流体力学、地球物理学実験Ⅰ，Ⅲ，Ⅳ、

卒業論文 (大学院) 地球流体力学特論 I、地球流体力学実験、修士論文 竹内 寛：(学部) 地球物理学実験 I、地球物理学実験IV
教員の所属学会
西 憲敬：日本気象学会、American Meteorological Society, American Geophysical Union, Royal Meteorological Society 竹内 寛：日本気象学会、日本惑星科学会、日本天文学会
最近 5 年間の学術論文
(査読有) Luce, H., N. Nishi, J-L Caccia, S. Fukao, M. K. Yamamoto, T. Mega, H. Hashiguchi, T. Tajiri, M. Nakazato, 2012: Kelvin-Helmholtz billows generated at a cirrus cloud base within a tropopause fold/upper-level frontal system. <i>Geophys. Res. Lett.</i>, 39, L04807, doi:10.1029/2011GL050120. Mega, T., M. K. Yamamoto, M. Abo, Y. Shibata, H. Hashiguchi, N. Nishi, T. Shimomai, Y. Shibagaki, M. Yamamoto, M. D. Yamanaka, S. Fukao, and T. Manik, 2012: First simultaneous measurement of vertical air velocity, particle fall velocity, and hydrometeor sphericity in stratiform precipitation: Results from 47 MHz wind-profiling radar and 532 nm polarization lidar observations, <i>Radio Sci.</i>, 47, RS3002, doi:10.1029/2011RS004823. Shibata, T. M. Hayashi, A. Naganuma, N. Hara, K. Hara, F. Hasebe, K. Shimizu, N. Komala, Y. Inai, H. Vömel, S. Hamdi, S. Iwasaki, M. Fujiwara, M. Shiotani, S.-Y. Ogino, and, N. Nishi, 2012: Cirrus cloud appearance in a volcanic aerosol layer around the tropical cold point tropopause over Biak, Indonesia, in January 2011, <i>J. Geophys. Res.</i>, 117, D11209, doi:10.1029/2011JD017029. Hamada, A., N. Nishi, and H. Kida, 2013: Separation of zonally elongated large cloud disturbances over the western tropical Pacific. <i>J. Meteor. Soc. Japan</i>, 91, 375-389, DOI:10.2151/jmsj.2013-309. Hasebe, F., Y. Inai, M. Shiotani, M. Fujiwara, H. Vömel, N. Nishi, S.-Y. Ogino, T. Shibata, S. Iwasaki, N. Komala, T. Peter, and S. J. Oltmans, 2013: Cold trap dehydration in the Tropical Tropopause Layer characterised by SOWER chilled-mirror hygrometer network data in the Tropical Pacific. <i>Atmos. Chem. Phys.</i>, 13, 4393-4411, doi:10.5194/acp-13-4393-2013, 2013. R. Wilson, H. Luce, H. Hashiguchi, N. Nishi, Y. Yabuki, 2014: Energetics of persistent turbulent layers underneath mid-level clouds estimated from concurrent radar and radiosonde data, <i>Journal of Atmospheric and Solar-Terrestrial Physics</i>, 118, 78-89, http://dx.doi.org/10.1016/j.jastp.2014.01.005 Luce, H., R. Wilson, F. Dalaudier, H. Hashiguchi, N. Nishi, Y. Shibagaki, and T. Nakajo, 2014, Simultaneous observations of tropospheric turbulence from radiosondes using Thorpe analysis and the VHF MU radar, <i>Radio Sci.</i>, 49, doi:10.1002/2013RS005355. (査読無)

最近5年間の学術著書
該当なし
最近5年間の学術国際会議での発表
Nishi N., A. Hamada, M. Ohigawa, and S. Shige, 2011: Cloud-top height dataset by geostationary satellite split window measurements trained with CloudSat data. Fifth Korea-Japan-China Joint Conference on Meteorology (Busan, Korea, 25 October, 2011) Nishi N., A. Hamada, M. Ohigawa, and S. Shige, 2011: Analysis of tropical cloud systems using a new cloud-top height data by geostationary satellite splitwindow measurements trained with CloudSat data. American Geophysical Union (AGU) Fall meeting (San Francisco, USA, 6 Dec 2011). Nishi, N., and A. Hamada, 2012: Temporal variation of the cloud top height over the tropical Pacific observed by geostationary satellites. American Geophysical Union (AGU) Fall meeting (San Francisco, USA, 5 Dec 2012). Nishi, N., A. Hamada, and H. Hirose, 2013: Top height of the upper tropospheric cloud over the tropical Pacific observed by geostationary satellites. WCRP regional workshop on stratosphere-troposphere processes and their role in climate. (Kyoto, 2 Apr 2013). Nishi, N., A. Hamada, H. Itoh, and M. Ohigawa, 2013: Separation of zonally elongated large-scale cloud disturbances over the western tropical Pacific, American Geophysical Union (AGU) Fall meeting (San Francisco, USA, 9 Dec 2013). Nishi, N., A. Hamada, and H. Hirose, 2014: Cloud-top database with only geostationary satellites (CTOP) and its application to the tropical cloud disturbances. <i>11th Annual General Meeting, Asia Oceania Geosciences Society (AOGS 2014)</i>, (Sapporo, 31 July 2014) Nishi, N., A. Hamada, and H. Hirose, 2015: Cloud-top height estimation method by geostationary satellite split-window measurements trained with CALIPSO and CloudSat data. European Geosciences Union (EGU) General Assembly (Vienna, Austria, 14 April 2015).
最近5年間の代表者としての学外資金導入実績
科学研究費(基盤研究(C)) 2011 年度～2013 年度 研究課題: 熱帯上部対流圏における大規模波動の伝播および増幅過程の解明 研究予算: 3900 千円 研究代表者: 西 憲敬 科学研究費(基盤研究(C)) 2014 年度～2016 年度 研究課題: 熱帯域雲データベースの構築およびそれを用いた大規模雲活動の解析 研究予算: 3700 千円 研究代表者: 西 憲敬
最近5年間の代表者としての学内資金導入実績
該当なし

最近5年間の学会等学術団体における役職など
竹内 寛：宇宙理学委員会 班員
最近5年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
竹内 寛：「数値シミュレーション」、地球物理学実験Ⅰ・Ⅱテキスト 第4章
最近5年間の一般（非学術）集会での発表論文
該当なし
最近5年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
竹内 寛：平成24年度自然観測&天体観測合宿（2012年8月16-18日、やまなみ荘）

研究室名
地球流体力学研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
地球圏科学科地球流体力学研究室では、地球流体のふるまいを、モデル実験、観測、数値シミュレーションなどの手段で明らかにしようとしている。地球流体力学は、地球に限らず木星や火星などの惑星や恒星の流動部分（地球の場合は大気、海洋、マントル、外核）の運動を、自転と重力の影響を受けて行う運動ととらえ、物理現象として統一的・体系的に理解することを目指す分野である。最近の研究概要は以下のとおりである。 (1) 鉛直環状水槽内の熱対流：鉛直に置いた環状水槽の下部を加熱、上部を冷却したときに生じる周回流の周期的な反転現象について、その温度場と速度場を詳細に調査した。 (2) 超音波風速計の製作：地表付近の3次元的な大気の運動を調べるために、超音波風速計の製作を開始した。現在は改良をおこなっている段階である。 (3) 準2年周期振動（QBO）のモデル実験：赤道成層圏で観測されるQBOのモデル実験を行ない、流れの反転現象を再現した。また、この現象を引き起こしている内部重力波をモアレ法で可視化することにより、その伝播の様子を明らかにした。 キーワード：地球流体・自転・重力・対流・QBO
研究室の構成員
玉木克美（准教授）・博士（理学） 乙部直人（助教）・理学修士
2014年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
4年次生：6名 気象測器の製作 お天気掲示板の作成 傾圧不安定波の平均流速とドリフト速度

内部重力波の可視化 水平熱対流の温度場計測 WRF で得たデータに基づく福岡の天気 of 考察
教員の担当科目
玉木克美：(学部) 力学Ⅰ、力学A、力学Ⅱ、流体力学Ⅱ、物理学実験、物理科学入門、物理の世界、地球物理学実験Ⅰ、地球物理学実験Ⅲ、地球物理学実験Ⅳ、卒業論文 (大学院) 地球流体力学講究、地球流体力学実験、地球流体力学特論Ⅰ 乙部直人：(学部) 地球物理学実験Ⅰ、地球物理学実験Ⅱ、地球物理学実験Ⅲ、地球物理学実験Ⅳ
教員の所属学会
玉木克美：日本気象学会 乙部直人：日本気象学会、日本流体力学会
最近5年間の学術論文
(査読有) 舩田あゆみ, 筆保弘徳, 乙部直人：回転水槽実験で発生するながれの定量化と分類. 天気, 2015, Vol62, 10, 3-14 筆保弘徳, 舩田あゆみ, 乙部直人, 熊澤里枝, 西野耕一：粒子画像流速測定法と渦運動エネルギーを用いた回転水槽実験で発生する傾圧不安定波の定量化. ながれマルチメディア 2014 Ishiwatari, M., Toyoda, E., Morikawa, Y., Takehiro, S., Sasaki, Y., Nishizawa, S., Odaka, M., Otobe, N., Takahashi, Y. O., Nakajima, K., Horinouchi, T., Shiotani, M., Hayashi, Y.-Y., Gtool development group, 2012: "Gtool5": a Fortran90 library of input/output interfaces for self-descriptive multi-dimensional numerical data. <i>Geosci. Model Dev.</i>, 5, 449-455. (査読無) 千秋博紀, 大野宗祐, 乙部直人, 山本真行, 仲吉信人, はしもとじょーじ, 梅谷和弘, 池原光介, 藤津裕亮, 火星環境模擬チャンバーを用いた探査機器の耐環境試験：千葉工業大学研究報告, 63, 69-74 山田園子, 椎名達雄, 千秋博紀, 乙部直人, はしもとじょーじ, 川端康弘：MAV 搭載用超小型 LED ライダーの作製と評価. 信学技報, vol. 115, no. 453, OPE2015-230, pp. 81-86, 2016 年 2 月.
最近5年間の学術著書
該当なし
最近5年間の学術国際会議での発表
Ko-ichiro Sugiyama, Masatsugu Okada, Kensuke Nakajima, Yoshiyuki Takahashi, Naohito Otobe, Seiya Nishizawa, Yoshi-yuki Hayashi, George Hashimoto, Kouichi Hasegawa, Atsusi Sakakibara, Kazuhisa Tsuboki, Assessment of Mars surface environment for a exploration program: application of CReSS to Martian atmosphere, JpGU Meeting 2015, Makuhari, 2015 年 5 月

Naohito Ootobe, George Hashimoto, Hiroki Senshu, Makoto nakayoshi, Junichi Kurihara, Meteorological Instruments of Mars EDL, JpGU Meeting 2015, Makuhari, 2015 年 5 月 Takeshi Imamura, Yasuko Kasai, Takeshi Kuroda, Yasumasa Kasaba, Naohito Ootobe, George Hashimoto, Kazunori Ogohara. Mars Atmosphere Exploration Plan in MELOS. AOGS 2011, Shingapole. 2011 年 8 月 Naohito Ootobe, George L. Hashimoto, Kazunori Ogohara et al. Development of Martian meteorological Instruments. JpGU Meeting 2011, Makuhari. 2011 年 5 月
最近 5 年間の代表者としての学外資金導入実績
該当なし
最近 5 年間の代表者としての学内資金導入実績
大気モデル・観測統合研究チーム（分担者：高島久洋・西 憲敬）
最近 5 年間の学会等学術団体における役職など
該当なし
最近 5 年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
大気中の物質拡散入門 原子力発電所からの放射性物質拡散を念頭に、林 祥介、石川裕彦、乙部直人、酒井 敏、塩谷雅人、竹見哲也、坪木和久、山田道夫、余田成男、2011 年 9 月
最近 5 年間の一般（非学術）集会での発表論文
該当なし
最近 5 年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
該当なし

研究室名
大気微粒子動態学研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
当研究室では、大気浮遊微粒子（エアロゾル）の地球規模の動態とその仕組み、環境変動に対する役割について研究を進めている。最近は、①極域、熱帯の上部対流圏下部成層圏領域のエアロゾル動態と物質循環、②東アジア域の黄砂、汚染物質等の長距離輸送と都市活動の複合作用（汚染）をテーマとしている。これらの研究の推進のために、③無人航空機を用いた新たな観測プラットフォームの開発、④エアロゾルと雲相互作用の解明のための電子顕微鏡下氷晶形成実験、などを行っている。①については、南極観測事業に参加し、南極地域におけるエアロゾルの定常的観測の維持、南極域への中緯度からの大陸起源物質の輸送について、また、熱帯対流圏成層圏のエアロゾル動態については、名古屋大学、北海道大学などと共同で、エアロゾル不揮発性分の鉛直分布を明らかにするなどの取り組みをしている。②については、多くの研究機関の要望を受け入れ、福岡大学におけるエアロゾルと微量機体成分の組成と放射への影響に関する総合的な観測を組織し、福岡の大気の状態が大陸からの越境物質と福岡の都市排出物質の複合的な状態にあることが明らかになりつつある。③については、九州大学との協力により、南極昭和基地における高

度 23km からの無人観測航空機自律帰還を成功させ、④に関しては、数 10%の過飽和度までエアロゾルが氷晶核として活性化しない、形成される氷晶の形の特徴などを明らかにしてきている。これらの研究を有機的に進めるために、福岡大学産学官連携研究機関研究所「福岡から診る大気環境研究所」を 2014 年 4 月に発足させた。 キーワード：エアロゾル・全球規模環境変動・エアロゾル－雲相互作用・全球規模観測・飛翔体観測
研究室の構成員 林 政彦（教授）・博士（理学） 原圭一郎（助教）・博士（理学） 西田千春（PD，2014 年 4 月～2017 年 3 月，福岡から診る大気環境研究所）・博士（理学）
2015 年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ 卒論生8名 ・熱帯対流圏界層エアロゾルの揮発特性と分布－西部および中央太平洋における気球観測－ ・自動制御カイトプレーン による 大気観測の高度化 -エンジン振動の影響除去を中心として - ・露点温度 -80 ℃での氷晶形成実験 ～ 熱帯対流圏界面遷移層モデル実験～ ・夏季南極対流圏-成層圏間のエアロゾル輸送～気球による in-situ 観測から～ ・北部九州におけるPM2.5質量濃度と越境輸送の関係 ・福岡市で採取された大気エアロゾル中の鉱物粒子の組成と混合状態 ・福岡におけるブラックカーボンの季節変化と越境輸送 ・福岡におけるエアロゾルと視程の関係
教員の担当科目 林 政彦：（学部）地球圏科学序論、自然地理学、大気物理学、物理学Ⅲ、物理学実験、地球物理学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、気水圏物理化学、卒業研究 （大学院）地球環境物理学特論Ⅱ、地球環境物理学実験、地球環境物理学講究、地球環境物理学特別研究 原圭一郎：（学部）地球物理学実験Ⅱ・Ⅲ
教員の所属学会 林 政彦：日本気象学会、日本エアロゾル学会、地球電磁気惑星圏学会、American Geophysical Union、日本地球惑星科学連合、大気化学研究会 原圭一郎：日本気象学会、日本エアロゾル学会、日本分析化学会、American Geophysical Union、日本地球惑星科学連合、日本大気化学会 西田千春：日本エアロゾル学会
最近 5 年間の学術論文 原著論文（査読有） 査読者 2名以上

- R. Ko, M. Hayashi, H. Hayashi, K. Hayashi, H.Kato, Y. Kurata, Y. Fuchino, T. Nakamichi, H. Migita, H. Yano, T. Sakata and E. Uchio, Correlation between acute conjunctivitis and Asian dust on ocular surfaces, *J. Toxicol. Environ. Health A*, 79(8), 367-375, 2016, doi:10.1080/15287394.2016.1162248.
- A. Yoshino, A. Takami, K. Sato, A. Shimizu, N. Kaneyasu, S. Hatakeyama, K. Hara, and M. Hayashi, Influence of trans-boundary air pollution on the urban atmosphere in Fukuoka, Japan, *Atmosphere*, 2016, 7(4), 51; doi:10.3390/atmos7040051.
- T. Okuda, H. Yamazaki, K. Hatoya, N. Kaneyasu, A. Yoshino, A. Takami, K. Funato, K. Inoue, C. Nishita, K. Hara and M.Hayashi, Factors Controlling the Variation of Aerosol Surface Area Concentrations Measured by Diffusion Charger at Fukuoka, Japan, *Atmosphere*, 2016, 7(3), 33; doi:10.3390/atmos7030033.
- S. Enami, Y. Sakamoto, K. Hara, K. Osada, M. R. Hoffmann, and A. J. Colussi, "Sizing" Heterogeneous Chemistry in the Conversion of Gaseous Dimethyl Sulfide to Atmospheric Particles, *Environ. Sci. Technol.*, 50 (4), 1834-1843, 2016 (DOI: 10.1021/acs.est.5b05337).
- Takami, A., T. Miyoshi, S. Irei, A. Yoshino, K. Sato, A. Shimizu, M. Hayashi, K. Hara, N. Kaneyasu, S. Hatakeyama, Analysis of organic aerosol in Fukuoka, Japan using a PMF method, *Aerosol Air Qual. Res.*, 16, 314-322, 2016 (doi: 10.4209/aaqr.2015.03.0145)
- Higashino, S., M. Hayashi, S. Nagasaki, S. Umemoto, and M. Nishimura, A Balloon-Assisted Gliding UAV for Aerosol Observation in Antarctica, *Transactions of JSASS Aerospace Technology Japan*, Vol.12, No.APISAT-2013, pp.a35-a41, 2014.
- Kobayashi, H.; M. Hayashi, K. Shiraishi, Y. Nakura, T. Enomoto, K. Miura, H. Takahashi, Y. Igarashi, H. Naoe, N. Kaneyasu, T. Nishizawa and N. Sugimoto, Development of a polarization optical particle counter capable of aerosol type classification, *Atmos. Environ.*, 97, p. 486-492, 2014.
- K. Hara, F. Nakazawa, S. Fujita, K. Fukui, H. Enomoto, and S. Sugiyama, Horizontal distributions of aerosol constituents and their mixing states in Antarctica during the JASE traverse, *Atmos. Chem. Phys.*, 14, 10211–10230, 2014.
- S. Irei, A. Takami, M. Hayashi, K. Hara, N. Kaneyasu, K. Sato, T. Arakaki, S. Hatakeyama, T. Hikida, and A. Shimono, Transboundary secondary organic aerosol in western Japan indicated by stable carbon isotope ratio of low volatile water-soluble organic carbon and signal at m/z 44 in organic aerosol mass spectra, *Environ. Sci. Technol.*, 48, 6273–6281, 2014.
- Hara, K., Hayashi, M., Yabuki, M., Shiobara, M., and Nishita-Hara, C.: Simultaneous aerosol measurements of unusual aerosol enhancement in troposphere over Syowa Station, Antarctica, *Atmos. Chem. Phys.*, 14, 4169-4183, doi:10.5194/acp-14-4169-2014, 2014.
- N. Kaneyasu, S. Yamamoto, K. Sato, A. Takami, M. Hayashi, K. Hara, K. Kawamoto, T. Okuda, and S. Hatakeyama, Impact of long-range transport of aerosols on the PM2.5 composition at a major metropolitan area in the northern Kyushu area of Japan, *Atmos. Environ.*, 97, 416–425, 2014.
- 佐藤圭, 高見昭憲, 兼保直樹, 清水厚, 小川佳美, 吉野彩子, 中山寛康, 前田恵, 原圭一郎, 林政彦, 伊禮聡, 三好猛雄, 畠山史郎, 2009～2012 年北部九州の都市と離島におけるベンゾ[a]ピレン濃度、大気環境学会誌、49, 138-148, 2014.
- 鈴木亮太, 吉野彩子, 兼保直樹, 高見昭憲, 林政彦, 原圭一郎, 渡邊泉, 畠山史郎, 長崎県福江島・福岡県福岡市におけるエアロゾル金属成分の特徴と発生源推定, 大気環境学会誌、49, 15-25, 2014.

- Hirasawa, N., H. Nakamura, H. Motoyama, M. Hayashi and T. Yamanouchi, The role of synoptic-scale features and advection in prolonged warming and generation of different forms of precipitation at Dome Fuji station, Antarctica, following a prominent blocking event, *J. Geophys. Res.* D118, 6916–6928, 2013.
- Higashino, S., Funaki, M., Hirasawa, N., Hayashi, M., and Nagasaki, S., Development and Operational Experiences of UAVs for Scientific Research in Antarctica, in *Autonomous Control Systems and Vehicles – International Series on Intelligent Systems, Control and Automation: Science and Engineering*, Vol. 65, pp. 159–173, Springer, 2013.
- 高見昭憲, 伊礼聡, 紀本岳志, 竹村俊彦, 林政彦, 原圭一郎, 三好猛雄, 上田佳代, 佐藤 圭, 兼保直樹, 吉野彩子, 畠山史郎, 2012 年夏季, 福岡市と大阪市における高濃度硫酸イオン観測事例の解析, *エアロゾル研究*, 28, 281–286, 2013.
- K. Hara, K. Osada, and T. Yamanouchi, Tethered balloon-borne aerosol measurements: Seasonal and vertical variations of aerosol constituents over Syowa Station, Antarctica, *Atmos. Chem. Phys.* 13, 9119–9139, doi:10.5194/acp-13-9119-2013, 2013.
- K. Sato, A. Takami, S. Irie, T. Miyoshi, Y. Ogawa, A. Yoshino, Y. Iwasaki, H. Nakayama, T. Ishida, R. Suzuki, M. Maeda, M. Tanaka, S. Hatakeyama, K. Hara, M. Hayashi, N. Kaneyasu, Transported and Local Organic Aerosols over Fukuoka, Japan, *Aerosol Air Qual. Res.*, 13, 1263–1272, 2013.
- 江崎雄治, 平沢尚彦, 林政彦, 山内恭, 1997 年春季に南極昭和基地において発言した地上オゾン消失現象, *天気*, 60, 91–96, 2013.
- Atkinson D. E., K. Sassen, M. Hayashi, C. F. Cahill, G. Shaw, D. Harrigan, and H. Fuelberg, , Aerosol properties over Interior Alaska from lidar, DRUM Impactor sampler, and OPC-sonde measurements and their meteorological context during ARCTAS-A, April 2008, *Atmos. Chem. Phys.*, 13, 1293–1310, doi:10.5194/acp-13-1293-2013, 2013.
- Higashino, S., M. Funaki, N. Hirasawa, M. Hayashi, and S. Nagasaki, Development and Operational Experiences of UAVs for Scientific Research in Antarctica , *Autonomous Control Systems and Vehicles - Intelligent Unmanned Systems-*, Springer Monograph, 2012.
- Hara, K., K. Osada, M. Yabuki, and T. Yamanouchi , Seasonal variation of fractionated sea-salt particles on the Antarctic coast, *Geophys. Res. Lett.*, 39, L18801, doi:10.1029/2012GL052761, 2012.
- Shibata T., M. Hayashi, A. Naganuma, N. Hara, K. Hara, F. Hasebe, K. Shimizu, N. Komala, Y. Inai, H. Vömel, S. Hamdi, S. Iwasaki, M. Fujiwara, M. Shiotani, S.-Y. Ogino and N. Nishi, Cirrus cloud appearance in a volcanic aerosol layer around the tropical cold point tropopause over Biak, Indonesia in January 2011, *J. Geophys. Res.*, 117, D11209, doi:10.1029/2011JD017029.
- 小川 佳美, 兼保 直樹, 佐藤 圭, 高見 昭憲, 林 政彦, 原 圭一郎, 畠山 史郎 , 長距離輸送された多環芳香族炭化水素と n-アルカン – 2009 年春季および秋季の沖縄辺戸岬, 福江島, 福岡での測定から, *大気環境学会誌*, 47(1), 18–25, 2012.
- Fujita, S., Holmlund, P., Andersson, I., Brown, I., Enomoto, H., Fujii, Y., Fujita, K., Fukui, K., Furukawa, T., Hansson, M., Hara K., Hoshina, Y., Igarashi, M., Iizuka, Y., Imura, S., Ingvander, S., Karlin, T., Motoyama, H., Nakazawa, F., Oerter, H., Sjöberg, L. , Sugiyama, S., Surdyk, S., Ström, J. Uemura, R. and Wilhelms, F., Spatial and temporal variability of snow accumulation in Dronning Maud Land, East Antarctica, including two deep ice coring sites at Dome Fuji and EPICA DML, *The Cryosphere*, 5, 1057–1081, 2011 (doi:10.5194/tc-5-1057-2011).
- Shiraishi, K., M. Hayashi, M. Fujiwara, T. Shibata, M. Watanabe, Y. Iwasaka, R. Neuber and T. Yamanouchi, Comparable analysis of measurement of stratospheric aerosol by lidar and aerosol sonde above Ny-Aalesund in the winter of 1995, *Polar Science*, doi:10.1016/j.polar. 2011.08.003, 5, 399–410, 2011.
- Hara K., K. Osada, C. Nishita-Hara, M. Yabuki, M. Hayashi, T. Yamanouchi, M. Wada, and M. Shiobara , Seasonal features of ultra-fine particle volatility in coastal Antarctic troposphere, *Atmos. Chem. Phys.*, 11, 9803–9812, doi:10.5194/acp-11-9803, 2011, 2011.

- Hara K., K. Osada, C. Nishita-Hara, and T. Yamanouchi , Seasonal variations and vertical features of aerosol particles in the Antarctic troposphere, *Atmos. Chem. Phys.*, 11, 5471–5484, doi:10.5194/acp-11-5471,2011,2011.
- Osada K., S. Ura, M. Kagawa, M. Mikami, T. Y. Tanaka, S. Matoba, K. Aoki, M. Shinoda, Y. Kurosaki, M. Hayashi, A. Shimizu, and M. Uematsu , Temporal and Spatial Variations of Wet Deposition Flux of Mineral Dust in Japan, *SOLA*, 7, 049-052, doi:10.2151/sola.2011-013,2011.
- 兼保直樹, 高見昭憲, 佐藤 圭, 畠山史郎, 林 政彦, 原圭一郎, 河本和明, 山本重一 , 九州北部の離島および大都市部における PM_{2.5} 濃度の通年での挙動, *大気環境学会誌*, 46, 111-118,2011.
- 兼保直樹, 高見昭憲, 佐藤 圭, 畠山史郎, 林 政彦, 原圭一郎, Chang Lim-Seok, Ahn Joon-Young , 九州北部における春季の高濃度 PM_{2.5} と長距離輸送, *大気環境学会誌*, 45, 227-234,2010
- 浦 幸帆, 長田 和雄, 香川 雅子, 三上 正男, 的場 澄人, 青木 一真, 篠田 雅人, 黒崎 泰典, 林 政彦, 清水 厚, 植松 光夫 , 非水溶性大気沈着物中の Fe 含有量を用いた鉱物質ダスト量の推定, *エアロゾル研究*, 26, 234-241,2011.
- Hara K., K. Osada, M. Yabuki1, G. Hashida, T. Yamanouchi, M. Hayashi, M. Shiobara, C. Nishita-Hara, and M. Wada , Haze episodes at Syowa Station, coastal Antarctica: Where did they come from?, *J. Geophys. Res.*, 115, D14205, doi:10.1029/2009JD012582,2010.

査読者 1名

- 尾塚馨一, 林政彦, 岡部和夫, 東野伸一郎, 無人航空機によるリアルタイム in-situ 測風, *福岡大学理学集報*, 44, 45-51, 2014
- 白石浩一, 林政彦, 橋本あやか, 内山明博, 山崎明宏, ライダー比の推定とエアロゾルの同定 — 2011 年 4-11 月に福岡でライダーとスカイラジオメータにより観測された下部対流圏エアロゾルの光学特性 —, *福岡大学理学集報*, 43/2, 159-165, 2013
- Hara K., K. Osada, and T. Yamanouchi , Tethered balloon-borne aerosol measurements: Seasonal and vertical variations of aerosol constituents over Syowa Station, Antarctica, *Atmos. Chem. Phys. Discuss.*, 13, 8153–8211, doi:10.5194/acpd-13-8153-2013,2013.
- Fujita, S., Holmlund, P., Andersson, I., Brown, I., Enomoto, H., Fujii, Y., Fujita, K., Fukui, K., Furukawa, T., Hansson, M., Hara, K., Hoshina, Y., Igarashi, M., Iizuka, Y., Imura, S., Ingvander, S., Karlin, T., Motoyama, H., Nakazawa, F., Oerter, H., Sjöberg, L. E., Sugiyama, S., Surdyk, S., Ström, J., Uemura, R., and Wilhelms, F. : Spatial and temporal variability of snow accumulation in Dronning Maud Land, East Antarctica, including two deep ice coring sites at Dome Fuji and EPICA DML, *The Cryosphere Discuss.*, 5, 2061-2114, doi:10.5194/tcd-5-2061-2011,2011.
- Hara K., K. Osada, C. Nishita-Hara, M. Yabuki, M. Hayashi, T. Yamanouchi, M. Wada, and M. Shiobara , Seasonal features of ultra-fine particle volatility in coastal Antarctic troposphere, *Atmos. Chem. Phys. Discuss.*, 11, 14777-14799, doi:10.5194/acpd-11-14777-2011,2011.

解説（査読なし）

- 林 政彦 (2012), 海塩粒子の潮解・－70℃の微小氷晶形成 , *空気清浄*, 49(6), p57.
- 原圭一郎 (2012) , 極域大気エアロゾルの混合状態、空気清浄, 50, p. 55.
- 西田千春 (2015), 黄砂とアレルギー：黄砂とアレルギー性結膜炎の関係解明に向けて、アレルギーの臨床, 35(7), p66
- 西田千春 (2015), 黄砂とアレルギー：黄砂とアレルギー性結膜炎の関係解明に向けて、アレルギーの臨床(再掲載), 35(14), p75

最近 5 年間の学術著書

原圭一郎

地球と宇宙の化学辞典(「極域の大気化学」page. 207)、日本地球化学会編、朝倉書店、2012

年9月
最近 5 年間の学術国際会議での発表
Hayashi, M. and H. Kobayashi, Size distribution of aerosol and cloud particles by in-situ observations using UAV, Joint PI workshop of Global Environment Observation Mission 2014, Takebashi, Jan. 12-16, 2015. Hayashi, M., K. Hara, T. Shibata and H. Hasebe, Volatility and composition of aerosols in tropical stratosphere and TTL over Biak, Indonesia, 2014 AGU Fall meeting, San Francisco, 2014. 12.. Hayashi, M., In-situ observation of size distribution of spherical and non-spherical particles by UAV borne Polarization Optical Particle Counter (P-OPC), EarthCARE Workshop 2014, National Museum of Emerging Science and Innovation (Mirai), 17 - 19th September, 2014 Hayashi, M., Size distribution of aerosol and cloud particles by in-situ observations using UAV, Joint PI workshop of Global Environment Observation Mission 2013, Takebashi, Jan. 14-17, 2014. Hayashi, M., N. Hirasawa and S. Higashino, Development of observations using Unmanned Aerial Vehicle in Antarctica, The 4th Symposium on Polar Science, Tachikawa, Nov. 13, 2013. Hayashi, M., Volatility and composition of TTL aerosols by balloon borne in-situ observation, US-JPN TTL workshop, Honolulu, Oct. 15-19, 2012 Hayashi, M., Observation of fine ice crystals on ice nucleus at 70 °C using ESEM, International symposium on aerosol studies explored by electron microscopy, Tsukuba, 2012. 2. K. Hara, K. Osada, M. Yabuki, M. Shiobara, and T. Yamanouchi, Seasonal features of black carbon measured at Syowa Station, Antarctica, AGU fall meeting, Dec. 14-18, 2015. Hara, K., Vertical distributions of aerosol constituents and their mixing states in Antarctic troposphere during the summer, International symposium on aerosol studies explored by electron microscopy, Tsukuba, 2012. 2.
最近 5 年間の代表者としての学外資金導入実績
科学研究費補助金 基盤研究 (B)「南極沿岸域の炭素質エアロゾル: 低中緯度域からの輸送とその起源」 (代表者: 原圭一郎、分担者: 須藤健吾), 15,990 千円, 2015 年度～2018 年度 挑戦的萌芽研究「黄砂の物理・化学・生物的諸特性とアレルギー性結膜円の病態の関係解明」2015 年度～2016 年度(代表者: 西田千春、分担者: 内尾英一) 挑戦的萌芽研究「北極季節海氷上の海塩粒子: 海氷からの粒子発生とフロストフラワー」 (代表者: 原圭一郎、分担者: 的場澄人), 3,100 千円, 2013 年度～2015 年度 挑戦的萌芽研究「気球分離式小型無人航空機による成層圏エアロゾル上部境界領域動態の直接観測」(代表者: 林政彦, 分担者: 白石浩一, 原圭一郎), 3,100 千円, 2011 年度～2013 年度 基盤研究(B)(海外学術調査)「南極大陸辺縁部における夏季エアロゾル相の上下混合過程の飛翔体観測」(代表: 林政彦, 分担者: 白石浩一、原圭一郎) 13,700 千円, 2012 年度～2014 年度 基盤研究 (B)「南極ヘイズ: その出現状況と鉛直分布、低中緯度からの物質輸送」(代表者: 原圭一郎, 分担者: 林政彦) 総額: 16380 千円 (直接経費+間接経費)・2010 年度～2013 年度 共同研究 (独)宇宙航空研究開発機構 気球分離小型無人航空機による成層圏エアロゾルの直接観測 4,091 千円, 2014 年度 (独)宇宙航空研究開発機構 気球分離小型無人航空機による成層圏エアロゾルの直接観測 2,280 千円, 2013 年度

受託研究 小林製薬(株) アイボン AL による洗眼効果の有効性試験 1,400 千円 2015 年度 (独)宇宙航空研究開発機構 Size distribution of aerosol and cloud particles by in-situ observations using UAV 803 千円, 2014 年度 (独)宇宙航空研究開発機構 Size distribution of aerosol and cloud particles by in-situ observations using UAV 1,550 千円, 2013 年度 研究助成寄付金 寄付者: 山梨技術工房 研究所活動助成, 100 千円, 2015 年度 寄付者: トーテックス 研究所活動助成, 50 千円, 2015 年度 寄付者: 小林製薬(株) 洗眼剤による異物抽出試験に関する研究, 1,400 千円, 2013 年度 寄付者: 小林製薬(株) 洗眼剤による異物抽出試験に関する研究, 1,100 千円, 2012 年度
最近 5 年間の代表者としての学内資金導入実績 産学官連携研究機関研究所: 福岡から診る大気環境研究所 (代表者: 林政彦, 分担者: 高島久洋, 原圭一郎, 白石浩一), 4,100 千円(2015 年度), 4,100 千円(2014 年度), 4,100 千円(2013 年度), 2014~2018 年度 推奨研究: 無人小型航空機による広域エアロゾル観測の南極対流圏への展開 (代表者: 林政彦, 分担者: 原圭一郎), 2,130 千円, 2014 年度~2016 年度 推奨研究: 無人小型航空機によるエアロゾル観測の南極対流圏への展開 (代表者: 林政彦, 分担者: 原圭一郎, 高島久洋), 1,050 千円, 2011 年度~2013 年度
最近 5 年間の学会等学術団体における役職など 林 政彦: 2014 年 8 月~ 日本アロゾル学会 理事 2014 年 日本気象学会秋季大会実行委員 2012 年 エアロゾル科学技術研究討論会 実行委員 (エアロゾル学会) 2012 年 大気化学討論会 実行委員長 (大気化学研究会) 2008 年 8 月~2012 年 8 月 日本アロゾル学会 理事 2008 年 8 月~2012 年 8 月 エアロゾル研究 (日本エアロゾル学会学会誌) 編集委員 2011 年 5 月~2012 年 4 月 情報システム研究機構国立極地研究所南極観測委員会気水圏専門委員会委員 2007 年 5 月~2011 年 4 月 情報システム研究機構国立極地研究所南極観測委員会気水圏分科会委員 原圭一郎: 2015 年 4 月-2016 年 3 月 大気条件標準化委員会 (JAXA) 2012 年 エアロゾル科学技術研究討論会 実行委員 (エアロゾル学会) 2012 年 大気化学討論会 実行委員 (大気化学研究会)
最近 5 年間の一般向け論文と著書、行政報告書など 該当なし
最近 5 年間の一般 (非学術) 集会での発表論文 該当なし
最近 5 年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など 該当なし
その他特筆事項 特許取得 粒子計数装置 特許番号:特許第 5717136 号、平成 27 年 5 月 13 日 (林 政彦)

研究室名
大気環境科学研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
当研究室では、大気中のエアロゾル・微量ガス成分・雲を対象として遠隔的な観測（リモートセンシング観測）をおこない、都市大気の影響から、黄砂・エアロゾル・大気ガス成分の半球規模の輸送現象、熱帯・極域（対流圏－成層圏）を含めた地球規模の物質循環まで、主に物理（輸送）過程に着目した研究をおこなっている。また、より広域的な（地域規模・半球規模）現象をとらえるために人工衛星観測データを用いた解析もあわせておこなっている。最近では ①福岡（都市域）におけるエアロゾル・ガス成分の動態/大気環境に関する研究、②ラマンライダーを用いた大気エアロゾル・雲の光学特性に関する研究、③ライダー・MAX-DOAS 法等のリモートセンシング観測手法の高度化に関する研究、④極域成層圏エアロゾル/極成層圏雲の動態に関する研究、⑤熱帯における成層圏-対流圏物質交換過程に関する研究、⑥船舶を用いた海洋上の大気組成の動態に関する研究をおこなっている。福岡における大気環境モニタリングの観点からエアロゾル・二酸化窒素の連続立体観測を行っている。 キーワード： リモートセンシング観測，物質循環，極域，熱帯，大気環境，黄砂
研究員の構成員
高島久洋（講師）・博士（理学） 白石浩一（助教）・博士（理学）
2015 年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
4 年次生：6 名 - 自動車搭載型装置を用いた MAX-DOAS 法による福岡都市圏の二酸化窒素 (NO₂) 分光観測 - 小型観測装置を用いた MAX-DOAS 法による二酸化硫黄 (SO₂) の分光観測 - スカイラジオメータで観測された福岡上空における対流圏エアロゾルの光学特性 - ライダーで観測された境界層高度と境界層の発達について - 福岡における二酸化窒素 (NO₂) の時空間変動 MAX-DOAS 法を用いた分光観測 - 福岡における対流圏オゾン濃度の長期変動 大学院生：1 名 - 北半球冬季における熱帯対流圏界面近傍の水蒸気、雲に関する研究
教員の担当科目
高島久洋：(学部) 地球物理学、地球物理学概論、物理学実験、物理学Ⅱ（振動と波）、地球物理学実験Ⅱ・Ⅲ、大気環境物理学A、大気環境物理学B、卒業論文 (大学院) 地球環境物理学特論Ⅰ 白石浩一：(学部) 地球物理学実験Ⅱ・Ⅲ

教員の所属学会
高島久洋：日本気象学会，日本地球惑星科学連合，American Geophysical Union (AGU)，大気環境学会 白石浩一：日本気象学会，日本エアロゾル学会，American Geophysical Union (AGU)
最近５年間の学術論文
学術論文 1. Kanaya, Y., H. Tanimoto, Y. Yokouchi, F. Taketani, Y. Komazaki, H. Irie, H. Takashima, X. Pan, S. Nozoe, S. Inomata, Diagnosis of Photochemical Ozone Production Rates and Limiting Factors in Continental Outflow Air Masses Reaching Fukue Island, Japan: Ozone-Control Implications, <i>Aerosol and Air Quality Research (AAQR)</i>, 16/2, 430-441, 2016. (査読有) 2. Taketani, F., T., Miyakawa, H., Takashima, Y. Komazaki, Y. Kanaya, and J Inoue, Shipborne observations of atmospheric black carbon aerosol particles over the Arctic Ocean, Bering Sea, and North Pacific Ocean during September 2014, <i>Journal of Geophysical Research (JGR) Atmospheres</i>, 121, 2016. (査読有) 3. Takashima, H., Y. Kanaya, H. Irie, Spatiotemporal inhomogeneity in NO₂ over Fukuoka observed by ground-based MAX-DOAS, <i>Atmospheric Environment</i>, 100, 117-123, doi:10.1016/j.atmosenv.2014.10.057, 2015. (査読有) 4. 白石浩一，木附雅貴，高島久洋，水谷耕平，寒冷前線通過時にライダーで観測された黄砂層の光学特性，<i>福岡大学理学集報</i>, 45/2, 21-29, 2015. 5. Kanaya, Y., H. Irie, H. Takashima, H. Iwabuchi, H. Akimoto, K. Sudo, M. Gu, J. Chong, Y. J. Kim, H. Lee, A. Li, F. Si, J. Xu, P.-H. Xie, W.-Q. Liu, A. Dzhola, O. Postlyakov, V. Ivanov, E. Grechko, S. Terpugova, and M. Panchenko, Long-term MAX-DOAS network observations of NO₂ in Russia and Asia (MADRAS) during 2007–2012: instrumentation, elucidation of climatology, and comparisons with OMI satellite observations and global model simulations, <i>Atmos. Chem. Phys. Discuss.</i>, 14, 2883-2934, 2014. (査読有) 6. Kobayashia, H., M. Hayashi, K. Shiraishi, Y. Nakura, T. Enomoto, K. Miura, H. Takahashi, Y. Igarashi, H. Naoe, N. Kaneyasu, T. Nishizawa, N. Sugimoto, Development of a polarization optical particle counter capable of aerosol type classification, <i>Atmos. Environ.</i>, 97, 486–492, 2014. (査読有) 7. Pinardi, G., M. Van Roozendaal, N. Abuhassan, C. Adams, A. Cede, K. Clémer, C. Fayt, U. Frieß, M. Gil, J. Herman, C. Hermans, F. Hendrick, H. Irie, A. Merlaud, M. Navarro Comas, E. Peters, A. J. M. PETERS, O. Puertedura, A. Richter, A. Schönhardt, R. Shaiganfar, E. Spinei, K. Strong, H. Takashima, M. Vrekoussis, T. Wagner, F. Wittrock, and S. Yilmaz, MAX-DOAS formaldehyde slant column measurements during CINDI: intercomparison and analysis improvement, <i>Atmospheric Measurement Techniques (AMT)</i>, 6/1, 167-185, 2013. (査読有) 8. 白石浩一，藤原玄夫，高島久洋，鳥越剛，ライダーで観測された福岡における成層圏エアロ

- ゾルの長期変動, 福岡大学理学集報, 43/2, 153-157, 2013.
9. 白石浩一, 林政彦, 橋本あやか, 内山明博, 山崎 明宏, ライダー比の推定とエアロゾルの同定 –2011 年 4-11 月に福岡でライダーとスカイラジオメータにより観測された下部対流圏エアロゾルの光学特性–, 福岡大学理学集報, 43/2, 159-165, 2013.
 10. Pan, X.L., Y. Kanaya, Z. F. Wang, F. Taketani, H. Tanimoto, H. Irie, H. Takashima, and S. Inomata Emission ratio of carbonaceous aerosols observed near crop residual burning sources in a rural area of the Yangtze River Delta Region, China, *Journal of Geophysical Research (JGR)* –*Atmospheres*, 117, 2012. (査読有)
 11. Takashima, H., H. Irie, Y. Kanaya, and F. Syamsudin, NO₂ observations over the western Pacific and Indian Ocean by MAX-DOAS on Kaiyo, a Japanese research vessel, *Atmospheric Measurement Techniques (AMT)*, 5, 2351-2360, 2012. (査読有)
 12. Kanaya, Y., F. Taketani, Y. Komazaki, X. Liu, Y. Kondo, L. K. Sahu, H. Irie and H. Takashima Comparison of Black Carbon Mass Concentrations Observed by Multi-Angle Absorption Photometer (MAAP) and Continuous Soot-Monitoring System (COSMOS) on Fukue Island and in Tokyo, Japan, *Aerosol Science and Technology*, 47/1, 2012. (査読有)
 13. Piter, A. J. M., K. F. Boersma, M. Kroon, J. C. Hains, M. Van Roozendaal, F. Wittrock, N. Abuhassan, C. Adams, M. Akrami, M. A. F. Allaart, A. Apituley, J. B. Bergwerff, A. J. C. Berkhout, D. Brunner, A. Cede, J. Chong, K. Cl'emer, C. Fayt, U. Frieß, L. F. L. Gast, M. Gil-Ojeda, F. Goutail, R. Graves, A. Griesfeller, K. Großmann, G. Hemerijckx, F. Hendrick, B. Henzing, J. Herman, C. Hermans, M. Hoexum, G. R. van der Hoff, H. Irie, P. V. Johnston, Y. Kanaya, Y. J. Kim, H. Klein Baltink, K. Kreher, G. de Leeuw, R. Leigh, A. Merlaud, M. M. Moerman, P. S. Monks, G. H. Mount, M. Navarro-Comas, H. Oetjen, A. Pazmino, M. Perez-Camacho, E. Peters, A. du Piesanie, G. Pinardi, O. Puentedura, A. Richter, H. K. Roscoe, A. Sch' onhardt, B. Schwarzenbach, R. Shaiganfar, W. Sluis, E. Spinei, A. P. Stolk, K. Strong, D. P. J. Swart, H. Takashima, T. Vlemmix, M. Vrekoussis, T. Wagner, C. Whyte, K. M. Wilson, M. Yela, S. Yilmaz, P. Zieger, and Y. Zhou The Cabauw Intercomparison campaign for Nitrogen Dioxide Measuring Instruments (CINDI): design, execution, and early results, *Atmospheric Measurement Techniques (AMT)*, 5/4, 457-485, 2012. (査読有)
 14. Irie, H., H. Takashima, Y. Kanaya, K. F. Boersma, L. Gast, F. Wittrock, D. Brunner, Y. Zhou, and M. Van Roozendaal, Eight-component retrievals from ground-based MAX-DOAS observations, *Atmospheric Measurement Techniques (AMT)*, 4/4, 1027-1044, 2011. (査読有)
 15. Takashima, H., H. Irie, Y. Kanaya, H. Akimoto Enhanced NO₂ at Okinawa Island, Japan caused by rapid air mass transport from China as observed by MAX-DOAS, *Atmospheric Environment*, 45/15, 2593-2597, 2011. (査読有)
 16. Shiraishi, K., M. Hayashi, M. Fujiwara, T. Shibata, M. Watanabe, Y. Iwasaka, R. Neuber, T. Yananouchi, Comparative analysis of measurements of stratospheric aerosol by lidar and aerosol sonde above Ny-Ålesund in the winter of 1995, *Polar Science*, 5/4, 399-410, 2011. (査読有)

最近 5 年間の学術著書

1. 図説 地球環境の事典 (吉崎正憲・野田彰ほか＝編集、項目「成層圏-対流圏交換」分担), 朝倉書店, 2013年10月.

最近 5 年間の学術国際会議での発表

(主著のみ記載)

Takashima, H., Y. Kanaya, H. Irie, Spatiotemporal inhomogeneity in atmospheric trace-gas over Fukuoka, an urban area in Japan, observed by ground-based MAX-DOAS, AGU fall meeting 2015, San Francisco

Takashima, H., Y. Kanaya, F. Taketani, Trace gas and aerosol measurements over ocean by ship-borne MAX-DOAS on a Japanese research vessel, Mirai, 7th International DOAS workshop, Brussels

Takashima, H., Y. Kanaya, H. Irie, Spatiotemporal inhomogeneity in atmospheric trace-gas over Fukuoka observed by ground-based MAX-DOAS 7th International DOAS Workshop, Brussels

Shiraishi, K., M. Hayashi, T. Shibata, R. Neuber, W. Ruhe, Vertical distribution of non-volatile species of upper tropospheric and lower stratospheric aerosol observed by balloon-borne optical particle counter above Ny-Aalesund, Norway in the winter of 2015, American Geophysical Union Fall Meeting 2015, San Francisco, USA, 2015.

Takashima, H., H. Tokunaga, Horizontally extensive cirrus clouds in the TTL over the eastern tropical Pacific, American Geophysical Union Fall Meeting 2014, San Francisco, USA, 2014.

Takashima, H., Y. Kanaya, Vertical and horizontal NO₂ transport in urban area associated with land-sea breeze as observed by ground-based MAX-DOAS, American Geophysical Union Fall Meeting 2013, San Francisco, USA, 2013.

Takashima, H., Y. Kanaya, Inhomogeneity of NO₂ over Fukuoka, an urban site in Japan observed by MAX - DOAS, International DOAS Workshop 2013, Colorado, USA, 2013.

Takashima, H. Irie, Y. Kanaya, Ship-borne MAX-DOAS measurements over the western Pacific and Indian Ocean on a Japanese research vessel “Mirai”, AGU fall meeting 2012, San Francisco, USA, 2012.

Takashima, H., H. Irie, and Y. Kanaya, NO₂ variations over the remote ocean observed by MAX-DOAS on a Japanese research vessel, AGU fall meeting 2010, San Francisco, USA, 2011.

Takashima, H., H. Irie, Y. Kanaya, Aerosol and gas observations by MAX-DOAS on a Japanese research vessel, 5th DOAS workshop, Mainz, Germany, 2011.

最近 5 年間の代表者としての学外資金導入実績

高島久洋: 科学研究費補助金・若手研究 B「越境汚染大気と都市大気の混合過程解明のためのリモートセンシング観測手法の高度化」 代表 2014 年 4 月 1 日～2017 年 3 月 31 日(予定).

高島久洋: 科学研究費補助金・若手研究 B「海洋上における半球規模の大気組成の変動要因の解明～衛星観測データの検証」 代表・290 万円 (直接経費) 2011 年度～2012 年度.

白石浩一: 科学研究費補助金・基盤研究 C「北極成層圏エアロゾルの揮発特性と輸送過程に関する研究」 代表・270 万円 (直接経費) 2013 年度～2015 年度.

最近5年間の代表者としての学内資金導入実績
高島久洋: 2013 年度 理学研究科高度化推進事業（タイプ I -研究科分）大気微量成分観測のための装置開発と地球規模の物質循環過程に関する研究 高島久洋 (代表): 2013 年～2015 年、推奨研究プロジェクト、大気エアロゾル観測のための観測装置・解析アルゴリズム高度化
最近5年間の学会等学術団体における役職など
高島久洋: 2012 年 第 18 回大気化学討論会, 実行委員 2008 年～ オゾン研究連絡会 世話人 白石浩一: 2012 年 第 18 回大気化学討論会 実行委員 2006 年 2 月～現在 レーザレーダ研究会運営委員
最近5年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
該当なし
最近5年間の一般（非学術）集会での発表論文
該当なし
最近5年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
該当なし

研究室名
火山・有機地質学研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
火山・有機地質学研究室では、岩石・地層・堆積物に保存された火山碎屑物や炭素質物質などを対象として、1. 火山噴火史の高精度解析, 2. 地殻表層における炭素循環システムの構築, 3. アジア地域での古環境復元に関する研究をそれぞれ進めている。研究室としてこれらの研究を総合することを目指している。その基礎となるのは精密な野外調査であり、国内は九州から北海道までの火山、洞窟および炭田、海外では米国アリューシャン列島のフォー・マウンテンズ諸島、フィリピンのピナツボ火山、タール火山、イロシンカルデラ、インドネシアのバリ島などをフィールドとしている。2012 年 4 月に設置された産学官連携研究機関・国際火山噴火史情報研究所とも連携して、調査・研究結果をデータベース化するなど、噴火史研究を防災・減災へ応用する研究にも取り組んでいる。 キーワード: 火山噴火史・活構造・地質年代・石炭地質・洞窟
研究員の構成員
奥野 充 (教授)・博士 (学術) 鮎澤 潤 (助教)・博士 (理学) 中西利典 (ポストドクター研究員)・博士 (理学) (受入期間: 2014 年 4 月～)
2015 年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ

大学院生：1名 フィリピン・ルソン島、パイタン湖のコア試料からみた環境変遷
教員の担当科目
奥野 充：(学部) 地球物質科学Ⅰ、地球物質科学Ⅱ、地球物質化学、自然科学入門、 自然科学と人間、地球物質科学実験Ⅱ、地球科学野外演習、卒業論文、 基礎防災学、科学・技術・情報と社会 (大学院) 地球変動科学実験、地球変動科学特論Ⅳ、地球変動科学特別研究 鮎澤 潤：(学部) 地球科学実験、地球科学野外演習、科学・技術・情報と社会
教員の所属学会
奥野 充： 日本地質学会，日本地理学会，日本火山学会，日本第四紀学会，東京地学協会，日本地形学連合，日本文化財科学会，日本自然災害学会，東北地理学会 鮎澤 潤： 日本地質学会，日本鉱物科学会，日本洞窟学会，Mineralogical Society of America 中西利典：日本地質学会，日本応用地質学会，日本火山学会，日本第四紀学会
最近5年間の学術論文
(すべて査読有) Ishii, Y., Hori, K., Momohara, A., <u>Nakanishi, T.</u> and Hong, W. (2016) Middle to late-Holocene decreased fluvial aggradation and widespread peat initiation in the Ishikari lowland (northern Japan). <i>The Holocene</i> , doi: 10.1177/0959683616646189. 堀川義之・永尾隆志・ <u>奥野 充</u> (2016) 国東半島，両子火山群—岡ノ岳火山の噴火活動．火山， 61 ，225–236. <u>Nakanishi, T.</u> , Hong, W., Sung, K.S., Sung, K.H., and Nakashima, R. (2015) Offsets in radiocarbon ages between plants and shells from same horizons of coastal sediments in Korea, <i>Nuclear Instruments and Methods in Physics Research Section B</i> , 361 , 670-679. 中西利典・竹村恵二 (2015) 徳島平野と濃尾平野で得られた完新世浅海底堆積物のテフラと放射性炭素年代測定による編年，火山， 60 ，299-308. Katsuki, K., Yang, D.Y., Seto, K., Yasuhara, M., Takata, H., Otsuka, M., <u>Nakanishi, T.</u> , Yoon, Y., Um, I.K., Cheung, R.C.W., Khim, B.K., and Kashima, K. (2015) Factors controlling typhoons and storm rain on the Korean Peninsula during the Little Ice Age. <i>Journal of Paleolimnology</i> , 55 , 35–48. doi: 10.1007/s10933-015-9861-3 片平 要・ <u>奥野 充</u> (2015) 開聞岳火山の海食崖に露出するテフラ層から得られた炭化木片の放射性炭素年代．火山， 60 ，309–315. 小林哲夫・筒井正明・ <u>奥野 充</u> (2015) 九重火山群，松の台岩層なだれ堆積物の地質学的研究．火山， 60 ，317–324. 奥村 勝・高橋伸弥・鶴田直之・鳥井真之・ <u>奥野 充</u> (2015) 火山露頭データベース：新たな“知識基盤”の構築とその試作例．火山， 60 ，349–356. Khasanov, B.F., Nakamura, T., <u>Okuno, M.</u> , Gorlova, E.N., Krylovich, O.A., West, D.L., Hatfield, V. and Savinetsky, A.B. (2015) The marine radiocarbon reservoir effect on Adak Island (Central Aleutian

- Islands), Alaska. *Radiocarbon*, **57**, 955–964. DOI:10.2458/azu_rc.57.18329
- Nakamura, T., Koike, H., Aizawa, J. and Okuno, M. (2015) Growth process in an elephant tusk: Age estimations based on temporal variations in bomb-radiocarbon content. *Nuclear Instruments and Methods in Physics Research, Section B: Beam Interactions with Materials and Atoms*, **361**, 496–499. doi:10.1016/j.nimb.2015.04.070
- 長岡信治・奥野 充 (2015) 九州中部, 九重火山群の噴火史. 地形, **36**, 141–158.
- 中西利典・竹村恵二・松山尚典・齋藤武士・柴田康行・香月興太 (2015) 別府市浜脇地区のボーリングコア試料から認定した朝見川断層の完新世における活動, 地形, **36**, 159–171.
- Tanabe, S., Nakanishi, T., Ishihara, Y. and Nakashima, R. (2015) Millennial-scale stratigraphy of a tidal-dominated incised valley during the last 14 kyr: Spatial and quantitative reconstruction in the Tokyo Lowland, central Japan, *Sedimentology*, doi: 10.1111/sed.12204.
- 鮎沢 潤・水島明夫・井上哲秀・棟上俊二・牧野泰彦 (2015) 福岡県の地質を探る. 日本地学教育学会 69 回大会 (福岡) 巡検案内書. 日本地学教育学会, 1–16.
- 堀 和明・野々垣 徹・松原功育・中島 礼・中西利典・洪 完・牧野内 猛 (2014) デルタフロント堆積物の特徴と既存ボーリング柱状図の再検討: 濃尾平野を例に. 地形, **35**, 233–249.
- 石井祐次・伊藤彩奈・中西利典・洪 完・堀 和明 (2014) 石狩低地内陸で採取された IK コアが示す完新世の堆積環境. 第四紀研究, **53**, 143–156.
- 稲倉寛仁・成尾英仁・奥野 充・小林哲夫 (2014) 南九州, 池田火山の噴火史. 火山, **59**, 255–268.
- Mirabueno, M.H.T., Torii, M., Laguerta, E.P., Delos Reyes, P.J., Fujiki, T., Bariso, E.B., Okuno, M., Nakamura, T., Danhara, T., Saito-Kokubu, Y. and Kobayashi, T. (2014) Stratigraphy and AMS radiocarbon dates of cored sediments (IrBH-2) from the Irosin caldera, the Philippines. *Journal of Geography (Chigaku Zasshi)*, **123**, 751–760. doi: 10.5026/jgeography.123.751
- Miyabuchi, Y., Okuno, M., Torii, M., Yoshimoto, M., and Kobayashi, T. (2014) Tephrostratigraphy and eruptive history of post-caldera stage of Toya Volcano, Hokkaido, northern Japan. *Journal of Volcanology and Geothermal Research*, **281**, 34–52. doi: <http://dx.doi.org/10.1016/j.jvolgeores.2014.05.019>
- Fujiki, T., Okuno, M., Moriwaki, H., Nakamura, T., Kawai, K., McCormack, G., Cowan, G. and Maoate, P.T. (2014) Vegetation changes viewed from pollen analysis in Rarotonga, southern Cook Islands, eastern Polynesia. *Radiocarbon*, **56**, 699–708. DOI: 10.2458/56.17444
- 檀原 徹・奥野 充・山下 透・マリア ハナ ミラブエノ・鳥井真之・小林哲夫 (2014) フィリピン共和国, イロシン火砕流堆積物とそれに伴う降下火山灰の岩石記載的特徴. 地学雑誌, **123**, 143–152. doi: 10.5026/jgeography.123.143
- Kobayashi, T., Mirabueno, M.H.T., Bornas, M.A.V., Torii, M., Eduardo P. Laguerta, E.P., Daag, A.S., Bariso, E.B., Nakamura, T. and Okuno, M. (2014) Eruptive sequence and characteristics of the Irosin ignimbrite, Southern Luzon, Philippines. *Journal of Geography (Chigaku Zasshi)*, **123**, 123–132. doi: 10.5026/jgeography.123.123
- Saputro, S., Yoshimura, K., Matsuoka, S., Takehara, K., Narsito, Aizawa, J. and Tennichi, Y. (2014) Speciation of dissolved chromium and the mechanisms controlling its concentration in natural water.

Chemical Geology, **364**, 33–41.

椎原美紀・堂満華子・鳥井真之・長橋良隆・奥野 充 (2013) 日本海とその周辺に分布する鬱陵島起源の完新世テフラ. 第四紀研究, **52**, 225–236.

Fujiki, T., Okuno, M., Nakamura, T., Nagaoka, S., Mori, Y., Ueda, K., Konomatsu, M. and Aizawa, J. (2013) AMS Radiocarbon dating and pollen analysis of core KS0412-3 from Kashibaru Marsh in northern Kyushu, southwest Japan. *Radiocarbon*, **55**, 1693–1701.

Park, J.H., Hong, W., Park, G., Sung, K.S., Lee, K.H., Kim, Y.E., Kim, J.K., Choi, H.W., Kim, G.D., Woo, H.J. and Nakanishi T. (2013) A comparison of distribution maps of $\Delta^{14}\text{C}$ in 2010 and 2011 in Korea. *Radiocarbon*, **55**, 841–847.

Kawamoto, T., Yoshikawa, M., Kumagai, Y., Mirabueno, M.H.T., Okuno, M. and Kobayashi, T. (2013) Mantle wedge infiltrated with saline fluids from dehydration and decarbonation of subducting slab. *Proceedings of National Academy of Science*, **110**, 9663–9668. doi/10.1073/pnas.1302040110

Okuno, M., Nakamura, T., Geshi, N., Kimura, K., Saito-Kokubu, Y. and Kobayashi, T. (2013) AMS radiocarbon dating of wood trunks in the pumiceous deposits of the Kikai-Akahoya eruption in Yakushima Island, SW Japan. *Nuclear Instruments and Methods in Physics Research, Section B*, **294**, 602–605. doi:10.1016/j.nimb.2012.05.015

鮎沢 潤・石田麻里・藤川将之・近藤祐子 (2013) コウモリの活動度指標としての洞窟産リン酸塩鉱物. 日本洞窟学会誌, **37**, 71–79.

吉村和久・片桐千亜紀・藤田祐樹・山崎真治・土肥直美・鮎沢 潤・栗崎弘輔 (2013) 固結堆積物から見た化石骨の堆積環境. 日本洞窟学会誌, **37**, 55–64.

Okuno, M., Torii, M., Naruo, H., Saito-Kokubu, Y. and Kobayashi, T. (2012) AMS radiocarbon dates and major element composition of glass shards of late Pleistocene tephra on Tanegashima Island, southern Japan. *Radiocarbon*, **54**, 351–358.

奥野 充 (2012) テフラ編年学の多様な役割：フィリピン，中国，韓国，日本，アリューシャン列島の研究例. 第四紀研究, **51**, 275–284.

奥野 充 (2011) 地質調査による高分解能なテフラ層序学・年代学の構築. 地質学雑誌, **117**, 654–662. doi:10.5575/geosoc.2011.0003

Shiuhara, M., Torii, M., Okuno, M., Domitsu, H., Nakamura, T., Kim, K-H., Moriwaki, H., Oda, M. (2011) Revised stratigraphy of the Holocene tephra on Ulleung Island, South Korea, and possible correlatives for the U-Oki tephra. *Quaternary International*, **246**, 222–232. doi:10.1016/j.quaint.2011.08.030

Nagaoka, S. and Okuno, M. (2011) Tephrochronology and eruptive history of Kirishima volcano in southern Japan. *Quaternary International*, **246**, 260–269. doi:10.1016/j.quaint.2011.06.007

Okuno, M., Torii, M., Yamada, K., Shinozuka, Y., Danhara, T., Gotanda, K., Yonenobu, H. and Yasuda, Y. (2011) Widespread tephra in sediments from Lake Ichi-no-Megata in northern Japan: their description, correlation and significance. *Quaternary International*, **246**, 270–277. doi:10.1016/j.quaint.2011.08.015

Mirabueno, M.H.T., Okuno, M., Torii, M., Danhara, T., Laguerta, E.P., Newhall, C.G. and Kobayashi, T.

(2011) The Irosin co-ignimbrite ash-fall deposit: a widespread tephra marker in the Bicol arc, south Luzon, Philippines. *Quaternary International*, **246**, 289–295. doi:10.1016/j.quaint.2011.08.043

最近 5 年間の学術著書

Yasuda, Y., Nasu, H., Fujiki, T., Yamada, K., Kitagawa, J., Gotanda, K., Toyama, S., Okuno, M. and Mori, Y. (2013) Climate Deterioration and Angkor's Demise. In: Yasuda, Y. (ed): *Water Civilization: From Yangtze to Khmer Civilizations*, Springer Japan, 331-362.

Gualtieri, L., Sarata, B., Okuno, M. and West, D. (2012) Did Holocene Paleoenvironmental Factors Affect Ancient Occupation and Settlement in the Aleutian Islands? In West, D., Hatfield, V., Wilmerding, E., Lefevre, C. and Gualtieri, L. eds., *The People Before: The Geology, Paleoecology and Archaeology of Adak Island, Alaska*, Archaeopress, Oxford, UK, 47–57.

Okuno, M., Wada, K., Nakamura, T., Gualtieri, L., Sarata, B., West, D. and Torii, M. (2012) Holocene Tephra Layers on the Northern Half of Adak Island In the West-central Aleutian Islands, Alaska. In West, D., Hatfield, V., Wilmerding, E., Lefevre, C. and Gualtieri, L. eds., *The People Before: The Geology, Paleoecology and Archaeology of Adak Island, Alaska*, Archaeopress, Oxford, UK, 59–74.

中村俊夫・奥野 充・小田寛貴・南 雅代 (2011) 中国・北朝鮮国境白頭山の10世紀巨大噴火：放射性炭素法による高精度年代測定法. 中條利一郎・酒井英男・石田 肇 編『考古学を科学する』, 臨川書店, 京都, 26–46.

奥野 充・森 勇一・藤木利之・杉山真二・此松昌彦・上田恭子・長岡信治・中村俊夫・鮎沢 潤 (2011) 中世の人間活動と土砂災害：北部九州・檜原湿原のボーリングコア分析. 中條利一郎・酒井英男・石田 肇 編「考古学を科学する」, 臨川書店, 京都, 79–98.

最近 5 年間の学術国際会議での発表

Nakanishi, T., Takemura, K., Matsuyama, N., Hong, W., and Katsuki, K. (2015) Holocene activity of the Asamigawa fault detected from sediment cores in Beppu city, southwest Japan. *XIX INQUA Congress*, T19-P14, Nagoya Congress Center, Japan.

Nakanishi, T., Hong, W., Sung, K.S., Sung, K. and Nakashima, R. (2015) Relation of marine reservoir effect and sea level in Holocene. *Proceedings of the 6th East Asia AMS Symposium*, 32-33, Taipei, Taiwan.

Nakanishi, T., Hong, W., Shimoyama, S., Sato, S., Park, G. and Lee, J.G. (2015) Radiocarbon age offset between shell and plant pairs in the Holocene sediments under the Hakata Bay, western Japan. *22nd International Radiocarbon Conference*, S07-P-06, Dakar, Rep. Senegal.

Nakanishi, T., Torii, M., Yamasaki, K., Bariso, E., Rivera, D.J., Lim, R., Pogay, C., Daag, A., Hong, W. and Okuno, M. (2015) Tephrostratigraphy and radiocarbon ages of sediment from Paitan Lake at the northern part of Luzon Central Plain, Philippines. *22nd International Radiocarbon Conference*, S08-P-06, Dakar, Rep. Senegal.

Nakanishi, T., Hong, W., Sung, K.S., Sung, K.H. and Nakashima, R. (2014) Spatial and historical variation of radiocarbon marine reservoir effect around Korea. *AMS-13*, Aix-en-Provence, France.

ce. Fujiki, T., <u>Okuno, M.</u>, Kawai, K. and Moriwaki, H. (2012) Vegetation change in Rarotonga, Cook Islands. <i>The 13th International Palynological Congress</i>. Tokyo, Japan. <u>Okuno M.</u>, Fujiki T., Nakamura T., Mori Y., Ueda K., <u>Aizawa J.</u>, Konomatsu M. and Nagaoka S. (2012) Radiocarbon chronology of paleoenvironmental changes of the Kashibaru marsh, Northern Kyushu, SW Japan. The 21st International Radiocarbon Conference. Paris, France. <u>Aizawa, J.</u> (2011) Pumpelly's geological survey of Hokkaido in 1862 and Pumpelly (1867) <i>GEOLOGIC RESEARCHES IN CHINA, MONGOLIA, AND JAPAN, DURING THE YEARS 1862 TO 1865</i>. International Commission on the History of the Geological Sciences. Toyohashi, Japan.
最近5年間の代表者としての学外資金導入実績
奥野 充： 日本学術振興会・科研費・基盤研究B「フィリピン共和国における広域テフラ・ネットワークの構築に関する日比共同研究」・1310万円（直接経費）・2012年度～2014年度・（学内分担者：田口幸洋） 日本学術振興会・科研費・基盤研究C「テフラと放射性炭素年代によるアリユート遺跡及び火山噴火史に関する日米共同研究」・400万円（直接経費）・2011年度～2013年度 日本学術振興会・科研費・基盤研究B「フィリピン共和国，イロシンカルデラの火山・地熱活動史に関する日比共同研究」・1120万円（直接経費）・2009年度～2011年度・（学内分担者：田口幸洋） （株）西日本技術開発・研究助成寄附金・「火山噴火史に関する研究助成」・1125万円（直接経費）・2011年度～2015年度 （株）いであ・研究助成寄附金・「古環境変遷史に関する研究助成」・27万円（直接経費）・2011年度 鮎澤 潤： 釧路コールマイン（株）・研究助成寄附金・「堆積岩の炭化水素鉱床ポテンシャル評価の基礎的研究」・120万円（直接経費）・2013年度～2015年度 （株）みょうばん湯の里・受託研究・「湯の花および関連物質の基礎的研究と資源工学的応用」・75万円（直接経費）・2015年度 中西利典： 隠岐世界ジオパーク協議会・「隠岐諸島におけるU-Okiの検出と最終氷期最盛期以降の古環境変遷の検討」・15万円（直接経費）・2015年8月～2016年2月 伊豆半島ジオパーク協議会・「1930年北伊豆地震時に動いた活断層と動かなかった活断層一姫之湯断層とそれに並走する活断層の極浅部地下構造の比較」・20万円（直接経費）・2015年8月～2016年2月 国土地理協会・研究助成金・「九州沿岸における放射性炭素海洋リザーバー効果の時空間変化の検討」・95万円（直接経費）・2014年8月～2015年7月
最近5年間の代表者としての学内資金導入実績
奥野 充： 産学官連携研究機関（国際火山噴火史情報研究所）・2012～2016年度・（分担者：田口幸洋，鮎澤 潤ほか） 推奨研究プロジェクト（地質情報のデータベース化の基礎研究）・201万円・2012年度～2014年度・（分担者：上野勝美）
最近5年間の学会等学術団体における役職など

鮎澤 潤：長崎県地学会・理事・～2011 年、唐津市教育委員会・北波多村史執筆委員・～2011 年、日本地球化学会・2012 年会実行委員・2012 年、日本地学教育学会・2015 大会事務局長・～2015 年
最近 5 年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
一般向け論文 奥野 充（2015）国際火山噴火史情報研究所の近況報告：フォー・マウンテンズ諸島での調査例．福岡大学研究推進部ニュース&レポート「Research」，20 (4)，36–37. 中西利典（2015）「別府－万年山断層帯（大分平野－由布院断層帯東部）における重点的な調査観測」への参加・研究報告．福岡大学研究推進部ニュース&レポート「Research」，20 (2)，23–25. 奥野 充（2015）日本火山学会 2014 年度秋季大会の開催報告．福岡大学研究推進部ニュース&レポート「Research」，20 (1)，17–18. 奥野 充（2014）国際火山噴火史研究所の中間報告．福岡大学研究推進部ニュース&レポート「Research」，19 (4)，29–33. 奥野 充（2013）「火山噴火史情報学」を確立する．七隈の杜．福岡大学，9，81–87. 奥野 充（2012）国際火山噴火史情報研究所の活動内容．福岡大学研究推進部ニュース&レポート「Research」，17 (4)，36–38. 日本鉱物科学会ワーキンググループ（鮎澤 潤）（2012）「鉱物－地球と宇宙の宝物」A1 判ほかポスター．日本鉱物科学会（文部科学省採択事業） 鮎澤 潤（2011）北波多の堆積岩，北波多の自然，唐津市教育委員会，247–253.
最近 5 年間の一般（非学術）集会での発表論文
該当なし
最近 5 年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
該当なし

研究室名
地球物質研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
地球圏科学科地球物質研究室では、火成活動に伴う地球深部のマントルから地表までの物質移動や特定成分の濃集の過程を対象とした研究を行っている。 一つは火山活動の変遷に伴う熱水系の発達と消長に関するもので、主に水を媒体とした循環によって形成される地熱資源や鉱物資源を、地質学的、鉱物学的、地球化学的立場から検討し、資源が形成される環境条件の解明を行っている。過去の浅熱水性金鉱床は削剥や採掘により現在の地熱系の地下に相当する部分を観察できるので、これらの比較研究は相互の資源形成の過程の解明に重要であるので、主に九州の地熱帯や金鉱床を対象とした研究を行っている。 また、大陸地殻を特徴づける珪長質深成岩の生成・定置・崩壊過程を、岩石学的、同位体年代学的見地から研究を行っている。研究対象地域は北部九州地域のみならず、タイ、南極も含ま

れる．さらに，内陸型地震発生のメカニズムの解明のため，断層帯周辺の珧長質深成岩に発達する断層系の構造解析も行っている．地質体の崩壊過程（風化・剝削）に伴う研究では元素移動過程およびその人間活動との関係を解析するため，川砂を用いた福岡県における地球化学図の作成と地圏環境評価を行っている．
キーワード：地熱・金鉱床・水循環・深成岩岩石学・構造解析・地球化学図
研究室の構成員
田口幸洋（教授）・理学博士 柚原雅樹（助教）・博士（理学）
2015年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
4年次生：5名 大分県大岳地熱帯疥癬湯付近の酸性変質作用について 大分県小鹿田地域の熱水変質作用について 鹿児島県霧島温泉地域の熱水変質作用と温泉の形成機構 田川変成岩類に貫入する堇青石花崗岩質岩の産状と成因 英彦山北麓に分布する北坂本累層の岩石学的特徴
教員の担当科目
田口幸洋：（学部）地球圏科学入門、新しい地球観、地球科学Ⅰ、地球物質循環学Ⅰ、地球物質循環学Ⅱ、地球科学実験、地球物質科学実験Ⅰ、地球物質科学実験Ⅱ、地球科学野外演習、地球科学野外実習、卒業論文 （大学院）地球変動科学特論Ⅰ、地球変動科学実験、地球変動科学講究 柚原雅樹：（学部）地球科学実験、地学実験、地球物質科学実験Ⅰ、地球物質科学実験Ⅱ、地球科学野外演習、地球科学野外実習、卒業論文
教員の所属学会
田口幸洋：資源地質学会，日本地熱学会，日本火山学会， Society of Economic Geologists, Geothermal Resources Council 柚原雅樹：日本地質学会，日本鉱物科学会，日本地球化学会，地学団体研究会
最近5年間の学術論文
柚原雅樹・西 瑛莉子 (2015) 添田花崗閃緑岩の岩相と化学組成. 福岡大学理学集報, 45, 107-136. 柚原雅樹・宮崎崇大朗・鮎沢 潤・西 瑛莉子・清浦海里・寺本 慶 (2015) 日向峠-小笠木峠断層周辺の早良花崗岩中に発達する断層系. 福岡大学理学集報, 45, 43-61. 柚原雅樹・水田史也・鈴木 啓・宮崎崇大朗 (2014) 北部九州, 杷木花崗閃緑岩の全岩化学組成. MAGMA, 96, 73-80. 柚原雅樹・亀井淳志・川野良信・岡野 修・加々美寛雄 (2014) 花崗岩体内部の全岩化学組成と Sr同位体比組成の変化-北部九州, 添田花崗閃緑岩の例 (予報) -. MAGMA, 96, 57-72. Boy Yoseph CSS Syah Alam, Itoi, R., Taguchi, S. and Yamashiro, R. (2014) Spatial Variation in

Groundwater Types in the Mt. Karang (West Java, Indonesia) Volcanic Aquifer System Based on Hydro-Chemical and Stable Isotope (δ D and δ 18O) Analysis. *Modern Applied Science*, 8, 87-102 (査読有) .

Kawakami, T., Nakano, N., Higashino, F., Hokada, T., Osanai, Y., Yuhara, M., Charusiri, P., Kamikubo, H., Yonemura, K. and Hirata, T. (2014) U-Pb zircon and CHIME monazite dating of granitoids and high-grade metamorphic rocks from the eastern and Peninsular Thailand – a new report of early Paleozoic granite. *Lithos*, 200/201, 64-79 (査読有) .

Taguchi, S. Vaquilar, R.L., Laguerta, E. P., Bornas, M.A.V., Solidum Jr. R.U., Reyes, P.J.D., Mirabueno, M. HhT., Daag, A.S., Bariso, E.B. and Okuno, M. (2014) Geochemical Characteristics of Hot Springs in Bulusan Volcanic Complex, Southern Luzon, Philippines. *福岡大学理学集報*, 44, 129-142.

Owada, M., Kamei, A., Horie, K., Shimura, T., Yuhara, M., Tsukada, K., Osanai, Y. and Baba, S. (2013) Magmatic history and evolution of continental lithosphere of the Sør Rondane Mountains, eastern Dronning Maud Land, East Antarctica. *Precambrian Res.*, 234, 47-62 (査読有) .

Kamei, A., Horie, K., Owada, M., Yuhara, M., Nakano, N., Osanai, Y., Adachi, T., Hara, Y., Terao, M., Teuchi, S., Shimura, T., Tsukada, K., Hokada, T., Iwata, C., Shiraishi, K., Ishizuka, H. and Takahashi, Y. (2013) Late Proterozoic juvenile arc metatonalite and adakitic intrusions in the Sør Rondane Mountains, eastern Dronning Maud Land, Antarctica. *Precambrian Res.*, 234, 63-84 (査読有) .

Yuhara, M., Ohira, H. and Kawano, Y. (2013) Fission track geochronology of Itoshima Granodiorite and Sawara Granite in the Gokayama area, northern Kyushu: timing of Miocene to Pliocene hydrothermal activity in Cretaceous granitoids. *Earth Science (Chikyu Kagaku)*, 64/5, 161-168 (査読有) .

柚原雅樹・亀井淳志・岡野 修・川野良信・加々美寛雄 (2013) 北部九州東部に分布する添田花崗閃緑岩のRb-Sr全岩-黒雲母アイソクロン年代. *岩石鉱物科学*, 42, 185-189 (査読有) .

庄田慎矢・梅崎恵司・池珉周・長井謙治・柚原雅樹 (2013) 청동기시대 마제석축 제작공정의 복원-서산 신송리유적 출토유물에 대한 분석을 중심으로-. *韓國上古史學報*, 79, 145-162 (査読有) .

柚原雅樹・眞崎求一 (2013) 添田花崗閃緑岩中の同時性貫入岩の産状と化学組成. *地球科学*, 67/1, 21-36 (査読有) .

Tiepolo, M., Langone, A., Morishita, T. and Yuhara, M. (2012) On the recycling of amphibole-rich ultramafic intrusive rocks in the arc crust: evidence from Shikanoshima Island (Kyushu Japan). *Jour. Petrol.*, 53/6, 1255-1285 (査読有) .

柚原雅樹・加々美寛雄 (2012) 三河地方領家変成帯に分布する苦鉄質岩類の同位体年代. *福岡大学理学集報*, 42, 37-55.

Kita, I., Asakawa, Y., Yuri, T., Yasui, M., Shimoike, Y., Yamamoto, M., Hasegawa, H., Taguchi, S. and Sumino, H. (2012) Rifting of Kyushu, Japan, based on fault-controlled concurrent eruption of oceanic island basalt-type and island arc-type lavas. *Bull. Volcanol.*, Vol.74, 1121-1139 (査読有) .

Riogilang, H., Itoi, R. and Taguchi, S (2012) Origin of Hot Spring water in the Kotamobagu geothermal field, Northern Sulawesi, Indonesia. *Jour. Geotherm., Res. Soc. Japan*, 34, 151-159 (査読有) .

Shimura, T., Akai, J., Lazic, B., Armbruster, T., Shimizu, M., Kamei, A., Tsukada, K., Owada, M. and Yuhara, M. (2012) Magnesiohobomite-2N4S, A new polysome from the central Sør Rondane Mountains, East Antarctica. *American Mineralogist*, 97, 268-280 (査読有) .

Yuhara, M., Sano, S. and Takahashi, Y. (2011) Trace and rare earth elements compositions of granitic rocks in Awaji Island, Southwest Japan Arc. *Bull. Geological Surv. Japan*, 62, 463-469 (査読有) .

Wu, F. Y., Yang, Y. H., Li, Q. L., Mitchell, R. H., Dawson, J. B., Brandl, G. and Yuhara, M. (2011) *In situ* determination of U-Pb ages and Sr-Nd-Hf isotopic constraints on the petrogenesis of the Phalaborwa carbonatite Complex, South Africa. *Lithos*, 127, 309-322 (査読有) .

柚原雅樹 (2011) 伊那領家変成帯, 高遠花崗岩の微量元素ならびに希土類元素組成. 福岡大学理学集報, 41, 207-215.

Shimura, T., Akai, J., Lazic, B., Armbruster, T., Shimizu, M., Kamei, A., Tsukada, K., Owada, M. and Yuhara, M. (2011) Magnesiohobomite-2N4S, IMA 2010-084. *CNMNC Newsletter* No. 9, page 2537; *Mineralogical Magazine*, 75, 2535-2540 (査読有) .

最近 5 年間の学術著書

田口幸洋：第 2 章地熱資源の探査, 掘削, 評価, 2.1.2 地質学的手法, 日本地熱学会 地熱エネルギーハンドブック刊行委員会 (編), オーム社, 26～58. 2014年2月。

最近 5 年間の学術国際会議での発表

Yuhara, M., Kamei, A., Kawano, Y., Owada, M., Shimura, T. and Tsukada, K., Secular geochemical variations of the early Paleozoic granitic rocks in western part of the Sør Rondane Mountains, East Antarctica. 2015 IAGR Annual Convention & 12th International Symposium on Gondwana to Asia. Tsukuba, Japan (October, 2015)

Okamura, K., Taguchi, S., Itoi, R., Agung Harijoko, I Wayan Warmada, Watanabe, K. Characteristics of Geothermal manifestations in/around the Buyan-Bratan caldera, central Bali, Indonesia. Geothermal Workshop of New Zealand 2015 (October, 2015)

Taguchi, S., Kohmatsu, M., Oikawa, K., Tanaka, K., Kiyosaki, J., Shimada, Y., Saito, Y. Motomura, Y., and Chiba, H. Hypogene Acid Alteration and Evolution of Geothermal System in Kuju Volcanic Area, Kyushu, Japan. 2015 International Conference on Geothermal Energy in Taiwan (October, 2015)

国際会議ではないが外国の大学等での講演

Taguchi, S. Geothermal manifestations in/around the Buyan-Bratan Caldera, Bali, Indonesia. Gadjra Mada University, Jogjakarta, Indonesia. (March, 2016)

Taguchi, S. Introduction of hydrothermal alteration minerals and results of it's analysis in Japan. JICA によるインドネシア地熱開発支援プロジェクトの講演, インドネシア国地質調査所, バンドン (March, 2016)

Taguchi, S. Introduction of application of fluid inclusions, and case study of geothermal systems in Japan. JICAによるインドネシア地熱開発支援プロジェクトの講演, インドネシア国地質調査所, バンドン (March, 2016) (March, 2016) Taguchi, S, Characteristics of Geothermal Resources in Japan. Guest Lecture for Studium Generale presentation at Padjadjaran University, Indonesia (March, 2012)
最近5年間の代表者としての学外資金導入実績
柚原雅樹：日本学術振興会・科研費・基盤研究（C）「東南極に産する花崗岩類の精密解析による大陸衝突過程における火成活動の変遷解明」・代表・370万円（直接経費）・2013年度～2016年度 田口幸洋：日本学術振興会・科研費・基盤研究（B）「インドネシア・バリ島のカルデラ活動と地熱資源ポテンシャル評価」・代表480万円（直接経費）・2014年度～2016年度
最近5年間の代表者としての学内資金導入実績
柚原雅樹：領域別研究チーム「プレート収束域の物質移動研究」・116.6万円・2010年度～2013年度（分担者：田口幸洋・杵山哲男・上野勝美・奥野 充・鮎澤 潤・石原与四郎・田上響）
最近5年間の学会等学術団体における役職など
田口幸洋：日本地熱学会 評議員（2010年～現在に至る）， 資源地質学会 評議員（2010年～現在に至る）
最近5年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
該当なし
最近5年間の一般（非学術）集会での発表論文
田口幸洋：丸尾温泉の特徴と課題ー現在・過去・未来ー，霧島市市役所，2015年9月28日 田口幸洋：鹿児島県霧島丸尾温泉の地球化学的特徴，霧島温泉旅館協会，2014年8月22日 田口幸洋：阿蘇山西部地域の地下構造について，南阿蘇村阿蘇山西部地域地熱資源活用協議会，2014年3月17日 田口幸洋：温泉のでき方ー火山地域と非火山地域ー，熊本県温泉協会，2014年3月11日 田口幸洋：平成24年志布志地下水調査報告，鹿児島県志布志市，2013年2月16日 柚原雅樹：石博士の30年の歩みと南極探検，袈裟丸福聚会ふるさと講演会，飛騨市，2012年8月14日
最近5年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
田口幸洋： 福岡県環境審議会委員 副会長，温泉部会長，2011年1月～2015年1月 財団法人 新エネルギー財団 平成23年度新エネルギー等導入促進基礎調査（地熱開発導入基盤整備調査）に係わる委員会 委員，2011年9月～2012年3月 公益財団法人 北九州生活科学センター 評議員選定委員会 委員，2012年6月～現在に至る 熊本県地熱・温泉熱研究会 アドバイザー，副会長，2012年7月～2015年3月 独立行政法人 石油天然ガス・金属鉱物資源機構 地熱資源ポテンシャル調査委員会委員，2012年10月～現在に至る 特定非営利活動法人 湯平温泉場活力創造会議 湯平温泉スマート・ホットスプリング・コミュニティ可能性調査検討委員会 委員，2012年12月～2013年3月 独立行政法人 石油天然ガス・金属鉱物資源機構 新人職員北薩現場研修講師，2013年5月 独立行政法人 石油天然ガス・金属鉱物資源機構 地熱貯留層評価・管理技術推進委員会 委

員，2014 年 1 月～現在に至る

熊本県南阿蘇村 南阿蘇村阿蘇山西部地域地熱資源活用協議会 委員，2014 年 1 月～現在に至る

福岡県産業廃棄物審議会委員 2014 年 11 月～現在に至る

鹿児島県指宿市 指宿市調和のとれた地熱活用協議会委員，2015 年 5 月～2019 年 3 月

独立行政法人 石油天然ガス・金属鉱物資源機構 地熱アドバイザー委員会 委員，2016 年 6 月～現在に至る

研究室名
環境進化学研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
環境進化学研究室では、骨格を持つ造礁生物や脊椎動物を主な対象として、化石と現生生物の双方を扱い、過去から現在に至る生物とその生息環境の進化を研究している。アメリカ、カナダ、中国など、海外の化石標本を扱うとともに、国内では西南日本産の化石を中心に研究を進めている。また、古生物との比較のために、琉球列島のサンゴ礁環境における現生造礁生物や、脊椎動物骨格標本の観察も行っている。 造礁生物の研究では、秋吉生物礁における堆積岩に記録された環境変動史の解読を進めており、時代境界の層位学的策定と、その前後での生物相や炭酸塩の同位体化学的変動を解析し、それらが汎世界的な温暖期から寒冷期への環境変化に呼応していることを明らかにした。 古脊椎動物の研究は恐竜を主な対象としている。これまでに、角竜類恐竜における摂餌器官の進化の解明や、歯の比較解剖学的研究を進めてきた。また、北九州市の関門層群産の歯化石をこれまで未報告の角竜類のものと同定し、他の同層群産脊椎動物化石の記載を行っている。 キーワード：進化・環境変動・造礁生物・石灰岩・古脊椎動物・骨格
研究室の構成員
杵山哲男（教授）・理学博士 田上 響（助教）・Ph.D.
2015 年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
4 年次生：6 名 ・秋吉台石灰岩の基底部から産出するサンゴ化石群。 ・熊本県緑川上流部の下部石炭系湯鶴葉層から産出するサンゴ化石群の種構成。 ・黒瀬川帯デボン系内大臣層下部から産出するサンゴ化石群。

- Vertebrate Fossils from Judith River Formation in Montana, USA
- Cervical Neural Spine of Sauropod from the Lower Cretaceous Kanmon Group, Northern Kyushu, Southwestern Japan
- Ornithopod Dorsal Vertebra from the Lower Cretaceous Kanmon Group, Northern Kyushu, Southwestern Japan

教員の担当科目

杵山哲男：(学部) 地学実験、地球環境進化学、地学実験「ナノサイエンスコース」、地球圏科学入門演習、応用地球圏科学、地球科学Ⅱ、地球環境進化学Ⅰ、地球環境進化学Ⅱ、地球環境進化学、地球科学野外演習、地球物質科学実験Ⅰ、地球物質科学実験Ⅱ、地球圏科学入門、地球圏科学入門「BB」、新しい地球観、博物館実習、博物館実習Ⅰ、卒業論文

(大学院) 地球変動科学特論Ⅱ、地球変動科学実験、地球変動科学講究

田上 響：(学部) 地学実験、地学実験「ナノサイエンスコース」、地学実験「化学コース」、博物館実習Ⅰ

教員の所属学会

杵山哲男：日本古生物学会、日本地質学会、日本サンゴ礁学会、日本洞窟学会、International Association for the study of Fossil Cnidaria and Porifera、The Paleontological Society、SEPM (Society for Sedimentary Geology)

田上 響：日本古生物学会、日本地質学会、Society of Vertebrate Paleontology

最近 5 年間の学術論文

Konishi, T., Caldwell, M. W., Nishimura, T., Sakurai, K., and Tanoue, K. (2015) A new halisaurine mosasaur (Squamata: Halisaurinae) from Japan: the first record in the western Pacific realm and the first-documented binocular vision in mosasaurs. *Journal of Systematic Palaeontology*, 31p. DOI:10.1080/14772019.2015.1113447. (査読有)

Oniki, A. and Tanoue, K. (2014) Description of theropod teeth from the Upper Cretaceous Judith River Formation in Montana, U.S.A. *福岡大学理学集報*, 44 (2), 125-128. (査読有)

Tanoue, K. and Okazaki, Y. (2014) The first basal neoceratopsian dinosaur from the Lower Cretaceous Kanmon Group in Kyushu, southwestern Japan. *Paleontological Research*, 18 (2), 77-81. (査読有)

佐藤裕一郎, 杵山哲男 (2014) 大分県佐伯市本匠高蘇の鳥巢石灰岩から六放サンゴと海綿化石の発見. *大分地質学会誌*, 20, 1-27 (査読有)

杵山哲男, 長谷川薫, 武藤ゆう, 宮東照, 魚川瞳, 佐藤もも, 吉形花月, 高司恵梨, 星木勇作, 永石美晴 (2014) 理系導入科目としての「理系こそ作文力」プログラムの3年間の実践報告：アンケート調査からみた教育目標と教育効果の摺り合わせ. *福岡大学理学集報*, 44 (1), 65-76 (査読有).

長谷川薫, 武藤ゆう, 魚川瞳, 野中双葉, 阿比留章子, 佐藤もも, 吉形花月, 高司恵梨, 宮東照, 星木勇作, 永石美晴, 杵山哲男 (2014) 理系大学生の「書く力」を育成するために一理学部地球圏科学科の「理系こそ作文力」(福岡大学魅力ある学士課程教育支援プログラム)の取り組み例一. *福岡大学日本語日本文学*, 第23号, 97-115 (査読なし). Tanoue, K., Li, D., You, H. (2012) Tooth replacement pattern in maxillary dentition of basal Neoceratopsia. *Bulletin of the Kitakyushu Museum of Natural History and Human*

History Series A (Natural History), 10, 123-127. (査読有) Kido, E., and Sugiyama, T. (2011) Silurian rugose corals from the Kurosegawa Terrane, Southwest Japan, and their paleobiogeographic implications. Bulletin of Geosciences, 86 (1), 49-61. (査読有)
最近 5 年間の学術著書
該当なし
最近 5 年間の学術国際会議での発表
Tanoue, K. CT reveals vertebral pneumaticity of sauropod dinosaur from the Lower Cretaceous Kanmon Group, northern Kyushu, Japan. The 6th International Workshop on X-Ray CT Visualization for Socio-Cultural Engineering & Environmental Materials on X-Earth (IWX) 2015, Kumamoto, Japan. 2015 年 12 月 Tanoue, K. and Tatehata, J. New insights into the diversity of dinosaurs from the Lower Cretaceous Kanmon Group, southwestern Japan. 75th Annual Meeting of the Society of Vertebrate Paleontology, Dallas, Texas, USA. 2015 年 10 月 Konishi, T., Caldwell, M. W., Nishimura, T., Sakurai, K., and Tanoue, K. A first mosasaur (Mosasauridae: Halisaurinae) with well-developed binocular vision. 3rd Annual Meeting, Canadian Society of Vertebrate Paleontology, Kelowna, British Columbia, Canada. 2015 年 5 月 Tanoue, K. Basal neoceratopsian tooth from the Lower Cretaceous Kanmon Group in Kyushu, southwestern Japan and its paleobiogeographical implication. International Symposium on Asian Dinosaurs in Fukui, Fukui, Japan. 2014 年 3 月 Tanoue, K., Li, D., You, H. Tooth replacement pattern in maxillary dentition of basal Neoceratopsia (Ornithischia, Dinosauria). 73rd Annual Meeting of the Society of Vertebrate Paleontology, Los Angeles, California, USA. 2013 年 10 月 Konishi, T., Caldwell, M.W., Nishimura, T., Sakurai, K., Tanoue, K. A new halisaurine (Mosasauridae: Halisaurinae) material from northern Japan. 4th Triennial International Mosasaur Meeting, Dallas, Texas, USA. 2013年5月 Tanoue, K. Depression of jaw joint in early evolution of ceratopsians. 71st Annual Meeting of the Society of Vertebrate Paleontology. Las Vegas, Nevada, USA. 2011年11月 Higa, K., Sugiyama, T. Murakami, T. Biotic and Environmental change through the Mississippian-Pennsylvanian boundary in Panthalassan oceanic atoll, the Akiyoshi Limestone, SW Japan. International Congress on Carboniferous and Permian Stratigraphy 2011, Perth, Australia, 2011年7月
最近 5 年間の代表者としての学外資金導入実績

田上響，科学研究費（基盤研究(C)），2015～2017 年度，脊椎動物における嘴の機能と進化，研究代表者，3,600 千円（直接経費）
最近 5 年間の代表者としての学内資金導入実績
杵山哲男，2011 年度～2013 年度，福岡大学魅力ある学士課程教育支援プログラム，理工系学生のための基礎力パワーアッププログラム（代表：横張文男），プログラム C（「理系こそ作文力」），2011 年度 1,106 千円，2012 年度 1,439 千円，2013 年度 1,415 千円．
最近 5 年間の学会等学術団体における役職など
該当なし
最近 5 年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
杵山哲男（2012）”For myself”から”For the others”へー福岡大学派遣隊活動報告ー．大学時報，342 号，54-59. 渡辺浩・杵山哲男（2011）東日本大震災復興支援における遠隔地の大学の災害ボランティア派遣の取り組み．地域安全学会梗概集，28 号，1-4.
最近 5 年間の一般（非学術）集会での発表論文
該当なし
最近 5 年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
杵山哲男：阿蘇火山博物館，2013 年度科学技術振興機構科学技術コミュニケーション推進事業，地球の歴史をかけぬけろっ！，講師，2013 年 8 月 10，11 日，2014 年 1 月 26 日実施．
その他特筆事項
該当なし

研究室名
地層・古生物研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
地層・古生物研究室では、地層記録に残された地質学的諸現象を、層序学、堆積学、古生物学、地盤工学等の手法を用いて時系列的に解析し、その要因や背景を明らかにすることを目的として研究を行っている。このような手法・観点で得られた地質学的情報を基に、堆積盆の発達過程の検討、海水準変動の復元、有孔虫類の系統分類、地域地質や古生物地理を基にした東南アジア地域の中・古生代構造発達史、縞状堆積物に記録された情報解析、重力流堆積物の運搬・堆積様式の検討、ボーリングデータに基づく 3 次元地質モデルの構築等についての研究を行っている。 主に対象としているのは、中・古生代の炭酸塩岩とそこから産する有孔虫類の分類・生層序・古生物地理、深海や湖成層などにみられる縞々の地層とそこから読み取れるリズムや地層の形成過程、および都市圏の地下地質である。本研究室の最近の研究では、南部中国の上部古生界浅海成炭酸塩岩の層序学的解析を行い、不整合や堆積相の変遷を基に南部中国において初めて氷室期型

海水準変動により形成されたサイクロセムを報告した。この研究では、さらにフズリナ化石による詳細な年代決定を基に、南部中国大陸基盤の構造運動変遷史を明らかにしている。東南アジアの地体構造研究では、地域地質、ペルムー三畳系の岩相層序および有孔虫化石群集、等を基に、東南アジア主要部におけるパレオテチス海洋プレートの沈み込みとそれに伴うペルムー三畳紀島弧の発達史、およびタイ国北部地域とラオス北部地域の地質学的連続性を明らかにした。また、ボーリングデータに基づく研究では、都市圏の浅層地下地質構造を明らかにするとともにその活用を検討した。 キーワード：中・古生代有孔虫、古生物地理、氷室期型海水準変動、東南アジアの地質構造発達史、重力流堆積物、3次元地質モデル、年縞堆積物
研究室の構成員
上野勝美（教授）・学術博士 石原与四郎（助教）・博士（理学）
2015年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
M2（1名）：縞状堆積物の自動認識と環境情報の抽出 M1（1名）：重力流堆積物に認められる高領域の堆積構造とその側方変化 4年次生（1名）：タイ国北部の最上部ペルム系ー三畳系層序と有孔虫群集変遷
教員の担当科目
上野勝美：（学部）地球圏科学序論、地球変動科学Ⅰ、地球変動科学Ⅱ、地学A、地学B、地球圏科学入門、新しい地球観、地学実験、地球物質科学実験Ⅰ、地球科学野外演習、地球科学野外実習、卒業論文 （大学院）地球変動科学講究、地球変動科学実験、地球変動科学特論Ⅲ 石原与四郎：（学部）地球化学野外実習、地球科学実験
教員の所属学会
上野勝美：日本地質学会、日本古生物学会、日本洞窟学会、米国 Cushman Foundation for Foraminiferal Research 石原与四郎：日本地質学会、日本堆積学会、第四紀学会、日本洞窟学会、地盤工学会、情報地質学会、IAS, SEPM, IAMG
最近5年間の学術論文
上野勝美・中澤努・藤川将之, 2016, 山口県秋吉台地域産の大理石石材「黒霞」から産するフズリナ化石. 秋吉台科学博物館報告, 51, 9-23. (査読無) 中澤努・井川敏恵・上野勝美・藤川将之, 2016, 国内産古生代大理石石材の岩相とその成因. 石灰石, 399, 20-43. (査読無) Sasaki, H., Sasaki, Y., Saito-Kato, M., Naruse, H., Yumi, M. and Ishihara, Y. 2016, Lacustrine sediment gravity-flow deposits and stratigraphic changes intercalated in varved diatomite: an example from the Hiruzenbara Formation, Okayama Prefecture, southwest Japan. <i>Quaternary International</i>, 397, 208-222. (査読有)

- Nakazawa, T., Igawa, T., Ueno, K., Fujikawa, M., 2015, Middle Permian sponge-microencruster reefal facies in the mid-Panthalassan Akiyoshi atoll carbonates: observations on a limestone slab. *Facies*, **61**, Article 15. (査読有)
- 坂田健太郎・中澤努・岡井貴司・上野勝美, 2015, 秋吉帯の海洋島起源の石炭紀-ペルム紀石灰岩におけるリンの偏在. 地質調査研究報告, **66**, 199-212. (査読無)
- 中澤努・上野勝美・乾睦子・鎌田光美, 2015, 東京都日の出町産大理石石材「青梅石」. *GSJ地質ニュース*, **4**, 283-284. (査読無)
- 中澤努・藤川将之・上野勝美, 2015, 山口県美祢市産大理石石材「霞」にみられる石炭-ペルム紀の造礁生物群. *GSJ地質ニュース*, **4**, 129-130. (査読無)
- 大西由梨・佐々木華・石原与四郎・吉村和久, 2015, 石筍の蛍光年縞の形成シミュレーション. 洞窟学雑誌, **40**, 3-18. (査読有)
- Tanabe, S., Nakanishi, T., Ishihara, Y. and Nakashima, R., 2015, Millennial-scale stratigraphy of a tide-dominated incised valley during the last 14 kyr: Spatial and quantitative reconstruction in the Tokyo Lowland, central Japan. *Sedimentology*, **42**, 1837-1872. (査読有)
- 佐々木華・石原与四郎・佐々木泰典, 齋藤めぐみ・成瀬元, 2015, 中期更新統蒜山原層の湖成年縞堆積物に挟在する洪水・斜面崩壊堆積物の堆積相と挟在頻度. 堆積学研究, **74**, 45-53. (査読有)
- Sasaki, H., Sito-Kato, M., Komatsubara, J. and Ishihara, Y., 2015, Application of a method for detecting varve characteristics in sediments for time series analysis: an example using a soft-X ray image of varve from the Hiruzenbara Formation, *Journal of Sedimentary Society of Japan*, **74**, 31-43. (査読有)
- Nakazawa, T., Ueno, K., Nonomura, N. and Fujikawa, M., 2015. Microbial community from the Lower Permian (Artinskian-Kungurian) paleoclimatic transition, mid-Panthalassan Akiyoshi atoll, Japan. *Palaeogeography, Palaeoclimatology, Palaeoecology*, **420**, 116-127. (査読有)
- Ueno, K., Arita, M., Meno, S., Sardud, A. and Saesangseerung, D., 2015. An Early Permian fusuline fauna from southernmost Peninsular Thailand: Discovery of Early Permian warming spikes in the peri-Gondwanan Sibumasu Block. *Journal of Asian Earth Sciences*, **104**, 185-196. (査読有)
- Kamata, Y., Kato, M., Ueno, K., Miyahigashi, A., Charoentitirat, T. and Sardud, A., 2015. Middle-Late Devonian radiolarians from Klaeng District, Rayong Province, southeastern Thailand: Geotectonic significance of the Rayong area as a continental margin of the Sibumasu Block. *Journal of Asian Earth Sciences*, **104**, 197-204. (査読有)
- Kamata, Y., Shirouzu, A., Ueno, K., Sardud, A., Charoentitirat, T., Charusiri, P., Koike, T. and Hisada, K., 2015, Late Permian and Early to Middle Triassic radiolarians from the Hat Yai area, southern peninsular Thailand: Implications for the tectonic setting of the eastern margin of the Sibumasu Continental Block and closure timing of the Paleo-Tethys. *Marine Micropaleontology*, **110**, 8-24. (査読有)
- 佐々木華・石原与四郎・吉村和久, 2014, 石筍の年縞の自動認定とその課題—長崎県西海市七釜鍾乳洞龍王洞石筍への適用, 洞窟学雑誌, **39**, 53-66. (査読有)
- 石原与四郎・高清水康博, 松本弾, 宮田雄一郎, 2014, 日南海岸沿いの深海堆積相と重力流堆積

- 物. 地質学雑誌, **120** (補遺), 41-62. (査読有)
- 馬兆亮・王玥・王秋来・星木勇作・上野勝美・祁玉平・王向東. 2013. 貴州羅甸羅悃剖面石炭系巴什尔階－莫滄斯科階界線研究. 古生物学報, 52 卷, 4 号, p. 492-502. (査読有)
- 石原与四郎・宮崎友紀・江藤稚佳子・木村克己, 2013, 東京港湾地域のボーリング情報を用いた浅層 3 次元地質・地盤モデル. 地質学雑誌, **119**, 554-566. (査読有)
- Uchida, S., Kurisaki, K., Ishihara, Y., Haraguchi, S., Yamanaka, T., Noto, M., Yoshimura, K., 2013, Anthropogenic impact records of nature for past hundred years extracted from stalagmites in caves found in the Nanatsugama Sandstone Formation, Saikai, Southwestern Japan. *Chemical Geology*, **347**, 59-68. (査読有)
- 木村克己・花島裕樹・石原与四郎・西山昭一, 2013, 埋没地形面の形成過程を考慮したボーリングデータ補間による沖積相基底面モデルの 3 次元解析: 東京低地北部から中川低地南部の沖積相の例. 地質学雑誌, **119**, 537-553. (査読有)
- 石原与四郎, 2013, 地盤の 3 次元モデル化－福岡平野を例として－. 地盤工学会誌, **61**, 16-19. (査読有)
- 吉村和久・内田章太・栗崎弘輔・石原与四郎・原口聡・山中寿朗・能登征美, 2013, 七釜鍾乳洞の石筍から明らかになった長崎県西海市の中浦地区の数百年間の土地利用変遷. 月刊地球, **35**, 628-635. (査読無)
- 村上崇史・石原与四郎・藤川将之・無名穴学術調査団, 2013, 山口県秋吉台無名穴洞口部テラスに認められるリムストーン充填層の堆積相. 洞窟学雑誌, **38**, 52-60. (査読有)
- 田辺晋・石原与四郎, 2013, 東京低地と中川低地における沖積層最上部陸成層の発達様式: “弥生の小海退” への応答. 地質学雑誌, **119**, 350-367. (査読有)
- Wang, X. D., Qie, W. K., Sheng, Q. T., Qi, Y. P., Wang, Y., Liao, Z. T., Shen, S. Z. and K. Ueno., 2013. Carboniferous and Lower Permian sedimentological cycles and biotic events of South China. In, Gąsiewicz, A. and Słowakiewicz, M., eds., *Palaeozoic Climate Cycles: Their Evolutionary and Sedimentological Impact. Geological Society, Special Publication*, vol. 376, 33-46. (査読有)
- Ueno, K., Hayakawa, N., Nakazawa, T., Wang, Y. and Wang, X., 2013. Pennsylvanian–Early Permian cyclothemic succession on the Yangtze Carbonate Platform, South China. In, Gąsiewicz, A. and Słowakiewicz, M., eds., *Palaeozoic Climate Cycles: Their Evolutionary and Sedimentological Impact. Geological Society, Special Publication*, vol. 376, 235-267. (査読有)
- Crippa, G., Angiolini, L., van Waveren, I., Crow, M. J., Hasibuan, F., Stephenson, M. H. and Ueno, K., 2013. Brachiopods, fusulines and palynomorphs of the Mengkarang Formation (Early Permian, Sumatra) and their palaeobiogeographical significance. *Journal of Asian Earth Sciences*, vol. 79, 206-223. (査読有)
- Hara, H., Kon, Y., Usuki, T., Lan, C. Y., Kamata, Y., Hisada, K., Ueno, K., Charoentitirat, T. and Charusiri, P., 2013. [U–Pb ages of detrital zircons within the Inthanon Zone of the Paleo-Tethyan subduction zone, northern Thailand: New constraints on accretionary age and arc activity](#). *Journal of Asian Earth Sciences*, vol. 74, 50-61. (査読有)
- 上野勝美・石原与四郎. 2013. 堆積盆の発達に関わる海水準変動の評価 (研究科特別経費 (研究

- 科分, タイプ I) 研究成果報告). 福岡大学理学集報, 43 巻, 1 号, 111-124. (査読無)
- Yumi, M., Ishihara, Y. and Komatsubara, J. 2013, Digitalization of scallop-microtopography using soft-X ray images. *Journal of the Speleological Society of Japan*. (査読有)
- Nakazawa, T., Ueno, K. and Fujikawa, M., 2012. Middle Permian sponge-microencruster bioherms in the Akiyoshi Limestone, SW Japan. *Geological Journal*, **47**, 495-508. (査読有)
- Groves, J.R., Wang, Y., Qi, Y.P., Richards, B.C., Ueno, K. and Wang, X.D. 2012. Foraminiferal biostratigraphy of the Visean-Serpukhovian (Mississippian) boundary interval at slope and platform sections in Southern Guizhou (South China). *Journal of Paleontology*, **86**, 753-774. (査読有)
- Ueno, K., Miyahigashi, A., Kamata, Y., Kato, M., Charoentitirat, T. and Limruk, S., 2012. Geotectonic implications of Permian and Triassic carbonate successions in the Central Plain of Thailand. *Journal of Asian Earth Sciences*, **61**, 33-50. (査読有)
- Hara, H., Kunii, M., Hisada, K., Ueno, K., Kamata, Y., Srichan, W., Charusiri, P., Charoentitirat, T., Watarai, M., Adachi, Y. and Kurihara, T., 2012. Petrography and geochemistry of clastic rocks within the Inthanon zone, northern Thailand: Implications for Paleo-Tethys subduction and convergence. *Journal of Asian Earth Sciences*, **61**, 2-15. (査読有)
- Kamata, Y., Maezawa, A., Hara, H., Ueno, K., Hisada, K., Sardud, A., Charoentitirat, T. and Charusiri, P., 2012. Basaltic activity preserved in an Upper Permian radiolarian chert from the Paleo-Tethys in the Inthanon Zone, northern Thailand. *Journal of Asian Earth Sciences*, **61**, 51-61. (査読有)
- Miyahigashi, A., Ueno, K., Charoentitirat, T. and Kamata, Y., 2012. Foraminiferal assemblage and depositional environment of the Doi Long Formation (Triassic Lampang Group), Northern Thailand. *Acta Geoscientica Sinica*, **33**(Suppl. 1), 45-49. (査読無)
- 弓真由子・石原与四郎, 2012, 重力流堆積物基底の侵食痕の特徴化: 特にフルートマーク形成に関する流れの持続時間による影響. 堆積学研究, **71**, 173-190. (査読有)
- Ueno, K., Shintani, T. and Tazawa, J. 2011. A fusuline fauna from the basal part of the Sakamotozawa Formation in the Kamiyasse area, South Kitakami Belt, Northeast Japan. *Science Reports of Niigata University (Geology)*, No. 26, 23-41. (査読無)
- Nakazawa, T., Ueno, K., Kawahata, H. and Fujikawa, M. 2011. Gzhelian-Asselian *Palaeoaplysina*-microencruster reef community in the Taishaku and Akiyoshi limestones, SW Japan: Implications for the Late Paleozoic reef evolution on mid-Panthalassan atolls. *Palaeogeography, Palaeoclimatology, Palaeoecology*, **310**, 378-392. (査読有)
- 弓真由子・石原与四郎, 2011, 溶食痕の形成実験: 流速と持続時間による形態と分布パターンの変化. 洞窟学雑誌, **36**, 61-73. (査読有)

最近 5 年間の学術著書

岡村行信, 尾崎正紀, 松本 弾, 西田尚央, 松島紘子, 木村克己, 中村洋介, 加野直巳, 駒澤正夫, 大熊茂雄, 花島裕樹, 水野清秀, 康義英, 池原研, 石原与四郎, 山口和雄, 上嶋正人, 中塚正, 金谷弘, 2013. 海陸シームレス地質情報集「福岡沿岸域」, 数値地質図, S-3 (DVD), 産業技術総合研究所地質調査総合センター. (査読無)

- 水野清秀, 風岡修, 田辺晋, 宮地良典, 石原与四郎, 安原正也, 小松原純子, 中島善人, 小松原琢, 石原武志, 稲村明彦, 吉田剛, 香川淳, 森崎正昭, 野崎真司, 菅野美穂子, 古野邦雄, 酒井豊, 木村満男, 古賀千裕, 2013. 地形および地質学的手法による液状化調査, 地質調査総合センター速報「巨大地震による複合的地質災害に関する調査・研究中間報告」, No. 63, p. 179-231. (査読無)
- Ueno, K. and Charoentitirat, T., 2011. Carboniferous and Permian. In, Ridd, M.F., Barber, A.J. and Crow, M.J. eds., *Geology of Thailand*. Geological Society, London, p. 71-136. (査読有)

最近 5 年間の学術国際会議での発表

- Ueno, K., Miyahigashi, A., Tagawa, R., Kamata, Y., Hara, H., Charoentitirat, T., The Phra That Formation of the Triassic Lampang Group in the Sukhothai Zone, northern Thailand. 4th International Symposium of IGCP589, Bangkok, Thailand (October, 2015)
- Kuroda, J., Hara, H., Ueno, K., Miyahigashi, A., Charoentitirat, T., Charusiri, P., Maruoka, T., Hisada, K., Lugli, S., Characterization of sulfate deposits in central Thailand. 4th International Symposium of IGCP589, Bangkok, Thailand (October, 2015)
- Hara, H., Kunii, M., Hisada, K., Kamata, Y., Ueno, K., Kon, Y., Assavapatchara, S., Treerotchananon, A., Charoentitirat, T., Charusiri, P., Provenance and detrital zircon U-Pb ages from Permo-Triassic marine sediments in Northern Thailand: Records of the Sukhothai Arc evolution and the Paleo-Tethys subduction. 4th International Symposium of IGCP589, Bangkok, Thailand (October, 2015)
- Kamata, Y., Ueno, K., Hara, H., Hisada, K., Sardud, A., Charoentitirat, T., Charusiri, P., Geological significance of occurrence of Middle Triassic (Ladinian) radiolarians from the Hong Hoi Formation of the Lampang Group, northern Thailand. 4th International Symposium of IGCP589, Bangkok, Thailand (October, 2015)
- Nakazawa, T., Ueno, K., Fujikawa, M., Flourishing microbial community during the Early Permian paleoclimatic transition on the mid-Panthalassan Akiyoshi atoll (SW Japan). XVIII International Congress on the Carboniferous and Permian, Kazan, Russian Federation (August, 2015)
- Ueno, K., Shibata, M. and Nemyrovska, T.I., Synchronous parallelism of four-layered wall in early Moscovian fusuline evolution –Example from the Donets Basin, Ukraine-. XVIII International Congress on the Carboniferous and Permian, Kazan, Russian Federation (August, 2015)
- Tanabe, S., Nakanishi, T., Ishihara, Y. and Nakashima, R., Millennium-scale infilling of a tide-dominated incised valley during the last 14 kyr: Spatial and quantitative reconstruction in the Tokyo Lowland, central Japan. INQUA2015, Nagoya (August, 2015)
- Ishihara, Y., Nakao, K., Tanabe, S., and Komatsubara, J., Three-dimensional geological and geotechnical models of incised-valley fills beneath the Tokyo-Arakawa-Nakagawa Lowlands: Their implications and problems. INQUA2015, Nagoya (August, 2015)
- Sasaki, H., Sasaki, Y., Saito-Kato, M., Naruse, H., Yumi, M. and Ishihara, Y., Climatic and solar cycles from diatomite varve and lacustrine sediment gravity flow deposits of the Middle Pleistocene Hiruzenbara Formation, Okayama Prefecture, southwest Japan. INQUA2015, Nagoya (August, 2015)

- Onishi, Y., Sasaki, H. and Ishihara, Y., Environmental changes in lacustrine varved deposits affected by flood events: an example from the Pleistocene Miyajima Formation, Tochigi Prefecture, central Japan. INQUA2015, Nagoya (August, 2015)
- Murakami, S., Yamamoto, K., Seiki, T., Ishihara, Y., Kondo, T., Wakabayashi, R., Publishing National Geotechnical Ground Models in Japan on the Web. INQUA2015, Nagoya (August, 2015)
- Nakao, K., Koga, C., Ishihara, Y. and Naruse, H., Three-dimensional geological models of sedimentary deposits in a coastal alluvial plain: A case study of the uplifted Miyazaki Plain. INQUA2015, Nagoya (August, 2015)
- Ishihara, Y., Tsuda, K., Onishi, Y. and Yokokawa, M., Lateral transition from long-wavelength traction carpet deposits to massive sandstone units: An example from turbidite deposits of the Kiyosumi submarine fan, central Japan. European Geophysical Union 2015 (April, 2015)
- Onishi, Y., Takii-Kawakami, K., Ishihara, Y. and Yokokawa, M., Topography of upper-flow-regime bedforms within sediment gravity flow deposits inferred from lateral variation of spaced planar lamination: an example from the Neogene Aoshima Formation, Miyazaki Group, southwest Japan. European Geophysical Union 2015 (April, 2015)
- Tominaga, K., Hisada, K., Ueno, K., Taniguchi, H., Yasukawa, K., Machida, S. and Kato, Y. Depositional facies analysis and petrology of accreted oceanic seamount rocks: implications for accretion tectonics of seamount. Crust-Mantle Evolution in Active Arcs 2015, Manila, Philippines (February, 2015)
- Ueno, K., Miyahigashi, A., Kamata, Y., Hisada, K., Hara, H., Uno, K., Charoentitirat, T., Charusiri, P., Kongthiphavong, S., Vilaykham, K. and Khamphavong, K. Permian and Triassic carbonates in the Oudom Xai–Luang Namtha area, Northern Laos: Stratigraphical and paleontological constraints for connecting Northern Laos with Northern Thailand. 3rd International Symposium of IGCP589 (Development of the Asian Tethyan Realm: Genesis, Process and Outcomes), Tehran, Iran (October, 2014)
- Miyahigashi, A., Ueno, K., Charoentitirat, T. and Kamata, Y. Foraminiferal fauna and depositional environment of the Lower Permian Kiu Lom Formation in the Sukhothai Zone, Northern Thailand. 3rd International Symposium of IGCP589 (Development of the Asian Tethyan Realm: Genesis, Process and Outcomes), Tehran, Iran (October, 2014)
- Kamata, Y., Ueno, K., Miyahigashi, A., Hisada, K., Hara, H., Uno, K., Charoentitirat, T., Charusiri, P., Kongthiphavong, S., Vilaykham, K. and Khamphavong, K. Middle Triassic acidic tuff in the Oudom Xai area, Northern Laos and its geological correlation with Northern Thailand. 3rd International Symposium of IGCP589 (Development of the Asian Tethyan Realm: Genesis, Process and Outcomes), Tehran, Iran (October, 2014)
- Sasaki, H., Ishihara, Y., Sasaki, Y., Saito-Kato, M. and Naruse, H. Sedimentary facies and thickness distribution of sediment-gravity flow deposits generated by flood and slope-failure intercalated in lacustrine varve deposits: Middle Pleistocene Hiruzenbara Formation, southwest Japan. ISC2014, Geneva (August, 2014)
- Ishihara, Y., Takii-Kawakami, K., Ohnishi, Y. and Sasaki, H. Hundred-meter-scale sediment wave-like

- stacking pattern of sediment-gravity flow deposits developed offshore of the fandelta, Neogene Aoshima Formation, Kyushu Island, Japan. ISC2014, Geneva (August, 2014)
- Ueno, K., Hayakawa, N., Nakazawa, T., Wang, Y. and Wang, X. D. Deducing subtle epeiric tectonism from shallow-marine stratigraphic record and fusuline biostratigraphy: A case for the late Paleozoic of the Yangtze craton. 2nd International Symposium of IGCP589 (Development of the Asian Tethyan Realm: Genesis, Process and Outcomes), Boracay, Philippines (November, 2013)
- Miyahigashi, A., Ueno, K., Charoentitirat, T., Kamata, Y. and Sardsud, A. Foraminiferal fauna and depositional environment of the Late Triassic Kang Pla Formation (Song Group), Northern Thailand. 2nd International Symposium of IGCP589 (Development of the Asian Tethyan Realm: Genesis, Process and Outcomes), Boracay, Philippines (November, 2013)
- Kamata, Y., Kato, M., Ueno, K., Miyahigashi, A., Charoentitirat, T. and Sardsud, A. Middle Triassic basalt-chert succession in the Chanthaburi area, Southeast Thailand. 2nd International Symposium of IGCP589 (Development of the Asian Tethyan Realm: Genesis, Process and Outcomes), Boracay, Philippines (November, 2013)
- Tanabe, S. and Ishihara, Y. Fluvial response to 3-2 ka sea-level lowering: an example of the latest Pleistocene to Holocene incised-valley fills in the Tokyo Lowland, central Japan. PAGES, Goa, India (February, 2013)
- Miyahigashi, A., Ueno, K., Charoentitirat, T. and Kamata, Y. Foraminiferal assemblage and depositional environment of the Doi Long Formation (Triassic Lampang Group). 1st International Symposium of IGCP589 (Development of the Asian Tethyan Realm: Genesis, Process and Outcomes), Xi'an, China (October, 2012)
- Kamata, Y., Kato, M., Ueno, K., Miyahigashi, A., Charoentitirat, T. and Sardsud, A. Middle to Late Devonian radiolarians from Klaeng of Rayong Province, Southeast Thailand. 1st International Symposium of IGCP589 (Development of the Asian Tethyan Realm: Genesis, Process and Outcomes), Xi'an, China (October, 2012)
- Kamata, Y., Hara, H., Ueno, K., Sardsud, A., Charoentitirat, T., Charusiri, P., and Hisada, K. Middle and Late Permian radiolarians from allochthonous chert blocks in the Inthanon Zone, northern Thailand : Toward constraints for the formation age of mélange fabric related to Paleo-Tethys subduction. 1st International Symposium of IGCP589 (Development of the Asian Tethyan Realm: Genesis, Process and Outcomes), Xi'an, China (October, 2012)
- Hara, H., Kunii, M., Hisada, K., Ueno, K., Kamata, Y., Charusiri, P. and Charoentitirat, T. Petrography and geochemistry of clastic rocks, U-Pb ages of detrital zircon from mélange within the Inthanon Zone, Northern Thailand: Implications for Paleo-Tethys subduction and convergence. 1st International Symposium of IGCP589 (Development of the Asian Tethyan Realm: Genesis, Process and Outcomes), Xi'an, China (October, 2012)
- Miyahigashi, A., Ueno, K., Charoentitirat, T. and Kamata, Y., Yakhtashian fusuline faunas from the Kiu Lom Formation in the Sukhothai Zone, Northern Thailand. International Conference on Tectonics of Northwestern Indochina, Chiang Mai, Thailand (February, 2012)

- Charoentitirat, T., Chanthaprasert, S., Ueno, K. and Chaimongkol, J., Late Paleozoic carbonates in Nan and Phrae provinces, Northern Thailand – Their foraminiferal faunas and geotectonic implications. International Conference on Tectonics of Northwestern Indochina, Chiang Mai, Thailand (February, 2012)
- Ueno, K., The Paleo-Tethyan mid-oceanic Doi Chiang Dao Limestone in the Inthanon Zone and its implication to the geotectonic subdivision of mainland Thailand. International Conference on Tectonics of Northwestern Indochina, Chiang Mai, Thailand (February, 2012) (Keynote)
- Yumi, M. and Ishihara, R., Spatio-temporal changes in distributional pattern of erosional marks on solutional substrate. 2011 PERC Planetary Geology Field Symposium - Kitakyushu, Japan (August, 2012)
- Ueno, K., Carboniferous–Permian biostratigraphic time-scales of Panthalassan and Paleo-Tethyan, mid-oceanic shallow-marine successions. 34th International Geological Congress, Brisbane, Australia (August, 2012) (Invited)
- Nakazawa, T. and Ueno, K., Evolutionary trend and turnovers of reef communities on Carboniferous–Permian Akiyoshi oceanic atolls. 34th International Geological Congress, Brisbane, Australia (August, 2012)
- Ueno, K. and Task Group, The Moscovian–Kasimovian and Kasimovian–Gzhelian boundaries — an overview and progress report. XVII International Congress on the Carboniferous–Permian, Perth, Australia (July, 2011)
- Qi, Y., Wang, X., Barrick, J., Lambert, L., Richards, B., Groves, J., Ueno, K., Wang, X., Lane R, Wu, X. and Hu, K., Progress on the study of conodonts from candidate GSSPs for the bases of Carboniferous stages in South China. XVII International Congress on the Carboniferous–Permian, Perth, Australia (July, 2011)
- Wang, Y., Wang, W., Cao, C., Shen, S. and Ueno, K., Recent progresses on the Upper Permian bouldoniids: their biostratigraphy and palaeogeography. XVII International Congress on the Carboniferous–Permian, Perth, Australia (July, 2011)
- Hoshiki, Y., Ueno, K., Wang, Y., Qi, Y. and Wang, X., Carboniferous foraminiferal faunal succession of upper slope facies in the Yangtze Carbonate Platform: the Dianzishang section in Guizhou Province, South China. XVII International Congress on the Carboniferous–Permian, Perth, Australia (July, 2011)
- Ueno, K., Hayakawa, N., Nakazawa, T., Wang, Y. and Wang, X., *Carbonoschwagerina* - mimics from the Zongdi section of South China: new relatives or homeomorphic strangers? XVII International Congress on the Carboniferous–Permian, Perth, Australia (July, 2011)
- Wang, X., Sheng, Q., Qi, Y., Wang, Y., Shen, S. and Ueno, K., The Carboniferous and Lower Permian of South China: sedimentologic cycles and biotic events. XVII International Congress on the Carboniferous–Permian, Perth, Australia (July, 2011)
- Nakazawa, T., Ueno, K., Kawahata, H. and Fujikawa, M., Late Pennsylvanian to Middle Permian reef succession on Panthalassan oceanic atolls. XVII International Congress on the Carboniferous–Permian, Perth, Australia (July, 2011)

Ueno, K., Miyahigashi, M., Kamata, Y., Kato, M., Charoentitirat, T. and Limruk, S., 2011. Geotectonic subdivision of the Central Plain of Thailand: A perspective from Permian and Triassic successions. Japan Geoscience Union Meeting 2011, International Symposium, Makuhari Messe (May, 2011)
最近 5 年間の代表者としての学外資金導入実績
上野勝美：日本学術振興会・科研費・基盤（B）「パレオテチス収束域における島弧－縁海系の発達・崩壊過程に関する地質学的検証」・1050 万円（直接経費）・2013 年～2015 年 石原与四郎：平成 24 年度国土政策関係研究支援事業「地盤の 3 次元モデルの構築とその共有に関する研究－地盤・防災情報のユビキタス化－」・125 万円（直接経費）・2012 年 上野勝美：研究寄付金・株式会社地球科学総合研究所「フズリナ化石による年代層序研究に対する助成」, 145 万円, 2012 年 上野勝美：研究寄付金・石油資源開発株式会社「古生代有孔虫研究奨励のための助成」, 45 万円, 2011 年 石原与四郎：受託研究「天然記念物「七釜鍾乳洞」天然記念物緊急調査（洞窟学・地質学・古生物学分野）」, 319 万円, 2011 年 上野勝美：日本学術振興会・科研費・基盤（C）「上部石炭系年代層序境界模式地策定に向けたフズリナ生層序とサイクロセム対比の統合」・350 万円（直接経費）・2009 年～2012 年 石原与四郎：日本学術振興会・科研費・基盤（C）「年縞堆積物に挟在される重力流の流動・堆積モデルと規制要因の研究」・330 万円（直接経費）・2009 年～2011 年
最近 5 年間の代表者としての学内資金導入実績
上野勝美：推奨研究プロジェクト, 「造山帯における表層および深部地質過程の統合研究」・141 万円・2015～2017 年度（分担者：柚原雅樹） 上野勝美：大学院高度化推進特別経費タイプ I（学生分）, 「揚子炭酸塩プラットフォーム, 石炭系堆積盆の発達過程と有孔虫群集変遷」・60 万円・2013 年（対象学生：星木勇作） 上野勝美：大学院高度化推進特別経費タイプ I（学生分）, 「タイ国北部ランパン層群に含まれる石灰岩の有孔虫群集と堆積環境の解明」・60 万円・2012 年（対象学生：宮東照） 石原与四郎：推奨研究プロジェクト, 「地質・言語情報の数値化・統計処理に関する研究」・144 万円・2012 年～2014 年（分担者：乙武北斗） 上野勝美：大学院高度化推進特別経費タイプ I（研究科分）, 「堆積盆の発達に関わる海水準変動の評価」・402.2 万円・2011 年（分担者：石原与四郎）
最近 5 年間の学会等学術団体における役職など
上野勝美： Palaeoworld (Elsevier), Editorial Board（2014 年～） 日本学術会議, 地球科学惑星委員会 IUGS 分科会 ICS 小委員会委員（2012 年～） 日本学術会議, 地球科学惑星委員会 IUGS 分科会 IGCP 小委員会委員（2012 年～） Journal of Foraminiferal Research（米国）, associate editor（2012 年～） IGCP589 “Development of the Asian Tethyan Realm: Genesis, Process and Outcomes” (UNESCO), プロジェクト代表（2012 年～） 日本地質学会「地質学雑誌」編集委員, 企画委員（2010～2014 年）

Research Unit on Earthquake and Tectonic Geology in Mainland Southeast Asia (EATGRU), Chulalongkorn University (タイ王国), 海外研究アドバイザー Task Group to establish GSSPs at the Moscovian-Kasimovian and Kasimovian-Gzhelian boundaries (I.U.G.S. Subcommission on Carboniferous Stratigraphy), 委員長 Task Group to establish a GSSP close to the existing Bashkirian-Moscovian boundary (I.U.G.S. Subcommission on Carboniferous Stratigraphy), 委員 I.U.G.S. Subcommission on Carboniferous Stratigraphy, 投票権保有委員 (～2012 年、) I.U.G.S. Subcommission on Permian Stratigraphy, 投票権保有委員 (2012 年～) 石原与四郎： 日本地質学会「地質学雑誌」編集委員 (2014 年～) 日本堆積学会運営委員, 行事委員長 (2010 年～2013 年) 日本堆積学会行事委員 (2014 年～) 地盤工学会九州支部「地盤情報データベースの防災および地盤環境への活用に関する研究委 員会 (2010 年～2012 年) 地盤工学会「全国電子地盤図の作成と利用に関する研究委員会」(2011 年～2013 年) 地盤工学会「全国電子地盤図の拡張と運用に関する研究委員会」(2014 年～) 日本洞窟学会事務局員, 編集委員, 評議員 (2013 年 8 月～)
最近 5 年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
Ueno, K. and Task Group, 2014, Report of the Task Group to establish the Moscovian-Kasimovian and Kasimovian-Gzhelian boundaries. <i>Newsletter on Carboniferous Stratigraphy</i>, 31, 36-40. Ueno, K. and Task Group, 2013, Report of the Task Group to establish the Moscovian-Kasimovian and Kasimovian-Gzhelian boundaries. <i>Newsletter on Carboniferous Stratigraphy</i>, 30, 42-46. 石原与四郎, 2013, 平成 24 年度国土政策関係研究支援事業研究成果報告書「地盤の 3 次元モデ ルの構築とその共有に関する研究ー地盤・防災情報のユビキタス化ー」. 86p. 石原与四郎, 2012, 地質学・古生物学分野「七釜鍾乳洞」指定地とその周辺の地形と地質. 西海 市教育委員会編, 西海市文化財調査報告書第 1 集, 天然記念物「七釜鍾乳洞」天然記念物緊 急調査報告書, 22-60, 西海市教育委員会. 石原与四郎, 2012, 洞窟学分野 七釜砂岩層に形成された洞窟. 西海市教育委員会編, 西海市文 化財調査報告書第 1 集, 天然記念物「七釜鍾乳洞」天然記念物緊急調査報告書, 69-164, 西 海市教育委員会. Ueno, K. and Task Group, 2011, Report of the Task Group to establish the Moscovian-Kasimovian and Kasimovian-Gzhelian boundaries. <i>Newsletter on Carboniferous Stratigraphy</i>, 29, 33-34.
最近 5 年間の一般 (非学術) 集会での発表論文
石原与四郎： 福岡県の平野部地下を構成する地盤の特徴, 福岡地盤セミナー (2013 年 11 月 21 日) 防災・減災への地盤情報データベースの応用ー都市地盤のハザードの見える化へー, 第 3 回地 盤情報 DB 講習会 (2013 年 11 月 15 日)
最近 5 年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など

上野勝美： 大学入試センター試験出題委員（2011 年～2012 年度） 地学オリンピック日本委員会，福岡県コーディネーター（～2013 年度） 石原与四郎： 白保竿根田原洞穴遺跡調査指導委員会・委員（2014 年度～） 天然記念物「七釜鍾乳洞」天然記念物緊急調査会議・委員（2009 年～2011 年度） 西海市天然記念物七釜鍾乳洞保存管理計画策定委員会・委員（2012 年度） 福岡県「雨量通行規制見直し検討委員会」委員（2012 年度～）
その他特筆事項
なし

研究室名
行動生物学研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要 行動生物学研究室では, 社会性昆虫であるミツバチのコロニー内でのコミュニケーション行動とその基盤となる神経機構について, 行動観察および実験, 学習実験, 神経生理学的手法を使って研究を進めている。主な研究課題は尻振りダンスなどで巣仲間に蜜源情報として伝達される音や匂いの情報や採餌活動の調節に関与する振動情報の伝達過程や中枢での情報処理過程の解明である。音情報に関しては, 受容器であるジョンストン器官の構造と中枢投射, および音刺激応答の一次介在ニューロンを同定し応答特性をすでに明らかにしており, 匂いや他の機械感覚入力と関わりを含め更に情報処理経路を追跡している。また, 匂い情報については, 学習した匂いの刺激が受信者に特定の定位歩行パターンを誘発することを見いだしており, この歩行様式の経時変化について行動実験を進めている。また, 尻振りダンスでの情報伝達に関して, 羽化個体での尻振りダンス発現過程と出巣経験との関連を調べており, その際に独自に構築した RFID を用いた出帰巣の自動モニターシステムを利用している。振動情報であるパイピングシグナルの伝達に関しては, 観察巣箱での終日記録により, 既報よりも持続時間の非常に長いパイピングシグナル発信を確認しており, パイピングシグナル全体の発信特性による詳細分類と採餌活動とシグナル発信推移との関係を調べている。加えて, 飛行範囲を人為的に制限した環境下で, 採餌環境の変化とパイピングシグナル発信との関係についても調べている。 キーワード：ミツバチ, コミュニケーション, ダンス, 嗅覚, 聴覚, パイピング
研究員の構成員
伊東綱男（准教授）・理学博士 藍 浩之（助教）・博士（理学）

2015 年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
4 年次生：6 名 RFID を用いたミツバチの出巢、帰巢の自動モニターシステムの開発 RFID と小型 HD カメラモジュールを用いたミツバチの尻振りダンス関連行動の解析 —出巢と尻振りダンス関連行動の関係— イヌビワコバチの触角上感覚子の走査型顕微鏡観察 ミツバチコロニーでのパイピング個体の終日追跡 ミツバチコロニーでのパイピング個体の経日追跡 ミツバチコロニー内のパイピング発信に対する採餌状況変化の影響
教員の担当科目
伊東綱男（学部）動物生理学、行動生物学、ミクロの生物科学、マクロの生物科学、生物科学実験Ⅱ、生物学実験、卒業論文 （大学院）適応機能生物学講究、適応機能生物学実験、適応機能生物学特論Ⅰ、修士論文 藍 浩之（学部）生物学実験、生物学実験Ⅱ
教員の所属学会
伊東綱男：日本動物学会，日本比較生理生化学会 藍 浩之：日本動物学会，日本比較生理生化学会、ニューロエソロジー談話会 甲斐加樹来：日本動物学会，日本比較生理生化学会
最近 5 年間の学術論文
（すべて査読有） Yamashita, T., Haupt, S. S., Ikeno, H., <u>Ai, H.</u> (2016): Walking patterns induced by learned odors in the honeybee, <i>Apis mellifera</i> L. <i>J. Exp. Biol.</i> 219, 12-16. 吉田昭広、藍 浩之(2014)：鱗翅類の翅周縁部に分布する振動受容感覚器 — カイコガの剛毛状感覚子 —。昆虫と自然 2014 年 11 月号 pp11-16. Ikeno, H., Akamatsu, T., Hasegawa, H., <u>Ai, H.</u> (2014): Effect of the olfactory stimulus on the flight course of honeybee, <i>Apis mellifera</i>, in a wind tunnel. <i>Insects</i>, 5, 92-104; doi:10.3390/insects5010092 Rautenberg, P. L., Kumaraswamy, A., Tejero-Cantero, A., Doblander. C., Norouzian, M., <u>Kai, K.</u>, Jacobsen, H-A, <u>Ai, H.</u>, Wachtler, T., Ikeno, H. (2014): NeuronDepot – Keeping your colleagues in sync by combining modern cloud storage services, the local system, and simple web applications. <i>Frontiers in Neuroinformatics</i> , 10.3389/fninf.2014.00055 <u>Ai, H.</u>, Hagio, H. (2013): Morphological analysis of the primary center receiving spatial information transferred by the waggle dance of honeybees. <i>J. Comp. Neurol.</i> 521, 2570-2584, doi: 10.1002/cne.23299. <u>Ai, H.</u> (2013): Sensors and sensory processing for airborne vibrations in silk moths and honeybees. <i>Sensors</i> 13, 9344-9363; doi: 10.3390/s130709344.

Watanabe, H., Ai, H., Yokohari, F., (2012): Spatio-temporal activity patterns of odor-induced synchronized potentials revealed by voltage-sensitive dye imaging and intracellular recording in the antennal lobe in the cockroach. *Frontiers in System Neuroscience* 6, doi: 10.3389/fnsys.2012.00055.

甲斐加樹来, 岡田二郎: 自由歩行する昆虫から行動と神経活動を同時計測するための新たな実験システム, 比較生理生化学 29, 1, 18-25 (2012)

藍 浩之: 昆虫は振動をどのように行動に利用しているのか? 日本神経回路学会誌 18, No. 2, 73-84, (2011).

Sumiyoshi, M. Sato, S. Takagi, Y. Sumida, K. Koga, K. Itoh, T. Nakagawa, H. Shimohigashi, Y. Shimohigashi, M.: A circadian PDF in the honeybee, *Apis mellifera*: cDNA cloning and expression of mRNA. *Zoological Science*, 28(12): 879-909(2011)

最近 5 年間の学術著書

伊東綱男: 匂いが先か、色が先か—組合せ記憶における情報の重みの違いを確認する二者選択実験; 研究者が教える動物実験、尾崎まみこ他日本比較生理生化学会編 (共立出版)、第 3 巻、第 5 章: 174-177

藍 浩之 (2015): 虫の鼻はどこ? 電気で測る触角の働き—カイコガのフェロモン腺の観察と触角電図による匂い応答解析—. 研究者が教える動物実験、日本比較生理生化学会編 (共立出版)、第 1 巻, pp. 30-33.

佐倉 緑、岡田龍一、藍 浩之 (2015): パブロフのミツバチ—餌の匂いはどれ?—. 研究者が教える動物実験、日本比較生理生化学会編 (共立出版)、第 3 巻, pp. 178-181.

森山 徹、弘中満太郎、藍 浩之 (2015): ダンゴムシのジグザグ歩行—迷路を用いた交替性転向反応の観察とその仕組みの検討—. 研究者が教える動物実験、日本比較生理生化学会編 (共立出版)、第 3 巻, pp. 69-73.

Ai, H. and Itoh, T., The Auditory System of the Honeybee. In “*Honeybee Neurobiology and Behaviors*. (Eds.: Eisenhardt, D., Galizia, C. G. and Giurfa, M.)” Chapter 4.3, 2nd ed. Springer Verlag, Berlin Heidelberg, Germany (2012)

藍 浩之: 「無脊椎動物の感覚・脳・行動の比較行動生理学 (ミツバチ関連のサイトへのデータ提供、学術記事の記載)」無脊椎動物脳データ、理化学研究所無脊椎動物神経系ニューロプラットフォーム http://invbrain.neuroinf.jp/modules/htmldocs/IVBPF/Bee/Bee_sensory_system.html 他 14 サイト。2012年12月 Upload

最近 5 年間の学術国際会議での発表

Ai, H., Kai, K., Watanabe, H., Itoh, T., Kumaraswamy, A, Rautenberg, P. Wachtler, T, Ikeno, H. (2016): Honeybee interneurons responsive to the pulsed vibration produced by waggle dance. *12th International Congress of Neuroethology 2016, Uruguay, Concurrent Participant Symposium A*, March 30 to April 3 (招待講演) .

Ai, H. (2015): The parallel systems in the primary auditory center of the honeybee. *11th Goettingen Meeting of the German Neuroscience Society*, March 18-21, S31-3 (招待講演) . .

- Ai, H (2015): Topological organization of vibration-sensitive neurons of honeybee, *Meeting Honeybee Standard Brain*, 16-17, Mar., 2015, Freie Universität Berlin (招待講演) .
- Ai, H, Kimura Y, Yamashita, T., Ikeno H and Haupt SS (2015): Locomotion patterns induced by learned odors in the honeybee (*Apis mellifera* L.). *11th Goettingen Meeting of German Neuroscience Society*, Goettingen, Germany, 18-21 March, 2015.
- Kai, K., Kumaraswamy, A, Rautenberg, P., Ikeno, H., Wachtler, T, and Ai, H. (2015): Neural basis of airborne vibratory signal processing of the honeybee *Apis mellifera*. *11th Goettingen Meeting of German Neuroscience Society*, Goettingen, Germany, 18-21 March, 2015.
- Kuramaswamy, A., Rautenberg, P., Kai, K., Ai, H., Ikeno, H. and Wachtler, T. (2015): Evidence for morphological refinement of neurons encoding waggle dance communication signals in the honeybee. *11th Goettingen Meeting of German Neuroscience Society*, Goettingen, Germany, 18-21 March, 2015.
- Ai, H., Kai, K. and Ikeno H (2014): Vibration processing and olfactory locomotion related to honeybee communication. *17th International Union for the Study of Social Insects 2014 Cairns*, Australia July 13-18, 2014 (招待講演)
- Ai, H. and Kishi, N. (2014): How does the waggle dance communication mature after the adult emergence? *11th International Congress of Neuroethology (2014 ICN/JSCP)* Sapporo, Japan July 28-Aug 1, 2014.
- Kai, K., Kumaraswamy, A, Rautenberg, P. Wachtler, T, Ikeno, H. and Ai, H. (2014): Neural basis of vibratory signal processing of the honeybee *Apis mellifera*. *11th International Congress of Neuroethology (2014 ICN/JSCP)* Sapporo, Japan July 28-Aug 1, 2014.
- Ikeno, H., Kai, K., Lizuka, S., Kumaraswamy, A, Rautenberg, P. Wachtler, T, and Ai, H. (2014): Reproducible segmentation method of neural morphology from LSM images. *11th International Congress of Neuroethology (2014 ICN/JSCP)* Sapporo, Japan July 28-Aug 1, 2014.
- Kai, K., Ikeno, H., Haupt, S. S., Rautenberg, P., Wachtler, T., Ai, H. (2013): Response properties of auditory interneurons in the honeybee brain. *Bernstein Conference 2013*, Tuebingen, Germany, Sep. 24-27, 2013.
- Ai, H., Kimura Y, Kanzaki R, Itoh T, Haupt SS (2012): Neuroethological analysis of vibration and olfactory processing related to in-hive communication of the honeybee. Potential of Insect Neuroscience, *The 35th annual meeting of the Japan Neuroscience Society*, Nagoya, Sept. 19, 2012 (招待講演) .
- Ai H, Haupt SS, Rautenberg P, Stransky M, Wachtler T and Ikeno H (2012): Robust automated protocol for extraction and comparison of single neuron morphology. *Neuroinformatics 2012* Muenchen, Germany, Sept 10-11, 2012.
- Rautenberg P, Stransky M, Haupt SS, Ikeno H, Ai H and Wachtler T (2012): Morphological properties of neurons in the honeybee auditory system. *Bernstein Conference 2012* Muenchen, Germany, Sept 12-14, 2012.
- Ai H, Kimura Y, Haupt SS, Kanzaki R, Ikeno H and Itoh T (2011):- Two types of odor-triggered walking behaviors of honeybees controlled by classical olfactory conditioning. *8th International Congress of*

<i>Comparative Physiology and Biochemistry</i>. Nagoya, Japan, May 31-June 5, 2011 <u>Kai K</u> and Okada J (2011): Locomotor-related spike activity of protocerebral neuron in freely walking crickets. <i>8th International Congress of Comparative Physiology and Biochemistry</i>. Nagoya, Japan, May 31-June 5, 2011 <u>Ai, H.</u>, Ikeno, H., Minemoto, T., Saitoh, A., Isokawa, T. Kamiura, N., Matsui, N. and <u>Itoh, T.</u> (2011): Modelling and comparative analysis of an identified vibration-sensitive interneuron of honeybee brain. <i>Japan-Germany Joint Workshop on "Computational Neuroscience"</i>. Onna, Okinawa, March 2-5, 2011.
最近5年間の代表者としての学外資金導入実績
<u>藍 浩之</u>：科学研究費・挑戦的萌芽：ミツバチの尻振りダンスに符号化されたベクトル情報統合の神経機構・360万円（直接経費）・2015年度～2017年度 <u>藍 浩之</u>：科学技術振興機構・戦略的国際科学技術協力推進事業・日本-ドイツ研究交流「ミツバチ聴覚情報処理の神経基盤～振動応答性ニューロンに対する計算神経科学アプローチ～」・1,380万円（直接経費）・2012年度～2014年度 <u>藍 浩之</u>：科学研究費・基盤（C）：ミツバチの尻振りダンス解読に関わる異種感覚統合機構の解明・360万円（直接経費）・2010年度～2014年度 <u>藍 浩之</u>：理化学研究所・プラットフォーム運用委員会・無脊椎動物脳プラットフォーム・90万円（直接経費）・2010年度～2012年度
最近5年間の代表者としての学内資金導入実績
<u>藍 浩之</u>：福岡大学研究推進部総合科学研究チーム・「RFID と高解像度ビデオ記録を用いたミツバチ行動自動追跡システムの開発」・488万円・2015年度～2016年度 <u>藍 浩之</u>：福岡大学研究推進部推奨研究プロジェクト・「理工連携によるロボットを用いた社会性昆虫の通信機構の研究」・78万円・2012年度～2014年度 <u>藍 浩之</u>：福岡大学研究推進部領域別研究チーム「昆虫の社会行動に関わる脳機能の解析」・105万円・2009年度～2011年度（分担者：横張文男・西川道子・<u>伊東綱男</u>）
最近5年間の学会等学術団体における役職など
伊東綱男：日本比較生理生化学会評議員・2012年度 <u>藍 浩之</u>：ニューロエソロジー談話会・世話人・2012年度～ <u>藍 浩之</u>：日本比較生理生化学会・会計幹事・2004年度～2014年度 <u>藍 浩之</u>：日本比較生理生化学会・将来計画委員・2007年度 <u>藍 浩之</u>：日本比較生理生化学会・高校教科書問題検討委員長・2013年度～2014年度 <u>藍 浩之</u>：生物科学学会連合・教科書問題検討委員・2013年度～2014年度
最近5年間の一般向け論文と著書，行政報告書など
<u>藍 浩之</u>：科学研究費補助金（基盤研究 C）：「ミツバチの尻振りダンス解読に関わる異種感覚統合神経機構の解明（課題番号 22570079）」研究報告書 https://kaken.nii.ac.jp/d/p/22570079.ja.html
最近5年間の一般（非学術）集会での発表論文
該当なし
最近5年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
<u>藍 浩之</u>：新課程生物基礎・生物における「神経・行動」をどう教えるか？～基礎と体系による

整理法～・平成27年度山口県高等学校教育研究会生物教育研究大会「自然をみつめなおす生物教育」で講演（於下関市立下関商業高校）（2015年10月13日） 藍 浩之：新課程生物基礎・生物をどう教えるか～教科書の内容を踏まえて～・第3分科会・動物行動学分野。第69回日本生物教育会全国大会内研究協議で講演（於西南学院大学）（2014年8月7日） 藍 浩之：平成25年度福岡県高等学校生物部会・第2回若葉研修会「新課程生物における動物行動単元の展開について」で講演（於福岡リーセントホテル）（2013年5月18・19日） 藍 浩之：サイエンス パートナースHIP プログラム(SPP・科学技術振興機構)「サイエンスキャンプ」(兵庫県立伊丹高校)で「動物の行動」の出張講義と実験の指導（2013年8月21日） 藍 浩之：インスパイア・ハイスクール事業(兵庫県)で「サイエンスキャンプ：体験！環境科学の世界」(兵庫県立加古川南高校)の自然観察会、生物行動実験の指導（2013年8月22・23日） 藍 浩之：福岡県高等学校生物部会 特別研修「新課程 生物において動物の行動をどう教えるか？」で講演（於福岡大学付属大濠高校）（2012年7月27日）
--

研究室名
進化脳科学研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
進化脳科学研究室では、昆虫の行動の基盤となる脳機能の基本的設計を明らかにすることを目指して、電気生理学および組織学、解剖学的方法で、触角の嗅感覚系の機能と嗅覚の情報処理機構の解明を課題として研究している。また、昆虫と哺乳類の嗅覚の一次中枢は極めてよく似た構造をもつ特徴を活かして、昆虫の嗅覚系の研究によって動物一般の匂い識別機構を解明することも目指している。本研究室の最近の研究では、ワモンゴキブリの嗅覚一次中枢である触角葉の匂い識別の単位である約200個の糸球体を形態学的に同定し、その内の一部の糸球体を機能的に同定し、その上位中枢への投射様式も明らかにした。また、触角葉では匂い刺激によって特定の糸球体に一定の周期で同期的電位が発生するが、この同期的電位の発生には触角葉局所介在ニューロンが深く関わっていることを明らかにした。 社会性昆虫であるクロオオアリの働きアリ（雌）は体表炭化水素18種を匂いとして受容し、その組成比の違いによって巣仲間と非巣仲間を識別している。これらの炭化水素それぞれに対する嗅受容細胞の応答特性を調べたところ、それぞれの炭化水素に多数の受容細胞が応答していることや1つの受容細胞が多数の炭化水素に応答していることなどが明らかになってきた。最近、ワモンゴキブリの集合フェロモンに応答する感覚子の同定と受容細胞の応答特性の解析や、ゴキブリの近縁関係にある社会性昆虫のシロアリの触角葉の構造解析も開始した。 このほか、ワモンゴキブリの機械感覚ニューロンの免疫染色法による解析、ワモンゴキブリの性フェロモン受容細胞の発生様式の解析、原始昆虫である無翅目昆虫の嗅覚や湿度感覚の末梢および脳内での処理機構の進化過程の解析、アゲハチョウ類の産卵植物の匂い成分に対する触角感

覚ニューロンの応答の比較解析も進めている。 キーワード：昆虫・脳の基本設計・嗅覚・湿度感覚・機械感覚・社会性昆虫・発生・進化
研究室の構成員
横張文男（教授） 渡邊英博（助教） Thomas Carle（研究員：2011 年 11 月～2012 年 10 月、JSPS 外国人特別研究員：2012 年 11 月～2013 年 10 月、外国人研究員：2014 年 4 月～2015 年 3 月、研究員：2015 年 4 月～2016 年 3 月）
2015 年度の大学院生および卒論生の研究テーマ
博士課程前期（2 名） ハチ目昆虫の脳構造の特徴とその多様性 クロオオアリの巣仲間認識に関わる感覚子の嗅応答の電気生理学的解析 卒論生（6 名） 7 種のシロアリの触角葉糸球体の比較解析 マダラシミの湿度受容と湿度嗜好性、湿度依存性生存率に関する研究 昆虫の視葉と触角葉の大きさについて ワモンゴキブリ嗅覚投射ニューロンの応答パターン形成機構の解析 ワモンゴキブリの性フェロモン受容細胞の発生様式 アゲハチョウ類の食性植物に対する嗅覚応答に関する電気生理学的研究—触角電図（EAG）測定—
教員の担当科目
横張文男：（学部）神経生物学、生物科学Ⅱ、マクロの生物科学、生物科学実験Ⅱ、生物学実験、卒業論文 （大学院）適応機能生物学講究、適応機能生物学実験、適応機能生物学特論Ⅰ、修士論文 渡邊英博：（学部）生物学実験、生物科学実験Ⅱ
教員の所属学会
横張文男：日本動物学会、日本比較生理生化学会 渡邊英博：日本動物学会、日本比較生理生化学会、国際神経行動学会 Thomas Carle：日本比較生理生化学会
最近 5 年間の学術論文
（すべて査読有） Mizunami M, Nishino H Yokohari F (2016) Status of and future research on thermosensory Processing. Front. Physiol.7:150. doi: 10.3389/fphys.2016.00150 Frontiers in Physiology. 4/25/2016, p1-5. 5p. Nishino, H Watanabe, H Kamimura I Yokohari F Mizunami M (2015) Coarse topographic

- organization of pheromone-sensitive afferents from different antennal surfaces in the American cockroach. *Neuroscience Letters* 595 35-40 doi:10.1016/j.neulet.2015.04.006
- Inoue T A, Ito T, Hagiya H, Hata H, Asaoka K, Yokohari F, Niihara K (2015) K⁺ Excretion: The Other Purpose for Puddling Behavior in Japanese Papilio Butterflies. *PLoS One*. 2015; 10(5): e0126632 doi: 10.1371/journal. one. 0126632
- Watanabe H, Shimohigashi M, Yokohari F. (2014) Serotonin-immunoreactive sensory neurons in the antenna of the cockroach *Periplaneta americana*. *Journal of Comparative Neurology* 522:414-434.
- Carle T, Toh Y, Yamawaki Y, Watanabe H, Yokohari F. (2014). The antennal sensilla of the praying mantis *Tenodera aridifolia*: a new flagellar partition based on the antennal macro-, micro- and ultrastructures. *Arthropod Structure and Development*. 43: 103-116.
- Carle T, Yamawaki Y, Watanabe H, Yokohari F (2014) Antennal Development in the Praying Mantis (*Tenodera aridifolia*) Highlights Multitudinous Processes in Hemimetabolous Insect Species. *PLoS ONE* 9(6): e98324. doi:10.1371/journal.pone.0098324
- Matsumoto, C. S., Kuramochi, T., Matsumoto, Y., Watanabe, H., Nishino, H., Mizunami, M. (2013) Participation of NO signaling in formation of long-term memory in salivary conditioning of the cockroach. *Neuroscience Letters*. 541: 4-8
- Watanabe, H. H., Yokohari, F., (2012) Spatio-temporal activity patterns of odor-induced synchronized potentials revealed by voltage-sensitive dye imaging and intracellular recording in the antennal lobe of the cockroach. *Frontiers in System Neuroscience*. 6: 55 doi: 10.3389/fnsys.2012.00055
- Watanabe, H., Haupt, S., Nishino, H., Nishikawa, M., Yokohari, F. (2012) Sensillum-specific, topographic projection patterns of olfactory receptor neurons in the antennal lobe of the cockroach *Periplaneta americana*. *Journal of Comparative Neurology* 520(8):1687-1701
- Nishikawa, M., Watanabe, H., Yokohari, F. (2012) Higher brain centers for social tasks in worker ants, *Camponotus japonicus*. *Journal of Comparative Neurology*. 520:1584-1598
- Nishino, H., Iwasaki, M., Yasuyama, K., Hongo, H., Watanabe, H., Mizunami, M. (2012) Visual and olfactory input segregation in the mushroom body calyces in a basal neopteran, the American cockroach. *Arthropod Structure and Development* 41(1):3-16.
- Matsumoto C., S., Matsumoto, Y., Watanabe, H., Nishino, H., Mizunami, M. (2012) Context-dependent olfactory learning monitored by activities of salivary neurons in cockroaches. *Neurobiology of Learning and Memory* 97(1):30-36.
- Takashi A. Inoue, Tamako Hata, Kiyoshi Asaoka, Tetsuo Ito. (2012) Japanese Papilio butterflies puddle using Na⁺ detected by contact chemosensilla in the proboscis. *Naturwissenschaften* 99,12 985-958. doi 10.1007/s00114-012-0976-3
- Sakurai, T., Mitsuno, H., Haupt, S., S., Uchino, K., Yokohari, F., et al.(2011) A Single Sex Pheromone Receptor Determines Chemical Response Specificity of Sexual Behavior in the Silkmoth *Bombyx mori*. *PLoS Genet* 7(6): 100211doi:10.1371/journal.pgen.1002115.

Watanabe, H., Matsumoto, C., S., Nishino, H., Mizunami, M. (2011) Critical roles of mecamylamine-sensitive mushroom body neurons in insect olfactory learning. <i>Neurobiology of Learning and Memory</i> 95(1):1-13.
最近 5 年間の学術著書
西野浩史、渡邊英博「振動・聴覚受容器のかたちとはたらき」昆虫と自然、50巻10号、4-8 頁、2015年 渡邊英博（単著）「昆虫の脳を見てみよう」『研究者が教える動物実験』第一巻（日本比較生理生化学会 編）共立出版、173頁、2015年 Mizunami M., Matsumoto Y., Watanabe H., Nishino H. (2013) Invertebrate learning and memory. Elsevier 549-560 渡邊英博（2013）ワモンゴキブリの末梢から高次中枢までの嗅覚情報処理機構 比較生理生化学 30, 89-105. 渡邊英博：研究者が教える動物飼育 『第2巻 昆虫とクモの仲間』59 ワモンゴキブリ 日本比較生理生化学会編集 共立出版 47～47頁 2012年5月 渡邊英博:「ワモンゴキブリの嗅覚系」無脊椎動物脳データ、理化学研究所無脊椎動物神経系ニューロプラットフォーム http://invbrain.neuroinf.jp/modules/htmldocs/IVBPF/Cockroach/Cockroach_antenna.html 2012年12月 Upload
最近 5 年間の学術国際会議での発表
Watanabe H, Nishino H, Yokohari F Temporal activity patterns of two different types of projection neurons revealed by simultaneous intracellular recordings in the cockroach. International Congress of Neuroethology. Sapporo. 2014年7月 Watanabe, H., Nishikawa, M., Yokohari, F. Higher brain centers for social behaviors in the ant <i>Camponotus japonicas</i>. Evolutionary and Behavioral Neuroscience Workshop. Hayama. 2012年7月 Watanabe, H. Neural basis of general odor processing in the cockroach antennal lobe. 8th International Congress of Comparative Physiology and Biochemistry. Nagoya. 2011年6月 Watanabe, H., Ai, H., Yokohari, F. Odor-induced spatio-temporal activity patterns of synchronized potentials mediated by local interneurons in the cockroach antennal lobe. 8th International Congress of Comparative Physiology and Biochemistry. Nagoya. 2011年6月
最近 5 年間の代表者としての学外資金導入実績
横張文男：日本学術振興会・科研費・基盤研究（C）「社会性昆虫クロオオアリの巣仲間認識機構の神経生物学的研究」・代表・（分担者：渡邊英博）・380 万円（直接経費）・2016 年～2018 年 渡邊英博：日本学術振興会・科研費・若手 B「嗅覚情報の並行処理における触角葉局所介在ニューロンの役割」・代表・330 万円（直接経費）・2016 年～2018 年 横張文男：日本学術振興会・科研費・戦略的萌芽研究「昆虫における機械感覚器から湿度感覚器

への進化に関する神経生物学的研究」・代表・(分担者：渡邊英博)・320 万円 (直接経費)・2013 年～2015 年 渡邊英博：日本学術振興会・科研費・研究活動スタート支援「社会性昆虫クロオオアリを用いた巣仲間識別機構の神経科学的解析」・代表・240 万円 (直接経費)・2012 年～2013 年) Thomas Carle: 日本学術振興会・外国人特別研究員・「捕食者による忌避学習の神経基盤：異種感覚情報の統合機構」・972,000 円・2012 年 11 月～2013 年 10 月 横張文男：日本学術振興会・科研費・基盤研究 (C)「昆虫の湿度感覚に関する前大脳高次情報処理についての生理学的形態学的研究」・代表・360 万円 (直接経費)・2010 年～2012 年 渡邊英博：日本学術振興会・科研費・特別研究員奨励費「昆虫の脳内での感覚情報の統合・処理機構の解析」・代表・280 万円 (直接経費)・2010 年～2012 年 (2011 年度で就職による途中辞退)
最近 5 年間の代表者としての学内資金導入実績
横張文男：福岡大学研究推進部・総合科学部研究チーム・「昆虫をモデルとした嗅覚系の基本設計原理と適応進化の研究」・代表・(分担者：渡邊英博、山脇兆史)・250 万円・2014 年 横張文男：福岡大学大学院理学研究科高度化推進事業タイプ I・「社会性昆虫クロオオアリの体表揮発性物質およびフェロモン等の化学的同定とそれを受容する感覚子の電気生理学的同定」・代表・(分担者：渡邊英博・Thomas Carle)・458.5 万円・2012 年 横張文男：福岡大学理学部・学部長預金・「昆虫における嗅覚系入力による行動発現とその神経機構の解析」・347,812 円・2012 年 横張文男：福岡大学理学部・学部長預金・「昆虫の嗅覚系を中心とした触角感覚器の応答スペクトラおよび触角系感覚情報の脳内情報処理神経回路に関する電気生理学的研究」・313,425 円・2011 年
最近 5 年間の学会等学術団体における役職など
横張文男：日本動物学会九州支部委員、日本比較生理生化学会評議員 渡邊英博：日本比較生理生化学会行事委員、同吉田奨励賞審査委員、同若手の会幹事
最近 5 年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
該当なし
最近 5 年間の一般 (非学術) 集会での発表論文
該当なし
最近 5 年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
該当なし
その他特筆事項
渡邊英博：吉田奨励賞受賞 「ワモンゴキブリ触角葉における嗅覚情報処理機構の解析」 日本比較生理生化学会第 34 回大会、葉山 (神奈川)、2012 年 7 月 横張文男：吉田記念賞 (学会賞) 受賞 「On hygro- and thermoreception of insects」 日本比較生理生化学会第 35 回大会、姫路 (兵庫)、2013 年 7 月

研究室名
細胞生物学研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
動物の体を構成する細胞は、その生理活性に応じて様々な基質に接着し運動します。この運動には、2 種類の細胞骨格が重要な役割を担っています。1 つはアクチン細胞骨

格で、移動のための力を発生しています。神経細胞が伸長する神経突起は細胞運動研究の良いモデル構造で、私たちはショウジョウバエ培養神経細胞を用いて神経突起伸長の制御機構を解析しています。もう1つの細胞骨格は微小管で、細胞内での物質輸送を担う極めて動的な構造です。私たちは、試験管内で再構成した微小管の動態をさまざまな方法で観察・測定し、この微小管の構造と機能の時空間的解析を進めています。

神経細胞は神経突起を介してネットワークを形成し、多様な情報処理を行います。そのしくみを知るために、昆虫を用いて外部情報を受容する触角や中枢神経ネットワークの構造を解析しています。

キーワード： 神経細胞、アクチン、微小管、アロメトリー

研究室の構成員

中川裕之（教授）・博士（理学）

岩崎雅行（助教）・理学博士

香月美穂（助教）・博士（情報工学）

2015 度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ

大学院生（修士課程 2 名）

研究テーマ：神経突起の伸長開始に関わる遺伝子の探索、ヒドラ上皮筋細胞の筋繊維の微細構造

卒論生 7 名

研究テーマ：ヒドラ触手における神経伝達物質の分布、ヒドラ神経細胞骨格の可視化、ショウジョウバエ培養神経細胞の神経突起伸長と細胞骨格遺伝子の発現変動、微小管重合の温度依存性-変異チューブリンの発現プラスミドの作製-、微小管結合タンパク質 Mal3 による微小管の曲がり

教員の担当科目

中川裕之：（学部）生物科学 I、生物学 A、生物科学、ミクロの生物科学、マクロの生物科学、構造生物学、生物科学実験 I、生物学実験、卒業論文

（大学院）適応構造生物学講究、適応構造生物学実験、適応構造生物学特論 I、適応構造生物学特別研究 I～VI、修士論文

岩崎雅行：（学部）生物学実験、生物科学実験 I

香月美穂：（学部）生物学実験、生物科学実験 I

教員の所属学会

中川裕之：日本細胞生物学会、日本生化学会、生物物理学会、日本動物学会

岩崎雅行：日本動物学会、日本比較生理生化学会、日本顕微鏡学会

香月美穂：日本生物物理学会、日本動物学会

最近 5 年間の学術論文

M. Katsuki, D. R. Drummond, and R. A. Cross (2014) Ectopic A-lattice seams destabilize microtubules. *Nat. Commun.* 5: 3094.

Maeda T, Tamotsu S, Iwasaki M, Nisimura T, Shimohigashi M, Hojo M and Ozaki M (2014) Neuronal projections and putative interaction of multimodal inputs in the subesophageal ganglion in the blowfly,

Phormia regina. <i>Chem. Senses</i> 39: 391-401. K. Matsushima, H. Nakagawa, and *S. Kotani. (2014) Distribution of a Neural Cell-Specific Isoform of Microtubule-Associated Protein 4 in Growth Cone. <i>Sci. J. Kanagawa Univ.</i> 25: 1-5 H. Nakagawa, K. Matsushima, M. Iwasaki, M. Shimohigashi, K. Tokuraku, and S. Kotani (2013) Deletion in the Pro-rich Region of Microtubule-associated Protein 4 Influences Its Distribution. <i>Fukuoka University Science Reports</i> 43: 67-72. M. Sumiyoshi, S. Sato, Y. Takeda, K. Sumida, K. Koga, T. Itoh, H. Nakagawa, Y. Shimohigashi, M. and M. Shimohigashi (2011) A Circadian Neuropeptide PDF in the Honeybee, <i>Apis mellifera</i>: cDNA Cloning and Expression of mRNA. <i>Zool. Sci.</i> 28:897-909. Morita H., Ando S., Okuma K., Nagahora N., Aizawa Y., Fukuda M., Nakagawa H. and Shioji K. (2011) Intracellular molecular dynamics of N-terminal motif of myristoylated peptide. <i>Peptide Science</i>: 309-312.
最近 5 年間の学術著書
岩崎 雅行 (2015) 顕微鏡の使い方と試料作製法. (尾崎まみこ他 編) 研究者が教える動物実験 第一巻 感覚 共立出版 33章 pp150-172. 岩崎 雅行、伊東 綱男 (2013) 鼓膜器官. (上田恵介他 編) 動物行動学辞典 東京化学同人 pp224. M. Katsuki, E Muto, and R. A. Cross (2011) Preparation of dual-color polarity-marked fluorescent microtubule seeds. <i>Methods Mol. Biol.</i> 777: 117-126. D. R. Drummond, S. Kain, A. Newcombe, C. Hoey, M. Katsuki, and R. A. Cross (2011) Purification of tubulin from the fission yeast <i>Schizosaccharomyces pombe</i>. <i>Methods Mol. Biol.</i> 777: 29-55. K. Tokuraku, K. Matsushima, H. Nakagawa and S. Kotani. (2011) Microtubule-associated protein 4. In: R. A. Nixon, A. Yuan (Eds) <i>Cytoskeleton of the Nervous System, Advances in Neurobiology</i> 3: 151-166.
最近 5 年間の学術国際会議での発表
Miho Katsuki, Douglas R. Drummond and Robert A. Cross. Dynamics of A-lattice microtubules. 56th Annual Meeting of Biophysical Society. San Diego, California Feb. 2012 M Shimohigashi, M Sumiyoshi, A Furukawa, A Matsushima, Y Shimohigashi, H Nakagawa. Effects of Bisphenol A-exposure on the gene expression of culture neuron BG2-c6. International Congress of Comparative Physiology and Biochemistry. Nagoya May 2011
最近 5 年間の代表者としての学外資金導入実績
香月美穂：日本学術振興会・科研費・新学術領域研究「微小管内にある不均一構造の動的変化の観察と機能の解析」・代表・220 万円（直接経費）・2015 年度 香月美穂 (Prof. R. Cross, Dr M. Katsuki, Dr D. Drummond の共同申請) : Association for International Cancer Research Grant (AICR, 現 Worldwide Cancer Research, www.aicr.org.uk) 研究課題名: Single molecule analysis of microtubule tip tracking in vitro, 研究経費: £45, 000 (約 850 万円、£1 = 190 円として) 総額 £200, 000 (約 3,800 万円、£1 = 190 円として、含 Dr M Katsuki 人件費) (期間: 2009 年度～2012 年度) 中川裕之：日本学術振興会・科研費・基盤研究 (C)「鉄貯蔵タンパク質フェリチンの集合体形成と細胞内輸送の制御機構」・代表・380 万円（直接経費）・2009 年度～2011 年度
最近 5 年間の代表者としての学内資金導入実績
香月美穂：領域別研究・理工学研究部「細胞骨格動態の生物物理学」・代表・366 千円・2015 年度
最近 5 年間の学会等学術団体における役職など

中川裕之、岩崎雅行、香月美穂（2014 年 6 月～2015 年 5 月）：2015 年度日本動物学会九州支部（第 68 回）、九州沖縄植物学会（第 65 回）、日本生態学会九州地区会（第 60 回）三学会合同福岡大会実行委員会委員
最近 5 年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
なし
最近 5 年間の一般（非学術）集会での発表論文
なし
最近 5 年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
香月美穂: アウトリーチ活動 サイエンス展示 , Nano-scale transport Royal Society Summer Science Exhibition 2012, Presented by University of Oxford, Department of Physics and University of Warwick, Centre for Mechanochemical Cell Biology, Organiser: Dr Helen Carstairs / Post Doctoral Research Assistant, University of Oxford, London, UK July 2012
その他特筆事項
なし

研究室名
発生生物学研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
両生類初期胚のパターン形成、つまり胚の 3 次元構造がどのように形成されるかを研究しています。胚の細胞の運命は 1 個 1 個の細胞が自分勝手に決めるわけではありません。胚全体の中での部分として、それぞれの細胞の運命は決定されます。人間を含めた脊椎動物の体は、背中に神経系と背骨、腹側に内臓とそれらを囲む筋肉という基本設計をもとに作られます。私達は、アフリカツメガエル胚を用いて、この基本設計がどのように出来上がるかを研究しています。特に背腹軸の“背”の決定に注目しています。カエルの未受精卵には上下軸はありますが、まだ背腹軸はありません。背腹軸は受精直後の卵の表層回転によって、植物極表層細胞質にある背決定因子が将来の背側に移動することで決定されます。しかし、この因子の実体や作用は未だ不明のまま残されています。 また、蝶の翅の紋様のパターン形成機構の研究を進めています。蝶の翅は肢原基の背側の突起として出現し、昆虫に飛翔という革命的形態変化を与えました。また、鱗粉によって描かれる翅の紋様は配偶行動における雌雄の認識、捕食者に対する警告や隠遁といった新奇な役割を与えられました。翅の紋様は多種多様ですが、基本となるパターンが存在し、その基本から派生するバリエーションとして多種多様なパターンが生み出されます。紋様の比較形態的研究から得られたタテハチョウ基本プランを、発生生物学的様々な実験から再検討し、翅紋様形成の基本原理を明らかにしようとしています。 キーワード：アフリカツメガエル・胚・背腹軸・調節性・蝶・パターン形成・翅・紋様
研究室の構成員
景浦 宏（教授）・理学博士 古賀正明（助教）・理学博士
2015 年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
大学院生 0 名 卒論生数 6 名 人工飼料による蝶の幼虫の飼育 ヘパリンの翅紋様形成に及ぼす効果 オナガアゲハ蛹へのヘパリン注入による後翅紋様の変異

クロアゲハ後翅赤色弦月紋発達変異の遺伝様式 アフリカツメガエル筋肉組織の免疫染色 アフリカツメガエル尾芽胚期での脊索に隣接する体節内の細胞の運動
教員の担当科目
景浦 宏：(学部) 発生生物学、分化と教育、形態形成制御学、ミクロの生物学、マクロの生物科学、生物学A、地球圏科学序論、生物学実験、生物科学実験Ⅰ、卒業論文 (大学院) 適応構造生物学講究、適応構造生物学実験、適応構造生物学特論Ⅱ、修士論文 古賀正明：(学部) 生物学実験、生物学実験Ⅰ
教員の所属学会
景浦 宏：日本発生生物学会 古賀正明：日本発生生物学会、日本動物学会
最近5年間の学術論文
Koga, M, Nakashima, T., Matsuo, S., Takeya, R., Sumimoto, H., Sakai, M., Kageura, H. (2012). High cell-autonomy of the anterior endomesoderm viewed in blastomere fate shift during regulative development in the isolated right halves of four-cell stage <i>Xenopus</i> embryos. <i>Dev Growth Differ</i> 54, 717-729. (査読有) Koga, M., Takao, K., Kageura, H.(2016).The high therapeutic effect of thiabendazole on chytridiomycosis in <i>Xenopus laevis</i>. 理学部集報 (印刷中).
最近5年間の学術著書
該当なし
最近5年間の学術国際会議での発表
該当なし
最近5年間の代表者としての学外資金導入実績
該当なし
最近5年間の代表者としての学内資金導入実績
景浦 宏：領域別研究 理工学・生命科学研究部 「神経・筋肉系応答における細胞シグナルの研究」・99.7万円・2011-13年(分担者：古賀正明) 景浦 宏：領域別研究 理工学・生命科学研究部 「背軸の形成と機能発現機構の解析」・67.4万円・2014-15年(分担者：古賀正明)
最近5年間の学会等学術団体における役職など
日本動物学会九州支部(第68回)・九州沖縄植物学会(第65回)・日本生態学会九州地区会(第60回)三学会合同福岡大会実行委員会 会計(古賀正明)
最近5年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
該当なし
最近5年間の一般(非学術)集会での発表論文
該当なし
最近5年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
該当なし
その他特筆事項
該当なし

編集後記

『理学部・理学研究科の年報 2015』の編集については、編集委員の先生方や事務室長はじめ教員や関係者の皆様方には多大なご協力をいただきました。本年報は理学部ホームページに pdf 版で掲載するとともに、ISSN 日本センター（国立国会図書館）に登録し、学内のみならず学外の方々も閲覧できるようにしています。本年報が理学部・理学研究科の 2015 年度の教育・研究活動を俯瞰し、今後の改善・改革に役立ち、また共同研究などの可能性を探る上でも大いに役立つことを願っています。

（2016 年 10 月 31 日 山口敏男 記）

編集委員

山口 敏男（理学部長）
西田 昭彦（理学研究科長）
小田 信行（応用数学科）
平松 信康（物理科学科）
安藤 功（化学科）
中川 裕之（地球圏科学科）
池田 雅文（理学部事務室長）